

琵琶湖博物館研究調査報告

7号 1999年6月

現存漁具記録調査報告



内水面漁撈研究会 編



LAKE BIWA MUSEUM
琵琶湖博物館

琵琶湖博物館研究調查報告

第 7 号

現存漁具記録調査報告

内水面漁撈研究会 編

編集責任者：杉立繁雄，大沼芳幸

滋賀県立琵琶湖博物館

1999年6月

目 次

1	琵琶湖水系における木造船実態報告	1
	第1編 木造船の現況	1
	第1章 木造船の現況調査	2
	第2章 現存する木造船の概要	61
	第2編 木造船の造船用具・用品	75
	第1章 船又造船所寄贈の造船用具用品	76
	第2章 西田正三家の造船用具用品	105
2	安曇川中流域の漁具漁法漁具漁法	109
3	琵琶湖の定置漁法	169

1 琵琶湖水系における木造船実態報告

第1編 木造船の現況

第1章 木造船の現況

はじめに

我が国最大の湖「琵琶湖」がほぼ中央に大きく横たわる滋賀県では、古くから輸送・交通・漁撈・農用・日常生活の手段として、時代を問わず船が果たす役割は大きなものがあった。近年の感覚からは交通の障害と考えられる琵琶湖も、かつて対岸まで船を操れば陸路よりはるかに便利な通行手段であったろう。湖上ばかりに目を奪われがちであるが、それに接する多くの内湖や河川などもその一翼を担ったことは言うまでもない。

その歴史は古くすでに縄文時代後半期以降の遺跡から多くの丸木船や櫂などの出土が報告され、平安期～中世にかけては日本海の米穀を中心とした貢租物の湖上輸送で飛躍的な発展をみたが、時として軍事的な意味合いを併せ持つものでもあった。近世を通じ生産や経済活動に船が大きな役割を担ったことは、その船数の多さからも明らかとなろう。

江戸期を通じ東海道横田渡船が伏見の船大工によって建造された事例を確認するに過ぎず、比較的封鎖的であった近江の造船も、明治期に入ると大阪・敦賀、さらに伊勢方面からも船大工が出入りするようになった。また折からの著しい造船技術の発達により、琵琶湖にも新しい造船技術が導入されるようになった。木造蒸気船や鋼船の出現で、その数も年ごとに増加し、湖上交通も汽船時代を迎えるようになっていった。ただ明治中期以降、鉄道を含む陸路交通網が整備されるようになると旅客船や湖上遊覧船が湖上の中心を占めるようになり、かつて荷船として活躍した大型の木造船も暫時減少傾向を示し、これに付随した船運も次第に衰退を余儀なくされていった。

一方、湖辺集落にあって農用や農閑期を利用した片手間の漁業、さらに日常生活に大きな役割を担った小船は、用途別の船を要望したことや船講などの金融組織の普及もあって、むしろ微増する傾向にあったと考えられる。しかし、戦時中以降の食糧増産を目指した干拓によって湖岸の内湖の多くが埋め立てられ、のちの農業の近代化を目指した耕地整理事業の施行によって、湖岸一帯の水路も次第に埋め立てられ、かつて船を使うほか耕作地に行き来する手段を持たなかった湖岸一帯の農家は、もはやこれらの船も必要としなくなってしまった。さらに昭和45年頃になって新素材FRP船が出現するようになると、そのメリットが受け

入れられ漁船などに占める割合を増し、木造船衰退に拍車をかける結果を招いていった。

かつて丸木船に始まった木造船も、準構造船から構造船へと発展すると、その大きさを増大させると共にその用途を確実に増していった。これらの船はその用途、地域、船体構造の特徴などによってさまざまな呼称で呼ばれ、使用する目的や水域に応じて多くの工夫・改良が加えられ各々の用途に定着していったのであろうが、新素材の船の出現によってこれらの木造船も近年では伝統的な木造船・洋船を問わずほとんど造られることがなくなったので、かつて造られた船の自然消滅を待つほかないのが現状であろう。

昭和23年、県下に62軒を数えた造船所も、需要がほぼ途絶えてしまった現状では、船大工の高齢化なども相俟って、木を刻み船釘を打つという習熟を要する木造船独自の建造技術の継承も日毎に困難となることが予想される。また木造船やそれらの建造に用いられた用具用品もすでに相当数が公共機関に保管されるようになったものの、系統だてた調査研究はまだ途についたばかりと言うのが実情であろう。

第1節 木造船の現況調査報告

1) 調査の目的

本調査は近年ほとんど建造されることのなくなった県下の木造船の現況を、現地確認することで掌握しようとするものである。ただ今回は木造船調査の第一段階というべきものなので、個別の精査は次の段階に委ねなければならない。

2) 調査の経緯

調査は平成5年2～3月にかけて集中して行った。短期間で行うことで船の移動による重複を極力防ごうとし、冬期に行うことで葭原などに係留される船の確認をより容易にしようと意図するものであった。ただ実際に確認作業を開始してみると、湖岸域や河川の整備が進んだこともあって、その多くはかつて船が繫留されていた琵琶湖岸や内湖辺の漁港や船溜りより、むしろ湖岸や内湖の葭原、未改修の小河川、さらに行き場を失った船が陸上げされるなど、予期せぬ場所に所在するようになった。かなりの精度を確信して確認作業を終えたつもりであったが、用途を失った船の多くの管理不十分を要因として水没状態（半水没を含む）や陸上げが過半数を占める現状では、確認漏れが生じる可能性が多分に危惧される。またほぼ水没状態にあ

る船が実際の程度使用に耐えられるかは今後の精査を待たなければならない。

さて調査表の主な書式は「所在地、調査年月日、通称、船数、現況、基本類型、加工痕跡の有無、主な用途、備考、構造所見（船首・敷・舷の構造や推進具など）」の項目を採った。各船を目視することによって状態を観察し、カード記入すると共に、写真撮影することで現況確認とした。基本的には個々の船を単位としたが、ほぼ同一仕様の船が集合する一帯では一括処理したケースもある。また通称は可能な限り聞き取りを行ったが、ある程度類推したケースもままある。表題のように木造船を対象とするものであるが、近年船体にFRP加工を施すことで船齢を延ばす木造船もその数を増したので、加工が半分以下で収まり少なくとも木造船の構造を窺わせる船は注記を付した上でその範疇に含めることとした。

このうち本報告書には紙面の関係もあってその所在地を地区別に図示し、「地域別番号、所在地、数量、基本型、通称、状態、状況、備考（加工痕跡および施設）」に要約するにとどめ、写真もその一部を収録したに過ぎない。

3) 基本類型

手造りに近いこともあって施主の要望を受け入れることの多い木造船は、造船資料にも改良型や折衷船などの注釈が付されることもある。つまり、厳密な区分を設ければ際限なく項目を設けなければならなくなり、ついには1船1項目にもなりかねない。船大工は自身が手掛けた船のほとんどを見分けるとされたことは、それだけ各船に特徴が見られたことを意味しよう。そこで調査に際し幾つかの試案を検討した結果、残存状況と目視によって判別できる外観を基準として、便宜的に次のような3類11タイプの基本類型に分類することから始めた。

1類 舳板船

A, 丸子船 B, 中型舳板船
C, 小型舳板船 D, 南浜船

2類 剣先船

A, 大型剣先船 B, 小型剣先船
C, 剣先旅客船

3類 その他

A, 屋形船 B, 網打ち船 C, 箱船
D, 鮎掛け船 E, その他

まず舳とオモギ（船舷）の間に数枚の板を斜めに取り付けることで船首部を構成する「舳板船」を1類とした。琵琶湖独自の構造船で、県下で圧倒的な船数を誇った船でもある（この舳板船については第2節で解説したので参照されたい）。これを独自の構造船である「丸子船」、主に漁船や荷船として湖上で用いた「中型舳板船」（敷幅4尺以上が一つの目安）、主に農用として内湖や水路で用いた「小型舳板船」、独自の外観を持つ「南浜船」に大別することとした。実際に各船の計測が許されるならば寸法によってさらに細分化する必要があるだろう。また本来ならば丸子船は独立させた類型を設けるべきであろうが、残存状態からこの類に包含した。近世の艀船は「大艀・大中艀・中艀・小艀・手繰漁船（小艀猟船）・田地養船」などに区分されていたが（第2節『資料1』参照）、中艀以上はいずれも舳板構造と推定されるので1類Bに相当しよう。

2類は一本水押しである芯木を剣のように突き出させ、オモギ（船舷、ガワホテなどとも言う）を直接芯木に寄せ合わせることで船首部を構成した延造り構造船「剣先船」。これを漁船や荷船などに用いた中型を含む「大型剣先船」、小漁船や遊漁船としての用途が多かった「小型剣先船」、瀬田川で用いられた「剣先旅客船」に大別した。

1類・2類に該当しない船を3類に包含した。瀬田川筋を中心に普及した戸立て構造の観光「屋形船」、専ら投網に用いる小型漁船「網打ち船」、前後同型で箱状に仕上げた「箱船」、川船仕様の小型漁船「鮎掛け船」、手造りや構造不明の「その他」。

なお丸子船・フリカケ船・構造不明船のごく一部を除けばシキ（船底）はいずれも艀構造。艀（ヒラタ）とは数枚の船板をほぼ並列に矧ぎ合わせてシキとし、これに対しほぼ直角にオモギを取り付けた比較的細長い船。とはいうもののシキの左右はタチといって少し反りを持たせるし、オモギの取り付け方もヒラキといって少し上口開きとなるので、中央付近の断面が定規で測ったように箱型になる訳ではない。船底が平らに近いぶん船が安定し、水深の浅い水路や河川などの水域での使用も可能となる。一方、湖上の航行能力や堅牢さともなると丸子船にはるかに及ばないとされる船でもある。

【基本類型の設定にあたって】基本類型を設定するに際し次のような点に留意した。当初は近世との比較資料とする意味もあって、丸船・艀船の区分を想定し

た。しかし、調査対象の船の多くは接近して採寸することを拒むことが想定されたので、近世のように艀船を敷幅や敷長さによる区分を困難としている。つまり、数艘の丸子船を除くほとんどを艀船として一括処理しなければならなくなってしまうので、これでは分類したことになる。またほぼ同じ船型でも用途や地域によって呼称を変えることもあるので、転売されたり用途を違えると呼称そのものを変えてしまう可能性も想定される。現存する木造船ではもはや漁船・遊漁・屋形船・貸釣船・観光田船などの一部を除けばほとんど特定の用途を持たない船なので、用途や名称からの区分は繁雑さが生じるばかりでさほど有力な分類方法とは思われない。ほかに明治以降の日本形船では「五〇石以上・長さ3間以上・3間以下・免税船」「小船（鯉漁船及小廻船・遊船・端艇）」「五〇石積以上・五〇石未満及鯉漁船湖川小廻船・水田耕作船・水災予備船」「小廻船・遊船・免税船」、さらに船の長さ（3間・4間・5間・6間以上）、動力の有無、積載量、漁船であれば漁法別など様々な分類がみられる。つまり、過去の資料と比較しようとすれば限りなく繁雑になってしまうのである。そこで試行錯誤の結果、前出のような基本類型を設定したのであるが、史料を含めた統一的な分類ともなるとな一考を要しよう。

4) 調査の結果

調査の結果、総船数667艘の木造船を確認した。その基本類型別集計と現況はおよそ『表1』のようである。

【現況】 確認した船数のうち、比較的「良」と判断した船はかなり基準を甘くしても396艘。うち何らかの形で使用中と推定される船は294艘前後。つまり、全体の44%程度が辛うじて使用される状況にあるに過ぎない。一方、265艘は用途を失って葭原などに放置されたり、陸上げされるなど、もはや修理を施しても船として再生することはまず不可能に近いと考えられるので、現状で使用可能と推定される船は最大400艘を越えることはまずなからう。

水没船109艘、半水没船191艘程度を確認した。水没船は水没または船体のごく一部が水面に姿を表した船を一つの基準としたが、半水没との区分は水深や水位の関係もあって多分に抽象的である。かつて頻繁に使用していた時代では、雨が降ると水を汲み出すなど小まめに船の手入れをするのが船持ちの仕事の一つであったが、船の用途が減少するに従って次第に管理が

表1 基本類型の船数とその現況

基本形	船数	状 況			
		良	中破	大破	不明
1類 舳板船	524	287	152	82	3
A、丸子船	6	1	3	2	0
B、中型舳板船	60	19	22	17	2
C、小型舳板船	445	259	123	62	1
D、南浜船	13	8	4	1	0
2類 剣先船	92	70	13	9	0
A、大型剣先船	10	2	4	4	0
B、小型剣先船	78	65	9	4	0
C、剣先旅客船	4	3	—	1	0
3類 その他	51	39	7	3	2
A、屋形船	19	15	3	1	0
B、網打ち船	8	6	2	—	0
C、箱船	17	13	2	2	0
D、鮎掛け船	4	3	—	—	1
E、その他	3	2	—	—	1
合 計	667	396	172	94	5

疎かになっていった。水没状態の船の多くはこのような水替えの管理を怠ったためなので、すべてを廃船と見做す訳にはいかない。調査後でもほぼ水没状態の船を水替えし、一部修理を施すことで使用した船もあるし、引き上げ作業中に二つ折となった事例も聞き取れる。これらは今後の個々の精査に委ねなければならないが、良と判断した船にはこのような船の一部を含む可能性もある。

陸上げ船は76艘程度を確認している。志賀町に所在する海水浴の監視船およびエリ船の各1艘、大津市関津町の1艘を除くと展示保管用を含むすべてが廃船同様。使用船を長期間陸上げしてしまうと、よほど保存対策をしっかりと施さなければ矧ぎ合わせた板間に大きな隙間を生じさせ、船としての使命を確実に奪い去ってしまう。その意味ではむしろ水没状態の方が船の保全には適す場合が多いが、水没期間による船体材の強度、船内のヘドロの堆積などの問題もある。かつては作業を終えると船内を丁重に掃除したし、夏場になると船を陸上げして船体に付着したソブ（水アカ）を取り除き、銅板の上に墨を塗り直したり、船底を焼くなどの管理を行っていた地域も、もはやそれらの作業光景を目にすることができなくなってしまった。

現在でも明らかに木造船の船体の一部にFRP材を張ることで補強した船77艘程度を確認したが（前述

のように加工が半分程度以下に限定される船)、外観が許されない船底外側に施した船ともなると、さらにある程度の船数を見込まなければならない。またこの工法を流用することで廃船同様の木造船でも一時期に再生させることもできるが、船体材がこれに耐え得る船に限られる。このようにほぼ全体にFRP加工を施した木造船は正確にはカウントしていないが、相当数に上ることは間違いなからう。

【船型】 その船型を概観すると、琵琶湖独自の構造を持つ舳板船は524艘で全体の78.6%を占める。つまり、現存する船からも舳板船が琵琶湖を代表する船型であったことが知られよう。

このうち小型舳板船は全体の66.7% (445艘) を占め、これに小型剣先船11.9% (78艘) と続く。いずれも簡便な船として比較的遅くまで用途を得ていたため、比較的「良」と評価される船の占める割合が高い。これらの船は共にさほど頻度は高くないものの、近年でも遊漁船・貸船として辛うじて用途を得ている船である。かつて湖上を賑わせた中型舳板船は船全体の9.0% (60艘) を占めるものの、実際に使用可能な船ともなるとごく限られた船数とならう。屋形船は近い将来使用に耐えられなくなることは明らかなし、独自の船型とされる南浜船・網打ち船などの他の船も同様の傾向にある。

☆

以下、各船型別の解説は第2節に譲ることとし、ここではタイプ別の現況の概略を紹介しておこう。

1-A 丸子船 稼働するのは湖北町尾上の「金龍丸」(一〇〇石積機械船) 1艘に過ぎない。このほかに西浅井町大浦・菅浦に陸上げされた展示船各1艘、ほぼ倒壊状態の3艘(尾上・大浦・北小松)を確認したが、なお近江八幡市伊崎の湖中に3艘程度が水没状態にあるという。また県下各地で相当数の丸子船の部材を確認しているが、これらは今後の研究資料として再認識されよう。

1-B 中型舳板船 かつて漁船・荷船・作業船などとして湖上を中心として幅広く用いられた船であるが、辛うじて稼働しているのは漁船として用いられる数艘、他の用途を含めても10数艘に過ぎず、その多くは陸上げされるなどほぼ廃船状態にある。調査後、大津市南大萱の浜口地区で1艘の陸上げ船を確認したが、これが帆走構造を完備した唯一の船である(ほかに脱着式の帆走施設を保有する小船1艘、全面にFRP加工を施したが辛うじて帆走施設を窺わせる小船1

艘を目にしている)。

1-C 小型舳板船 田船などの通称で呼ばれることの多い小船は、現存する木造船の3分の2程度を占め使用可能状態の船も数多い。簡便な多目的船として、比較的遅くまで農用を中心に小型漁船や日常生活など幅広く用いられていたことが、現存する船の多さにつながったのだろう。なお近年隆盛をみる西ノ湖の観光田船はその多くが船体にFRP加工を施しているのもはや木造船の範疇に含めることができなくなってしまった。

1-D 南浜船 びわ町南浜を中心に普及した川船として、現在も姉川筋のヤナ漁などに用いられる。とは言うものの他の地域に移動した船を含めても総数は13艘程度に過ぎないし、何らかの形で使用中と推定される船は一部に改造痕を残すものを含めても8艘前後にまで衰退してしまっている。

2-A 大型剣先船 かつて漁船や荷船として使用されていたが、膳所・勝野の船溜まりの各1艘の漁船を除けばいずれも廃船同様でわずかに船型を今に伝えるに過ぎない。いずれも機械船仕様の漁船で、比較的近年に稼働した痕跡は窺えない。

2-B 小型剣先船 現存する船数は78艘で、全体に占める割合は11.7%と比較的高い比率を占める。木造船が次第に用途を失っていったのちでも、建造が容易なこともあって小型遊漁船や釣貸船として需要があったためだろう。ただ少なくとも昭和54年以降の建造は確認できない(県外料亭用船は除く)。

2-C オヤマ船 かつて石山寺・立木観音などへの参詣客を運ぶ旅客船として活躍したが、昭和40年以降に造られることもなくなり、屋形船の曳船として用いられる3艘のほかに、廃船同様1艘(のち焼却処分)をみるに過ぎない。いずれも機械船仕様に改造された船。

3-A 屋形船 瀬田川筋に15艘程度が観光屋形船として稼働するに過ぎない。昭和54年以降の新造もみられないので、いずれも何らかの形でFRP材で補強することで辛うじて使用に耐えられる状態にあり、これを施さない船はいずれも廃船同様。

3-B 網打ち船 一部FRP材で補強した船を含め6艘が辛うじて使用可能状態にある。昭和40年頃以降造られることはなく、かつてのように櫓を推進具とする無動力船は片面にFRP加工を施した1艘に過ぎず、これ以外はいずれもエンジン搭載仕様船。現在瀬田川筋の網打ちの中心を占めるのは同船を模倣したF

R P 船.

3-C箱船 エリ竹を運ぶために造られた陸上げの1艘を除くと、いずれも船首部を朽損したため切断した改造船（調査後、志賀町中浜で納屋の壁面に保管した水災予備船1艘を確認している）。

3-D鮎掛け船 瀬田川筋下流域の小型漁船で、水域にあっては多目的に用いられた中心的な船であったが、近年では関津町の2艘を見るに過ぎない。現在使用されるのは1艘、残り1艘もほぼ使用可能状態にある（のち1艘は船具を含め琵琶湖博物館に寄贈）。

3-Eその他 素人による手作り船2艘のほかに、水没したため構造が全く不明な2艘があった。また全面にFRP加工を施したので集計に加えなかったが、木工技術の心得のある人によって造られた船も少なからずあった。洋釘を薄く打ち延ばして船釘とした船は外見上は全く遜色のない船であるが、どうしても使い勝手が悪いという。また木造船の宿命ともいえる塗止めを接着剤やFRP材補強に依存しなければならぬのは止むを得ないことであろう。

【所在地】 さて現存する木造船の市町村別の集計は『表2』のようである。概観すると湖南・湖東一帯に多くを占めていることが注目される。大津・草津・近江八幡の3市で全体の45%を占めるし、これに守山・中主・安土・能登川の1市3町を加えると実に全体の73%近くにもなってしまう。一方、かつて船利用が盛んであった高島郡内は総数102艘、彦根市から西浅井町にかけての1市6町は合わせても64艘を数えるに過ぎない。少し以前に相当数の船を確認した米原～長浜にかけての1帯では、用途を失った木造船が漁港などの改修によってその姿を消し、わずか2艘（うち1艘は手造り船）しか現存しなくなってしまった。

水域別にみると八幡堀を含めた西ノ湖に88艘、白鳥川以西の近江八幡市内34艘、伊庭内湖やそれに通じる水路に83艘を確認しているので、この水域だけでも全体の30%近くが所在することとなる。湖岸域や漁港などの改修整備が進むに従って次第に内湖や水路などに追いやられていった結果であろうが、もともと現存する小船に限ればそれらの水域で用いることの多かった船でもある。また比較的遅くまで用途があり、その後も遊漁船などとして辛うじて用途を得たこと、船を繋留または放置する場所の確保も船の現存率に与える影響も大きなものであった。船籍を持たない船は

漁港での繋留に制限を受けるし、雨を避けるため橋梁下での繋留も年々それを困難としている。また草津市下物の江川に30艘が密集するように繋留されることが目に付くが、川筋に位置し琵琶湖にあっても比較的遅くまで木造船を手掛けた造船所によって管理が維持されたことによる。

また昭和40年以降、農業の近代化を目指したの耕地整理事業の施行に伴って湖岸水路が埋め立てられ、農用などの用途が大幅に減少すると、その多くは自然消滅の形で姿を消していったが、そのうちの何割かは未施行の地域に売却されていった。今なおこのような経緯によって移動した船の一部を目にすることができる。湖南湖東一帯の用途を失った丸子船もその多くが「船の三昧」と呼ばれる湖北一帯に転売されて行った。現在湖北一帯にみられる丸子船の多くがこのような経緯が語られる船である。

表2 市町村別、木造船の集計

地区別	船数	1 類				2 類			3 類				
		A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	D	E
大津市	100	-	10	34	-	2	25	4	16	6	1	2	-
草津市	93	-	7	40	-	1	36	-	1	2	5	1	-
守山市	42	-	4	31	-	2	4	-	-	-	1	-	-
中主町	39	-	-	39	-	-	-	-	-	-	-	-	-
近江八幡市	107	-	7	97	-	-	1	-	1	-	1	-	-
安土町	20	-	2	17	-	-	1	-	-	-	-	-	-
能登川町	83	-	5	73	-	-	3	-	-	-	2	-	-
彦根市	18	-	-	12	-	2	-	-	1	-	2	-	1
米原町	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
近江町	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
びわ町	24	-	1	8	13	-	1	-	-	-	1	-	-
湖北町	5	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
余呉町	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
西浅井町	14	3	5	3	-	-	1	-	-	-	2	-	-
マキノ町	21	-	1	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-
今津町	3	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
新旭町	20	-	-	18	-	1	1	-	-	-	-	-	-
安曇川町	47	-	9	35	-	1	1	-	-	-	-	1	-
高島町	11	-	2	6	-	1	1	-	-	-	1	-	-
志賀町	17	1	3	9	-	-	3	-	-	-	1	-	-
合計	667	6	60	445	13	10	78	4	19	8	17	4	3

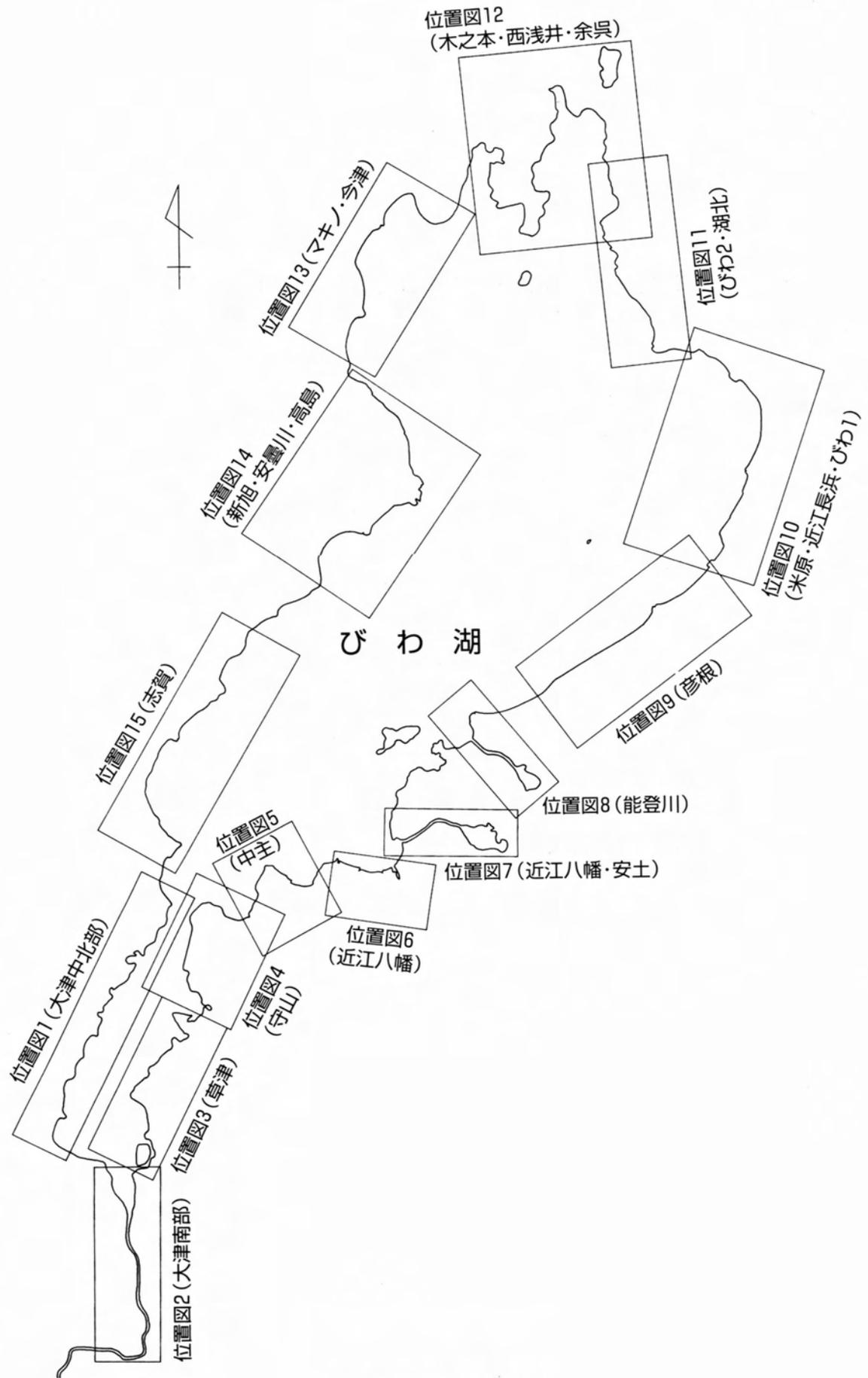
5) 調査のまとめ

調査を終えて言えることは明治7年「帆船（旧制丸木船）1,172艘，船14,315艘，漁舟50艘」（『滋賀県議会史・第一巻』），昭和2年「小船11,225艘・漁船1,308艘」（『滋賀県統計書』），昭和10年でも「小船10,516艘，漁船1,260艘」（『前同』）もあったとされる県下の木造船も，もはや667艘をみるに過ぎなくなり，その4割近くはもはや船と呼ぶには相応しくない劣悪な状態にある．それでも湖北町尾上の丸子船1艘，数艘の中型漁船，びわ町南浜の南浜船，膳所船溜りの貸船，瀬田川の屋形船，西ノ湖の観光田舟，内湖や河川での遊漁船（投網・小糸など）として，頻度はともかくも辛うじて使用されているが現状で，日常的に使用される船ともなると皆無に等しい．その修理業務も近年では片手間に行うという造船所数軒に過ぎないし，資材の確保もあってか実質的な修理業務ともなるとここ数年では皆無といっても過言ではない状況にある．

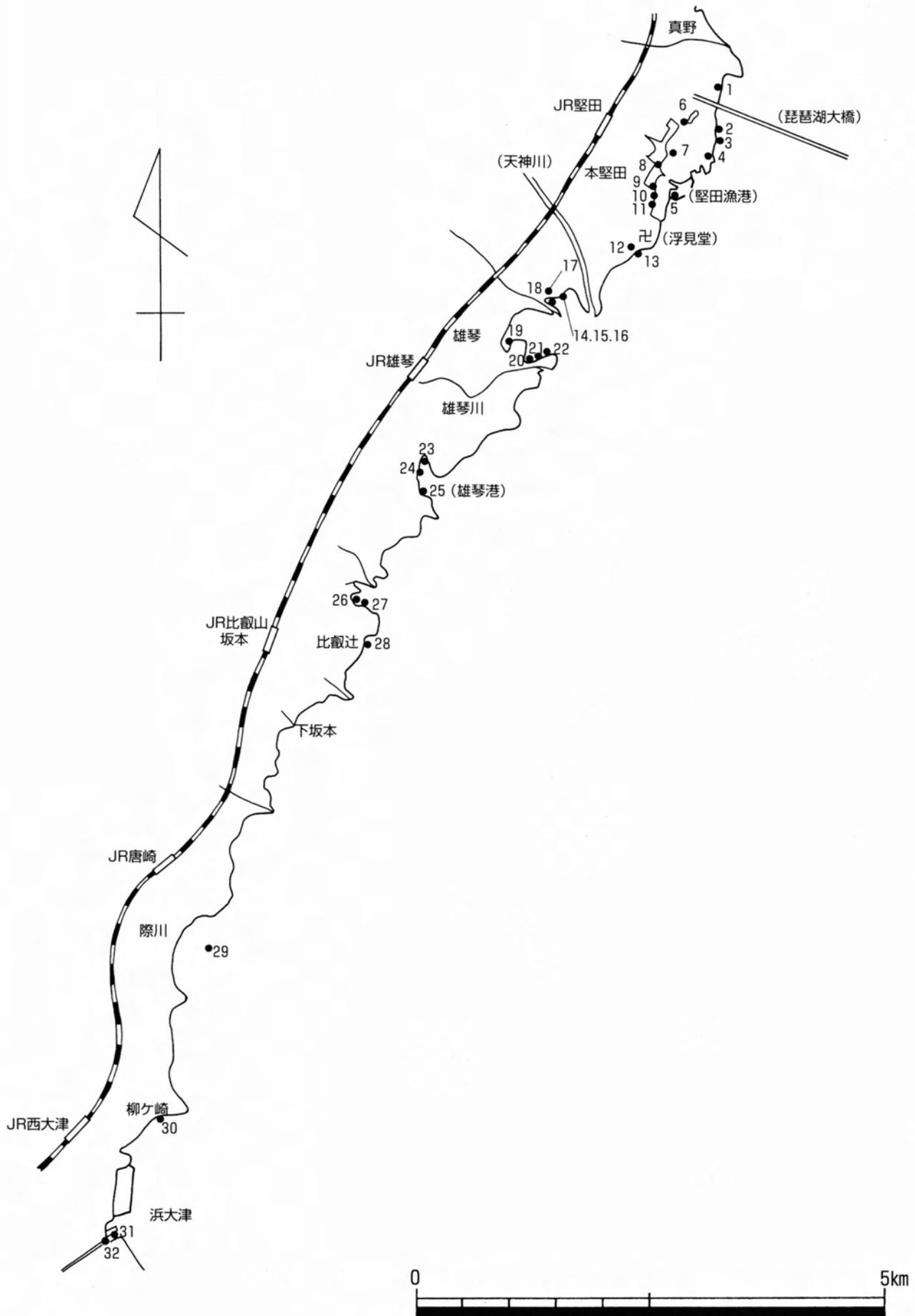
最も普及率の高かった一般的な田船は修理を施しても船齢は15年程度，漁船では11～13年程度（『滋賀県統計書』）を目安とするので，ここ8年間で展示用を除けば田船2～3艘が造られたに過ぎないので，むしろよく残っていたという思いが強い．そのぶん船の状態が悪いことにつながろうし，一部にFRP材などで補強することでようやく船を保持しているのが現状である．また調査直後でも能登川町大同川の護岸工事が一帯の船数を大幅に減少させたように，その数を年々減少させているし，現存する船の老朽化も年々加速することは間違いない．今後これらの船を維持しようとするならばまず修理手段を確保することが急務であろう．

明治22年船大工149人（『滋賀県統計書』），同43年の製造戸数56（『同前』），昭和23年10月の「滋賀県木造船工業協同組合」所属62軒（「目片文三家文書」），昭和38年3月の「滋賀県小型船舶工業会」所属20軒（「前同」）もあった造船所も，木造船の需要が皆無の現状ではその造船技術の継承を日々困難にしている．造船の用具用品などと合わせ本格的な木造船の調査や保存対策が望まれる．

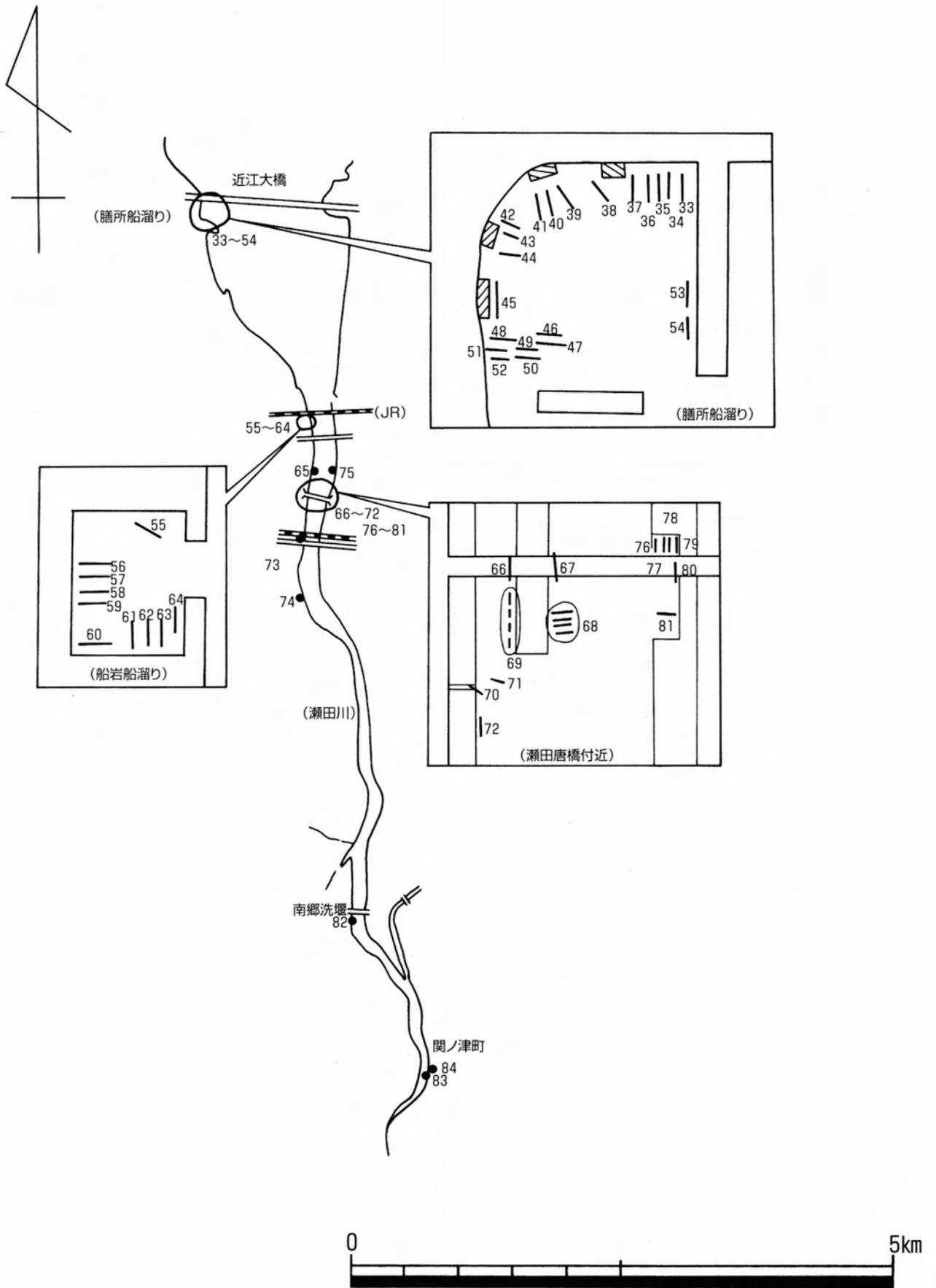
現存木造船調査報告（図版偏）



木造船実態調査位置図 (全体)



位置図 1 (大津中北部)



位置図 2 (大津南部)

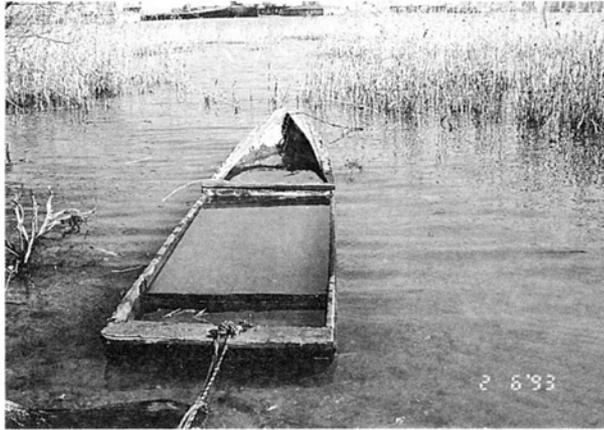
地区名大津市 1

(位置図1・2)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	大津市 今堅田	1	1-C	小型漁船	良	使用中	
2	大津市 今堅田	1	1-C	ダンベ	良	半水没	
3	大津市 今堅田	1	1-C	不明	良	使用中	
4	大津市 今堅田	1	1-C	ダンベ	中破	陸上	
5	大津市 堅田漁港	1	1-B	漁船	良	使用中	
6	大津市 今堅田	1	1-C	田船	中破	半水没	
7	大津市 今堅田	1	1-C	牛船	良	使用中	
8	大津市 今堅田内湖	1	1-C	ダンベ	良	半水没	
9	大津市 本堅田内湖	2	1-C	ダンベ	中破	水没	
10	大津市 本堅田	5	1-C	ダンベ	良	半水没	
11	大津市 本堅田	1	1-C	ダンベ	良	使用中	一部FRP
12	大津市 本堅田船溜	1	1-C	ダンベ	中破	半水没	
13	大津市 本堅田船溜	1	1-C	ダンベ	中破	水没	
14	大津市 本堅田	1	1-C	田船	良	使用中	
15	大津市 本堅田	1	1-C	ダンベ	良	使用中	一部FRP
16	大津市 本堅田	1	2-B	小舟	良	使用中	一部FRP
17	大津市 衣川	1	1-C	小型漁船	良	使用中	一部FRP
18	大津市 衣川	1	1-B	漁船	大破	陸上	
19	大津市 雄琴	1	1-C	田船	大破	水没	
20	大津市 雄琴	1	1-C	田船	中破	水没	
21	大津市 雄琴	1	1-C	不明	中破	半水没	
22	大津市 雄琴	2	1-C	漁船	中破	半水没	
23	大津市 雄琴港	2	1-C	田船	中破	水没	
24	大津市 雄琴港	1	1-C	田船	良	使用中	
25	大津市 雄琴港	1	1-C	田船	中破	陸上	
26	大津市 木ノ岡	1	2-A	漁船	中破	水没	詳細不明
27	大津市 木ノ岡	1	1-C	小型漁船	良	使用中	一部FRP
28	大津市 比叡辻	1	1-C	田船	中破	水没	
29	大津市 際川	1	1-B	漁船	不明	使用中	詳細不明
30	大津市 柳ヶ崎	1	1-B	漁船	良	使用中	
31	大津市 疏水口	1	1-B	漁船	中破	陸上	
32	大津市 浜大津	1	2-B	小型漁船	良	使用中	
33	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
34	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	
35	大津市 膳所船溜	1	3-B	チャリコ	良	使用中	貸し船
36	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	貸し船
37	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	貸し船
38	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	貸し船
39	大津市 膳所船溜	1	1-C	田船	良	使用中	貸し船
40	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	貸し船
41	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	貸し船
42	大津市 膳所船溜	1	3-B	チャリコ	良	使用中	網打船

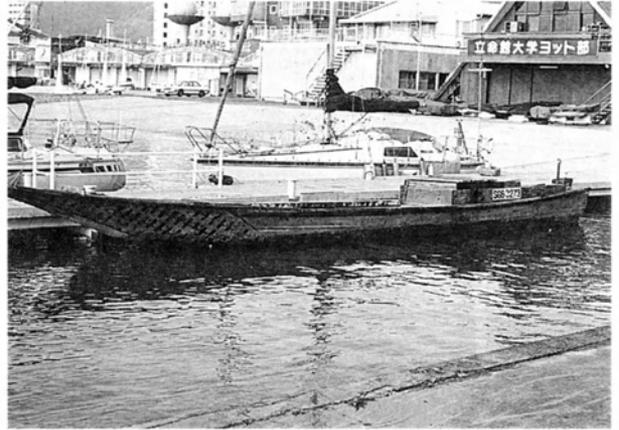
地区名大津市 2

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
43	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
44	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	貸し船
45	大津市 膳所船溜	1	1-C	田船	良	使用中	
46	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	
47	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	
48	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
49	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
50	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
51	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
52	大津市 膳所船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
53	大津市 膳所船溜	1	2-A	漁船	良	使用中	
54	大津市 膳所船溜	1	3-C	箱船	良	使用中	一部FRP
55	大津市 船岩船溜	1	3-B	小型漁船	良	使用中	網打漁船
56	大津市 船岩船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	
57	大津市 船岩船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	
58	大津市 船岩船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	
59	大津市 船岩船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	
60	大津市 船岩船溜	1	3-A	屋形船	中破	繫留	
61	大津市 船岩船溜	1	3-A	屋形船	良	使用中	一部FRP
62	大津市 船岩船溜	1	3-A	屋形船	良	使用中	一部FRP
63	大津市 船岩船溜	1	2-B	剣先船	中破	半水没	
64	大津市 船岩船溜	1	2-B	剣先船	良	使用中	
65	大津市 唐橋町	1	3-B	チャリコ	良	使用中	網打漁船
66	大津市 唐橋町	1	3-A	屋形船	大破	水没	
67	大津市 唐橋町	1	1-B	漁船	大破	水没	
68	大津市 唐橋町	4	3-A	屋形船	良	使用中	一部FRP
69	大津市 唐橋町	7	3-A	屋形船	良	使用中	一部FRP
70	大津市 唐橋町	1	1-C	田船	良	半水没	
71	大津市 唐橋町	1	1-B	漁船	良	半水没	一部FRP
72	大津市 蛭谷	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
73	大津市 蛭谷	1	1-B	漁船	中破	陸上	活簀付き
74	大津市 蛭谷	1	1-B	漁船	中破	陸上	活簀付き
75	大津市 橋本町	1	3-B	チャリコ	良	使用中	活簀付き
76	大津市 瀬田唐橋	1	2-C	おやま船	良	使用中	元旅客船
77	大津市 瀬田唐橋	1	2-C	おやま船	良	使用中	元旅客船
78	大津市 瀬田唐橋	1	2-C	おやま船	良	使用中	元旅客船
79	大津市 瀬田唐橋	1	1-B	漁船	良	使用中	一部FRP
80	大津市 瀬田唐橋	1	2-C	おやま船	大破	廃船	元旅客船
81	大津市 瀬田二丁目	1	3-B	チャリコ	良	使用中	一部FRP
82	大津市 南郷二丁目	1	3-A	屋形船	良	使用中	一部FRP
83	大津市 関津町	1	3-D	アユカケ船	良	使用中	川漁船
84	大津市 関津町	1	3-D	漁船	良	使用可	納屋に保管



今堅田・ダンベ

1-2



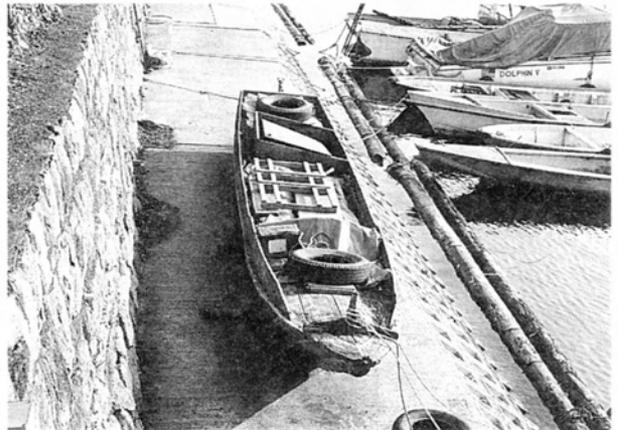
柳ヶ崎・漁船

1-30



堅田漁港・漁船 (中央)

1-5



疏水口・漁船

1-31



今堅田・牛船

1-7



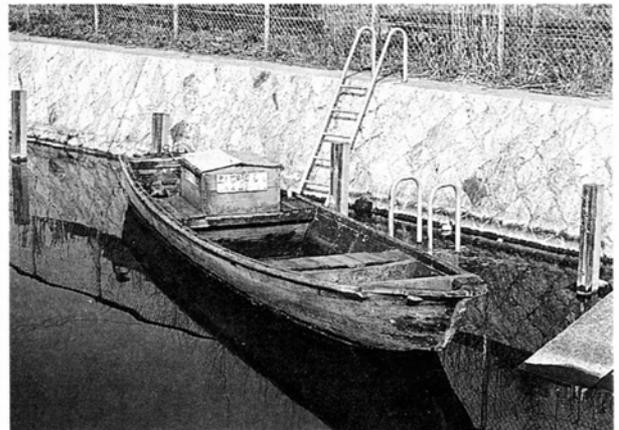
膳所船溜・田船 (右側から2艘目)

2-39



本堅田・ダンベ

1-10



船岩船溜・小型漁船

2-55



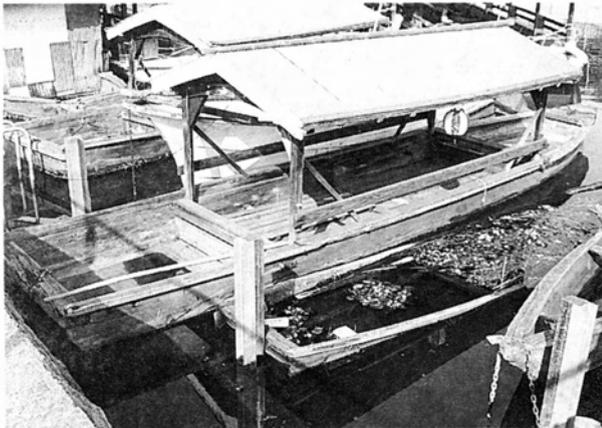
船岩船溜・剣先船

2-59



蛭谷・漁船

2-74



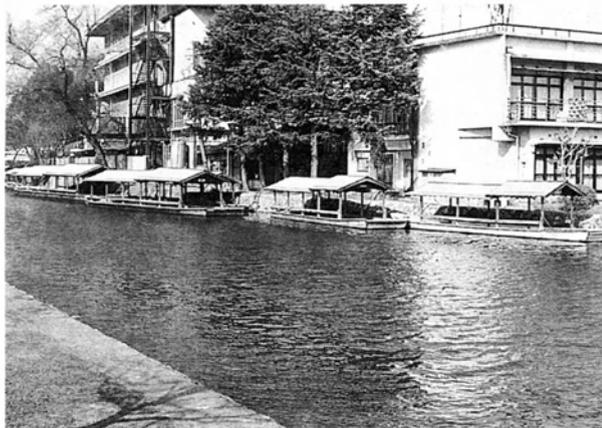
船岩船溜・屋形船

2-62



瀬田唐橋・おやま船

2-76



唐橋町・屋形船

2-69



瀬田二丁目・チャリコ

2-81



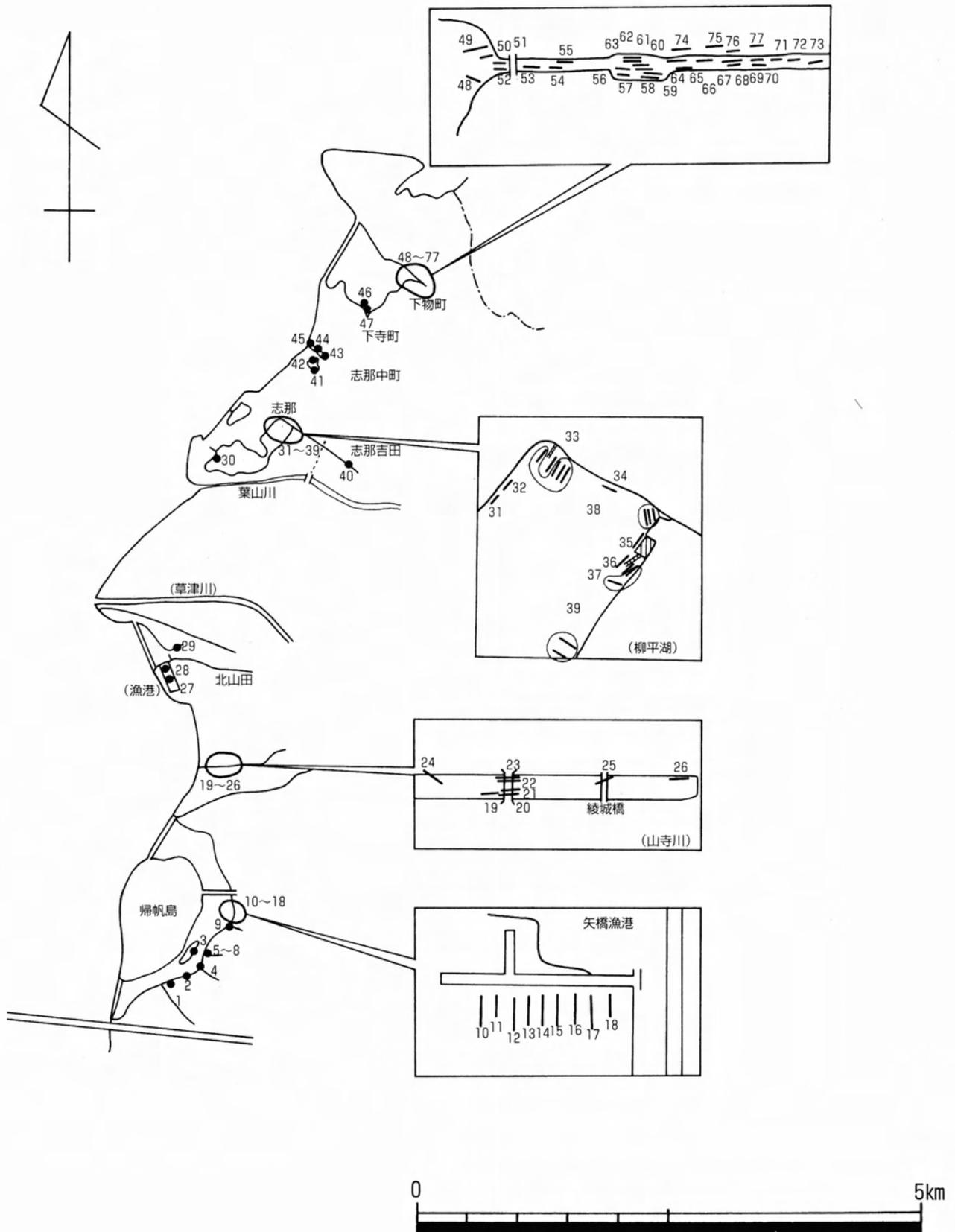
蛭谷・漁船

2-73



関津町・アユカケ船

2-83



位置図3 (草津)

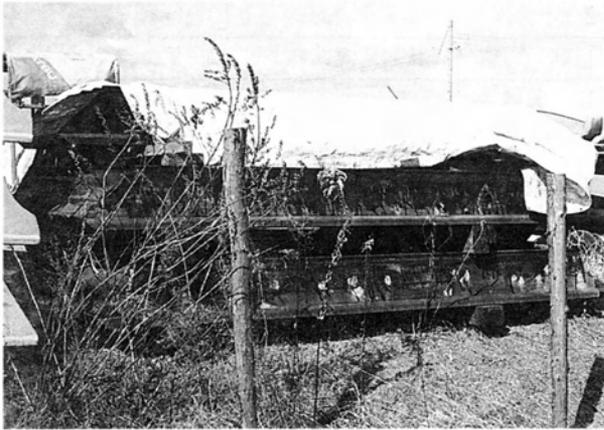
地区名 草津市

(位置図3)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	草津市 新浜町	1	1-C	小型漁船	大破	半水没	
2	草津市 矢橋町	1	2-B	剣先船	中破	半水没	一部FRP
3	草津市 矢橋町	1	1-B	漁船	不明	半水没	沖に繋留
4	草津市 矢橋町	1	1-B	漁船	中破	半水没	
5	草津市 矢橋町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
6	草津市 矢橋町	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
7	草津市 矢橋町	1	3-B	チャリコ	中破	陸上	一部FRP
8	草津市 矢橋町	5	3-C	箱船	良	陸上	釣り船
9	草津市 矢橋町	1	1-C	漁船	良	使用中	一部FRP
10	草津市 矢橋漁港	1	2-B	剣先船	良	使用中	
11	草津市 矢橋漁港	1	2-B	剣先船	良	使用中	
12	草津市 矢橋漁港	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
13	草津市 矢橋漁港	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
14	草津市 矢橋漁港	1	1-C	漁船	良	使用中	活簀付き
15	草津市 矢橋漁港	1	1-C	漁船	良	使用中	活簀付き
16	草津市 矢橋漁港	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
17	草津市 矢橋漁港	1	1-B	漁船	良	使用中	
18	草津市 矢橋漁港	1	2-B	剣先船	良	使用中	
19	草津市 山寺川	1	1-C	田船	中破	半水没	
20	草津市 山寺川	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
21	草津市 山寺川	1	2-B	剣先船	良	使用中	
22	草津市 山寺川	1	1-C	田船	良	半水没	
23	草津市 山寺川	1	2-B	剣先船	中破	陸上	
24	草津市 山寺川	1	1-B	漁船	中破	半水没	
25	草津市 山寺川	1	1-C	田船	良	使用中	
26	草津市 山寺川	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
27	草津市 北山田漁港	1	2-B	剣先船	良	使用中	
28	草津市 北山田漁港	1	1-B	漁船	良	使用中	
29	草津市 北山田町	1	2-B	剣先船	良	使用中	
30	草津市 志那柳平湖	1	1-C	田船	良	半水没	
31	草津市 志那柳平湖	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
32	草津市 志那柳平湖	1	2-B	剣先船	中破	半水没	活簀付き
33	草津市 志那柳平湖	1	1-C	田船	良	半水没	一部FRP
34	草津市 志那柳平湖	1	1-C	田船	大破	水没	
35	草津市 志那柳平湖	1	1-B	漁船	中破	半水没	
36	草津市 志那柳平湖	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
37	草津市 志那柳平湖	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
38	草津市 志那柳平湖	7	1-C	田船	大破	水没	
39	草津市 志那柳平湖	5	1-C	田船	大破	水没	
40	草津市 志那町	1	1-C	田船	中破	半水没	
41	草津市 志那中町	3	1-C	田船	大破	半水没	
42	草津市 志那中町	1	1-C	田船	中破	半水没	

地区名 草津市2

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
43	草津市 志那中町	1	2-B	剣先船	大破	半水没	
44	草津市 志那中町	1	1-C	田船	良	半水没	
45	草津市 志那中町	1	2-A	剣先船	大破	半水没	
46	草津市 下寺町	1	1-C	小型漁船	中破	使用中	活簀付き
47	草津市 下寺町	1	2-B	剣先船	中破	半水没	
48	草津市 下物町	1	3-A	屋形船	中破	半水没	
49	草津市 下物町	1	1-B	漁船	大破	半水没	
50	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
51	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
52	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	
53	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	
54	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
55	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
56	草津市 下物町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
57	草津市 下物町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
58	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
59	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
60	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
61	草津市 下物町	1	1-C	田船	良	使用中	活簀付き
62	草津市 下物町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
63	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
64	草津市 下物町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
65	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
66	草津市 下物町	1	3-D	不明	良	使用中	一部FRP
67	草津市 下物町	1	3-B	チャリコ	中破	使用可	一部FRP
68	草津市 下物町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
69	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	
70	草津市 下物町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
71	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
72	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
73	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
74	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
75	草津市 下物町	1	1-C	田船	大破	陸上	
76	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	大破	陸上	
77	草津市 下物町	1	2-B	剣先船	良	使用中	



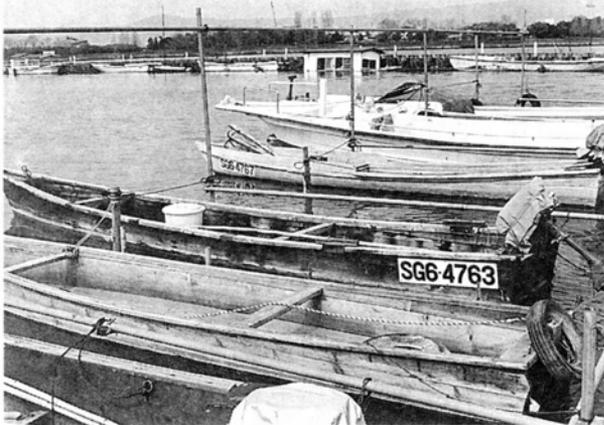
矢橋町・箱船

3-8



矢橋漁港・漁船

3-17



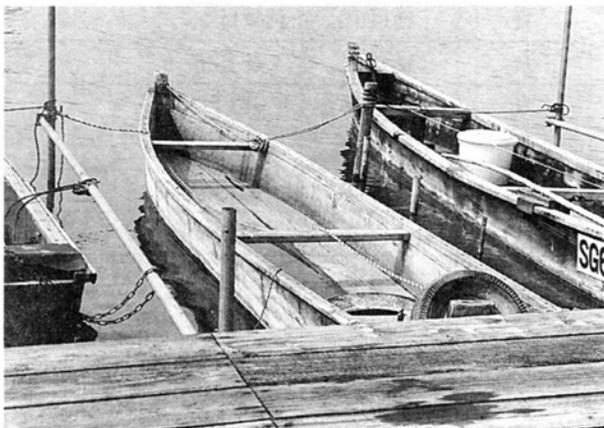
矢橋漁港・剣先船

3-10



山寺川・田船(中央)

3-22



矢橋漁港・剣先船

3-11



北山田漁港・剣先船

3-27



矢橋漁港・剣先船

3-13



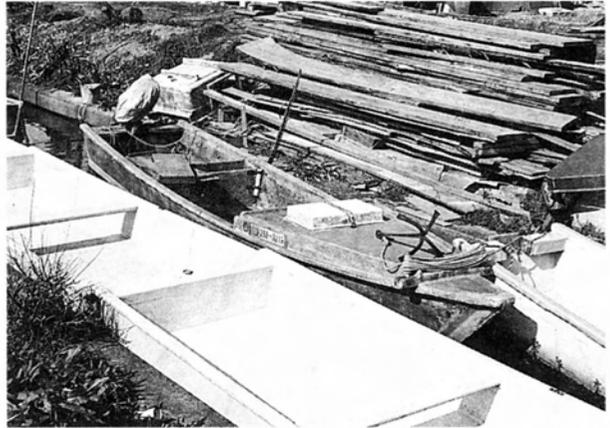
北山田漁港・漁船

3-28



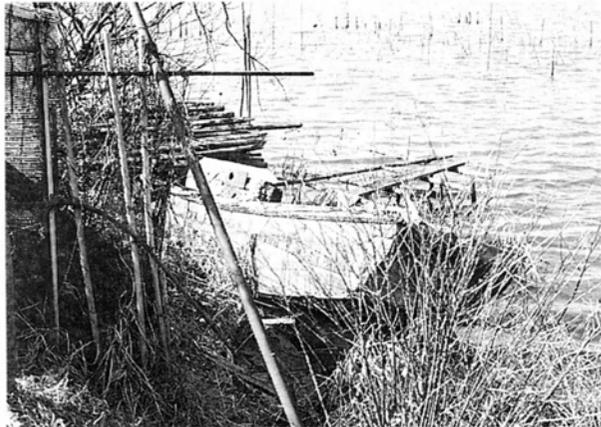
北山田町・剣先船

3-29



下物町

3-66



志那柳平湖・漁船

3-35



下物町・剣先船

3-69



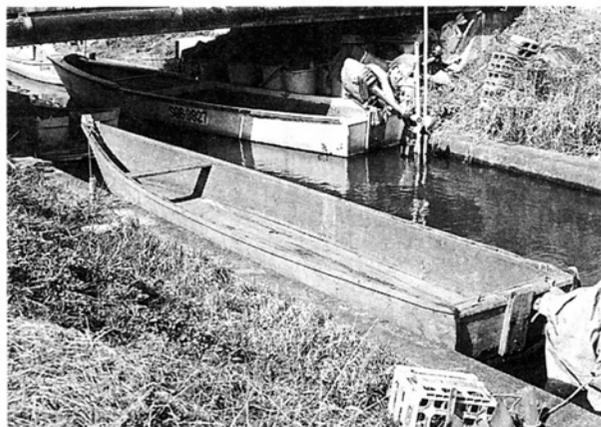
下物町・剣先船

3-52



下物町・田船

3-70



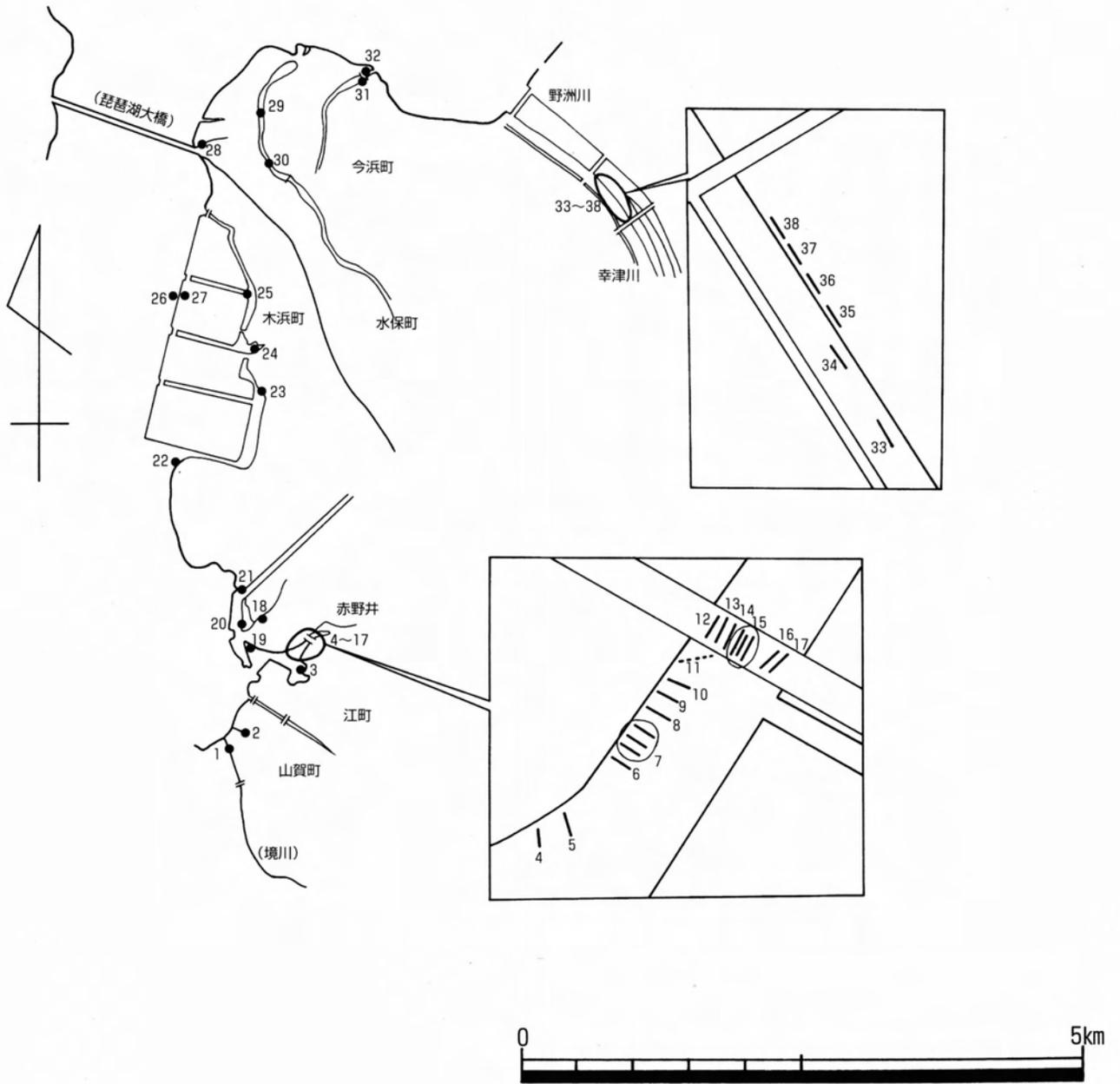
下物町・剣先船

3-53



下物町・剣先船

3-71



位置図 4 (守山)

地区名 守山市

(位置図4)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	守山市 山賀町	1	1-B	漁船	中破	半水没	
2	守山市 山賀町	1	1-B	漁船	大破	陸上	
3	守山市 杉江町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
4	守山市 赤野井町	1	3-C	箱船	良	使用中	
5	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	良	使用中	
6	守山市 赤野井町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
7	守山市 赤野井町	3	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
8	守山市 赤野井町	1	2-B	剣先船	良	使用中	一部FRP
9	守山市 赤野井町	1	1-C	ダンベ	良	使用中	一部FRP
10	守山市 赤野井町	1	1-C	ダンベ	良	使用中	一部FRP
11	守山市 赤野井町	1	2-B	剣先船	大破	水没	活簀付き
12	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	良	使用可	一部FRP
13	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	良	使用可	一部FRP
14	守山市 赤野井町	1	2-B	剣先船	良	使用可	活簀付き
15	守山市 赤野井町	3	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
16	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
17	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	良	使用中	
18	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	良	使用中	
19	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
20	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	大破	半水没	
21	守山市 赤野井町	1	1-C	田船	良	使用中	
22	守山市 木浜町	1	1-C	小型漁船	中破	半水没	
23	守山市 木浜町	1	1-C	田船	良	使用中	
24	守山市 木浜町	1	1-B	漁船	中破	水没	活簀付き
25	守山市 木浜町	1	1-C	田船	良	使用中	
26	守山市 木浜漁港	1	1-C	田船	良	使用中	
27	守山市 木浜漁港	1	2-A	漁船	中破	陸上	
28	守山市 木浜町	1	1-B	漁船	大破	水没	
29	守山市 水保町	1	1-C	田船	中破	水没	
30	守山市 水保町	1	1-C	田船	中破	水没	
31	守山市 今浜町	1	2-A	剣先船	大破	水没	
32	守山市 今浜町	1	1-C	田船	良	使用中	
33	守山市 野洲川西岸	1	1-C	田船	中破	陸上	
34	守山市 野洲川西岸	1	1-C	田船	中破	陸上	
35	守山市 野洲川西岸	1	1-C	田船	中破	半水没	
36	守山市 野洲川西岸	1	1-C	田船	中破	半水没	
37	守山市 野洲川西岸	1	1-C	田船	中破	半水没	
38	守山市 野洲川西岸	1	1-C	田船	良	半水没	



山賀町・漁船

4-1



赤野井町・田船ほか

4-13~15



赤野井町・箱船

4-4



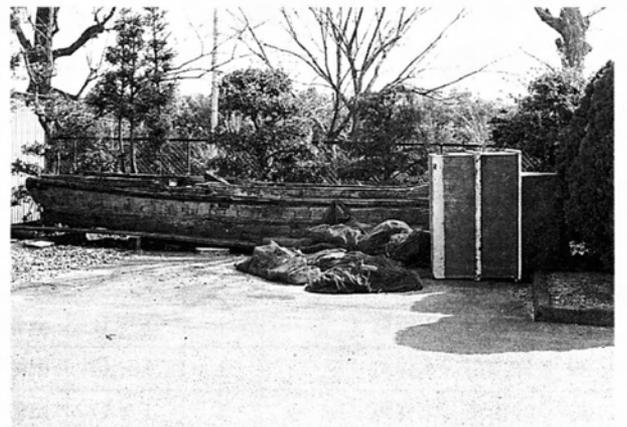
木浜漁港・田船

4-26



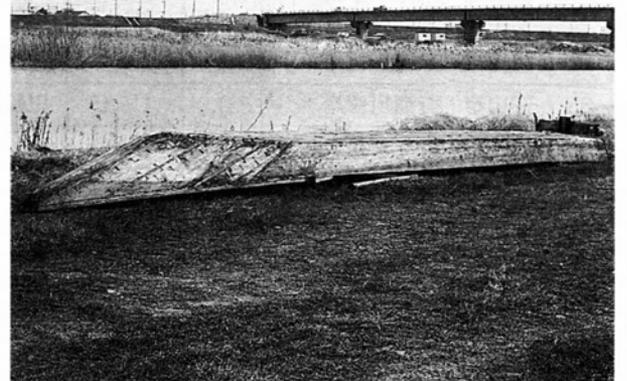
赤野井町・剣先船

4-8



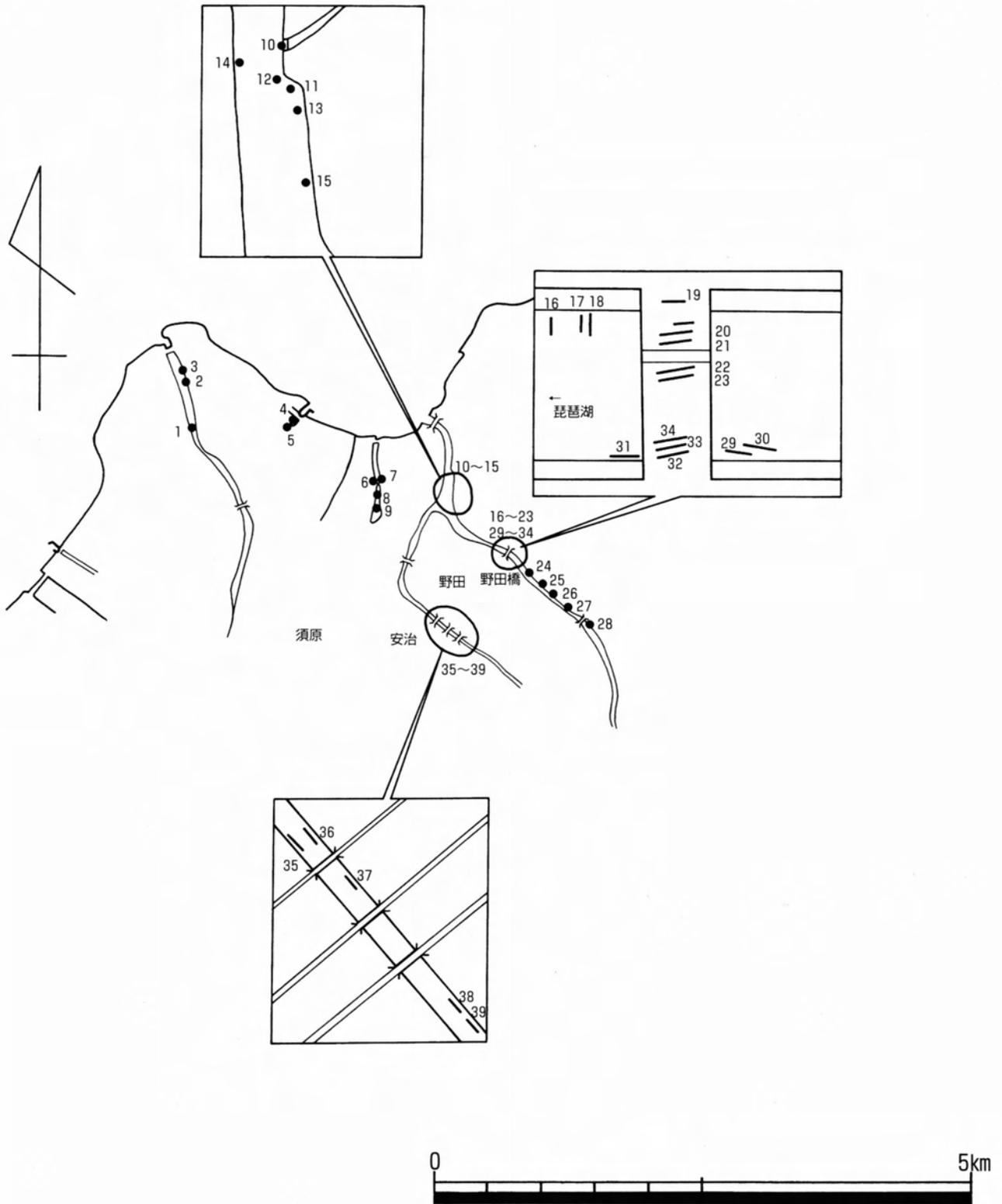
木浜漁港・漁船

4-27



野洲川西岸・田船

4-34



位置図5 (中主)

地区名 中主町

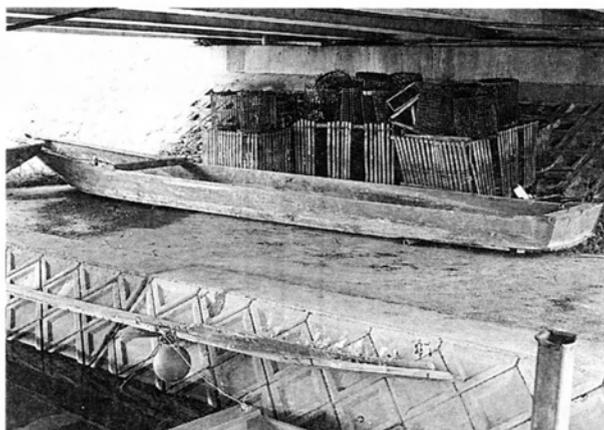
(位置図5)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	中主町 吉川	1	1-C	田船	良	使用中	
2	中主町 吉川	1	1-C	田船	良	使用中	
3	中主町 吉川	1	1-C	田船	良	使用中	
4	中主町 菖蒲	1	1-C	田船	良	半水没	
5	中主町 菖蒲	1	1-C	田船	良	半水没	
6	中主町 須原	1	1-C	田船	良	使用中	
7	中主町 須原	1	1-C	田船	中破	半水没	
8	中主町 須原	1	1-C	田船	良	使用中	
9	中主町 須原	1	1-C	田船	良	使用中	
10	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
11	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
12	中主町 野田	1	1-C	田船	中破	水没	
13	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
14	中主町 安治	1	1-C	田船	大破	水没	
15	中主町 野田	1	1-C	田船	中破	水没	
16	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
17	中主町 野田	1	1-C	田船	良	半水没	
18	中主町 野田	1	1-C	田船	良	半水没	
19	中主町 野田	1	1-C	田船	中破	陸上	
20	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
21	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
22	中主町 野田	1	1-C	田船	良	半水没	
23	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
24	中主町 野田	1	1-C	田船	中破	水没	
25	中主町 野田	1	1-C	田船	良	水没	
26	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
27	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
28	中主町 比留田	1	1-C	田船	良	使用中	
29	中主町 野田	1	1-C	田船	中破	水没	
30	中主町 野田	1	1-C	田船	中破	水没	
31	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
32	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
33	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
34	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
35	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
36	中主町 野田	1	1-C	田船	良	半水没	
37	中主町 野田	1	1-C	田船	良	半水没	
38	中主町 野田	1	1-C	田船	良	使用中	
39	中主町 野田	1	1-C	田船	良	半水没	



吉川・田船

5-1



家棟川・田船

5-19



葛蒲・田船 (手前)

5-5



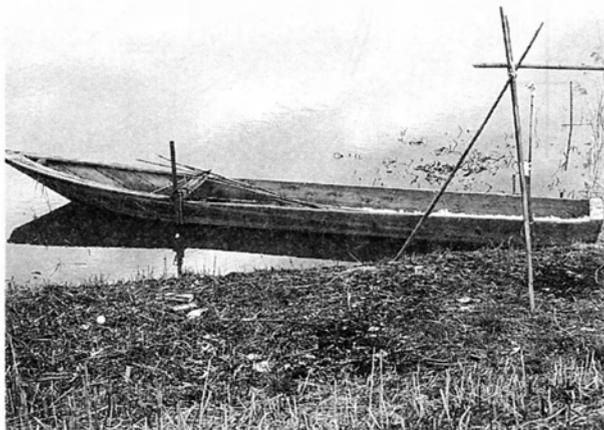
家棟川・田船

5-26



須原・田船

5-6



家棟川・田船

5-27



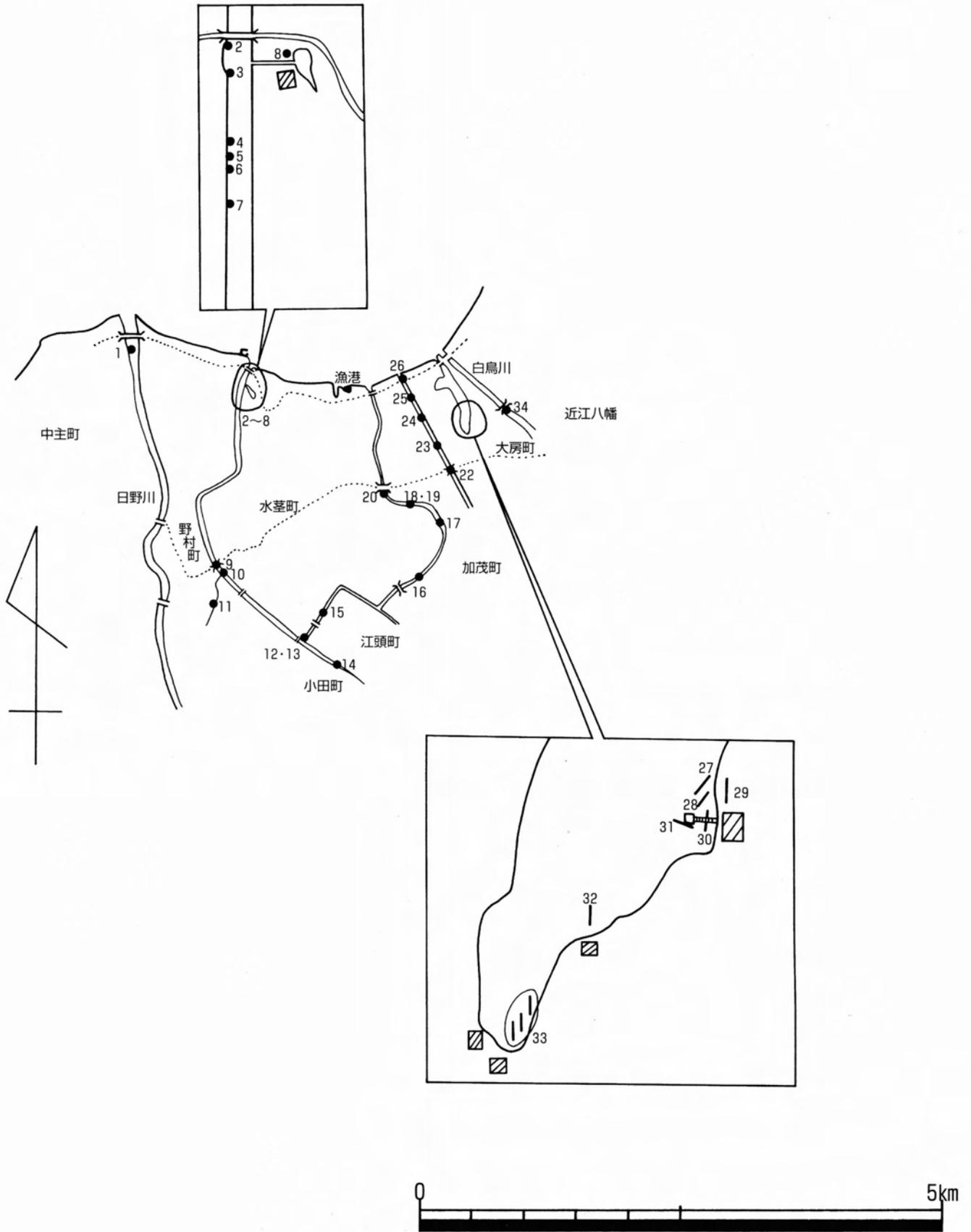
須原・田船

5-8

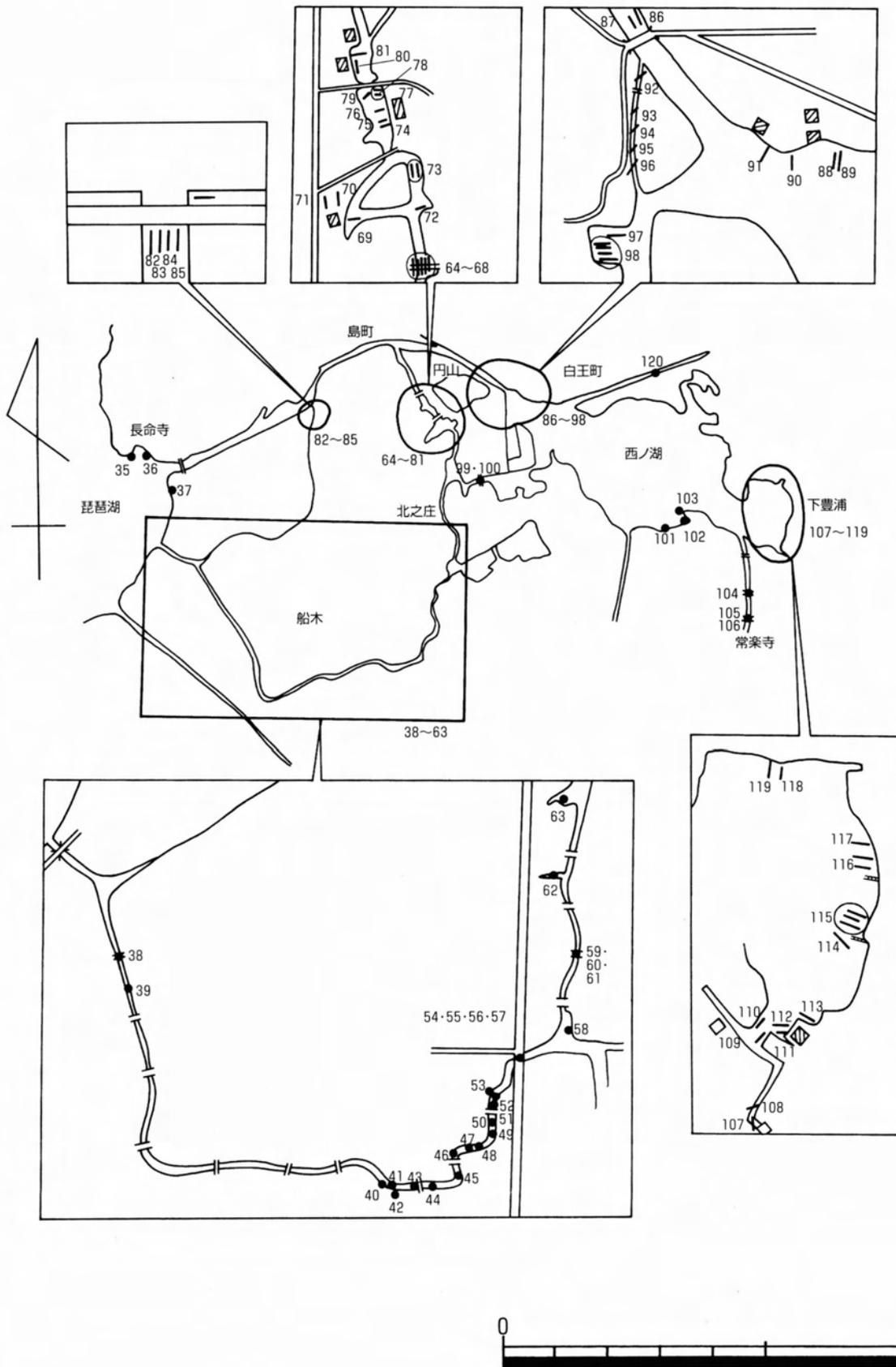


家棟川・田船

5-31~34



位置図6 (近江八幡)



位置図 7 (近江八幡 2・安土)

地区名 近江八幡市1

(位置図6・7)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	近江八幡市 日野川河口	1	1-C	田船	良	使用中	
2	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	中破	半水没	
3	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	良	使用中	
4	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	良	使用中	
5	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	中破	半水没	
6	近江八幡市 野村	1	1-B	漁船	中破	半水没	
7	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	中破	半水没	
8	近江八幡市 牧	2	1-C	田船	大破	陸上	
9	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	大破	水没	
10	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	中破	半水没	
11	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	中破	半水没	
12	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	良	使用中	
13	近江八幡市 野村	1	1-C	田船	中破	半水没	
14	近江八幡市 小田町	1	1-C	田船	良	使用中	
15	近江八幡市 江頭町	1	1-C	田船	良	半水没	
16	近江八幡市 加茂町	1	1-C	田船	良	半水没	
17	近江八幡市 牧	1	1-C	田船	良	半水没	
18	近江八幡市 牧	1	1-B	漁船	中破	半水没	
19	近江八幡市 牧	1	1-C	漁船	中破	半水没	
20	近江八幡市 牧	1	2-B	剣先船	大破	半水没	
21	近江八幡市 牧	1	1-C	田船	良	半水没	
22	近江八幡市 牧	1	1-C	田船	良	半水没	活簀付き
23	近江八幡市 牧	1	1-C	土船	大破	水没	
24	近江八幡市 牧	1	1-C	田船	良	使用中	
25	近江八幡市 牧	1	1-C	田船	良	使用中	
26	近江八幡市 牧	1	1-B	田船	良	半水没	
27	近江八幡市 北沢沼	1	1-C	田船	中破	半水没	
28	近江八幡市 北沢沼	1	1-C	田船	大破	水没	
29	近江八幡市 北沢沼	1	1-B	漁船	中破	陸上	活簀付き
30	近江八幡市 北沢沼	1	1-C	田船	中破	半水没	
31	近江八幡市 北沢沼	1	1-C	田船	中破	半水没	
32	近江八幡市 北沢沼	1	1-C	田船	良	半水没	
33	近江八幡市 北沢沼	3	1-C	田船	中破	半水没	
34	近江八幡市 北沢沼	1	1-B	漁船	中破	陸上	
35	近江八幡市 長命寺	1	3-C	箱船	中破	半水没	
36	近江八幡市 長命寺	1	1-C	田船	中破	半水没	
37	近江八幡市 津田	1	3-A	屋形船	中破	陸上	旧沖島渡船
38	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
39	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
40	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
41	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
42	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	良	陸上	

地区名 近江八幡市2

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
43	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	良	陸上	
44	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
45	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
46	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	良	陸上	一部FRP
47	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
48	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	良	使用中	
49	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
50	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	良	使用中	
51	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
52	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	良	使用中	
53	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	中破	半水没	
54	近江八幡市 八幡堀	1	1-C	田船	良	使用中	
55	近江八幡市 水郷めぐり	1	1-C	田船	良	使用中	
56	近江八幡市 水郷めぐり	1	1-C	田船	良	使用中	
57	近江八幡市 水郷めぐり	1	1-C	田船	良	使用中	
58	近江八幡市 北之庄	1	1-C	田船	中破	半水没	
59	近江八幡市 北之庄	1	1-C	田船	中破	半水没	
60	近江八幡市 北之庄	1	1-C	田船	中破	半水没	
61	近江八幡市 北之庄	1	1-C	田船	良	使用中	
62	近江八幡市 北之庄	1	1-C	田船	中破	半水没	
63	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
64	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
65	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
66	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
67	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	生簀付
68	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	生簀付
69	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
70	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	大破	陸上	
71	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	大破	陸上	
72	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	大破	水没	
73	近江八幡市 円山	2	1-C	田船	良	使用中	
74	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
75	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
76	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
77	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	大破	水没	
78	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	大破	水没	
79	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	中破	半水没	
80	近江八幡市 円山	1	1-B	漁船	大破	水没	
81	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	半水没	
82	近江八幡市 北津田	1	1-B	漁船	中破	使用可	
83	近江八幡市 北津田	1	1-C	田船	良	使用中	
84	近江八幡市 北津田	1	1-C	田船	良	使用中	

地区名 近江八幡市 3

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
85	近江八幡市 北津田	1	1-C	田船	良	使用中	
86	近江八幡市 白王	1	1-C	田船	良	使用中	
87	近江八幡市 白王	1	1-C	田船	良	使用中	
88	近江八幡市 白王	1	1-C	田船	良	使用中	
89	近江八幡市 白王	1	1-C	田船	良	半水没	
90	近江八幡市 白王	1	1-C	田船	良	半水没	
91	近江八幡市 白王	1	1-C	田船	良	半水没	
92	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	半水没	
93	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	半水没	
94	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	半水没	
95	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
96	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	半水没	
97	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
98	近江八幡市 円山	4	1-C	田船	中破	半水没	
99	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	
100	近江八幡市 円山	1	1-C	田船	良	使用中	



日野川河口・田船

6-1



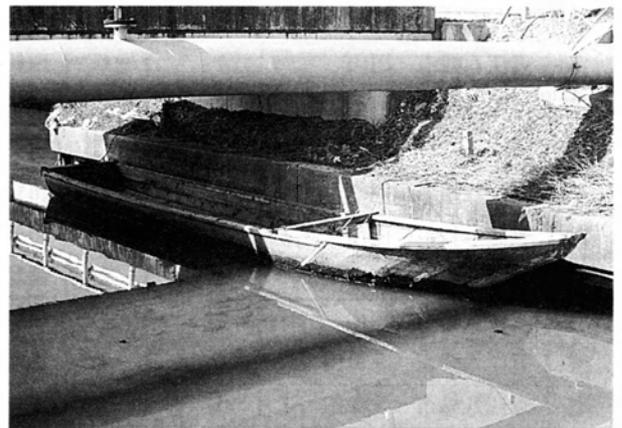
牧・田船

6-8



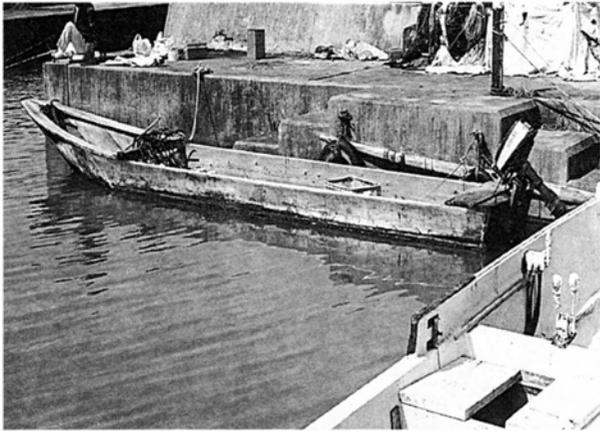
野村・田船

6-4



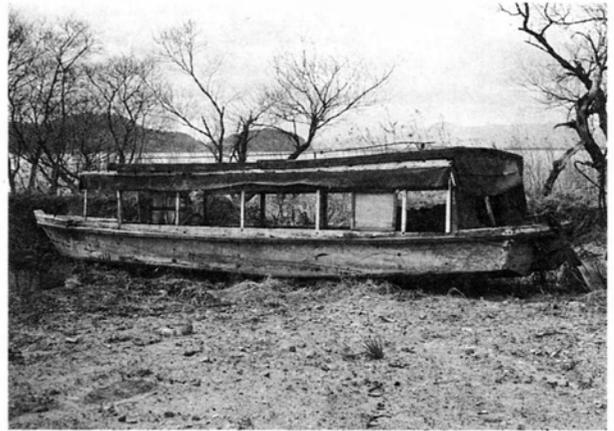
野村・田船

6-12



牧漁港・田船

6-21



津田・沖島渡船

7-37



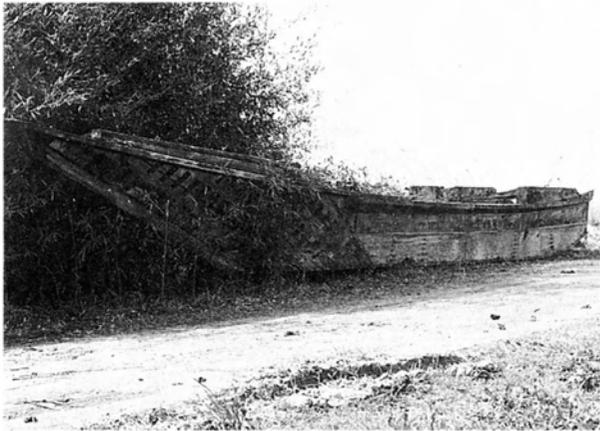
牧・田船

6-22



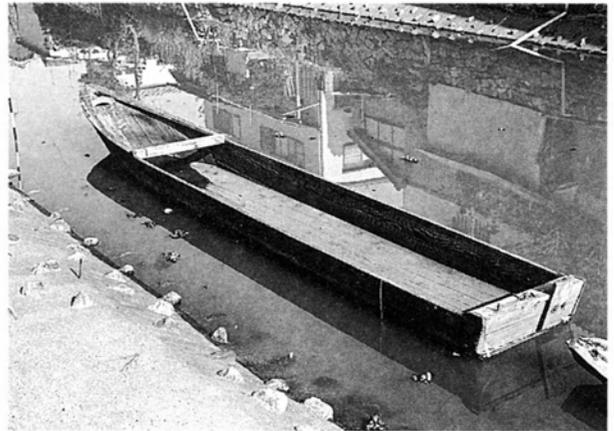
八幡堀・田船

7-42



北沢沼・漁船

6-29



八幡堀・田船

7-48



北沢沼・田船

6-32



北之庄・田船

7-62



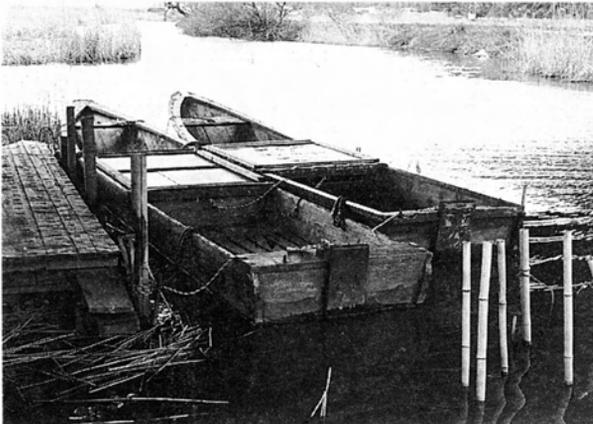
円山・田船

7-63



北津田・漁船ほか

7-82~85



円山・田船

7-65・66



円山・田船

7-71



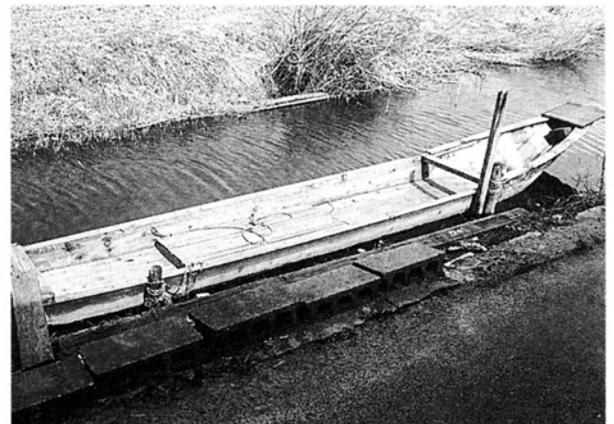
白王・田船

7-86・87



円山・田船 (2艘組船)

7-73



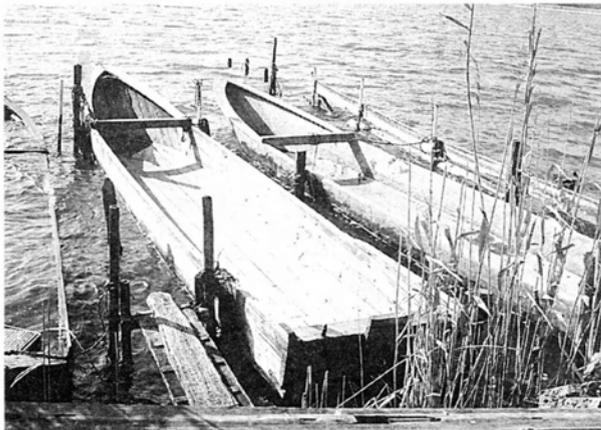
円山・田船

7-95

地区名 安土町

(位置図7)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
101	安土町 常楽寺	1	1-C	田船	良	半水没	
102	安土町 常楽寺	1	1-C	田船	中破	半水没	
103	安土町 常楽寺	1	1-C	田船	良	使用中	
104	安土町 常楽寺	1	1-C	田船	良	半水没	
105	安土町 常楽寺	1	1-C	田船	大破	水没	
106	安土町 常楽寺	1	1-C	田船	良	使用中	
107	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	大破	水没	
108	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	良	使用中	活簀付き
109	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	大破	水没	
110	安土町 下豊浦	1	1-B	漁船	大破	水没	
111	安土町 下豊浦	1	2-B	剣先船	良	半水没	
112	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	良	半水没	
113	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	良	水没	
114	安土町 下豊浦	1	1-B	漁船	大破	水没	
115	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	大破	水没	
116	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	良	使用中	
117	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	中破	半水没	
118	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	良	半水没	
119	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	良	使用中	
120	安土町 下豊浦	1	1-C	田船	良	使用中	



常楽寺・田船

7-103



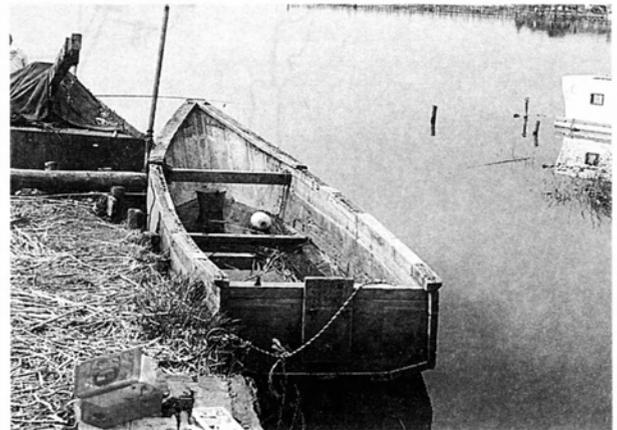
下豊浦・剣先船と田船

7-111・112



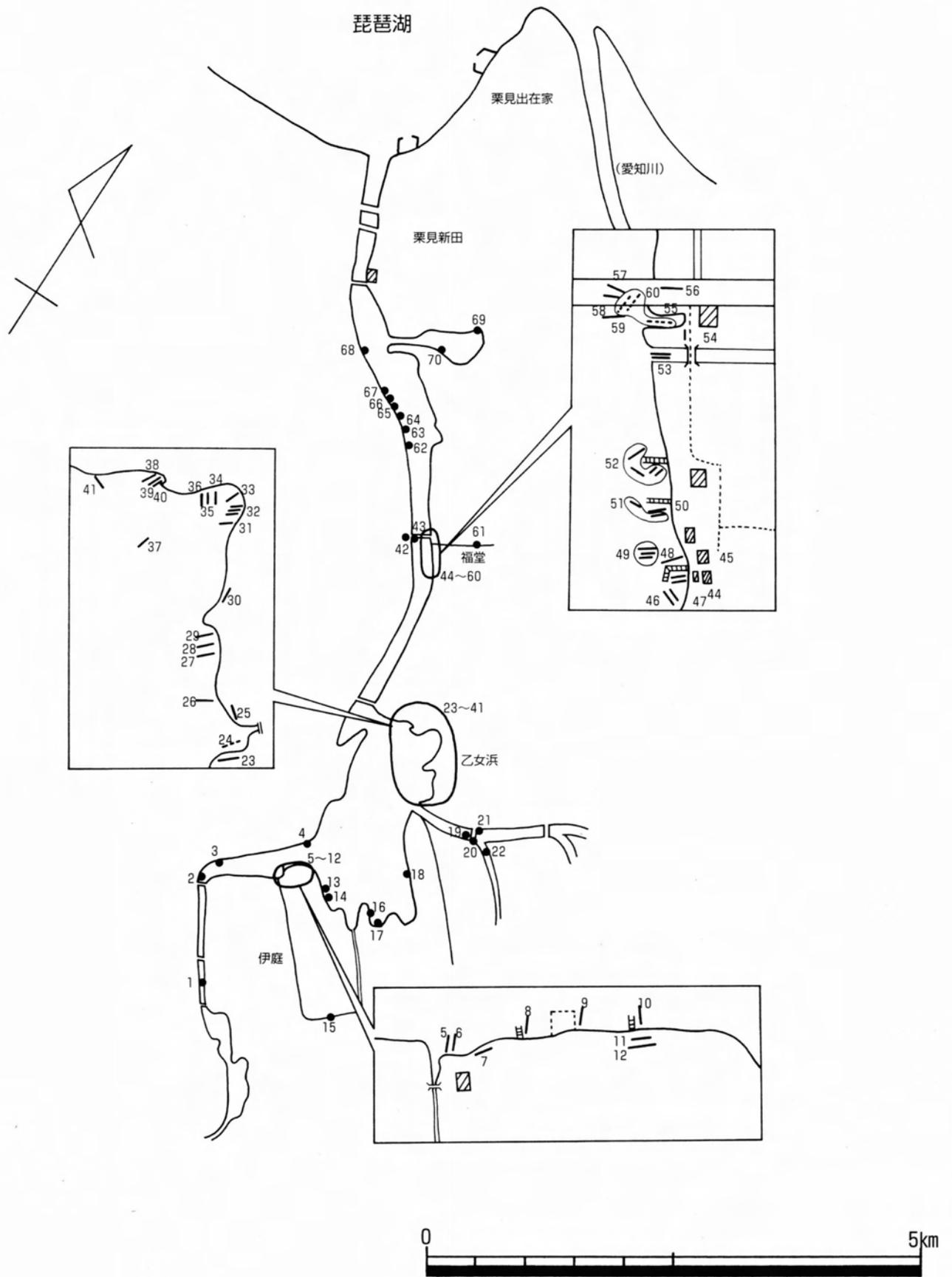
常楽寺・田船

7-106



下豊浦・田船

7-119



位置図 8 (能登川)

地区名 能登川町 1

(位置図8)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	能登川町 須田川	1	1-C	田船	良	半水没	
2	能登川町 須田川	1	1-C	田船	良	使用中	
3	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	良	使用中	
4	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	良	半水没	
5	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	中破	半水没	
6	能登川町 伊庭内湖	1	2-B	剣先船	中破	半水没	
7	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	中破	陸上	
8	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	良	半水没	
9	能登川町 伊庭内湖	1	2-B	剣先船	良	半水没	
10	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	中破	半水没	
11	能登川町 伊庭内湖	1	1-B	漁船	大破	陸上	
12	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	中破	陸上	
13	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	良	半水没	
14	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	良	半水没	一部FRP
15	能登川町 伊庭集落	1	1-C	田船	良	使用中	
16	能登川町 伊庭内湖	1	3-C	箱船	中破	半水没	
17	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	中破	水没	
18	能登川町 伊庭内湖	1	1-C	田船	良	使用中	
19	能登川町 山路	1	1-C	田船	中破	水没	
20	能登川町 山路	1	1-C	田船	良	半水没	一部FRP
21	能登川町 山路	1	1-C	田船	良	使用中	一部FRP
22	能登川町 山路	1	1-C	田船	良	使用中	
23	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	中破	陸上	
24	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	大破	水没	
25	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	大破	陸上	
26	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	良	使用中	
27	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	良	使用中	
28	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	中破	半水没	
29	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	中破	半水没	
30	能登川町 乙女浜	1	1-C	漁船	中破	陸上	
31	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	中破	半水没	
32	能登川町 乙女浜	3	1-C	田船	大破	水没	
33	能登川町 乙女浜	1	2-B	剣先船	中破	半水没	
34	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	中破	半水没	
35	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	良	半水没	
36	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	良	使用中	
37	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	不明	水没	沖に水没
38	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	良	使用中	
39	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	中破	水没	
40	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	大破	水没	
41	能登川町 乙女浜	1	1-C	田船	大破	水没	

地区名 能登川町2

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
42	能登川町 大中	1	1-C	田船	良	半水没	
43	能登川町 大中	2	1-C	田船	良	使用中	
44	能登川町 福堂	1	1-C	田船	良	半水没	
45	能登川町 福堂	1	1-C	田船	良	半水没	
46	能登川町 福堂	1	1-C	田船	中破	半水没	
47	能登川町 福堂	1	1-C	田船	大破	水没	
48	能登川町 福堂	1	1-B	漁船	大破	陸上	
49	能登川町 福堂	3	1-C	田船	大破	水没	
50	能登川町 福堂	1	1-C	田船	良	半水没	
51	能登川町 福堂	2	1-C	田船	良	半水没	
52	能登川町 福堂	4	1-C	田船	大破	半水没	
53	能登川町 福堂	2	1-C	田船	良	半水没	
54	能登川町 福堂	1	1-C	田船	中破	陸上	
55	能登川町 福堂	1	1-C	田船	良	陸上	
56	能登川町 福堂	1	1-B	漁船	中破	陸上	
57	能登川町 福堂	1	1-B	漁船	良	使用可	
58	能登川町 福堂	1	1-C	田船	良	使用中	
59	能登川町 福堂	1	1-B	漁船	大破	半水没	
60	能登川町 福堂	3	1-C	田船	大破	水没	
61	能登川町 福堂	1	1-C	田船	良	使用中	
62	能登川町 大中大同川	1	1-C	田船	大破	陸上	
63	能登川町 大中大同川	1	1-C	田船	良	半水没	
64	能登川町 大中大同川	1	1-C	田船	良	使用中	
65	能登川町 大中大同川	1	1-C	田船	良	使用中	
66	能登川町 大中大同川	1	1-C	田船	良	使用中	
67	能登川町 大中大同川	1	1-C	田船	中破	半水没	
68	能登川町 大中大同川	1	1-C	田船	大破	水没	
69	能登川町 粟見新田	1	1-C	田船	良	半水没	
70	能登川町 粟見新田	1	3-C	箱船	大破	水没	



伊庭内湖・田船

8-4



伊庭・田船

8-7



伊庭・漁船

8-11



乙女浜・田船

8-27



伊庭・田船

8-12



乙女浜・漁船

8-30



伊庭・田船

8-13



福堂・田船

8-61



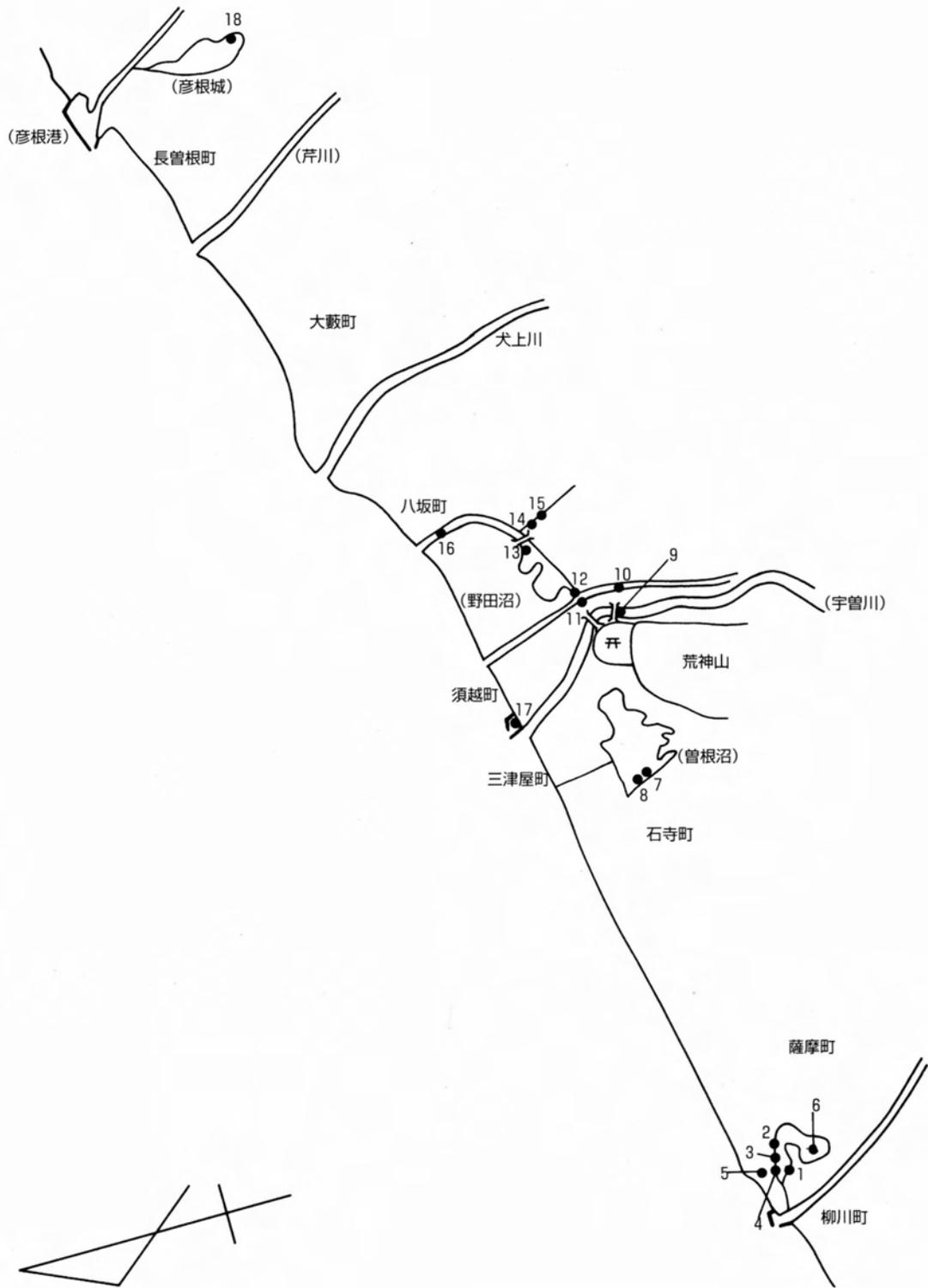
伊庭集落内・田船

8-15



大中大同川・田船

8-65



位置図 9 (彦根)

地区名 彦根市

(位置図9)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	彦根市 柳川	1	3-E	不明	良	半水没	形式不明
2	彦根市 薩摩	1	1-C	田船	良	使用中	
3	彦根市 薩摩	1	1-C	田船	良	使用中	
4	彦根市 薩摩	1	1-C	田船	良	使用中	
5	彦根市 薩摩	1	1-C	田船	大破	陸上	
6	彦根市 薩摩	1	1-C	田船	良	使用中	
7	彦根市 曾根沼	1	1-C	田船	良	使用中	
8	彦根市 曾根沼	1	2-A	剣先船	中破	半水没	
9	彦根市 宇曾川	1	3-C	箱船	良	使用中	活簀付き
10	彦根市 安食川	1	1-C	田船	良	使用中	活簀付き
11	彦根市 安食川	1	1-C	田船	良	使用中	活簀付き
12	彦根市 安食川	1	3-C	箱船	大破	半水没	活簀付き
13	彦根市 江面川	1	1-C	田船	良	半水没	活簀付き
14	彦根市 江面川	1	1-C	田船	良	半水没	活簀付き
15	彦根市 江面川	1	1-C	田船	中破	半水没	活簀付き
16	彦根市 江面川	1	1-C	田船	良	使用中	活簀付き
17	彦根市 磯田漁港	1	2-A	漁船	中破	陸上	
18	彦根市 彦根城堀	1	3-A	屋形船	良	使用中	



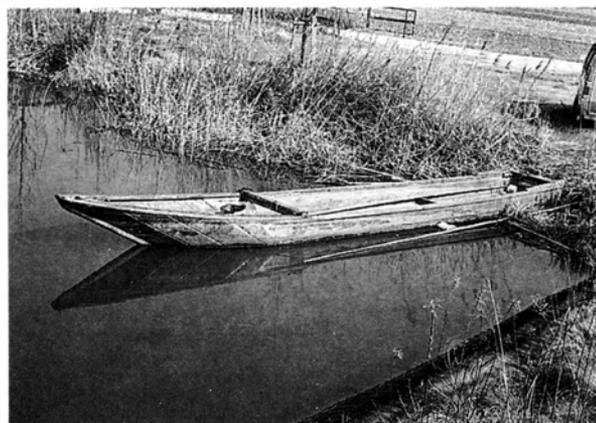
柳川

9-1



江面川・田船

9-16



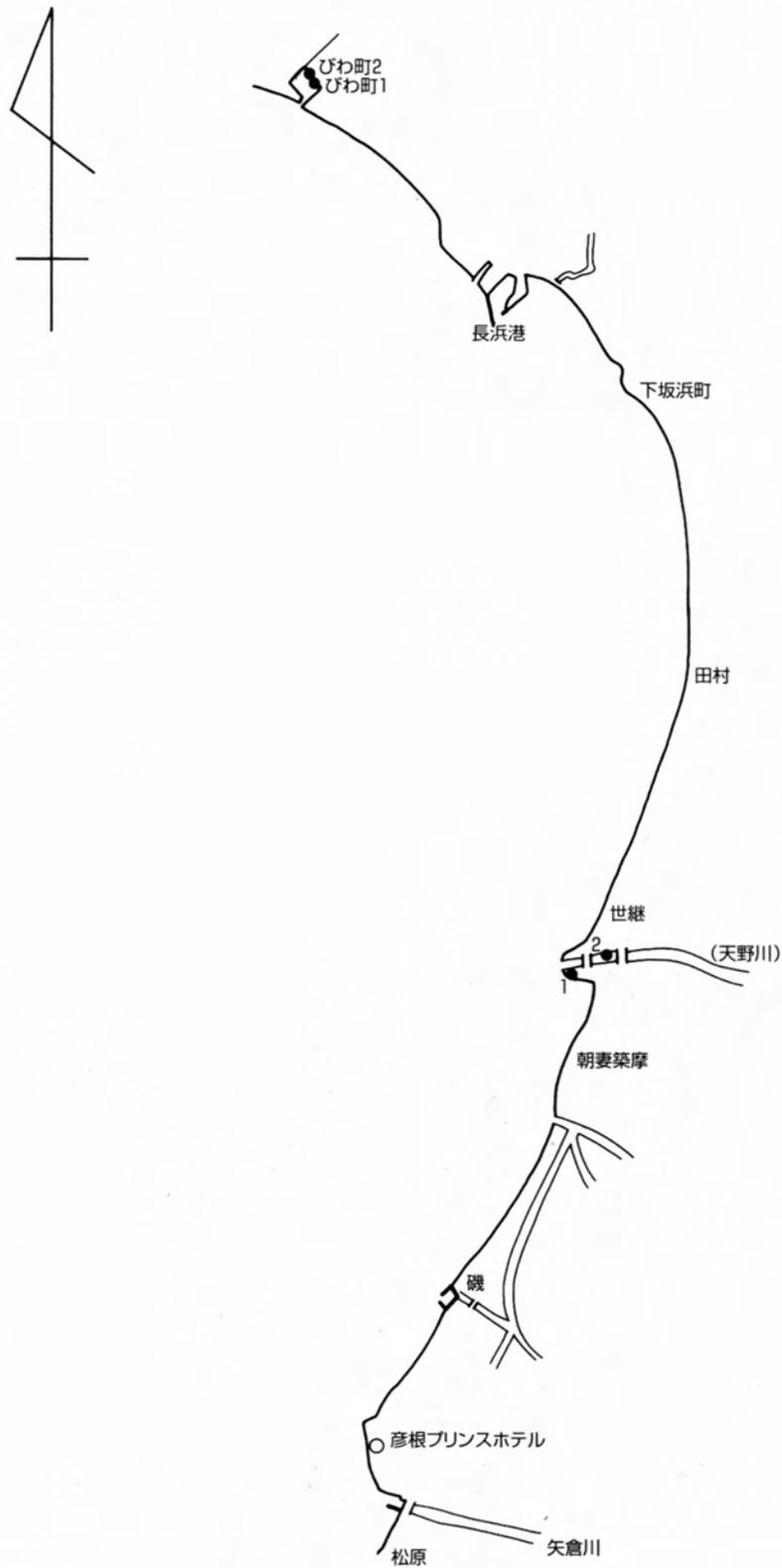
薩摩・田船

9-2



磯田漁港・漁船

9-17

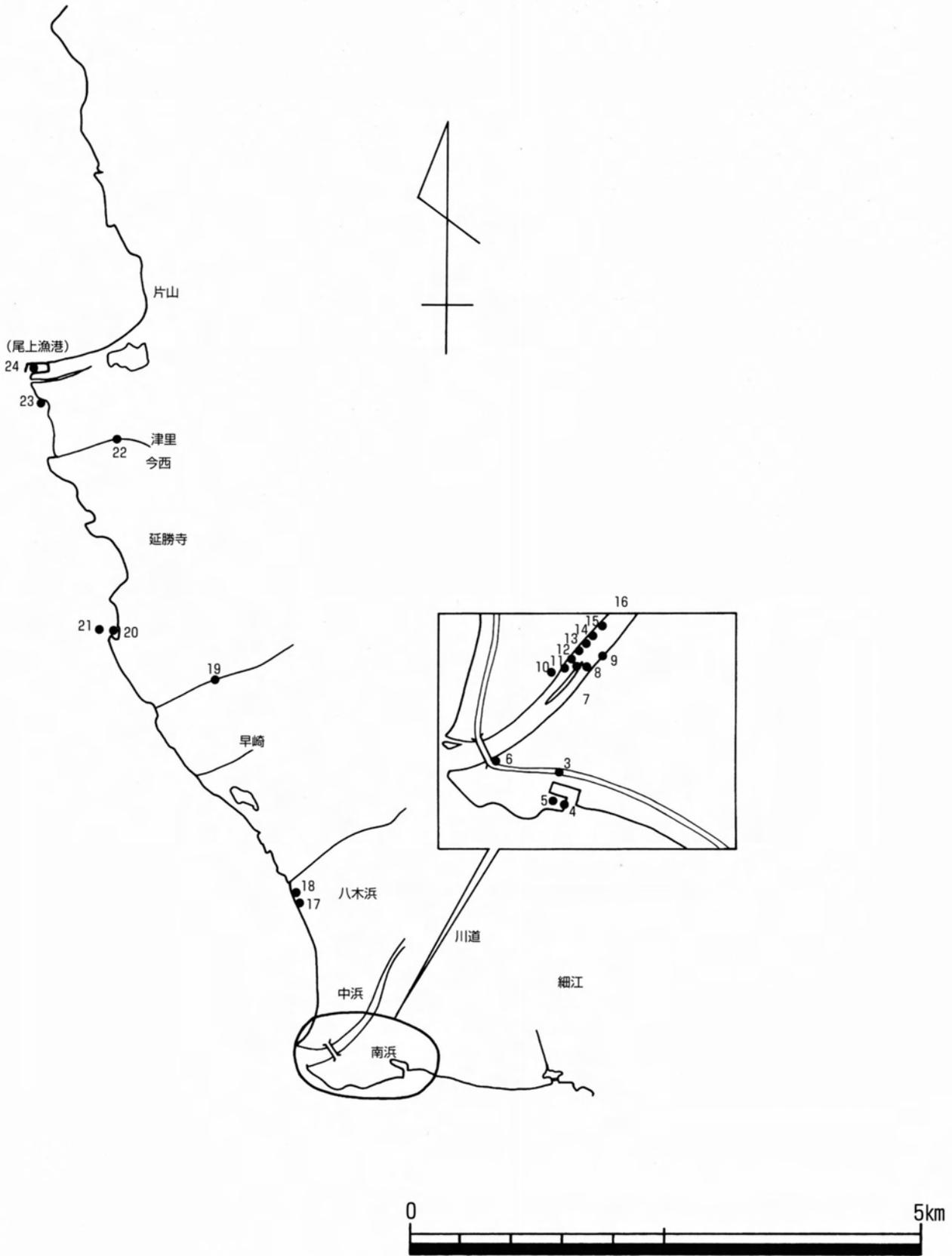


位置図10 (米原・近江・長浜・びわ1)

地区名 米原町・近江町・長浜市

(位置図10)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	米原町 朝妻	1	1-C	芯なし田船	良	陸上	
2	近江町 世継	1	3-E	-	良	陸上	手造り

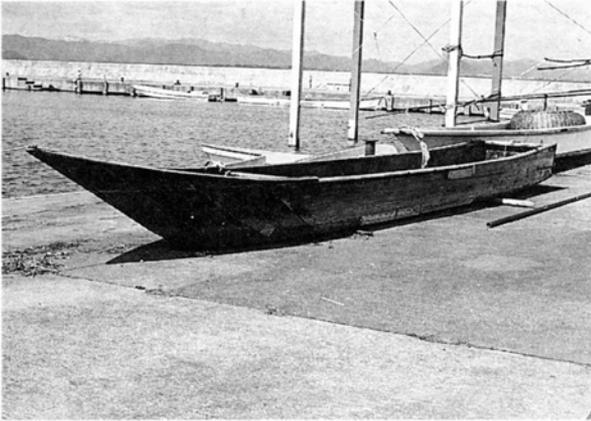


位置図 11 (びわ2・湖北)

地区名 びわ町・高月町・湖北町

(位置図10・11)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	びわ町 細江内湖	1	2-B	剣先船	良	使用可	いけす
2	びわ町 細江内湖	1	1-C	田船	良	使用可	
3	びわ町 南浜漁港	5	1-C	田船	中破	水没	
4	びわ町 南浜漁港	2	1-D	南浜船	中破	水没	
5	びわ町 南浜漁港	1	1-D	南浜船	大破	陸上	
6	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	中破	陸上	
7	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	良	使用可	青塗装
8	びわ町 南浜姉川	1	1-C	田船	良	使用可	
9	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	良	使用可	
10	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	中破	陸上	
11	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	良	使用可	
12	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	良	使用可	
13	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	良	使用可	内FRP
14	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	良	使用可	内FRP
15	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	良	使用可	
16	びわ町 南浜姉川	1	1-D	南浜船	良	使用可	
17	びわ町 八木浜漁港	1	1-B	漁船	良	陸上	活簀付き
18	びわ町 八木浜漁港	1	1-C	漁船	良	陸上	活簀付き
19	びわ町 早崎	1	3-C	箱船	良	水没	内FRP
20	湖北町 海老江漁港	1	1-B	漁船	中破	半水没	
21	湖北町 海老江漁港	1	その他	不明	不明	水没	近接できず
22	湖北町 今西大橋下	1	1-C	田船	良	水没	
23	湖北町 尾上	1	1-A	丸子船	大破	半水没	
24	湖北町 尾上	1	1-A	丸子船	良	使用中	



朝妻漁港・芯なし田船

10-1



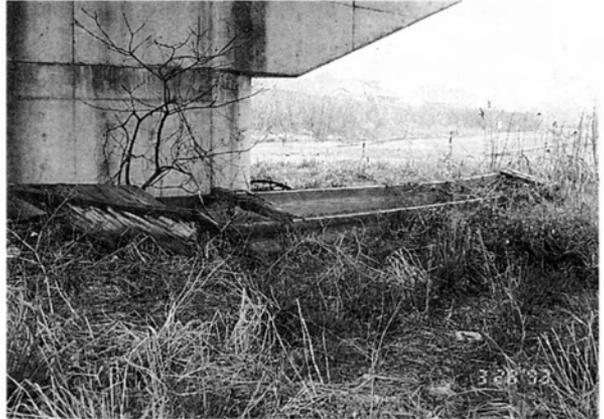
南浜漁港・南浜船

11-5



天野川・手造り船

10-2



姉川・南浜船

11-6



細江内湖・剣先船

10-びわ町1



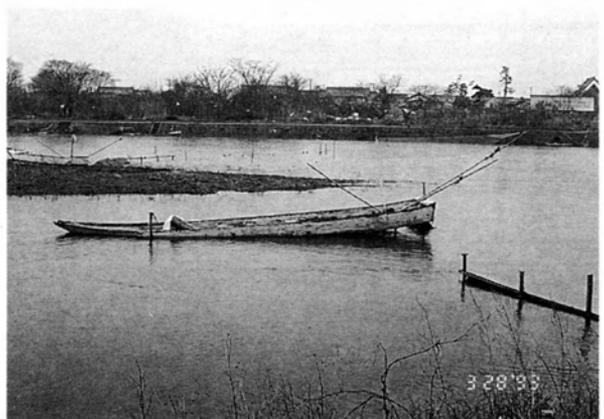
姉川・南浜船

11-7



細江内湖・田船

10-びわ町2



姉川・田船

11-8



姉川・南浜船

11-11



八木浜漁港・漁船

11-17



姉川・南浜船

11-12



八木浜漁港・漁船(手前)

11-18



姉川・南浜船

11-13



海老江漁港・漁船

11-20



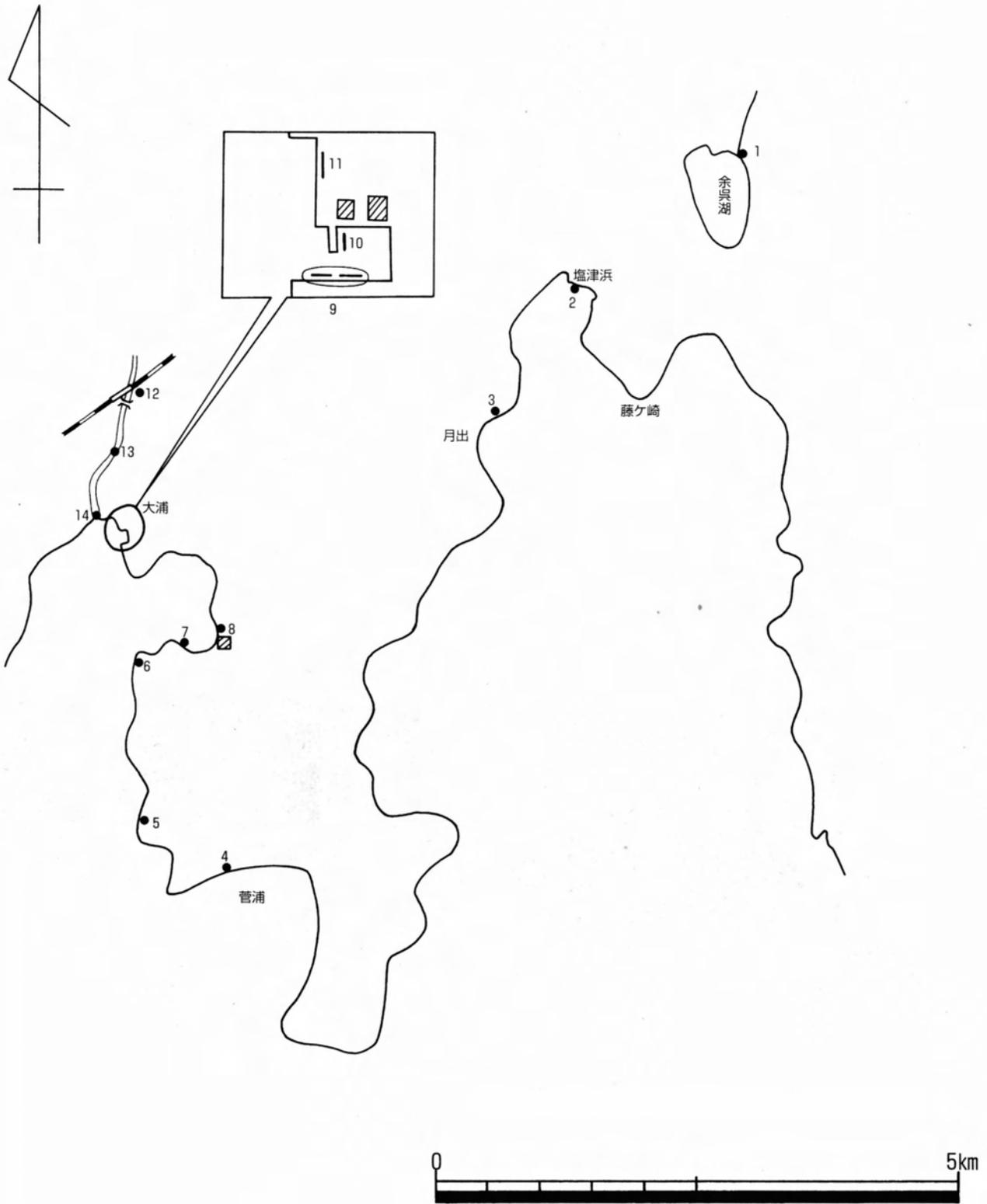
姉川・南浜船

11-14~16



尾上・丸子船

11-23



位置図 12 (木之本・余呉・西浅井)

地区名 余呉町・西浅井町

(位置図12)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	余呉町 余呉湖	1	1-B	漁船	中破	陸上	活簀付き
2	西浅井町 塩津浜	1	1-C	漁船	良	水没	活簀付き
3	西浅井町 月出	1	1-B	漁船	大破	陸上	活簀付き
4	西浅井町 菅浦	1	1-B	漁船	大破	陸上	活簀付き
5	西浅井町 菅浦	1	1-A	丸子船	中破	陸上	
6	西浅井町 菅浦	1	3-C	箱船	良	水没	活簀船?
7	西浅井町 菅浦	1	2-B	剣先船	良	水没	
8	西浅井町 菅浦	1	1-A	丸子船	大破	半水没	活簀船
9	西浅井町 大浦漁港	2	1-C	ダンベ	良	半水没	
10	西浅井町 大浦漁港	1	1-B	漁船	良	半水没	活簀付き
11	西浅井町 大浦	1	1-B	漁船	中破	陸上	活簀付き
12	西浅井町 役場前	1	1-A	丸子船	中破	陸上	
13	西浅井町 大浦川	1	3-C	箱船	良	使用中	活簀付き
14	西浅井町 大浦川	1	1-B	漁船	良	使用中	活簀付き



余呉湖・漁港

12-1



月出・漁船

12-3



菅浦・漁船

12-4



大浦漁港・ダンベ

12-9



菅浦・丸子船

12-5



大浦・漁船

12-11



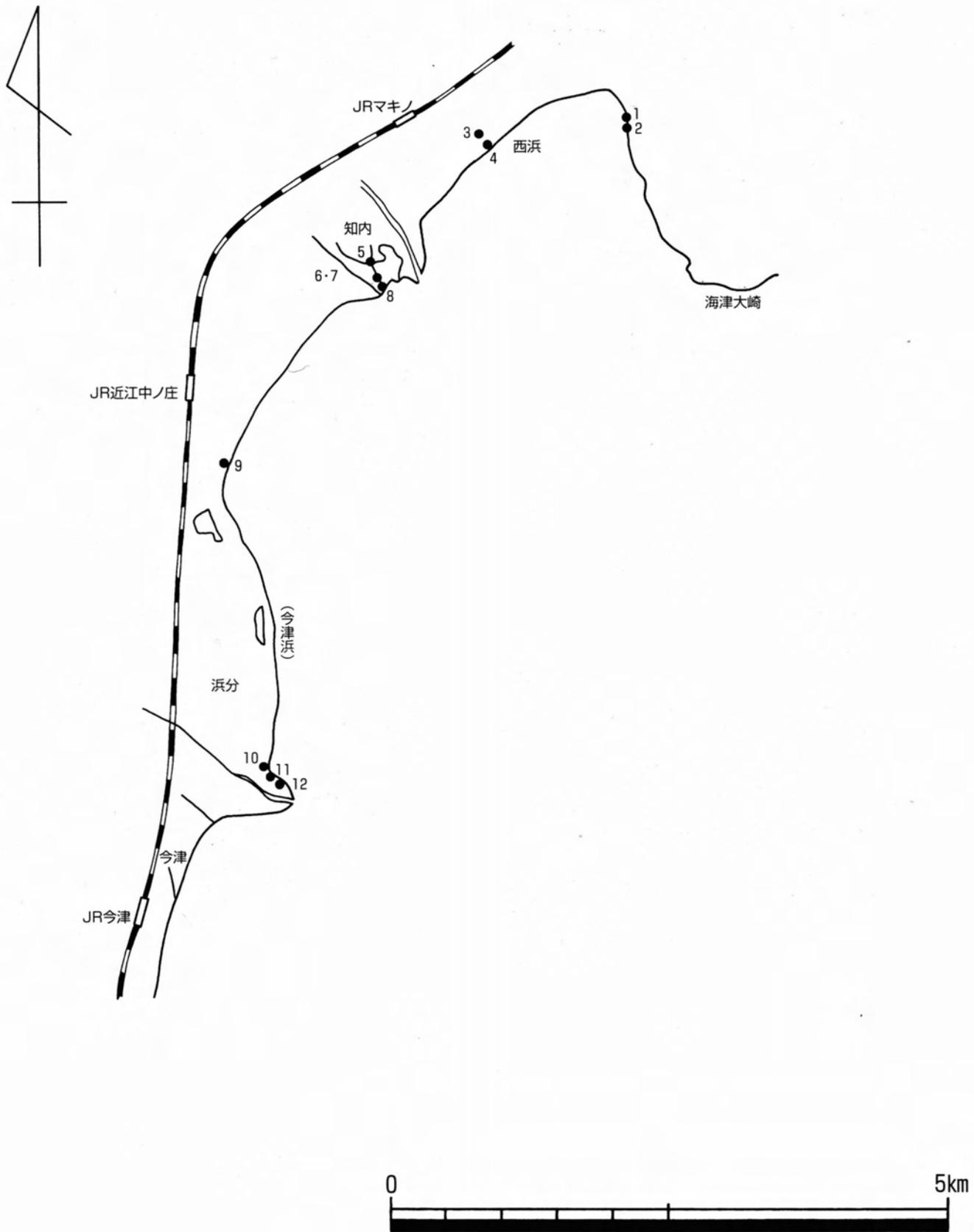
菅浦・丸子船

12-8



大浦・漁船

12-14



位置図 13 (マキノ・今津)

地区名 マキノ町

(位置図13)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	マキノ町 海津	13	1-C	漁船	中破	水没	13艘一括
2	マキノ町 海津	1	1-B	地曳網船	大破	水没	
3	マキノ町 西浜	1	1-C	小型漁船	良	半水没	活簀付き
4	マキノ町 西浜	1	1-C	小型漁船	中破	水没	活簀付き
5	マキノ町 知内	1	1-C	田船	良	水没	
6	マキノ町 生来川	1	1-C	漁船	良	半水没	活簀付き
7	マキノ町 生来川	1	1-C	小型漁船	中破	水没	詳細不明
8	マキノ町 生来川尻	1	1-C	小型漁船	中破	陸上	活簀付き
9	マキノ町 大沼	1	1-C	小型漁船	大破	陸上	活簀付き
10	今津町 浜分漁港	1	1-B	漁船	中破	陸上	活簀付き
11	今津町 浜分漁港	1	1-B	小型漁船	大破	陸上	
12	今津町 浜分漁港	1	1-C	田船	良	半水没	使用可能



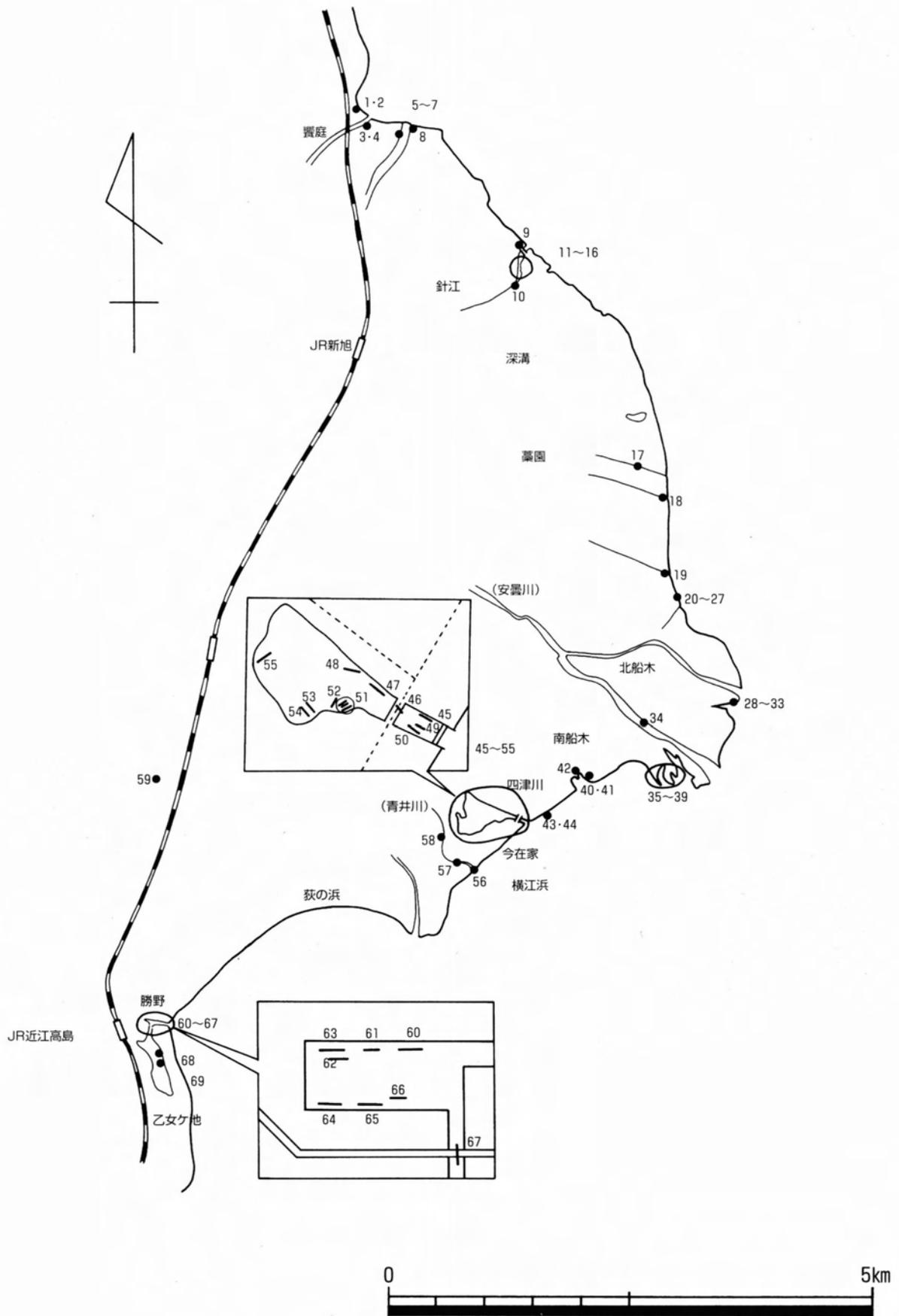
生来川・漁船

13-6



生来川尻・小型漁船

13-8



位置図 14 (新旭・安曇川・高島)

地区名 新旭町・安曇川町・高島町1

(位置図14)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	新旭町 饗庭	1	1-C	不明(漁船)	良	半水没	エリ漁
2	新旭町 饗庭	1	1-C	田船	良	使用中	エリ漁
3	新旭町 五十川	1	1-C	田船	良	半水没	
4	新旭町 五十川	1	1-C	田船	大破	水没	
5	新旭町 田井川	1	1-C	田船	良	使用中	
6	新旭町 田井川	1	1-C	田船	良	水没	
7	新旭町 田井川	1	1-C	田船	中破	水没	
8	新旭町 安井川	1	1-C	田船	大破	陸上	
9	新旭町 針江	1	2-A	漁船	大破	陸上	活簀付き
10	新旭町 針江内湖	1	1-C	田船	良	使用中	
11	新旭町 針江大川	1	2-B	剣先船	良	使用中	
12	新旭町 針江大川	1	1-C	田船	良	半水没	
13	新旭町 針江大川	1	1-C	田船	良	使用中	
14	新旭町 針江大川	2	1-C	田船	中破	半水没	
15	新旭町 針江大川	1	1-C	田船	良	使用中	
16	新旭町 針江大川	1	1-C	田船	良	半水没	
17	新旭町 藁園	1	1-C	田船	良	使用中	
18	新旭町 入道沼	1	1-C	田船	良	使用中	
19	新旭町 太田	1	1-C	田船	良	使用中	
20	安曇川町 北船木漁港	1	1-C	かわら船	良	使用中	
21	安曇川町 北船木漁港	1	1-C	ダンベ	良	半水没	
22	安曇川町 北船木漁港	1	1-C	かわら船	良	使用中	
23	安曇川町 北船木漁港	1	1-C	かわら船	良	使用中	
24	安曇川町 北船木漁港	1	1-C	かわら船	良	使用中	
25	安曇川町 北船木漁港	1	1-C	かわら船	良	使用中	
26	安曇川町 北船木漁港	1	1-B	漁船	良	陸上	
27	安曇川町 北船木漁港	1	1-B	漁船	中破	陸上	活簀付き
28	安曇川町 北船木船溜	1	1-C	かわら船	良	陸上	
29	安曇川町 北船木船溜	1	1-C	ダンベ	良	半水没	
30	安曇川町 北船木船溜	1	1-C	かわら船	良	半水没	
31	安曇川町 北船木船溜	6	1-C	かわら船	良	半水没	
32	安曇川町 北船木船溜	1	1-C	漁船	中破	陸上	
33	安曇川町 北船木船溜	1	1-B	漁船	中破	陸上	
34	安曇川町 安曇川南流	1	1-C	かわら船	中破	陸上	
35	安曇川町 南船木漁港	1	1-C	田船(漁船)	良	陸上	活簀付き
36	安曇川町 南船木漁港	1	1-C	かわら船	中破	半水没	
37	安曇川町 南船木漁港	1	1-C	田船	良	使用中	
38	安曇川町 南船木漁港	1	1-C	田船	中破	半水没	
39	安曇川町 南船木漁港	1	1-C	田船	良	使用中	
40	安曇川町 南船木	1	1-C	田船	新品	未使用	桑田造船所保有
41	安曇川町 金丸川	1	1-C	小型漁船	良	使用中	
42	安曇川町 金丸川	1	1-C	田船	中破	水没	

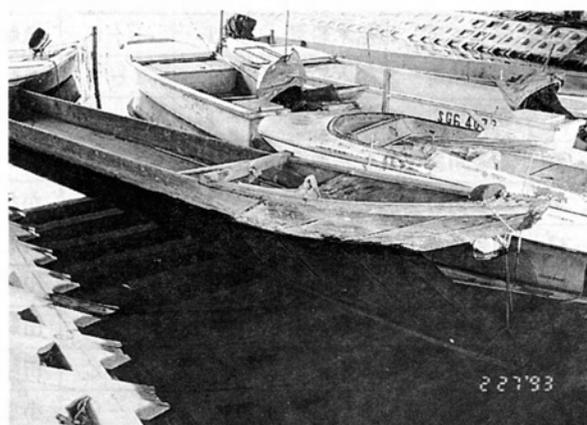
地区名 新旭町・安曇川町・高島町2

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
43	安曇川町 四津川漁港	1	2-A	剣先船	大破	陸上	船体切断
44	安曇川町 四津川漁港	1	1-B	漁船	良	使用中	
45	安曇川町 四津川内湖	1	1-B	漁船	良	使用中	活簀付き
46	安曇川町 四津川内湖	1	1-B	漁船	大破	水没	
47	安曇川町 四津川内湖	1	1-B	漁船	良	使用中	
48	安曇川町 四津川内湖	1	1-B	漁船	中破	半水没	
49	安曇川町 今在家内湖	1	1-C	田船	中破	水没	
50	安曇川町 今在家内湖	1	1-B	漁船	良	陸上	
51	安曇川町 今在家内湖	3	1-C	田船	中破	半水没	
52	安曇川町 今在家内湖	1	1-C	田船	良	半水没	
53	安曇川町 今在家内湖	1	1-C	田船	良	使用中	
54	安曇川町 今在家内湖	1	2-B	剣先船	良	使用中	活簀付き
55	安曇川町 今在家内湖	1	1-C	田船	良	使用中	
56	安曇川町 横江浜	1	1-C	田船	大破	埋没	
57	安曇川町 横江浜	1	3-D	小舟	良	使用中	
58	安曇川町 横江浜	2	1-C	田船	大破	埋没	
59	高島町資料館	1	2-B	剣先船	中破	展示	漂着船
60	高島町 勝野船溜	1	1-C	救助艇	良	使用中	改造船
61	高島町 勝野船溜	1	1-C	田船	良	使用中	
62	高島町 勝野船溜	1	1-C	田船	良	使用中	
63	高島町 勝野船溜	1	1-B	漁船	良	使用中	一部FRP
64	高島町 勝野船溜	1	2-A	剣先船	良	使用中	
65	高島町 勝野船溜	1	1-B	漁船	良	使用中	一部FRP
66	高島町 勝野船溜	1	3-C	箱船	良	使用中	
67	高島町 勝野橋	1	1-C	小型漁船	良	使用中	
68	高島町 乙女池	1	1-C	田船	良	使用中	
69	高島町 乙女池	1	1-C	打下ダンベ	中破	半水没	



養庭・田船

14-2



田井川・田船

14-5



針江内湖・田船

14-10



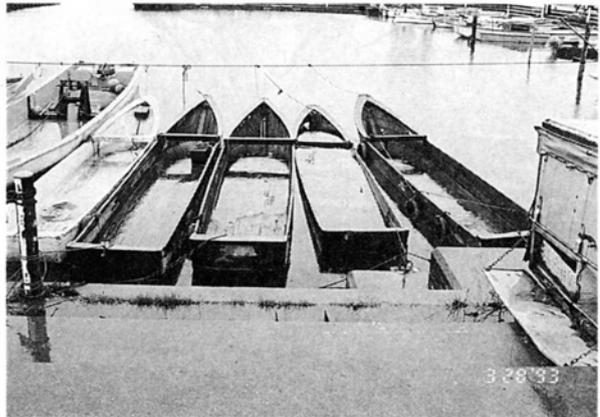
北船木漁港・かわら船

14-20



針江大川・剣先船

14-11



北船木漁港・かわら船

14-22~25



針江大川・田船

14-15



北船木漁港・漁船

14-26



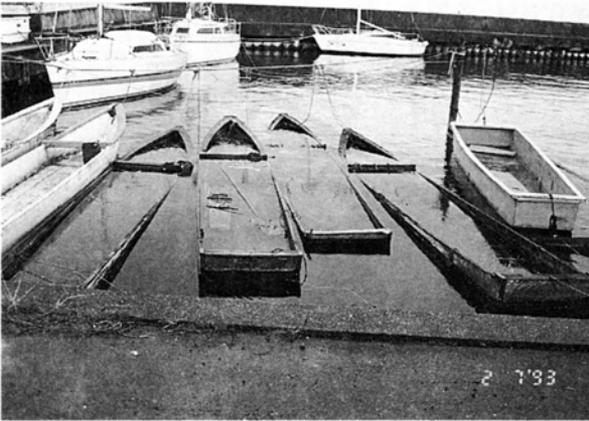
入道沼・田船

14-18



北船木漁港・漁船

14-27



北船木船溜・かわら船

14-31



南船木・田船

14-40



四津川漁港・剣先船

14-43



四津川漁港・漁船

14-44



安曇川南流・かわら船

14-34



四津川内湖・漁船

14-45



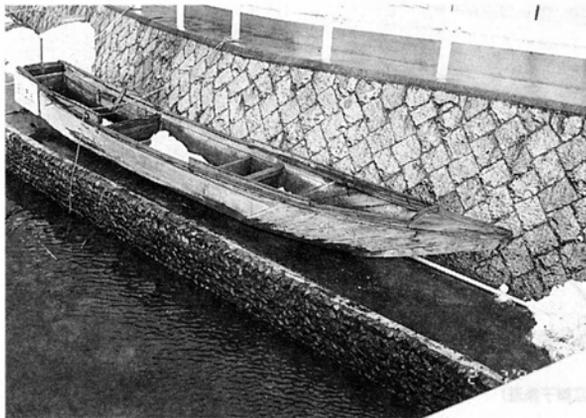
南船木漁港・田船

14-37



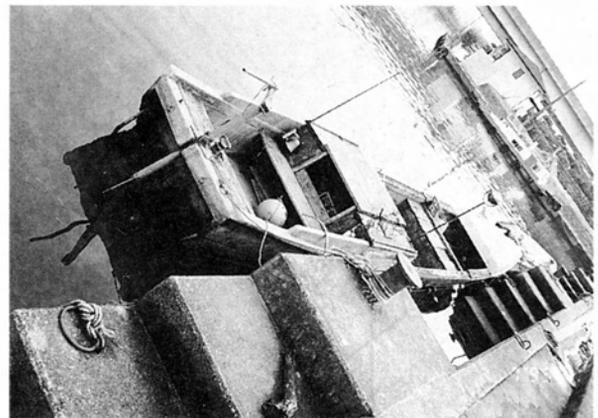
四津川内湖・漁船

14-47



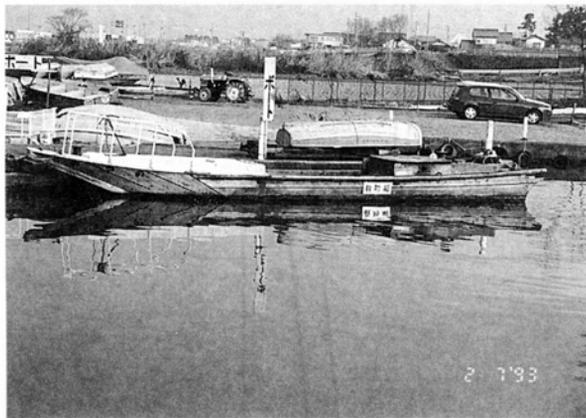
今在家内湖・漁船

14-50



勝野船溜・漁船

14-65



勝野船溜・救助艇

14-60



乙女池・田船

14-68



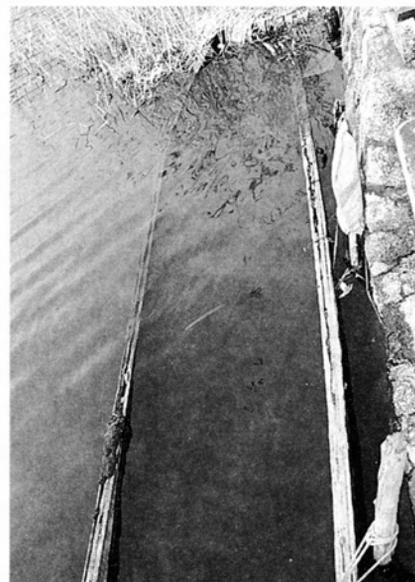
船溜・漁船

14-62・63



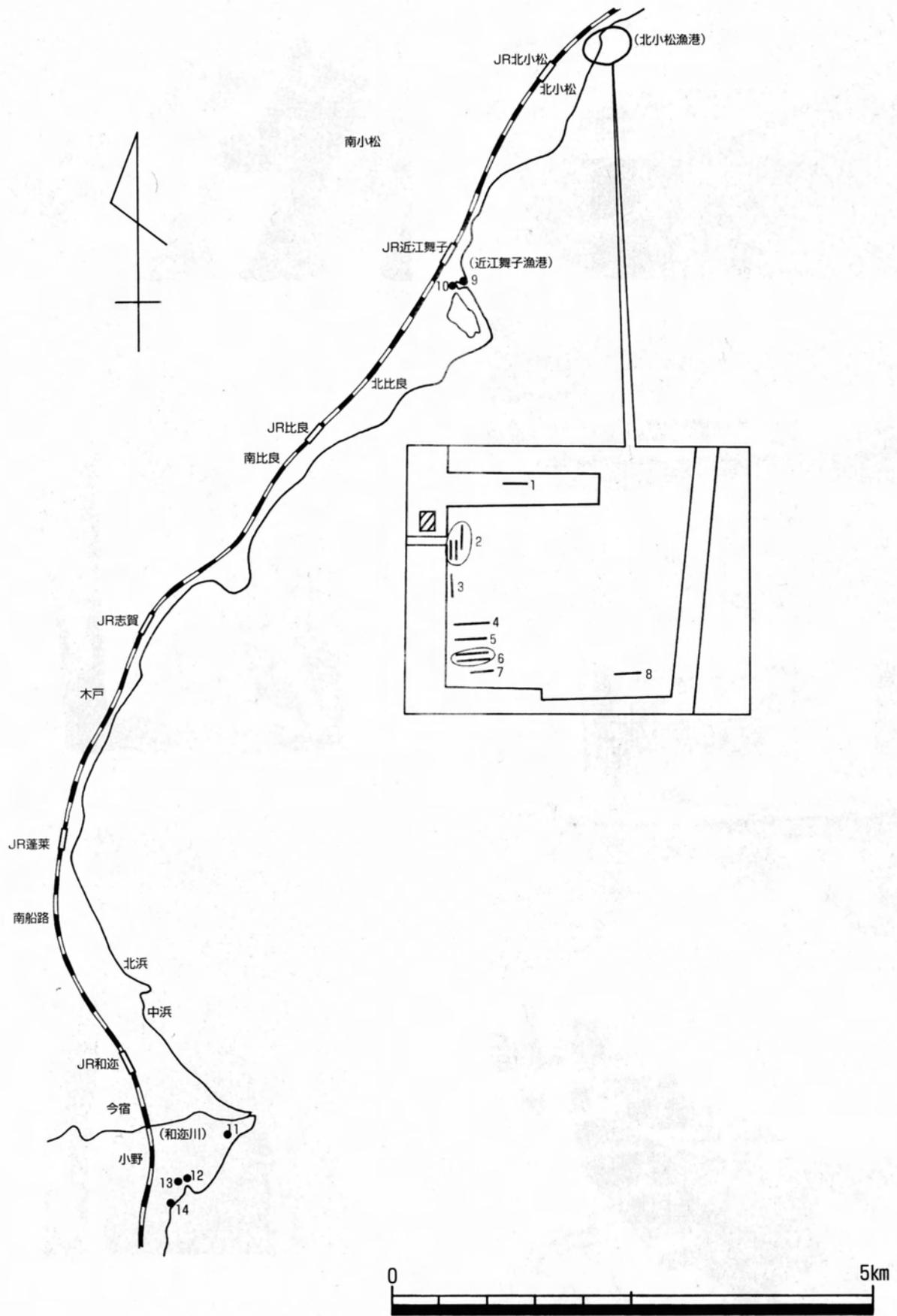
勝野船溜・剣先船

14-64



乙女浜・打下ダンベ

14-69



位置図 15 (志賀)

地区名 志賀町

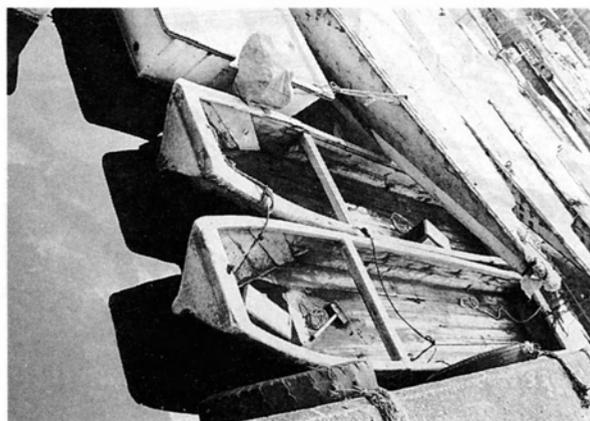
(位置図15)

NO	所在地	数量	基本型	通称	状態	状況	備考
1	志賀町 北小松漁港	1	2-B	小型漁船	中破	陸上	
2	志賀町 北小松漁港	3	1-C	不明	良	使用中	舳切断
3	志賀町 北小松漁港	1	2-B	剣先船	中破	半水没	
4	志賀町 北小松漁港	1	1-A	丸子船	中破	半水没	網船
5	志賀町 北小松漁港	1	1-B	漁船	良	使用中	
6	志賀町 北小松漁港	2	1-C	ダンベ	良	半水没	
7	志賀町 北小松漁港	1	1-C	ダンベ	良	使用中	
8	志賀町 北小松漁港	1	1-C	ダンベ	良	使用中	内面FRP加工
9	志賀町 近江舞子漁港	1	1-C	小舟	中破	半水没	
10	志賀町 近江舞子漁港	1	1-B	漁船	中破	陸上	活簀付き
11	志賀町 今宿	1	2-B	剣先船	良	陸上	使用可能
12	志賀町 小野	1	3-C	箱船	良	陸上	使用可能
13	志賀町 小野	1	1-B	漁船	大破	陸上	
14	滋賀町 小野	1	1-C	田船	中破	半水没	



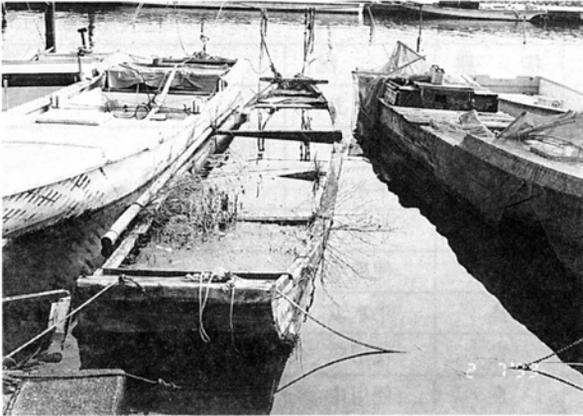
北小松漁港・小型漁船

15-1



北小松漁港

15-2



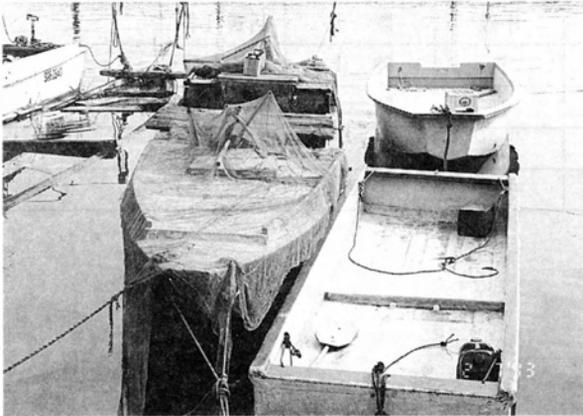
北小松漁港・丸子船 (中央)

15-4



近江舞子漁港・漁船

15-10



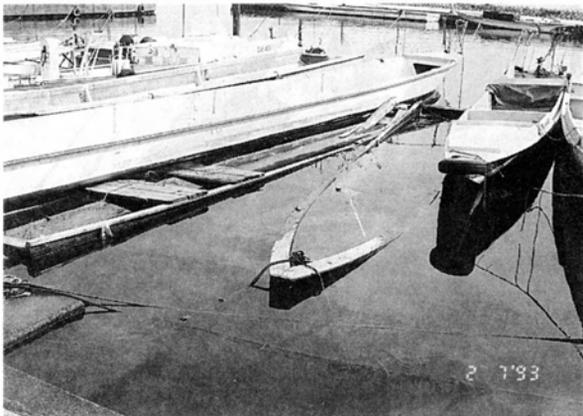
北小松漁港・漁船 (左側)

15-5



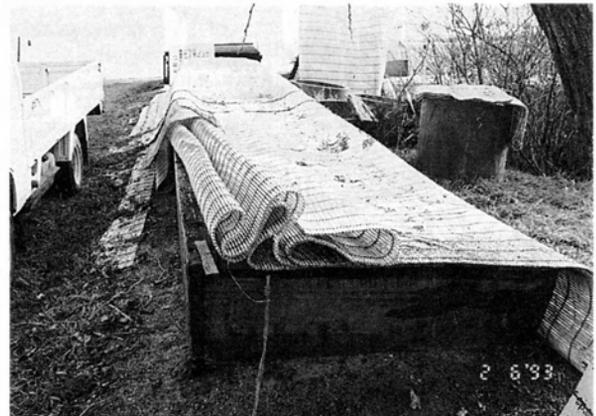
下今宿・剣先船

15-11



北小松漁港・ダンベ (中央沈船)

15-6



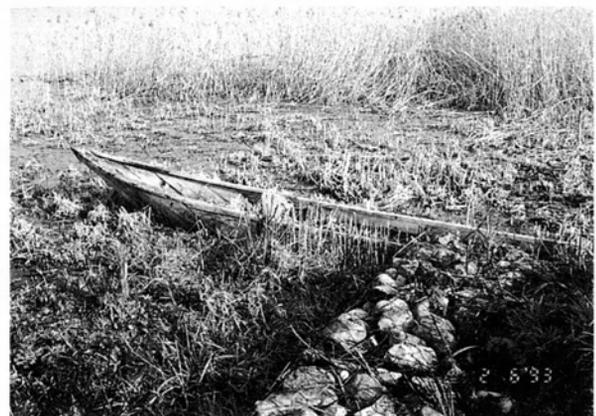
下今宿・箱船

15-12



北小松漁港・ダンベ (中央手前)

15-8



小野・田船

15-14

第2章 現存する木造船の概要

前章の基本型およびタイプ別にごく簡単な解説を加えることで現存する伝統的な木造船の補足資料としておこう。

1類 舳板船

舳板船（ヘイタブネ）とは一本水押しであるシン（芯木・真木・芯・新などの表記も見られる）と船舷材であるオモギ（面木・重木・ウムギ・ホテ・ガワなどの表記もある）の間に数枚の板を斜めに取り付け、船首部を構成する船の総称（一部芯木を省略した船もあるが）。斜めに取り付けられた板をヘイタ（舳板・平板・反平・平田・屏板などの表記も見られる）といい、この構造船を便宜上「舳板造り」「舳板船」と表記しておこう。敢えてこの船首構造の類型を求めらば、伊勢湾や淀川水系の船にある種の共通する部分が見られるものの、同じ類型とするには多分に無理が生じる。つまり、琵琶湖独自と言わざるを得ない構造船なのである。琵琶湖を代表する丸子船や船船（漁船、作業船、田船など）の大多数はこの船首構造を持った船で、現存する木造船でも8割程度を占めるが、かつてはさらに高い占有率であったと推定される。

琵琶湖独自の船首の装飾紋様ダテカスガイは、かつてこの舳板を外側からヒラカスガイ（打ち込み足を持った板状のカスガイ）で短冊状に固定したのがその祖型と考えられる。のちになると内側から打つようになり（のちこれも省略）、かつてのヒラカイガイに準じた銅板を張るようになったもので、舳板船に見られる独自の装飾紋様である（これも小船に限れば簡略化して带状としたり、省略した船が大勢を占めるようになっている）。

舳板構造は短材で大きな船を造り得るメリットがあるが、一方では以外と波に弱い一面をかいま見せる。内水面でこそ発達した構造船かも知れない。

1-A 丸子船

琵琶湖を代表する丸子船は、慶長6年（1601）の「江州諸浦れう舟ひらた船之帳」（「観音寺文書」）に丸船8艘が散見できるのが初見史料。管見ながら近世・明治期を通じ丸子船と表記された史料はせいぜい6点程度を目にするに過ぎず（いずれも近世で、うち2点は丸船と併記）、「丸船」と表記されることが圧倒的だ

し、大正7年2月改正の堅田造船組合「新造船値段書」（「仲野愛規家文書」）にもなお丸船とある。一方、報告書に引用されることの多い「丸木舟」は宝暦11年（1761）大阪の船大工によって記された『和漢船用集』および明治7年1月の「県治所見ヲ述テ滋賀県諸官ニ示ス」（『滋賀県議会史・第一巻』）、「丸太船」は前出『和漢船用集』のほかに、享保19年（1734）の『近江輿地志略』（丸船・大丸子・小丸子も併記）を目にするに過ぎないので、呼称の一つに含めるにはいささか疑問が残る。つまり、近世初頭から大正初期までは、丸船が一般的な呼称であったと考えておきたい。

この船の特徴は船首部を舳板構造とするほかに、杉の丸太を二つ割りにし、平らな面を内側に向けて取り付け、シキ（船底材）にフリカケと呼ばれる加敷を斜めに取り付け、丸く矧ぎ上げるように仕上げることにあろう。嘉永元年（1848）赤野井村から大津市街地に向けての肥取り船が「船舟ニ而者風波強ク候節危き儀も在之」として丸子船を造りたいとする願書（「諏訪安茂家文書」）によっても、琵琶湖では極めて堅牢で荷船に適した船として認識されていたことが窺えよう。特に近世末期の丸子船は、現存する丸子船よりはるかに厚板構造の上に、多くのカスガイで補強したことが明らかである。

正徳享保年間（1711～35）の琵琶湖には1,463艘の丸子船があったが、その支配別は彦根藩領115艘、領外1,348艘（「木俣男爵家文書」）。なお元禄9年（1696）の「江州湖水諸浦丸舟船名寄御運上帳」（「居初家文書」）には、彦根藩を除いた琵琶湖の丸子船の内訳を

400石積	2艘
300～380石積	35艘
200～299石積	102艘
100～199石積	319艘
50～99石積	208艘
30～49石積	183艘
7 獵船～28石并傳馬獵船共	256艘
6～9石并傳馬乗舟共	113艘

としている。船の大きさは最大四九〇石積が文献によって確認される（『近江輿地志略』）。因に四〇〇石積丸子船の主要寸法を明治初年の資料でみると「敷長さ55尺9寸、シタサキ16尺8寸1分、ミワキ幅12尺、ミワキカサ5尺6寸、帆柱68尺5寸、舵長19尺、造船手間450人程度」（「中野又右衛門家文書」）。同資料に見られる一〇〇石積は敷長さ40尺7寸5分程度なので、船体の長さに限れば4割程度長くなるに過ぎな

8馬力焼玉エンジンは旧船を流用)が建造された。これが琵琶湖で造られた最後の丸子船(のち平成7年3月に松井造船所で琵琶湖博物館展示の復元丸子船が進水している)。この船も昭和40年頃に肥取り業務を終えたのちしばらくして転売されてしまった。戦時中以降用途を失った丸子船が「船の三昧」と言われる湖北方面に売却されるようになっていったが、現在湖北一帯に現存する丸子船の多くは湖東・湖南方面から転売された船である。湖北港が比較的遅くまで薪炭輸送として船利用が盛んであったためである。またイクス船(魚類養殖)として終焉を迎えた船も少なからず聞き取っている。

前出のようにこれらの船も現在では湖北町尾上の一〇〇石積機械搭載船「金龍丸」(昭和23年大津市今堅田で建造、山岡佐々雄氏保有)が、不定期はあるが年々修理を加えながら、陸路交通の不便な葛籠尾崎一帯のチップ材を尾崎まで搬出したり、竹生島に建築資材や燃料などを届ける業務に携わっているに過ぎなくなってしまう。このほかに西浅井町大浦・菅浦に陸揚げされた展示船各1艘、ほぼ倒壊状態の3艘(尾上・菅浦・北小松)を確認したが、なお近江八幡市の湖中に3艘程度が水沈状態にあるという。守山市森川原には耕地整理事業に際し移動困難を理由に埋められた船(小丸子)は遠い将来、埋蔵文化財として日の目を見る機会があるかも知れない。

1-B 中型舳板船

かつては漁船・荷船・作業船・小渡し船を含む渡船・観光船など多くの用途に用いられた船。シキ構成を船とすることから近世では「大船・中船・小船」などの区分があり、年貢米を藩蔵に廻漕する多くの村持ちの中船船または大船船の存在が知られる(惣船・村船などという)。用途によって「アッコ・ダンベ・土船・藻船・石船・肥船・土砂芥船」、さらに漁

船であればこれに漁法を冠して「イサザ船・地曳船・網船」など多様な名称があり、さらにこれに地域名を冠すことも多いので、名称からは船型が浮かび上がってこないことも多い。基本的には琵琶湖を航行することを前提とした船なので、堅牢さと波除けのためにオモギの上に棚を取り付ける(これを棚打ち船という)。

これらの船はかつては帆と櫓を併用する帆走構造が中心であったが、農用を中心とし季節に限って琵琶湖に出る船の中には帆走構造を脱着する構造に仕上げた船(堅田ダンベ)、専ら櫓を推進具とする船も一部を占めるものであった。のち漁船・荷船を中心として、焼玉・ジーゼル・電着・水冷などの様々なエンジンを搭載するようになったが、漁船に限れば大正10年の有動力は1艘に過ぎなかったが、昭和10年になると25%を占めるまでになっている(『滋賀県統計書』)。とはいうものの漁船はむしろエンジンを必要としない漁法も多いし、農用船などは敢えて必要としなかったもので、必要とする船に対する普及率はかなり高いものであったと理解しておきたい。このエンジンも当初は4馬力程度であったがのち、7→13→17→20→25と次第に性能をアップさせていったが、一方では振動や水抵抗の増大などもあって耐用年数や用材、さらに船型にも少なからず影響を与えていった。

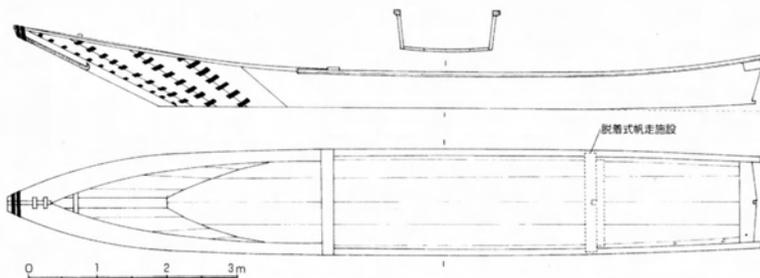
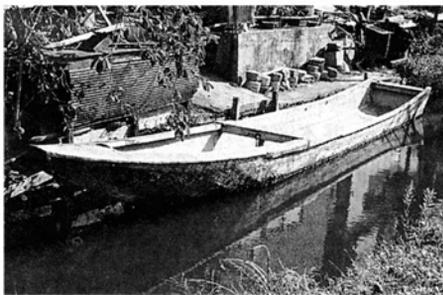
これらの木造船も陸路交通が発達するようになるとその多くがトラックなどにその座を奪われ、わずかに望みをつないだ漁船も昭和45年以降に普及していった新素材FRP船に取って代われ次第に減少していった。調査終了時点で都合60艘を確認したが、実際に使用中または使用可能な漁船ともなると数艘、他の用途を含めても精々10数艘に過ぎなくなってしまう。

【ダンベ】主に農用に用いられる比較的大型の舳板船を特に「ダンベ」という(ダンベイ・田船と呼ぶ地域もある)。田圃1反歩以上の稲藁を積むことができ、

【資料1】船の区分と大きさの関係、および船数

区分	正徳4年の区分と船数		文化8年の敷長さと敷幅の関係	
	敷幅	船数	敷長	敷幅
大船	5尺～6尺5寸	50艘	6間以下	6尺5寸～4尺5寸
中船	4尺5寸～4尺9寸	27		
小船	4尺～4尺4寸	141	4間5尺以下	4尺～4尺4寸
小船	3尺1寸～3尺9寸	677	4間2尺以下	3尺9寸以下
手操漁船	3尺並手くり船	234	—	
田地養船	2尺9寸以下	4,034	3間2尺以下	2尺9寸以下

※出典は、正徳4年(1714)は『京都御役所向大概賞書』、文化8年(1811)は「竹中弘家文書」。いずれも彦根藩は除く。



帆走施設が脱着できる堅田ダンベ（本堅田、井居恒夫氏所有）

主に湖岸伝いの田圃に通う船とされるのでその多くは棚打ち船。地域名を冠して打下ダンベ（高島町）、堅田ダンベ（大津市）、尾花川ダンベ（同、尾花川農船ともいう）、大浦ダンベ（西浅井町）などの呼称があり、各々少し仕様を違える。ただ特に規定がある訳ではないので、時として少し小さな船を含むこともある。その多くは櫓を推進具としたが、帆走構造を取り付けた船も少なからずあった。都市部の屎尿を野菜の出荷の傍ら引き取ったり、農閑期に自給肥料である湖中の藻や泥藻（ゴミという）を採取するなど多目的に用いるためである。延宝9年（1681）の「江州諸浦舟員数帳」（「観音寺文書」）の艀船1,790艘の内訳は「ひらた舟1,666艘、たんへい舟22艘、てんくり舟76艘、うかい舟26」とあるが、ここでいう「たんへい舟」は比較的大型艀船を意味するのかも知れない。



牧の水路に繋留中の土船（昭和63年撮）

【アンコ船・土船】主に土砂・バラスなどを運ぶ中型舳板船を総称して「アンコ船」などと呼ぶ。これもダンベと同じく地域名、主な積荷を冠して呼称されることも多い。例えば、北山田（草津市）では山田アンコ、瀬田（大津市）では瀬田アンコなどという。また土を運ぶ専用船を特に「土船」といい、ほかに「石船・砂利船・土砂芥船」などの名称で呼ばれた船もあった。アンコ船は「アンコウ（海魚）がぼんやり餌を待つ様が、土砂運搬などの仕事を待つ様に似ていること」から付けられた名称というが、もはやアンコ船の通称で呼ばれる船は現存しない。この船の大きさは敷長さや敷幅のほかに積載量の単位「坪」で著すこともある。

近江八幡市牧一帯では、八幡瓦の瓦土としてアマ土を取り除いた田圃の粘度質の下土（深さ1尺程度、ニガという）を売ることがあったが、これらの土を運ぶための専用船を特に「牧土船」「土船」という。舳や櫓を高く仕上げることで浮力を持たせたことに特徴が見られる船。かつて多くの船屋が手掛け、昭和39年の大中ノ湖一帯だけでも「18業者、運搬採土作業従業者150人」が大型木造船（15リットル積）を使ってこれに従事していたし（『琵琶湖干拓史』）、明治40年県下に205軒もあった瓦製造業者（『滋賀県統計書』）の中には瓦土を船によって輸送した所も決して少なからう。つまり、かつて相当数の船が就業していたと考えられるものの、現在では牧の水路に廃船同様の1艘を見るに過ぎなくなっている。この船は敷幅3尺6寸程度と少し小型に仕上げた機械船（安土町の船多造船建造、積載量二坪半）。

【漁船】漁船として最も多く用いられたのが中型舳板船。とはいうものの、琵琶湖の漁業には丸子船、内湖や河川を対象とした投網・小糸・タツベなどに用いる小船も多いので、特に中型舳板船の占める比率を示すことができない。木造漁船は横流れも少なく操業には適したとして高く評価されるものの、造船や修理手段の確保などもあって近年琵琶湖で使用される漁船とも

なると数艘を見るに過ぎなくなっている。明治31年頃の漁船の平均船齢を11～13年としているので(『滋賀県統計書』), 昭和50年以降造られることのないとされる木造漁船にあっては当然の結果かも知れない。

因に明治20年の漁船の用途別を「地引網用船601艘・網船764艘・釣船18艘・魴蜆搔船36艘・漁船525艘・小糸網漁船2艘・投網漁船14艘・鮎掛漁船5艘・魴漁船17艘・漬柴漁船76艘・鰯船20艘・魎網船7艘・其他208艘, 合計2,293艘」(『前同』)とある。このほかに近世史料には「山田あみ舟(てんま), 矢橋あみ舟(小伝馬), ふし船(漬柴船), 猟船(流しもち猟), 鶉飼船」などがあったが, これに地域名を冠して呼称されることも多いので, 実際の名称ともなると際限がない。イクスを持つ漁船を特に「イクス船」と呼ぶこともあるが活魚運搬船との判別は難しい。

【地曳網船】主に地曳き網に用いた船。大正末期になると人件費を削減しようとして動力を使って網を巻き上げるためのヤグラ(当初は木造, のち鉄製に改良)を船内に設置するようになると, 船を安定させるためにより幅広い船を求めようになっていった。かつて地曳き船として用いられていた丸子船の中には, 作業を安定させるためシキ板1枚を補充し, 幅広に改造させたこともあったという(志賀町北浜)。

同タイプの木造船としては現在はマキノ町海津に地曳き仲間の持ち船として造られた廃船同様の中型軸板船1艘見るに過ぎない(「共生丸」, 昭和52年4月西浜の船勘造船所建造)。なお同施設を持つ地曳き専用船としてはほかにマキノ町知内の河川に係留される1艘のFRP船を確認している。



海津の地曳き網船「共生丸」

【資料2】大正7年2月改正の「新造船値段書」(堅田造船組合)

船名	総杉船	平板楨船	備考
堅田船	—	95円	棚付
堅田漁船	159円	181	
阪本船	205		敷幅4尺
阪本比江辻船	137	—	敷幅4尺3寸、道具なし
山田船	103	115	
下笠舟	108	120	
山賀杉江	76	83	3尺3寸船
岡山村牧土船	97	118	土船
岡山村牧船	85	97	中棚船、船道具なし
洲本赤野井	75	82	3尺2寸船
志那中村	60	65	3尺船
木濱船	65	70	
今濱幸津川船	59	—	
吉川船	60	65	
野田船	55	—	
イクス船	—	95	3尺2寸船、棚付
瀬田大萱船	175	195	大萱浦、敷幅4尺
瀬田大萱船	118	138	瀬田浦、敷幅3尺8寸

(注) 総杉船は主な船体材に杉を用いた船、平板楨船は杉船のうち特に軸板に楨を用いた船。この価格は今堅田の造船組合が主に得意とした地域の船を対象としたと考えられる(資料提供は仲野愛規氏)。

1-C 小型軸板船

軸板構造の艀船のうち, 1-Bと1-D(南浜船)を除いた小船をこの類型に含めた(一応敷幅4尺以下が一つの目安)。内湖や水路などを使用水域とする農用船としての用途が多いことから一般的に「田船」の名称で呼ばれる船が多い。しかし, 内湖などの漁船としての用途も結構多くみられるし(農業と兼用する場合もある), 安曇川の四ツ手網漁に用いるカワラ船, 安曇川筋の渡船(川島の渡しなど5カ所), 内湖口の渡船(貫川内湖・金丸の渡しなど), 河川の荷船(明治中期には少なくとも30河川に舟運が見られた), 藻や泥藻取り船, 肥取り船(彦根市内への肥取り船は専ら小型軸板船)など実に多くの用途に用いられていた船である。また湖岸一帯の農家では日常生活に欠くことができない多目的船として, 1軒に数艘を保有するようになり, 昭和23年県下62軒の造船所(うち木造船を手掛けたのは60軒)でこの船を手掛けなかった造船所はなかったとされるほどで, 県下で最も普及した船の一つ。

これまた用途のほかに地域名を冠して呼称されるの

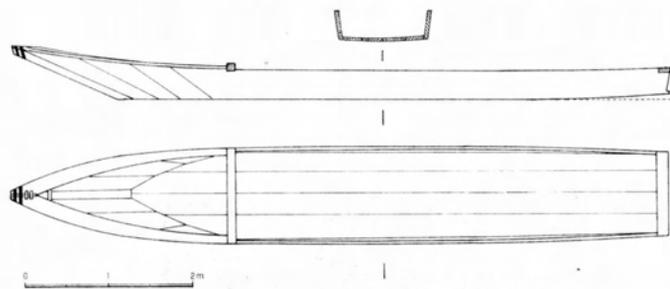
で、実に多くの名称が聞き取れる。さほど耐波性を要求されないことよりその多くは棚板を取り付けない一枚ガワ（舷を一枚板で仕上げた船）。とは言うものの農閑期に限って琵琶湖での漁業（貝曳き漁・流し針漁など）に従事することもあるので、棚打ち船が決してない訳ではない。施主サイドの都合による。地域によって大きさや仕様に微妙な違いが見られる船もある。例えば、敷幅を3尺・3尺1寸・3尺2寸・3尺3寸を標準とする地域、敷長さを21～23尺、タチ（敷板の左右の反り）を1寸～1寸2分、またツリ（敷の後部の反り）を3寸5分～4寸5分などとする船もあったし、川船などでは特に舳にツリを持たせた船もあった。集落によってある程度標準的な仕様がなかったので、地域名を冠して呼称することで区別することもあった。野洲中主造船組合では標準的な田船を「一艘船」（敷幅3尺）といい、一回り大きな船を「二分五厘」、さらに大きな船を「一艘半」などといって区別している（『吉田茂家文書』）。タチを多く取ると船のローリングが多くなるものの、船足が軽く仕上がるし、ヒラキ・ツリも多く取ると同様に船が軽く押せるようになる。艀構造は相対的に安定性の高い船であるが、この微妙な違いが操船に与える影響も決して少なくなかったとされる。外見はさほど違わないように見える船であっても、微妙な違いを見せつつ地域に定着しているのである。『資料2』の新造船の価格差はひとえにその構造の違いを示そう。

その推進具は専ら棹や櫂（主に檜製）に頼るが、併用する地域も多いし、流れを伴う河川では専ら棹や陸路からの曳船が中心となる。棹を主とする一帯では櫂杭を省略し、ホテ（舷）後部にサオズリといって三角状の板を取り付けることで、使用する箇所ホテ上端を保護した船もある。農用の傍ら琵琶湖に出る船の中には、戦後でも帆を立てる構造を取り付けたり（貝曳き漁）、水冷式農発エンジンを取り付けた簡易機械船も少なからず見受けられた。近年では船外機を搭載する施設に改良された船がかなりを占めるようになっている。総杉船（主な船材を杉とした船）は修理を加えると最大15年程度を船齢とするが、今なお比較的良船を多く目にするのができるのは、それだけ遅くまで用いられていたことを意味しよう。

【田船】農用に用いる船を特に「田船」と総称する。用途によって付けられた俗称なので特に船の大きさや構造を示すものではないが、1-Cに類する船が圧倒的に多いことから、むしろこの類の船の代名詞にもなった感がある。しかし、かつて田船と呼ばれた船でも農用に用いない地域に転売されるとこの名称を用いなくなるし、1-Bに類する中型船でも農用に用いる船を特に田船と呼称する地域もあるので、多分に抽象的な含みをもった呼称である。なお田船と同意語として用いられる「田地養船」について慶応2年（1866）には「田地江通ひ候迄ニ而漁小渡等一切不仕、商もの等をも積不申、其外遠方者勿論近在へも通ひ不申候」船



サオズリを付けた田船（西ノ湖）



中主町野田の田船構造図



今堅田の水路に繋留される鉄製田船



組船にして農機具を運ぶ田船（西ノ湖）

と定義づけている(「南大萱共有文書」)。基本は農用に限定した船なのである。

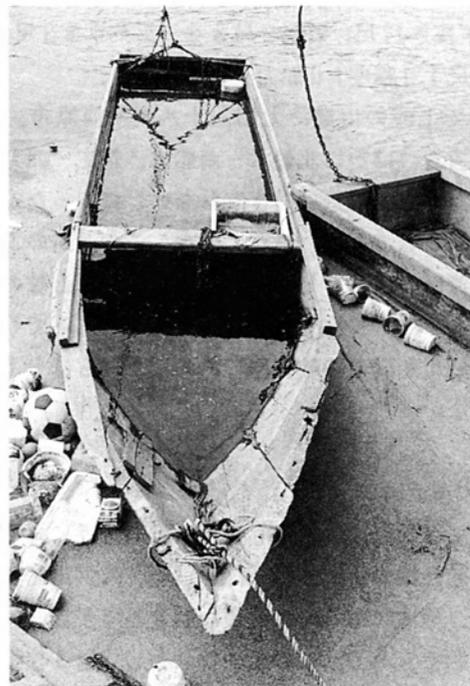
かつて湖辺農家はこれらの船を1軒に数艘(耕作地への通船、水替え具バーチカルポンプ専用船、牛などを運ぶ組船の予備船、採藻採泥船など)を保有するようになった。農用の傍ら漁業や日常生活など何かにつけて用いられた多目的の小船である。現在でも最も多く見られる船の一つで全体の5割弱と多くを占める。また比較的遅くまで用いられていたこともあって使用可能な良船が占める割合も高い。また全面にFRP加工を施すことで船齢を延ばした船も多いし、昭和40年代に過度期的な船として鉄材でほとんど同型に造られた田船数艘が今なお堅田内湖などに現存する。

【芯なし田船】 田船のうち芯木を省略した船。通称「芯なし田船」。愛知川から犬上川の湖岸一帯で普及した敷幅3尺3寸~5寸程度の舳板造りの小艀船。戦後では地域全体の8割以上を占めたこともあったという。これらの地域の船は専ら内湖や水路を使用水域とした農用船なので、さして耐波性を求めず船価を安くしようとして芯木を省略する船型に改良されていったと伝えられる(舳板船の祖型の可能性を捨て切れないが)。これらの地域以外では耐久性に乏しいとしてほとんど普及しなかったと言うので、やはり内湖や水路など耐波性を要求されない水域に限られる船なのである。かつて一帯で相当数を目にしてはいたが、現在では朝妻漁港に陸上された1艘を見るに過ぎなくなりました。

【牛船】 農耕用の牛を運ぶ専用船(農耕機械を運ぶようになってからもこのように呼び習わすこともある)。船が田圃に通う唯一至便な手段であった湖辺集落では、農耕に牛を用いるようになると、これらを運ぶ専用船を必要としていった。比較的大きな船を保有しない農

家は小船2艘を横につなぎ合わせることでこれに対応していたが(これを「組船」「船をカラメる」などという)、予備船を確保しなければならないこともあってか、戦後になると湖南湖東一帯を中心として敷幅(3尺8寸~5尺など)を広く仕上げた専用船を別途に誂えるようになっていった。

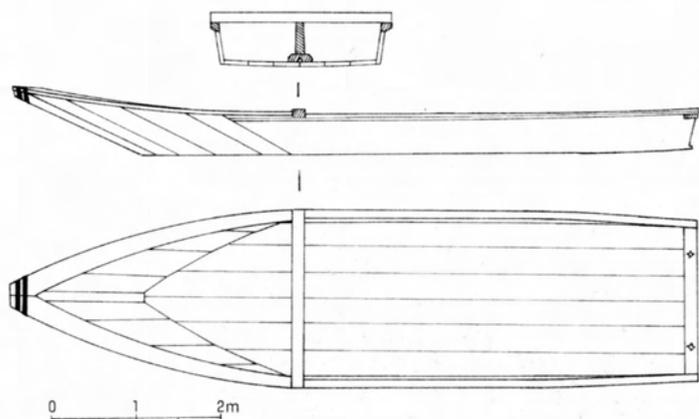
現在では大津市今堅田の水路に係留される1艘を見るに過ぎなくなっている。ただこの船は10匁にも満たない水路の対岸に耕運機などの農機具を運ぶことを目的で造られた船であるが、かつての慣習からか今なお牛船の名称で呼ばれることも多い(西村八郎氏保有、昭和50年頃高島町の船力造船建造)。ただ敷長さ21尺、敷幅5尺8寸なので1-Bに含めるべき船かも知れな



かつて宇曾川に係留されていた芯なし田船(昭和63年撮) 追鼻の大部分が欠落している。



堅田内湖の牛船(西村八郎氏所有)



牛船の設計図

い。なおこの名称で呼ばれる船はほかに守山市木浜に全体にFRP加工を施した1艘を目にしている(敷幅3尺8寸)。すでに全体にFRP加工が施されたため集計に加えていないが、近江八幡市円山の「芦刈り船」も同様の趣旨で船体を長く仕上げた船である。

【カワラ船】安曇川筋下流域のホウチョウ漁(四ツ手網漁)に用いた小罾船の総称。造船所サイドでは「北船木田船」などと呼ぶように、一帯の農用兼漁船でもある。かつてこの船を川幅一杯に縦に並べ、この艫部でホウチョウ漁を行っていた。現在でも安曇川河口に位置する北船木・南船木一帯に相当数が見られるが、そのうちの幾らかは湖東方面から移動した田船という。その用途も近年ではエリの補助船や遊漁程度に用いられるに過ぎない。カワラ船の平均的な仕様は「オモギ長さ17尺、敷幅2尺8寸、シタサキ3尺8寸、深さ1尺1寸程度」(「船力造船手控え」)。

かつて上流の川島-太田、十八川-河原市、南古賀-下古賀(ほかに北船木-南船木、新庄-西万木にもあったが、船構造は聞き取れない)にあった安曇川筋の渡船としても用いられていた。この渡船のように川筋上流域の川船として用いる船は、何れも艫のほかに舳のシキにもツリ(反り)を持たせた県下でも類型を見ない川船構造の舳板船であったが、もはや1艘も現存しない。

1-D 南浜船

かつてびわ町南浜を中心に米原町磯付近にまで普及した川船仕様の小型漁船。「南浜船」「南浜川船」などという。地域にあっては簡便な船として多目的に使用された船でもある。この船の特徴としては3枚程度の舳板を、ハリ(膨らみ)を持たせずほぼ二等辺三角形のように取り付け、ホテ(船舷)から一段と高く仕上げる。舳板船特有の追鼻(舳板の倒壊を防ぐために上から取り付ける板)をほぼ舳板の厚み程度の直材で済まされること。芯木を省略し先端の舳板を寄せ集



姉川に繋留される南浜船

めることで船首部を構成すること(現存する船の一部に見られる細い芯木は後補か)、などを挙げておこう。

この船は姉川での使用に適した川船とされ、急流でも船が安定するように舳板をほぼベタ(水平)に矧ぎ合わせ、舳と艫にツリ(反り)を持たせ細長く仕上げた小罾船。平均仕様は敷長さ20尺、敷幅3尺、深さ1尺程度。かつては姉川のヨツデアミ漁に欠かすことの出来ない船とされる。現存する船の上艫板(フブキという)に空けられた3箇所の穴は、中央はナガシアミ漁用、左右は四ツ手網の柄を支えるもの。一帯では県下全域に見られた舳板造りの小罾船(田船)もかなり普及していたが、姉川筋の漁船として使用されることは少ないので、やはり川船として独自の発展を遂げた船と理解しておきたい。

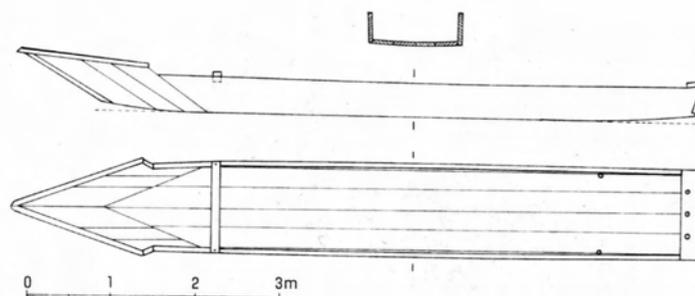
この船型はすでに明治15年の『船舶仕法書』に「敷幅4尺4寸・敷長さ34尺・深さ1尺9寸」の南浜川船形が記されている(姉川筋の荷船か)。ただこれが舳板造りの原型なのか、改良型なのか、また独自の発展を遂げたかなどは定かではない。これらの船は南浜の「船庄」を中心に、川道の「船久」「船六」、ほかに南浜で修業時代を過ごした長浜の「船武」などの船屋が建造したことが知られる。ただ船庄では戦後以降でもかなりの箇所に工夫改良を加えたと語られるものの具体的な指摘を受けるに至っていない。

2類 剣先船

剣先船は一本水押しである芯木を棚板より剣のように突き出させ、側板を直接芯木に寄せ合わせることで船首部を構成した船。「舳板造り」に対してこの造船手法を「延造り」と呼んでおこう。比較的大型になれば数枚の側板を縦に矧ぎ合わせてガワを構成するが、最も普及した小型船はほとんど一枚板仕上げ。

2-A 剣先大型船

海外構造の船型を琵琶湖に導入したと伝えられる



南浜船の概測図

船。びわ町南浜ではこの船型を建造するに際し敦賀の造船所から職人の派遣を受けたとする話などはその証しの一つと考えている。名称は明治40年の「造船寸法控」に「海津村。ケンサキ、敷長サ42尺5寸」とあるのが初見（「空兵衛造船所蔵」）。ただかつてこれに近い船首構造をもった「彦根藩御座船」（敷構成はフリカケか）、天保12年（1842）に就航した長浜～大津間の旅客船「早船」（初期は丸子船構造、のち早船造り）などとのつながりは明らかにし得ない。

在来の琵琶湖の舳板船に比べて波切りが良く、船足も早いこともあって、戦前には漁船、荷船（湖北町片山）、野洲川の土砂運搬船（10数艘の土砂を満載した丸子船を曳く機械船）などに使用されていたことが聞き取れるが、技術の関係もあってか建造数はさほど多くないという。現在では6艘程度の中型船が見られるが、宇曾川漁港・勝野の船溜まり・膳所の船溜まりに繋留される各1艘のほかはいずれも陸上げ管理（宇曾川漁港も直後に陸上げ）。いずれも漁船仕様であるが、ごく近年に使用された痕跡をとどめない。

2-B 小型剣先船

剣先仕様の小艀船。通称「剣先小船」「剣先釣漁船」。琵琶湖で大勢を占めた舳板船に比べて比較的建造方法が容易で、安価なこともあって、戦後以降に小漁船や遊漁船として多く建造されるようになったと伝えられる。この船も多くの造船所が手掛けたことが知られるが、それにもかかわらず造船記録の中には戦前以前の資料をほとんど目にする事ができない。このことは比較的新しく出現した船を意味するのであろうか。現在78艘と多くを確認することができ、うち65艘前後が使用中やその可能性を持つ船。比較的遅くまで遊漁船としての需要があったことによるものであろう。

今なお膳所船溜まりには貸釣船として16艘が使用状態にある。とはいうもののその多くは船底部の外側にFRP加工を施し、船体に数年に1回防腐剤を塗る

ことで辛うじて船を維持しているのが現状である。また推進具としてオール受けを取り付けることで利用者の便に供すなど改造が加えられている。これらはいずれも昭和54年以前に島ノ関の船宗造船所が手掛けた船。また「小廻り船」といって舳艀にツリを持たせ、深さを持った船は矢橋漁港の1艘を見るに過ぎないが、小型剣先船の祖型とする説が語られることもあるが定かではない。

【フリカケ船】戦後になると剣先船に丸子船のフリカケ構造に近い仕様を取り入れた改良小型漁船「フリカケ船」が出現した。ローリングが大きくなるものの、波切りの良さもあって漁師間に高い評価を受けたが、フリカケは大きく捻るように曲げ加工を施さなければならないので、船板に節があると折れるなど建造が容易ではなかったこともあって、さほど普及しなかった。

なお比較的大型の木造旅客船や木造公用船にもこの構造が取り入れられ、これらもフリカケ船の通称で呼ばれることもあったが、一応別仕様の船である。これも現在では廃船同様の沖島の旧連絡船を見るに過ぎない。

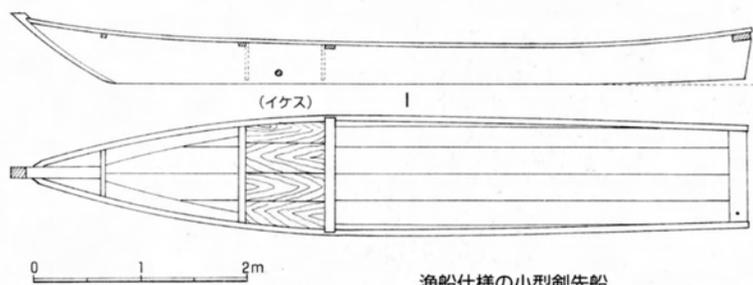
2-C 剣先旅客船（オヤマ）

瀬田川筋の旅客船として比較的新しく導入された船。主に石山寺や立木観音に参詣する旅客を運んだ船として知られている。延造り構造の剣先小艀船。かつてこの旅客船には琵琶湖独自の舳板造り中艀船アンコ船が用いられていたという。しかし、参詣が隆盛をみるようになると自ずと波切りが良く使い勝手のよい船が求められるようになり、昭和10年頃に新しく考案された船と伝えられる。前後にツリを持たせることで船足を軽く、延造りの手法を取ることで波切りを良くした船。

現在のJ R石山駅や京阪石山、さらに石山寺、南郷付近で旅客を待ち、瀬田川筋を棹や櫓を操って上下し



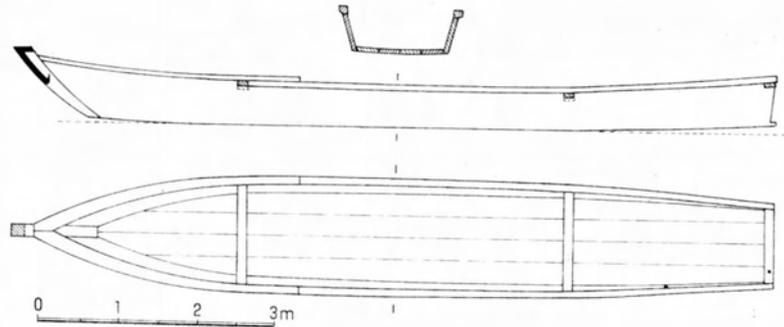
建造中の小型剣先船（昭和63年。船力造船）



漁船仕様の小型剣先船



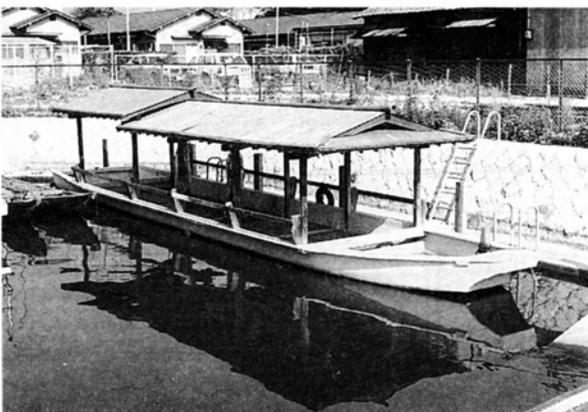
機械船仕様の「オヤマ船」



旅客船「オヤマ船」の設計図（三清造船所提供）

ていた。時には大津にまで客を運ぶことがあったが、条件が良くても片道2時間も要したきつい労働になったという。定員は乗客10人でこれに対して船頭1人、11人になると2艘の船を仕立てなければならない決まりであった。オヤマ船が盛んであった時代の瀬田川は流れも比較的緩やかで、水の淀んだ場所（マヨリという）を通ることで棹や櫓での航行が可能であったという。最盛期の昭和30年頃には30艘以上が瀬田川に就航していたとされる（昭和30年代の建部大社船幸祭の渡御船4艘や伴走船はいずれもオヤマ船）。昭和40年頃を境に建造されなくなり、現在ではエンジンを搭載した3艘の船（一部FRP加工やペンキ塗装）が見られるだけで、それらも対岸の観光屋形船の曳船として使用されるに過ぎない。なお平成6年10月に廃船同様の1艘が焼却処分されている光景に出会ったが、もはや手の施しようもなかった。

オヤマ船の名称は石山寺をオヤマ（信仰の対象とする御山）とし、これに参拝する客を乗せたことよりオヤマの名称が付けられたとも、石山寺の参拝客をオヤマ（歌舞伎の女形や遊女など）に見立て、これを運ぶ船をオヤマと呼ぶようになったともいうが定かではない。



瀬田川筋の観光屋形船

3類 その他

1類・2類に該当しない船をこの類で取り扱った。特殊用途の箱船やその他（不明・手造り船）を除けば、いずれも改良型としてのちに定着した木造船。

3-A 屋形船

現存する屋形船は観光旅館が所有する船首部を戸立てに仕上げた観光屋形船と彦根藩復元船1艘があるが、草津市・近江八幡市（沖島の連絡船か）の各1艘は半水没または陸上げされ、もはや使用に耐えられない廃船状態にある。屋形船の名称で呼ばれた船には、剣先船「新御好屋形船」「丸御屋形船」などの彦根藩船（『彦根市史』）、明治23年開設の琵琶湖疏水に遊船111艘（長さ34尺、幅5尺5寸、屋形付）が就航したことが知られるが（『琵琶湖疏水要略』）、疏水遊船はいずれも触板造りの疏水船に屋形を設えた船であった。

ところが観光屋形船が隆盛をみるようになると、瀬田川筋に大型の戸立ての屋形船が出現するようになった。これに至る経緯は次のように伝えられる。年々増加する利用客に対応するため、施主は乗客を多く乗せることが出来、かつ安定するより大型の屋形船を、また船を軽く押せるように前後に大きくツリを持たせ、さらに乗客数に影響がない船首部をより狭くするように要望したという。在来の触板造りの船型ではこれを満たすことができないし、芯木を持った延造りでも側板を触部で極度に曲げ加工を施さなければならないので、ロスが生じることは明らか。ちょうど石山出身で大阪・九州などで川船を多く手掛けた経験のある目片勝太郎が、大正6年頃に瀬田川筋に船屋「船勝」（のち目片造船所と改称）を開設し、かつての経験を生かし戸立て構造の屋形船を建造したのがその始まりと伝

えられる。

のち瀬田川筋に観光屋形船の需要が急増すると川筋2軒の造船所(船勝, 三清造船所)では到底捌き切れない状態になったので, 船善(観音寺町), 船伊・船丑(共に今堅田)など従来の琵琶湖の技法を持つ船大工もこの船を手掛けるようになり, 次第に瀬田川の屋形船として定着し, さらに琵琶湖一円の観光地の遊船として普及していった。最盛期の昭和50年頃には瀬田川筋だけでも50艘以上の屋形船が就航していたとされるが, 昭和54年頃以後新造は無く, いずれも船体の一部または全体にFRP材を巻くことで補強し, かるうじて船齢を延ばしているのが現況である。一時期この加工のほとんどを船の陸上げ施設を持った石塚造船所(中主町吉川)が手掛けたという。かつては櫓を推進具とした時代には, 20人乗りは2人船頭, 40人乗りは4人船頭, 50人乗りは6人船頭が乗り組む決まりであったが, 近年ではいずれも動力船による曳航。船はそれぞれ観光旅館が保有するもので, 定員22~45人乗などがある。

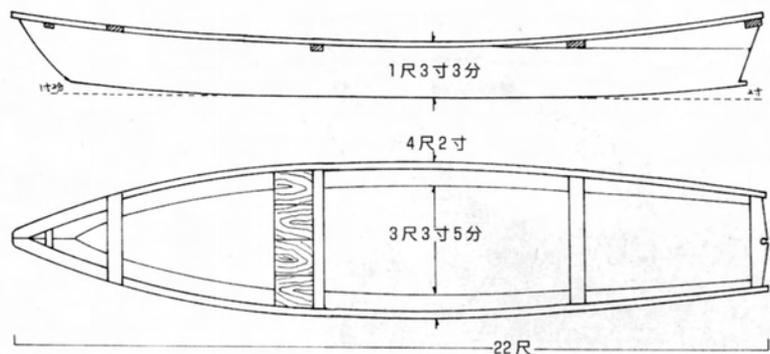
彦根城の外堀に係留される屋形船は, 昭和60年頃にかつての彦根藩船「大太郎丸」「小太郎丸」をモデルとして復元した船2艘のうちの1艘。当初かつての船に近い図面(フリカケ構造の剣先船)が準備されたものの, 実際には剣先船に仕様変更されてしまったという(空兵衛造船所建造, うち1艘は外注)。また建造当初は2艘とも内堀での遊船として観光客を乗せる業務に携わったが, しばらくするとこれらの観光業務も休止させ, うち1艘は他に売却されてしまったという。なお屋形船はいずれも船体部と船具は船大工, 屋形部は家大工が手掛けるのが慣習という。

3-B 網打ち船(チャリコ)

瀬田川の網打ち(投網)に使用される延造りの小艇船。造船所サイドでは「瀬田漁船」と呼称されるように(「磯田清春家文書」), かつては瀬田橋本地区だけでも30艘以上もあり, 南郷・黒津などでも中心的小艇船とされたので, 瀬田川筋の小型漁船として定着した船である。かつては蜆掻き船, 船内で寝泊まりしながら2日程をかけて小松方面にまでワタカ漁に向く漁船として代用されることもあったという。通称「チャリコ」(チャンリコともいう)は小回りの利く小船という意味で付けられた呼称とされる。

この船の特徴は, 芯木を省略し側板を直接寄せ集めることで船首部を構成すること(オガミアワセという)。投網が引っ掛からないように船首部を丸く仕上げること(投網は専ら船首部に立って打つ)。小回りの利くように船全体を丸く仕上げ, シキの前後にツリを持たせること(県下では最もツリの比率の高い船), などを挙げておこう。このように仕上げられた船は多少安定性に欠けるものの, 小回りには抜群の性能を発揮する。

このチャリコの初期の姿は, 舳部に芯木を取り付けた川船の構造を多少なりとも残していたという(小廻り船か)。のち使用される水域が限定され, あまり耐波性や強度が要求されないことや網打ちの際に網が引っ掛かるのを防ぐために, 次第に芯木を省略した現在の姿に変化していったとされる。この船の出現について次のような経緯が伝えられる。「明治時代の天津博覧会に県内外の川船構造を参考にした改良船が出品され, 金賞を受賞するなど高い評価を受けたが, これが現在の船の原型。網打ち漁に適していたことより瀬田川筋に導入され, 以降大阪方面の造船技術を持った船大工により若干の改良が加えられ, 瀬田川に定着して



網打ち船「チャリコ」とその設計図(三清造船所提供)

いった」という比較的新しいタイプの船。ただ大正期にはすでに現在に近い船型の船で網打ちが行われていたことが明らかなので、新しいといってもごく近年のことではない。チャリコが琵琶湖一帯でも独自の形態を有しているとされるのは、このような発生形態に拠ったためであろう。明治19年には「投網漁船18艘」があったことが知られるが（『滋賀県統計書』）、この船型を確認するに至っていない。

この船は元々は船善（観音寺）が主に手掛けるものであったが、改良型になった後は大阪系の技術を持った前出鳥居川の船勝が独占するように手掛けるようになった。このため元来琵琶湖にない造船技術が随所に見られるようになった。例えば、船首部を丸く仕上げるためこの部分の板を薄く削り込み、さらに内側から焼くことで曲げ加工を得たが（ヤキダメという）、瀬田川筋以外の琵琶湖辺で行われることはない造船手法。船首部に芯木を持たない寄せ集め構造船は、県下では芯無し田船、南浜船の3例を知るに過ぎないが、その取り付け方はこの船独自のもの。また板の接合面のスリ合わせや木殺しを重視し、横縄を入れることが少ないのもこの船の特徴の一つである。

木造船としては昭和40年頃に造られたのが最後とされ、以後この船にFRP加工を施したり、この構造を真似たFRP船が造られることもあって、今なお網打ちの中心的な船。のち草津市などの湖岸に数艘が移動していったという。

3-C 箱船

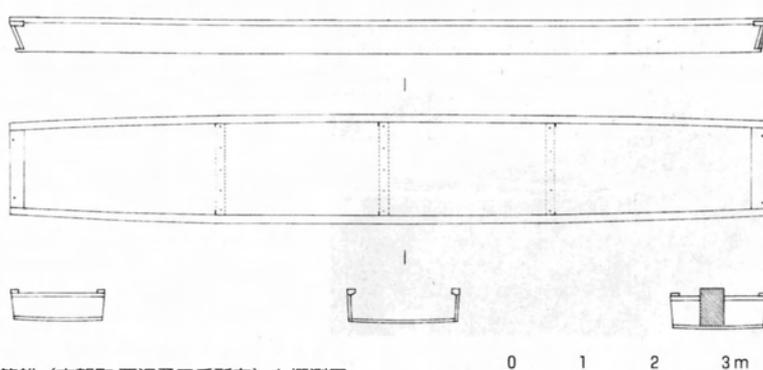
箱船とはほぼ前後同型で箱状に仕上げられた船。元々使用目的を持って造られた船と船首部を朽損したことよりこれを切断して改造させた船がある。志賀町の1艘を除くといずれも改造船。

志賀町下今宿の湖岸に陸上げされた箱船はエリ竹を運ぶための専用船。寸法は長さ24尺、敷幅4尺4寸、深さ1尺2寸。この上に厚さ3寸程度の棚板を取り付け、側板のヒラキは少なくほぼ箱状に仕上げる（西沢勇三氏所有、昭和50年頃高島町勝野の船力造船建造）。用途が限定されたこともあって、一般的な船に比べて細長く仕上げられるが、船の長さはエリ竹の長さ準じるといふ。またかつてはこの船自体は推進具を持たず、エリ竹などを積んだのち船で曳かれる無動力船であったが、のち船外機を搭載できるように改造が加えられている。

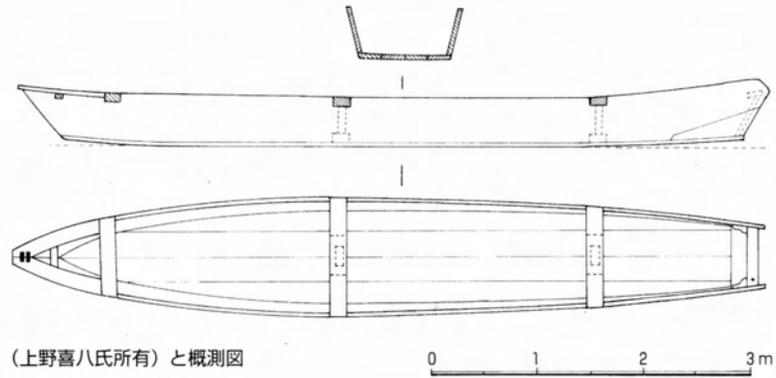
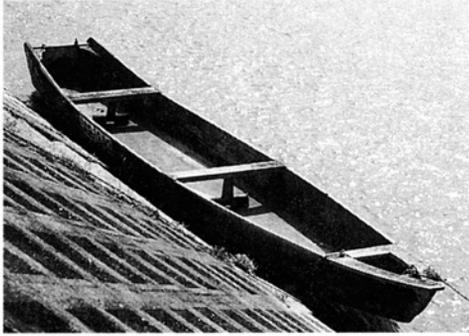
明治4年の「舟覚帳」（「中野又右衛門家文書」）に「はこ船、しきたけ壺丈九尺」とあり、明治9年に62艘、同19年119艘があったことが知られる水防予備船（敷長さ12尺程度、前後同型の箱船で納屋などの壁面に取り付け万一の水害に備えた船。調査後志賀町で1艘を確認）、かつて中山道日野川の橋船（船数艘をつないで渡河手段とする）などもこれに類する船であろう。ただ湿田で用いる敷長さ6尺程度の通称「タブネ」「ドロブネ」はこの範疇に含めないものとする（ガワの取り付け方は木造船とは明らかに異なるし、塗止めをほとんど無視するので船には含めないことにしている）。

3-D 鮎掛け船

瀬田川の比較的下流域の関津町を中心に用いられた延造りの小型船。「アユカケ船」「川下鮎かけ漁船」、ただ単に「漁船」と呼ばれることもある。主に黒津浜から曾東までの間の鮎のヒッカケ漁（船を使った鮎の友釣り、「船カケ」という）に用いられたため付けられた名称で、ほかに投網・小糸などにも用いられた地域の中心的な漁船。かつては瀬田川の対岸を結んだ渡



エリ用箱船（志賀町、西沢勇三氏所有）と概測図



釣掛け船「関ノ津一号」(上野喜八氏所有)と概測図

船(曾束, 外畑, 関津, 新浜など)や柴運搬に用いられていたこともあったが, 現在では大津市関津町に2艘がみられるに過ぎない(いずれも上野喜八氏所蔵).

うち1艘は「関ノ津一号」(かつては瀬田川筋下流の外畑港に係留されていたが, 現在自宅前の瀬田川に係留中, 排水量0.2吨). 昭和30年5月1日に観音寺町の船善造船所で建造. 一説に8年が寿命とされる川船なので, 建造後すでに40年を経た現役の木造船が, 元のままの姿をとどめる訳がない. この間度重なる船板の取り替えなどの修理によって, 新造当時の部材はごく一部しか残っていないが, 船外機を搭載するため艫部に改造を加えたほかはほぼ建造当時の姿をとどめるとされる. 大きく姿を変える修理が加えられなかったため, 船にFRPなどの加工が施されなかったことも幸いし船の構造の細部が窺える.

のち瀬田橋本の三清造船所で建造した船(関ノ津二号)は流出し現存しない. 三清造船所が業務を休止したのちの昭和63年草津市下物の船孝造船所で建造した1艘が瀬田川下流域で建造した最後の木造船(自宅脇に陸上げ保管, 船名「関ノ津三号」, 排水量0.2吨). ただこの船は仕様に改良が加えたため, かつての船の姿とは少し違えるという. 例えば, 船を軽くするためガワ板のコケ(上口開きに仕上げる)をより大きく取り, 側板全体に丸みを持たせ, 船板も1寸5分(かつては1寸1分)と厚板構造の仕上げ. ために船が扱い易くなったものの, 安定性に欠けるので網打ちなどで

は慣れないと危険を伴うといい, 使用頻度は少ない. つまり, 長い期間をかけその水域に応じて発展していった船が最良ということであろうか.

この船は瀬田川の岩場の多い急流で用いられることを前提とした典型的な川船の構造を持ち, 操船技術を含め, 県下を見渡しても瀬田川筋にのみ見られる独自の船である. かつて瀬田川筋の大津市曾束を宇治と琵琶湖の船大工の出入りの境とする慣習があったので, 案外淀川筋の流れを汲む船であったのかも知れない. 例えば, 伏見の小船(小回り船, 一枚ガワともいう)と比較すると側板の船首部の取付部を除けば類似する点の多いし, 一五石積大阪型土砂船なども構造的に類似する船の一つである.

これらの船はかつては船善造船所が独占的に建造していたといい, 同造船所に「明治二〇年六月吉日, 釣掛け船」と墨書された追鼻の型板が保管されていること(のち大津市歴史博物館保管), 明治19年に「釣掛漁船5艘」(『滋賀県統計書』)とあることより, 少なくとも明治中期以前にまで遡ることのできる船であることは疑う余地はなさそう. ただ前出の追鼻の型板などを見る限りにおいては, 現存する船とでは若干の仕様の違いが見られるので, 少なからず改良された痕跡が認められよう. のちには三清造船所・船孝造船所でも建造するようになったが, いずれも琵琶湖の系譜を受けた船大工である.

第2編 木造船の造船用具用品

滋賀県下の伝統的な木造船も、近年では手持ち材を消化する意味で数艘の小船が造られたに過ぎないので、それらに用いられた用具用品も緊急を要する調査の一つである。幸いにもかつて造船業を営んでいた大津市瀬田の三清造船所（磯田清春氏）、同今堅田の中野新次郎氏、志賀町南小松の船又造船所（中野又右衛門氏）、安土町常楽寺の船多造船（深尾見三氏、現在でも片手間に造船業務に携わることもある）などから、その一部を寄贈していただくことができた。またかつて造船の中心地であった大津市今堅田にあって、少なくとも近世初頭から戦時中まで連続と造船を続けて来た西田正三家に所蔵される用具用品を整理分類する機会を得ることができた。なお県内ではこのほかに大津市歴史博物館に2造船所（いずれも大津市内）の用具用品を所蔵していることを確認している。

本編ではこのうち中野又右衛門氏寄贈の用具用品、整理作業を快く承諾していただいた西田正三家の所蔵品の明細を報告することで木造船の一資料としておこう。

第1章 船又造船所寄贈の造船用具用品

平成6年6月、戦前まで丸子船など比較的大型船を多く手掛けた造船所を営んでいた中野又右衛門氏より、かつて造船に用いていた用具用品、および造船資料の寄贈を受けることができた。とはいうものの廃業されて久しいので、46種、601点（うち船釘440点）と量的にはさほど多いものではないが、かつて丸子船を多く手掛けただけあってそれらの中には近年見ることのできない用具用品も含まれる。今後それらは資料と共に高い評価を受けることは間違いなからう。

本章はそれらを整理分類した報告で、うち113点を図面化し、それらの用途を少し西田家の所蔵品を視野に入れながら略述することで戦前の造船の一資料としておきたい。

第1節 船又造船所の系譜

志賀町南小松にあって少なくとも四代に互って伝統的な木造船を手掛けた造船所。船屋（フナヤ）といい、屋号は船屋「船又」または「船又造船所」。中野又治郎が明治初年頃に、現近江舞子の漁港脇に船屋を開設したのがその始まりと伝えられる。ただ南小松では「湖辺船大工仲間」（彦根藩領下を除く船大工仲間組織）が公認されたと推定される安永8年（1779）の「浦々住居船大工御尋ニ付御役所江差上候写」（「竹中弘家文書」）に「南小松村船大工、太右衛門」とあり、以降

慶応4年（1868）までほぼ世襲で造船を営んでいたことが知られる。とするとこの太右衛門と何らかの繋がりが推定されそうであるが、明らかにするに至っていない。

同家の所蔵文書の一つである明治4年9月の「舟覚帳」には「たかしま船・はこ船・大みと（溝）船・中間船」のほかに、七～二〇〇石積の丸子船10艘の造船記録が見られる。すでに高島町内などに得意先を広げ、丸子船などを手掛けた船屋として地域に知られる存在であったのだろう。また明治40年4月起の「寸法帳」には「一〇〇石積（米300俵積）・八〇石積・四〇石積（米130俵積）・七石積」などの丸子船のほかに、「小松あみ船・高島ひらだ・八坂中引（沖曳）船・堅田漁師船」などを建造していたことが知られる。つまり、丸子船を建造できる能力を持った船屋の一つとして、造船の本場とされる堅田（大津市）や対岸の八坂（彦根市）などに得意先を得ていたことは、ひとえにその建造能力の高さを示すものであろう。

のちこの跡を継いだ長男又左衛門が若くして死去されたので、弟の又三郎が三代目としてこの跡を継いだ。現当主又右衛門氏（明治44年生まれ）は尋常小学校を卒業後、つまり昭和2年頃から父又三郎に就いて造船技術を修得し、父や数人の職人と共に造船所を切り盛りしていたが、のちになると弟繁茂も船大工としてこれを手伝うようになった（繁茂は戦時中海軍に応召し戦死）。ところが昭和11年頃、開設以来造船を行っていた地所の買収の話が持ち上がった。結構有利な条件提示なのでこれに応じ、少し北方に位置する北浜の地に船小屋を移し、ここで敷長さ42尺という一〇〇石積「小松丸」（施主は集落の神田三郎、発動機船なので積載量は米220俵程度）を建造した。この船が同所が建造した最後の丸子船。これの建造については、船の用材（杉）は立木を見立てて丸太状で買い付け、この製材はすべて又右衛門氏がマエビキを使って行ったし、機械（エンジン）設置に業者が出向いたもののその据え付け作業は造船所サイドで行ったなどのエピソードを聞くことができる。のち漁船の新造や修理などを手掛けたが、折からの物資統制もあって昭和13年12月ほぼ全国的な造船組織である「日本造船工業組合聯合会」が組織され、その下部組織である「滋賀県木造船工業組合」に所属したが（「竹中弘家文書」）、昭和17年頃になると資材用品の調達に支障を来すようになり、この時期を境に本格的な造船業務を終えてしまった。この後も手漕ぎボートや木造船の修理などを手掛けるこ

を手掛けることもあったが、それらはもはや業務と言うには相応しいものでなかったとされるので、実質的な終焉期を戦時中としておこう。このため新しい船小屋での作業はさほど長い期間ではなかったし、この船小屋も現在ではみることができなくなってしまった。この船小屋解体に際し、用具用品は湖岸から少し離れた自宅脇の作業小屋に移されたが、これらの一部が今回寄贈の対象となった用具用具である。なお寄贈品の明細を一覧表にすると次のようであった。

船又造船所の寄贈明細目録

分類および名称	点数	備 考
1、計測墨付用具		
サシガネ	1	
スミツボ	2	
スミサシ	1	
2、ノコギリ類		
マエビキ	2	
タテビキ (タツビキ)	3	うち柄なし2
ヨコビキ	1	
スリノコ	9	
3、ノミ類		
ツバノミ (曲)	15	(タマリツバ)
ツバノミ (直)	5	(スグツバ)
ツバノミ (小口ツバ)	3	
タタキノミ	1	刃幅5分
	1	刃幅1寸3分
ウチヌキ	1	
4、カンナ類		
ソリダイカンナ	1	
ミゾカンナ	2	(底取りカンナ)
シャクリカンナ	3	
ワキトリカンナ	2	
ヒラカンナ	1	
6、カナヅチ・サイズチ類		
サイズチ	6	
ヨウガネ (クギシメ)	1	
7、槓縄と槓縄入れの用具		
槓縄	1	
サキヤリ	6	
ヤトク	3	
釘ヤトク	2	
カナヤトク	4	(金ヤトク)
ホウコン打ち	1	

8、船釘・カスガイ類		
船釘 (縫釘)	20	3寸~3寸5分
	40	3寸8分
	93	4寸2分~4寸3分
	65	4寸5分~5寸
	124	5寸
	88	5寸8分~6寸
	7	7寸~7寸5分
	2	8寸
	1	1尺2分
カイオレクギ	3	(皆折釘)
カサクギ	9	(笠釘)
ヘリクギ	3	(縁釘)
(頭釘・包み釘)	5	
カスガイ (丸)	4	
カスガイ (角)	23	
ヒラカスガイ	10	(平鏝)
9、金具類		
マルカン	1	
10、造船用具その他		
マルカン打ちのツバ	2	(モジブリ)
ボルトキリ	3	(ギムネ)
ケビキ	2	
ササラ	1	
(不明の竹)	1	
銅板	若干	
道具箱	5	
11、形板・板図など		
追鼻の型板	1	
15、帆関係		
帆柱のセミ	1	
カメ (シャクリ)	3	
帆のカン	2	
17、資料		
(丸子船仕法帳)	1	長帳
舟覚帳 (明治4年)	1	長帳
寸法帳 (明治40年)	1	縦帳
大福帳 (大正13年)	1	半縦帳

(注) 分類は第2章の西田家と共通としたので、欠番は該当品が見られないことを意味する。

第2節 造船の用具用品について

木造船建造の大まかな工程は、製材、乾燥、板取り、組み立て、調整、仕上げなどがある。基本的には他の木工加工に似るが、造船は技術的にも高度な組み立て技法を用いるため、用具用品の種類も多く、造船独自の道具も少なからず見受けられる。以下、中野又右衛門氏から寄贈を受けた用具用品を中心とし、これに第2章の西田正三家所蔵品を少し視野に入れながらごく簡単な解説を加えておこう。寄贈品には含まれないものの、一般的に用途の多いと考えられる用具については各項目の最後にまとめて記述した。なお各項目の「⇒図○」は文末に収録した中野家寄贈品の実測図の番号に相当する。

船又造船所の船材

船材は適材適所といわれるように材の特性を見極めながら使い分けられる。主要な用材は杉・楨・檜・樫など、ほかにアテ・油分を含んだ松を用いることもあった。用具用品の記述に先立って船又造船所の昭和10年頃の用材の概要を聞き書きによって紹介しておこう。

【杉】 主要材である杉は、長年に互って培った山持ちとの付き合いや湖北湖西などの山中の立木の情報に精通した人（トンビなどという）の仲介を受け、これを現地で見立てて買い付け、木挽を雇って製材させた。丸太で仕入れると自身がマエビキを使って製材しなければならなくなる（同所最後の丸子船の杉材の製材はほとんどすべて又右衛門氏の木挽によった）。主な産出地は鴨川上流の高島町畑一帯や比叡山中。杉材はツギテ（板を途中で継ぎ合わせる）を嫌って出来るだけ1材で仕上げようとしたので、「木を買うより道を買え」と言われたほど搬出手段が重要視されたという（一〇〇石積丸子船であれば少なくとも42尺以上の長尺材を必要とした）。のちになるに従って良材はより不便な山中に求めなければならなくなったので、現地で板状に製材して搬出するようになり、さらにのちになると材木商から製材した状態で仕入れるようになっていった。杉のシラタ部は耐水性に乏しいので、基本的には取り除くのが琵琶湖造船の一般的な用法。アカミでも成長が遅く目が詰まった材が好まれる。また多少の節はむしろ船板の減りが少なく、かつ船が丈夫になるといって好んだので、材木商はこれを極力嫌う家大工と振り分けたという。

【楨】 かつての楨の用途は風呂桶か船材であったと言われるように、長年真水に浸っても材質がさほど変化しなかったので琵琶湖を含む内水面では最も良質とされた船材。和歌山県高野山から産出する高野楨を、伏見の間屋や大津の材木商（岡本製材など）を通じて仕入れた。すべての船材に楨を使った「総楨船」は一般的な「総杉船」に比べ船価にすると倍にもなったが、一方では船齢ははるかに長くなったので高級志向の施主が好んだ船とされる。また比較的朽損する率の高い舳板に楨材を用いた「舳板楨船」は船価にすると1～2割増。丸子船はフリカケ・舳板・艦板・芯木などの主要な部分には楨材を用いるのが一般的。高級な材なので多少のツギテは容認されるという。

【檜】 比較的に水に弱い材なので、イクラ（ユクラともいう船梁）・棚板・追鼻などの上部工作（ウワバマワリという）の船材として用いる。材木商を通じて仕入れるが、特に独自の曲がりを持った追鼻の用材は市場に出回ることが少ないので、あらかじめ材木商に頼んでおいて確保させた。時には自身で材木商を回って確保しなければならなかったという。山の斜面などで成長した根に近い所では必然的にこのような曲がりをもった材となるが、船に合った材ともなると確保するのは容易ではなかったとされる。近世の川船などは檜を主な船体材とした船も見られたが、近年これを主な船材とする伝統的な和船は数艘の小型剣先船を見るに過ぎない（防腐材で保護）。

【樫】 放置しておいてシラタ部を腐らせてから使用した。主な用途は強度を要した舵床。材木商を通じて仕入れるが、油気を含んだ松や樫を使うこともあった。

【檜】 舵や櫓の用材。ほかに帆走構造の用材でもあった（ホクソ・ハサミゲタ・セミ、時には小船の帆柱など）。特に櫓材は「シモギ」といって大阪方面で木目に沿ってミカン状に粗割りした状態（ナゲシビキという）で仕入れる。加工を容易にするため、さらにアク抜きや虫害を防ぐため水中に沈めて保管する。舵材の身木はかつて白樫が多かったが、のち機械船が普及するようになると強度を得るため赤樫を主流とさせていったという。十分乾燥させ反りを生じさせたのちこれを加工したのは、製品に仕上げたのちの振れを避けるためである。

1. 設計墨付用具

設計図の作成や板材の墨付けなど主に加工の前工程で用いる用具。特に造船に限定されたものは少ないが、

計測にはサシガネ・折れ尺・直定規・ジュウガネ・ケンザオ、墨付けとしてスミツボ・スミサシ・ワリズミサシ、円を描くブンマワシ・デバイダー・コンパス、アールを描くシナイ、水平を出すザケフや水平器など実に多くの用具を用いる。自身が工夫した用具も結構多いという。造船採寸は曲尺。

サシガネ ステンレス製。計測・作図・型取りなど建造のほとんどの工程に用いる。サシガネは長さ・直角・勾配の計測のほか、2丁を組合わせ工夫することで、かなり高度な比率算出もできるので、これの使用法は船大工の必須技能ともされる。ほかに細部を計測するため一片を短く切断したり、マキガネ（建具職が多く使う小型のサシガネ）を準備することもある。いずれも市売品。⇒図1

スミツボ 板図の作成や船材の墨付けに用いる。スミサシとは一対のもの。直線に墨を付ける時、滑車の糸を伸ばし指でつまんで板に弾くが、墨を付けた糸をよじて板に弾くことで自然な曲線を描くことができる（これを「墨を放る」といい、シキ両端のアールなどを描く）。墨を放るには微妙な感覚が必要なので、思い通りのアールを描くにはそれなりの経験が必要とされる。以前は自作したが、のち市売品が中心。⇒図2・図3

スミサシ 竹製。板図の作成や船材の墨付けのほかに、文字・記号などの記入に用いるので現場での筆記用具でもある。船大工が用いるスミサシは皮の部分を外側して製作するため、家大工とは逆向きに拵えられるので形状も少し違いを見せる。もともと自作したが、のち市売品が出回るようになり、特に区別が見られなくなった。⇒図4

その他 ジュウガネ（クセガネともいう）は一点を支点として自由に角度を変えることのできる斜角定規。木製が多いがのちになるとステンレス製も出回るようになった。ブンマワシは木製の大型コンパス、軸に刻まれた幾つかの目盛りにスミサシを添わせることで描く円の大きさを変えることができる。ケンザオ（間竿）は各船屋が比較的丈夫な角材に必要な目盛りを適時に刻み込んで用いる長さ1～2間程度の木製の棹（船によって違った目盛りのケンザオを準備することもある）。墨付け用具として硯や細筆、のちになると鉛筆などを用いることもある。

2, ノコギリおよび目立て用具

木材を加工する工程は基本的には他の木工加工と同

じなので、ノコギリの多くはごく一般的な大工道具と共通する。このうち造船独特とされるノコギリにスリノコがあり、ヒキマワシ・ハメヒキノコなども使用頻度の高いノコギリ。目立て用具も必需品。

昭和初期の船又造船所では月1～2回程度若狭方面（敦賀か）から業者が訪問したので、ここで発注購入することが多かった。ノコギリ類は三木地方の製品が多かったが、マエビキは甲賀郡内で鍛造した製品。

マエビキ（マエビキノコ） 丸太を縦に製材する大型の木挽ノコ。形状からタイノコなどと呼ばれることもある。かつては杉材は丸太で買い付け、このマエビキを使って自身で製材することもあったので必需品の一つ。とは言ってもその多くは木挽職人を雇ったし、のちになると材木商が製材し板状で持ち込んだので、時代を経るに従って使用する頻度が低くなっていった。⇒図5・図6

タテビキ（タツビキノコ） 木材の繊維を縦断して挽く縦挽き用のノコギリ。一般的な用途のほかに、擦り合わせの粗目用として用いることもある。製材された杉の船材のシラタの部分（板についているシラタは一方だけの場合をソバ、両側にある場合をリョウソバという）を挽き落とすなど用途も多い。⇒図7・図8

ヨコビキ 材木の繊維を横断して挽く横挽き用のノコギリ。⇒図9

スリノコ 矧ぎ合わす板を寄せ合わせカスガイなどで仮固定したのち、この間を擦り合わせるノコギリ。擦り合わせることで板間の透き間を無くし、より密着させることができる。スリノコは目の粗細により数種類があり、最初は粗く次第に目の細かいものに代えて数回擦り合わせる。複雑に入り組む箇所には細身のヒキマワシノコを用いることもある。⇒図10～16

擦り合わせ工程は木造船建造の基本技法であるが、琵琶湖では外海に比べ比較的この工程を簡素化し、板間に槓縄を多く打ち込むことで塗止め効果を得ようとする傾向がみられる。これは県内ではほとんどと言ってよいほど、淡水による塗止めの悪さによるものと理解されている。しかし、県内でも大阪方面の系譜を受けた船大工は、擦り合わせを丁重に行い木口を殺すことで塗止め効果を得た船を造るし（網打ち船）、保津川筋や長良川筋などの川船は専らこの方法が中心であったとされるので、一概に淡水の説明だけでは片付けられない。琵琶湖での一般的な造船に対する考え方の違いに由来しよう。

その他 ヒキマワシは細身で、板の取り替え修理時の

切り取りや細部の擦り合わせなど用途の多いノコギリ、ハメヒキ（畦引きノコ）は溝を挽いたり、板の接合面の上に銅板を貼る時、その一端を差し込めるように切り込むなど比較的使用の多いノコギリ。

かつてノコギリの目立て、アサリ出しは船大工が行うものとされたので、これらの用具も結構多い。例えば、各自が作るノコギリの挟み板、購入品であるメタテヤスリ・アサリツチなどがある。ただのちになるとこれを専門に行う業者に頼むことが多くなるのは一般的な傾向。メタテヤスリは薄手の銅板の切断に用いることもある。

3. ノミ（鑿）

ノミは釘穴を刻んだり、ホゾの組み合わせ部の加工、舵穴や生簀穴を穿つなど多様な使い方がされる。造船独自のノミの一つにツバノミがある。

ツバノミ ツバノミは地金と鋼を鍛接し返し部をもったノミ。曲直の二種類があり、いずれも船釘を打ち込む仮穴を空けるのに用いる。ツバノミを使う工程は特に技術が必要とされ、かなりの経験を積まないとこの工程を任せて貰えなかったという。

曲はタマリツバといい、敷板や舳板などほぼ並列に近い取り付け方の板の矧ぎ合わせに用いるツバノミ。マガリツバ、カゴミツバともいう。まず2枚の板を寄せ合わせて墨付し、ハギ板に釘穴を切ったのちツバノミの頭の部分を叩いて打ち込み、反しの部分を逆に叩いて抜くことで、ハギ板3分の1、地板3の2程度の仮穴を空ける。このように導入穴を空けることで、船釘打ち込みによる板割や船釘が板からはみ出すことを防ぐことができる。釘の大きさや曲がりによって大小数種を使い分ける。⇒図17～31

直はスグツバといい、主に敷板と側板、側板と棚など直角に近い取り付けをした箇所の釘穴を空けるのに用いるツバノミ。使用法は基本的には曲とほぼ同じ。これも釘の大きさによって大小を使い分ける。⇒図32・33・35～37

コグチツバは刃の取り付け角度を90度離れたスグツバ。スグツバで板の小口に釘穴を切ると板割れを起こすので、板目に逆らうように切ることでこれを防ぐことのできる。⇒図34・38・39

ツバノミは鍛造が悪いと、打ち込んだり、抜いたりする工程で折れることも多いし、また曲がり具合によっては余分な力を加えなければ打ち込めないで、特に鍛造先を吟味した用具の一つ。それでも折れること

の多い用具なので、ナオシ（鍛冶屋に持ち込んで鍛接し直す）も結構多く聞き取れるし、その史料も散見できる。これらのツバノミは船大工道具や船釘・船具を多く手掛けていた鍛冶屋に注文する。県下で最も知られた鍛冶屋の一つに大津市真野の「かじ五」がある（代々続いた野鍛冶で、造船具を手掛けるようになったのは明治中期以降とされる。通称ヘキさん）。この鍛冶屋に寸法を指定すると、それに応じた曲がり具合を微妙に調節して造ってくれたといい、大正以降では船大工間で最も信頼を得た鍛冶屋として、造船の本場今堅田を中心に湖西・湖南・湖東一帯に多くの得意先を得ていたという。このほか長浜・近江八幡など湖辺各地に10軒程度の鍛造所を確認しているが、いずれも近隣一帯の船屋を得意先にしたに過ぎない。また彦根市では小規模ながら造船の傍ら船具を鍛造する船屋もあった。船又造船所では船釘・船具を含む鍛造品の多くを、小松の鍛冶屋や北比良の野鍛冶「武兵衛」などで造らせたという。九郎左衛門は前出「かじ五」。

琵琶湖一円のツバノミは元々は木柄が付かないものであったが、使い古すと頭部がチビって（摩滅して笠様になる）持った手に当たるようになるので、大阪方面から入るようになった柄付を真似るようになっていった。ただ長年の慣習によるものか、なお木柄の付かないタイプを好む船大工も多い。また県下で柄の付かないツバノミを目にすればまず県内鍛造と見做してほぼ間違いはないという。

タタキノミ 比較的深く彫る時に用いるノミ。頭部をサイズチヤカナズチなどで叩いて孔や穴を穿つので、刃を厚く仕上げ柄の部分は短く柄頭に鉄環をはめ込む。刃巾は1寸・2寸などがあるが、このうち1寸2分巾（寸二という）は釘目を切るなど最も使用頻度が高いノミ。形状によって追込れノミ・向こうまちノミなどがある。⇒図40・41

その他 ヒラノミは刃厚を薄く仕上げられた削り仕上げ用の突きノミ。銅板を貼る溝の浚えのほか、埋木の製作、竹製品の加工用としての用途も多い。比較的よく用いるマルノミは、イケス穴や舵穴を穿つ刃先の丸いノミ。当然、カンナを含め砥石を必需品とするのはいふまでもない。かつて職人は手が透くと専ら研ぎ作業で時間を費やしたという。ウチヌキはツバノミで仮穴、キリなどで穴を空けたのち、木屑を取り除くために通すノミ。県内での使用頻度はさほど多くない。

4, カンナ (鉋)

カンナは頻度こそ違え家大工と共通することの多い道具である。ただ船は木材を微妙な曲線を持って集合させることが多いことより、多くの形状を持ったカンナを使い分ける。船又造船所ではかつてはカンナ台を作ったこともあったが刃は業者からの仕入れ、のちになると完成品を専門業者から購入するようになった。ソリダイカンナ 曲面の内側を削るのに用いるカンナ。丸味を持った内面はこのように曲面を持った台でなければ容易に削ることができない。曲がり具合によって大小各種がある。ヒラカンナの台座を削り込めば容易に必要な反りを持ったカンナを作ることができ、かつてはこの台を作る専用の小型のソリダイカンナもあった。⇒図44

ミゾカンナ (底取りカンナ) 幅狭の溝の底取りカンナ。均一の溝を浚えるのに欠くことができない。銅板は矧ぎ合わされた板に均等に掛かるように7分～9分幅、深さ0.12ミリ程度に薄く削り込みこの上に船釘を保護する意味で銅板を張るが、この溝を浚えるにはミゾカンナは必需品。⇒図42・43

シャクリカンナ 溝突き工作に用いるミゾカンナで、縁からの幅を調整することができる。⇒図45・46

ワキトリカンナ 銅板を貼る箇所などを薄く浚える時などに用いる一方だけ削ることができるカンナ。ノコギリで切り込まれた端部を直角に削り取ることができる。右用と左用があり必要に応じて使い分ける。⇒図48～50

ヒラカンナ 材木全般を削るのに用いるごく一般的なカンナ。使用箇所によって幅1寸2分～4分程度の各種を用いる。4分・6分・8分巾の使用頻度が高い。特に長い台を持ったカンナを長台といい、長い面を平らに削り込むには不可欠。⇒図47

その他 比較的によく用いるのがマルカンナ。これにはイケス穴や舵穴などの内面を削るデマルカンナ、板の上端を面取りするウチマルカンナがある。小さな穴を削るデマルカンナには長い柄を取り付けることも多い。

5, 斧・手斧

船大工は手斧(チョンノ・チョンナという)を使う頻度が高く、これをうまく使いこなすことでのちのカンナ掛けの作業を大幅に短縮できる。船大工の中には手斧をうまく使うことを自慢する者もあったし、名手と語り伝えられる職人もいる。造船で用いる手斧は刃幅が狭く長いことに特徴が見られ、家大工用とは少し

形状を違える。柄はエンジの生木を縄で縛って形を整えたのち屋根裏などで長期間乾燥させて自作した。取り付け角度などもあってなかなか手に合ったものが得られないという。一般的な斧・ナタはさほど多く用いない。

6, サイズチ・カナズチなど

サイズチ かつて船釘や檣縄の打ち込み作業は、打面の両端に金輪をはめ込んだ木製のサイズチを用いた。作業効率ではカナズチが勝るものの、釘の締め具合は打ち込んだ反動が大きい分サイズチが勝るといふ。効率の兼ね合いがある。大型の丸子船の敷板には1尺以上の縫釘を用いることもあったが、この場合には2人一組となり、1人がヤットコなどで釘を挟み、1人がサイズチで叩いて打ち込まなければならなかった。当然、小さな釘の打ち込みや檣縄込めの作業はさほど大きなものを必要としなかったので大小各種がある。いずれも自作品。船又造船所のサイズチの中に大きなものが見られるのは、かつて大きな船を手掛けた証しでもある。⇒図51～56

カナズチ なお造船に用いるカナズチは打ち込むときの振れを防ぐため、一端が軽く仕上げられている。かつてはサイズチを主に用いていたが、のちになると作業が早いためかカナズチが主流を占めるようになっていった。カナズチは重さを指定し業者を通じて購入する。ゲンノウはさほど用いない。

ヨウガネ (クギシメ) 船釘はある程度打ち込むと釘頭にヨウガネ(クギシメ)を当てこの上からカナズチなどで叩いて釘を締めつける。摩滅が激しいので鋼製。ツバノミと同じく船具を手掛ける鍛冶屋で鍛造させる。⇒図57

その他 檣縄を柔らかくさせるヨコズチ(木槌)、船体を固定させたり板材を曲げるためのカイモノ(突っ張り材)を打ち込んだり、ボゾ加工部を組み合わせに用いるカケヤ。さらにボール、解体した船の釘抜きなども必需品。

7, 檣縄と檣縄入れの用具

船の建造過程で最も重要視される工程の一つに矧ぎ合わせた板の間の塗止めがある。外海ではハウコン(マニラ麻から製作した油分を含んだ繊維質)、淡水の河川湖沼では檣縄のほかにマキハダ(檜の皮を縄状に編む)を入れたり、東北・北海道などの外海では接合面に漆を塗ることで塗止めとする船もある。また擦り

合わせたのち木口を叩き木殺しすることで塗止め効果を得た地域ある。

槓縄 県下では船釘で矧ぎ合わせた船板の間すべてに、塗止めとして槓縄が埋め込まれる。槓縄とは槓の鬼皮を取り除いたアマ皮を蒸しこれを解して縄状に編んだもので、主に和歌山地方の業者が製造したものを問屋を通じて仕入れる。使用直前の槓縄は乾燥していることも多いので、少し水分を与え数把単位にして藁や縄で巻いたのち、この上からヨコツチなどで軽く数多く叩くことで柔らかくさせたが、婦女子や子供が手や足で揉むなど、造船所によって様々な方法が聞き取れる。矧ぎ合わされ船釘で縫い合わされた船板の間(スジヤミチという)にサキヤリを通して船板の隙間を広げ、ここに槓縄を入れこの上からヤトクを当てサイズチなどで叩いて順に充填していく。この作業を「槓縄を込める」「槓縄をかう」などといい、一定のリズムで連続して打ち込まれる作業。槓縄の入り具合は音で判断されたためかなり熟練を要したといい、造船全体の作業の中に占める割合は以外と大きい。

槓縄は敷であれば板厚5分に1本の割合を基準とし、小船であれば1筋に対して少なくとも3本を込めるのが一般的(外面から2本、内面から1本。2本であれば最初は半分に解して込め、のち半分さらに1本のまま入れるのが一般)。ただ板厚によって違うのは当然としても、造船所によって独自の感覚が見られたし、船型によっても本数や入れ方に違いが見られるという。例えば、丁重に行うことで特徴を持たせようとしたり、簡素化することで価格面で優位に立とうとする造船所もあったが、いずれにしてもごく一部の船を除けば省略することはまずない。船又造船所では大量であれば和歌山産を大津の問屋を通じて仕入れたが、かつては近在の小間物屋などで結構取り扱っていたという。

サキヤリ 槓縄込めに先立って矧ぎ合わせた板の間に打ち込むことで隙間を広げる竹製のヘラ。先端を丸く薄く仕上げ長さを持つ。各自が必要に応じて作るが、煤竹で作ると摩滅が少なく長持ちするし、油焼きすることで硬度を求める職人もあった。使用に際してはヤトクと一対で用いる用具。滑りを良くするため先端に少し種油(空き缶に入れた布に含ませる)を付けながら作業を行うこともある。このサキヤリの工程は接合面の木殺しを兼ねる作業でもある。⇒図58～60、図113は手で通すタイプか

ヤトク 先端を薄く、斜めに仕上げたヘラ状の竹製品。

板の接合面の上に槓縄を入れると、この上にヤトクを当てカナヅチなどで打ち込んでいく。槓縄の入り具合は音で判断されるので竹製を最良とするが、そのぶん消耗も激しいので、作業中に頻繁に先端を削り込んで状態を保持しようとするし、予備として常に数多くの製品を準備しておく。いずれもサキヤリと同様で自作品。⇒図61～63

釘ヤトク ヤトクの種類で、隅などの細部の作業には釘ヤトクといって鋼製の船釘状を用いる。船材に大きな節があると釘ヤトクで潰したのち、ここに槓縄を埋め込むことで浸水を防ぐこともある。部分的であれば船釘を代用することもある。⇒図64・65

カナヤトク(金ヤトク) 薄くヘラ状に仕上げた鍛造品のヤトク。槓縄の入り具合はヤトクが勝ったので、船内に水が溜まった状態の槓縄補充など特定の用途に用いるに過ぎない。⇒図66～69

ホウコン打ち カナヤトクの種類。先端を薄く丸く仕上げたことに特徴が見られる。主に洋船構造の船のデッキなどにホウコンを込める作業に用いるとされ、県内では比較的使用例は少ない。⇒図70

8. 船釘・カスガイ

造船に用いる釘を総称して船釘という。船釘には縫釘のほか、頭釘・皆折釘・笠釘・銅笠釘・縁釘・アイクギ・包釘・銅丸釘・小鋌釘など様々な形状を持つ釘があり、近世の造船史料には造船経験者に問い合わせても姿さえ思い浮かばないとする釘類も少なからず見受けられる。

船釘は一般的には板厚の3倍の長さが用いられ(敷板の縫い合わせの場合)、単位としては「連・アミ・寸法」があった。連とは主に近世にみられる造船鍛造品の単位で、40匁を一連としこれから取れる本数。4本ならば四本掛かり(1本当たり100匁に相当)、また30本であれば30アミ、50本では50アミなどと表記した(「木村忠之家文書」)。アミは大正期の今堅田の造船資料にも散見できるし、大津では戦前まで製造所との取り引き単位として用いられていたことが知られる。なお戦前の大津では単位と寸法の関係を、60アミ(3寸)・50アミ(3寸5分～4寸)・40アミ(4寸5分～5寸)・30アミ(6寸～6寸5分)・20アミ(7寸～8寸)とある(「竹中弘家文書」)。のちになるとすべて長さ(寸尺)を単位とするようになっていった。

船釘(縫釘) 縫釘・落とし釘ともいい、船板を縫い

合わせるのに用いる釘で、箇所によって長さを違える。例えば船板2寸厚では「敷釘30アミ・腰釘40アミ・舳板釘50～60アミ・棚釘」（「仲野愛規家文書」）と長さを違えるものの形状はほぼ同じ。またこれらの船釘の割合を小丸子船で見ると「敷釘150本、重木ふりかけ180本、舳板釘192本、たな釘120本、鱧釘40本、その他52本、合計734本」（「西田正三家文書」）。縫釘は錆びが釘の利きを増すとって、数本に1本古釘を用いるのが一般的。近世以降ナオシ釘（解体した際に抜いた古釘を再生させる）の史料も結構多く目にする事ができる。大津や真野の鍛冶屋など県下に10数軒の製造所を確認しているが、船又造船所では北比良の野鍛冶「武兵衛」などで造らせた。⇒図71～77

船釘は江州独自の発展をみたとされる「江州釘」と外海系の「大阪釘」に大別される。江州釘は全て手打造りで、外海系に比べて身幅が狭く厚手に仕上げることに特徴がみられる（琵琶湖の船が比較的厚板構造で仕上げられることによる）。しかし、戦中の統制により日本船舶金物統制株式会社を通じて配給されるようになり、戦後になると大阪などで機械打ちで仕上げるようになると、単面的にも大きな差が生じるようになり、江州釘の見本を大阪に持ち込んでこれに似せた船釘を造らせるようになっていった。琵琶湖の造船が衰退すると、ほとんどこれらの地域に依存するようになっていった。この意味でも船又造船所の船釘は比較的琵琶湖特有の形状を持った船釘とすることができようか。

カイオレクギ（皆折釘） 釘の頭部を大きく薄く仕上げた船釘。直角に取り付いた板を止める棚釘・腰釘として用いることが多い。⇒図78～81

カサクギ（笠釘） 釘頭を笠状に仕上げた船釘（カヨリ釘ともいう）。この両端を折り曲げ、これを直接船板に打ち込むことで釘の緩むのを防いだ。直角に近い取り付け部の船釘として使用されるが、特にオガミアワセとした船（芯を持たず側板を直接寄せ集めて舳を構成する）の船首部の固定にはこの釘が不可欠という。⇒図82・83

縁釘（ヘリクギ） 補強するために取り付けられた鉄帯の縁に数多く打ち込むことで固定するL字型の小釘。巻鉄釘ともいう。鉄帯は舳板船の追鼻とシンの間に巻いて開かないようにしたり、取り付けたいクラ（船梁）や上鱧板の補強などに用いる。⇒図84・85

その他の船釘 頭釘（カシラクギ、アラレともいう）は丸子船のシンの先端を保護するため打ち込む四角の大きな頭を持つ釘。銅鉾釘は銅板を止める銅製の小釘。

座金などを固定する包釘。アイクギは8割程度で両端に尖りを持った角釘で、舵のテイタ（底板）を固定するなど用いる。

カスガイ 両方に爪のある鉄製品で接合する船板の仮止めなどに用いる。大小があり、形状にも丸角、足の長いワカスガイなどがある。これらを用途によって使い分けるが、打ち込み足の開き具合も重視される。⇒図87～94

ヒラカスガイ（平鏝） 打ち込み足を持った板状のカスガイ。かつて舳板を補強するため表面から現在のダテカスガイに相当する大きさのヒラカスガイを打ち込んでいたが、のちになるとこのカスガイを内側から打ち込むようになった（のちになるとこれも省略する）。琵琶湖独自の船の紋様であるダテカスガイはかつてのヒラカスガイの名残と考えられる。⇒図95～98

9. 造船金具

船にはマルカン・エビカン・カケガネなど、実に多くの金具を取り付けるが、いずれも船釘と同じく鍛冶屋で造らせる。

マルカン 打ち込み足を持った環（ウチコミカンともいう）。ハヤオの一端を結ぶハヤノカン、綱をくり付けるマルカンなど様々な用途を得て打ち込まれる。用途によって大中小各種がある。⇒図103

その他 エビカンは帆綱などを引っかける海老の形状をした打ち込みカン。カケガネは船縁上に差し込む差板（垣板、メイタ、ヘギなどともいう）を内側から止める金具、これを受けるカケガネのツボとは一対。丸子船の笠木を倒壊しないように固定するヒカエガネ。櫓の継ぎ合わせ部やカメを固定する金輪などもある。船釘を保護するため矧ぎ合わせた板に均等に掛かるように張る銅板（赤板という）も金具の一つであろう（比較的大きな漁船などは矧ぎ合わせた板の両面に張ることもある）。

10. 造船用具その他

前述のほかに造船に必要な用具として、作業台から穴を穿つキリ関係まで多くがあつて、具体的な名称を列記するのに苦勞するほどである。ここでは中野家寄贈品に限った解説に限定しておこう。

マルカン打ちのツバ（モジブリ） マルカンや櫓杭などの打ち込み足の穴をもむ時、柄の中央の穴に四ツ目のキリのような刃先を取り付け、両手で回して仮穴を空ける。⇒図104・105

ボルトギリ (ギムネ) 穴を空けるのに用いる手動のラセンギリ。ギムネとも呼ばれ、先端はネジ、軸には螺旋が切られている。頭部のタイコ (丸穴) にハンドルを差し込み、両手で回して穴を空ける。⇒図106・107

ケビキ 板の縁より一定の幅で罫を引くことのできる用具。薄い板であれば切ることもでき、コミセンをはずすことで幅が調節できる。市売品を購入するがかつては自作したこともあったという。⇒図108・109

ササラ 主な用途は横縄を入れ終えたのち、この上を掃いて仕上げるほか、手ホウキとして使用するなど結構用途も多い。⇒図112

道具箱 各人の道具 (ノミ・カンナ・ノコギリなど) 一式を入れる木製の道具箱。各々が自身専用の箱を自作する。ほかに形状や寸法別の船釘を入れる釘箱や釘袋など、必要に応じ随時製作準備する。

その他 板の仮止めや修理時に船を締めつけるマンリキやハタガネも使用頻度の多い用具。

11. 型板・板図など

琵琶湖の木造船は船型によってある程度構造が決まるが、地域や施主によっては微妙な違いを見せるものである。そこで船屋ではこれらの取り付けの角度などを地域の船別・部署別、時には施主別に型板にして残すことが多い。これらは作業効率を高めるほかに、次の注文のノウハウとして活かされ得意先の管理にもつながるのである。

建造に際して端板に描かれる板図は県下9造船所で確認している。その多くは船の主要な部分を簡単な図や数値で表すとどめたり、これらを板片や手帳・ノート・紙片にメモすることで済ますことも多い。これらは後の注文の控えとして活かされるが、造船所によって採録する箇所や呼称に違いを見ることが多いので、資料を比較検討する上での障害となっている。比較の数多く手掛ける小船は、経験則によって造ることも多いのでむしろこのような図を準備しないものである。

追鼻 (オイバナ) の型 琵琶湖の木造船の多くは舳板造りといって、数枚の板を斜めに取り付けることで船首部を構成するが、この板の倒壊を防ぎ、かつ補強するためこの上に取り付ける板を追鼻という。舳板はハリ (少し丸みを持たせる) を持たせるので、必然的に微妙な曲がりを持たざるを得なくなる (南浜船は例外的)。ためにあらかじめ船の大きさに合わせた原寸大の型板を作り、これに合わせて取り付けようになる (ある程度型板に合わせた材を準備しないと、板の口

スが大きくなってしまう)。現存する船の追鼻が微妙な違いを見せるのは、それだけ入手が困難であったことを意味しようか。

その他 型板にはタチ型 (水圧から船底を守るための敷板左右の反りの角度、これを多く取ると船のローリングが多くなるが、一方では船足が軽く仕上がる)、ヒラキの型 (敷板とオモギの取り付けの角度、少し上口開きになる)、釘打ちの型 (ツバノミや船釘を打ち込む時に、釘がはみ出さないようにこれを当て打ち込みの角度を確認する。今堅田では地域・船型・箇所別に17を保管する造船所もあるし、かつては50以上を所蔵していたこともあったという)、ツナククリの型 (舳板内部に取り付ける鳥居型の板、田船などではここに綱を結んで船を係留させたり、曳船の棹当て、さらにこの内部を弁当や衣装などの置き場とする)、前述の船型別の追鼻の型などがあるが、さらに水替え具であるアカトリなども各部を型板にするし、芯木に付けられる装飾紋様マキサガリ (サバノオともいう) なども型紙にして保管することもある。造船所は基本的な型板から作業効率を高めるための型板まで、実に多く準備することで造船に備えるのである。

以下、12~17までは特に造船の用具用具という訳ではないが、造船所が手掛ける木造船の備品について少し解説を付け加えておこう。

12. 推進具関係

推進具としては帆のほかに櫓・棹・櫂、のちになるとエンジンを搭載するようになった。

櫓 櫓はシタ・ウデ・ツク・カメで構成される継櫓。シタとウデをコゴミとって少し角度を持たせて接合させたのち金輪 (3カ所が標準) で固定し、握り部のツク、櫓の支点となるカメを取り付ける。船の艫部に打ち込んだ櫓釘 (櫓杭ともいう) にカメを乗せることで操作する。内湖や水路では軽く水に浮く檜製、琵琶湖では強度のある桤製を用いるのが一般的。時折琵琶湖に出ることのある内湖の漁師などは、櫓と桤の櫓を使い分けなければ事故に遭遇してしまうという。櫓は推進具のほかに、小船に限れば船縁に取り付けることで代用舵とすることもあった (これを舵櫓という)。

櫓は原則的には各造船所が製作するが、今堅田には櫓を専門に造る櫓屋があった。造船が盛んであった今堅田にあってこそ成り立った船屋であろうが、大正期以降は一時代1軒程度を確認するに過ぎない。またその多くは桤櫓とされるので、製作に独自の技術を要し

たほかには櫓材確保の問題もあったのかも知れない。櫓材は専ら各造船所で製作したが、現存する何割かは素人の製作した櫓である。

棹 水路などでの主要な推進具で、船の大小を問わず必需品の一つ。瀬田川下流など岩場が多く水流の激しい水域では、専ら先端に木片を差し込んだ棹を用いる。ただこれらはいずれも各々の船持ちが準備するので、船大工が手掛けることはまずない。

櫂 かつて湖中や河川で盛んに用いられた推進具。かつては船大工が製作したと伝えられるが、近年ではその数もさほど多く目にするのができなくなっているし、和船における使用例は皆無に近い。

13. 舵

琵琶湖の帆走船の舵は外海系の長舵。一材の櫓材を頭部を四角、首部を丸く（丸口という）、薄く削り込んだ身木にテイタ（底板、楫を中心とするが杉もある）を取り付け、両面から棧で固定する。船の大小によって長さを違えるのは当然としても、船型によって少し形状を違える（丸子船に限れば舵の長さは敷長さのおよそ3分の1程度か）。機械船になると少し短くテイタを大きく丸く仕上げる傾向にあったし、前述のように櫓を代用とすることもあった。のち鉄製の舵が普及するが、木製に限ればいずれも各造船所が製作する。

ほかにはカジツカ（舵柄）も舵の一部。船のドウノマで操作するため長短のほか、二つ折れに仕立てたものもある。大きな舵ともなると深さを変えたり、舵を引き上げを容易にするため、舵上部に滑車（ヤジグルマという）を埋め込むが、大概是綱を通す穴が空けられるに過ぎない。

14. 碇

かつて碇には木製碇、これに石などを抱かせた木製四爪碇、木と鉄を組み合わせた碇、二爪鉄碇、四爪鉄碇などがあった。琵琶湖の鉄製四爪碇は貞享2年（1685）の史料が初見（「観音寺文書」）、戦前でも内湖などでは木製碇が用いられていたことが明らかなので、水域によって使い分けるのが碇の通念。なお田船などの小船は綱クりに綱を結び付けることで繫留させるので元々碇を積む慣習がないし、近年のFRP漁船などはもはや船を係留させるための碇を積む船はほとんど見られなくなっている。一方、湖辺農家であれば、鉄碇2丁を必要な岸に置き綱で船の前後と結ぶことで、船を寄せたり積み降ろし作業中の船を固定させ

ていたので（「土手持たせ」という）、碇の用途はなにも湖中に限ったものではないのである。

木製の碇は船大工が造ったというが、鉄碇などは直接携わることはなく、せいぜい仲介をするに過ぎない。これらの碇はかつては野鍛冶が手掛けるものであったが、近年では網碇を流用したり、船具店から直接購入するようになった。また近年目にするのできる碇の中には、湖中で綱に引っ掛かったする拾得品も決して少なくない。

15. 帆関係

かつて琵琶湖を航行する船は基本的には帆船で、近世では荷船は筵帆、渡船などの旅客船は帆布と使い分けられていたとある（『大津市史』）。近世中期の二〇石積程度の丸子船の帆は、なお6反45枚の筵帆であったが（「木村忠之家文書」）、のちになると帆布を中心とさせていった。琵琶湖を代表する丸子船に動力エンジンが搭載されるようになったのは大正10年以降のことである。さらに小船ともなると戦後でも帆走する船が多く見られ、田船の中には台形の帆を立てて貝曳き漁を行い、今なお当時の帆布を残す地域もある。また戦後でも棹に筵やコザ1枚を取り付けることで、櫓漕を補った小型や中型船も結構多かったので、帆を帆布と言い切ってしまう訳にはいかない。

帆柱のセミ 帆柱の先端にはめ込むように取り付けられる木製の滑車。「セミ」「セビ」とも呼ばれるが、形状から「蟬」「蟬型」の字が当てられることもある。上端の穴にハズラを通したのち帆柱を立て船首部分からロープで固定する。セミの中央の滑車にミズナワを通し、この一端に上貫桁（帆布の上に取り付ける横棒）の中央に取り付け、一端を引くことで帆布を上げることができる。セミはかつては船大工が製作したのであろうが、現在みられる製品の多くは大阪・敦賀などの業者からの購入品とされる。

カメ（シャクリ） 帆柱の先端にロープなどで結び付けることで取り付けられた滑車。のちになると金属・プラスチック製なども出現するようになった。このカメは荷物を移動させる時、綱の中間に取り付けて索引具として用いられることもある。これもかつては船大工が製作したと伝えられ、造船資料の中にも時折散見できる。

帆のカン 帆綱の中間に取り付ける滑車。⇒図110・111

その他 帆柱やそれを受ける帆走施設であるホクソ（帆沓）やハサミゲタ（挟桁）、帆綱、船縁に吊すこと

で船の横流れを防ぐキリカジも必需品。かつて内湖で用いた船の中には脱着式の帆走構造を持った農用船があった。平素は取り外すことで船内を広有効に利用できるし、これを取り付けることで湖上を帆走することが可能となる。帆布・帆綱などは船持ちが準備するのが一般的な慣習。

16. 船の備品

船大工が準備する備品にはツキオケ、ミザラ、垣板、櫓枕、櫓の踏台などがある。

ツキオケは県下ではアカトリ・ゴイ・ツクミ・ツイガワなど少なくとも10以上の名称で呼ばれることが確認できる木製の船の水替え具。柄付きと手持ちタイプがある。

ミザラは船内に敷くことで船底を平らにする付属品。垣板はサシタ・メイタ・ヘギともいい、船縁上に差し込むと内側からカケガネで固定することで波が入るのを防ぐ備品。設備として取り付けた船もあるし、必要に応じて差し込む形式もあった。櫓枕(ロマクラ)は常設した櫓座を増すための取り付け施設。櫓の踏台はこれに乗ることで櫓漕の労力を軽減させる台。

かつて帆走時代には炊事道具一式・寝具・食料や調味料(米・味噌・醤油など)を積むものであったし、船の売買史料の中には実に多くの備品が記載される。

17. 資料

造船資料としては、手掛けた船の控えでもある「船覚帳」「船寸法帳」、修理や購入品など諸々をメモした「大福帳」、造船の木割法ともいべき基本的な寸法を記した「船仕法帳」などがある。現在これらの資料は県下では造船に携わった11軒程度で確認しているが、

前出の板図などもこれに類するものであろう。ただ前出のようにこれらの資料も造船所によって採録の項目を違えたり、各部の呼称を違えることもあるので、比較資料としての価値を少し下げる。

以下、船又造船所寄贈の資料には次のようなものがある。

丸子船仕法帳(仮称) 一〇石積～四〇〇石積までの各丸子船の仕法を記した長帳。その記述は各部の寸法から造船手間、さらに割り付けの算出法にまで及ぶ。つまり、一種の木割り法とも呼ぶべきもので、これを算出するための計算式があったと考えられるもののその定式を提示するに至っていない。表紙が欠損しているので記載年代は明らかではないが、奥書に「船屋大工又治郎」とあることから、明治初年頃の書写と考えておきたい。丸子船を研究する第一級の資料であろう。

舟覚帳 又治郎によって記された明治4年9月起の船寸法帳。内容は「たかしま船・はこ船・七石舟・大みと船(大溝船)・三〇石船・五〇石船・六〇石船・四〇石船・一五〇石船・二〇〇石船・一五石船・四〇石船・中間船・一五石船・一〇〇石船・中船・中船」の寸法などが記される。

寸法帳 明治40年4月起の寸法帳。一〇〇石積・八〇石積・四〇石積・七石積などの丸子船のほかに、小松イサザ船・小松網船などの記載が見られる。当時丸子船を中心に建造していたことが知られる。

大福帳 大正13年起の造船や修理などの手控え。価格やそれに要した手間、その他が日記調に記され、むしろ和船研究の基礎資料として注目したい。

(文責/杉立繁雄, 実測/大沼芳幸・大沼直子・中川ステ・小林貴子)

図1 サシガネ

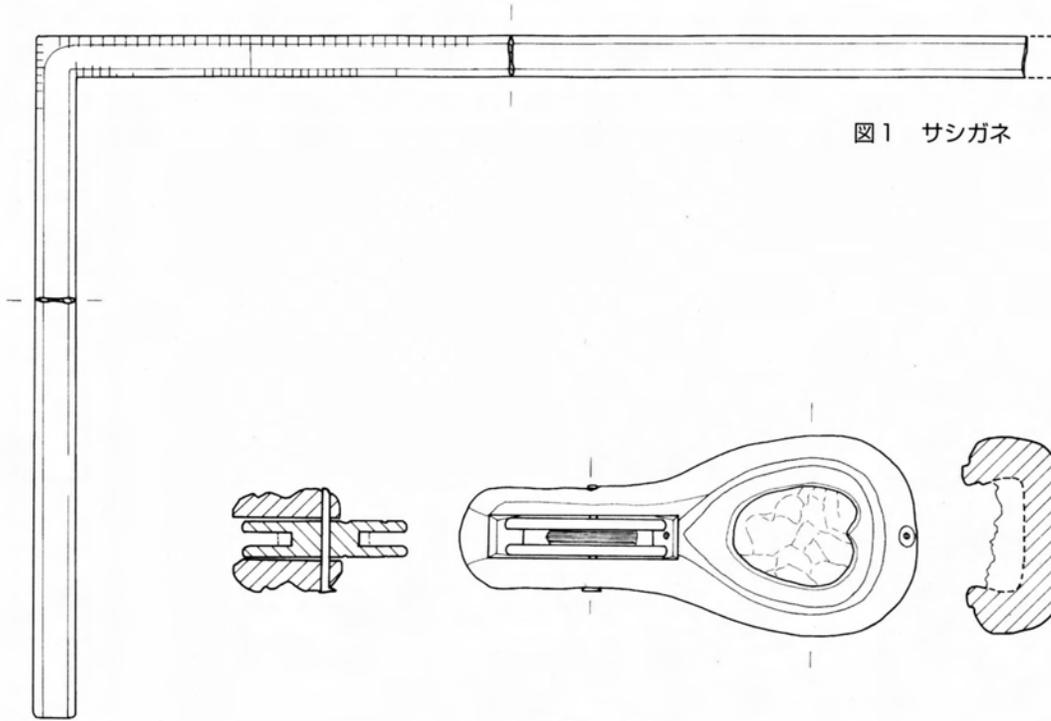


図2 スミツボ

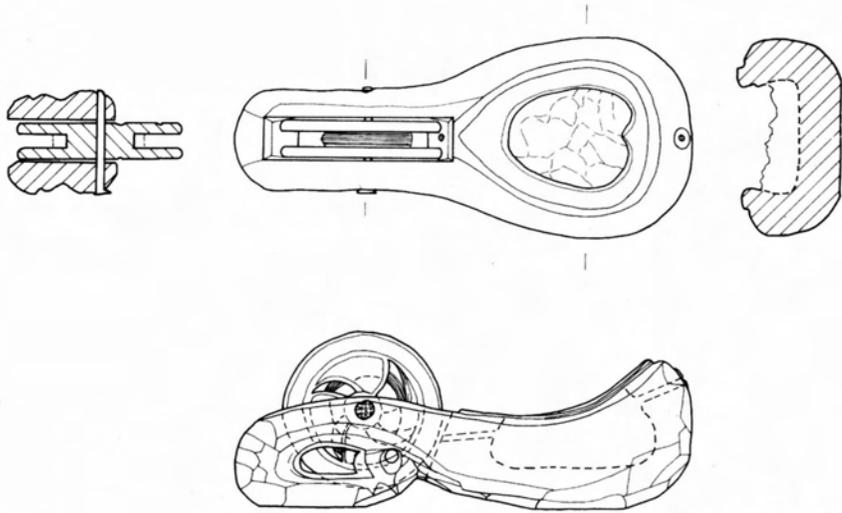
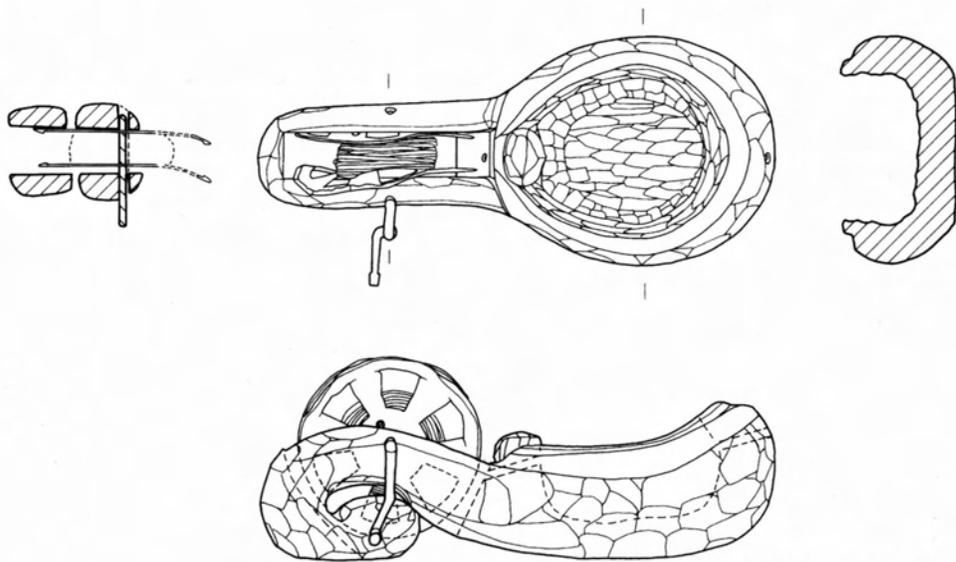
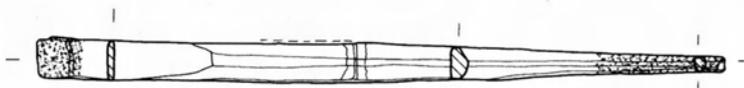


図3 スミツボ



× 1/4

図4 スミサシ



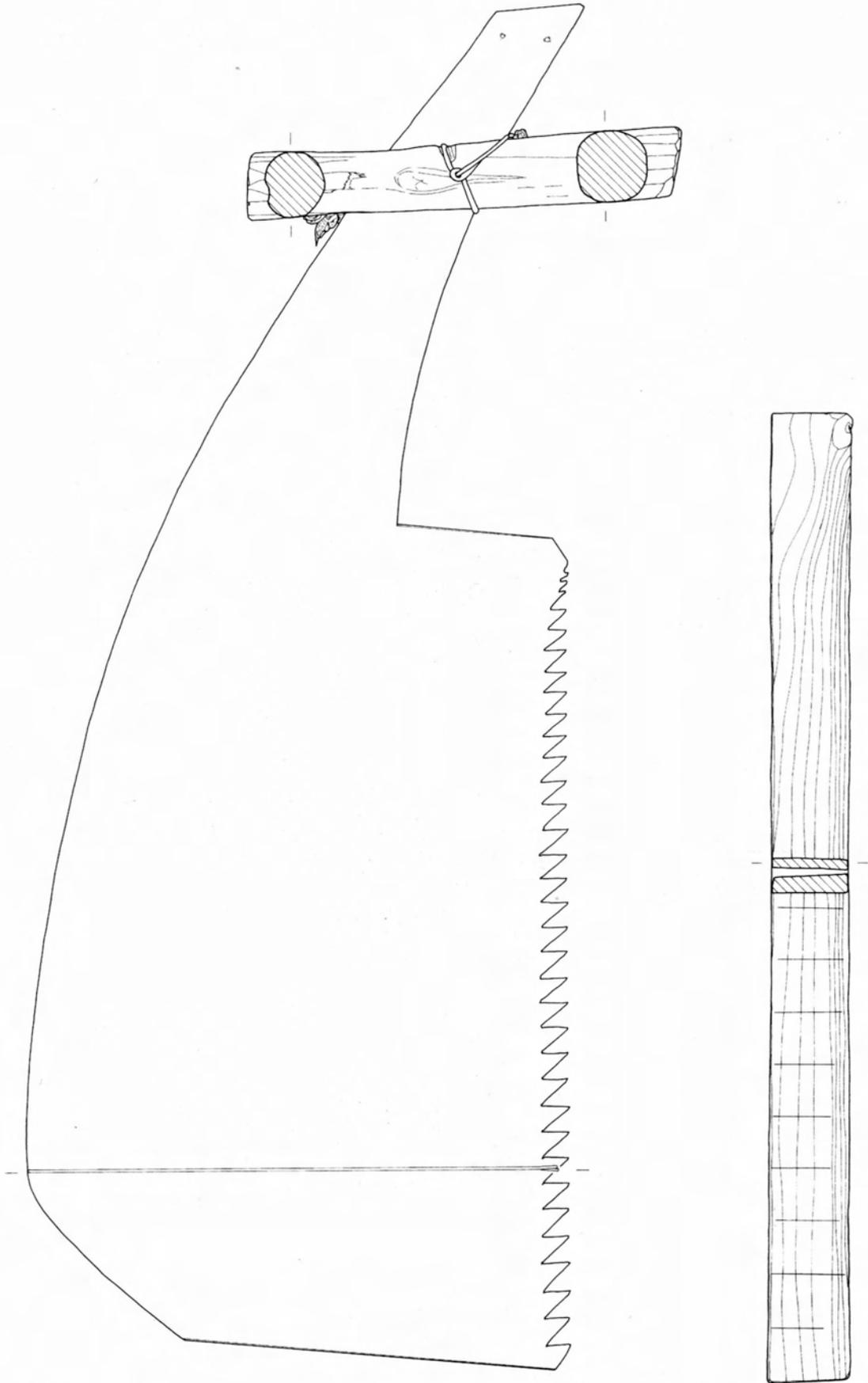


図5 マイビキ

×1/4

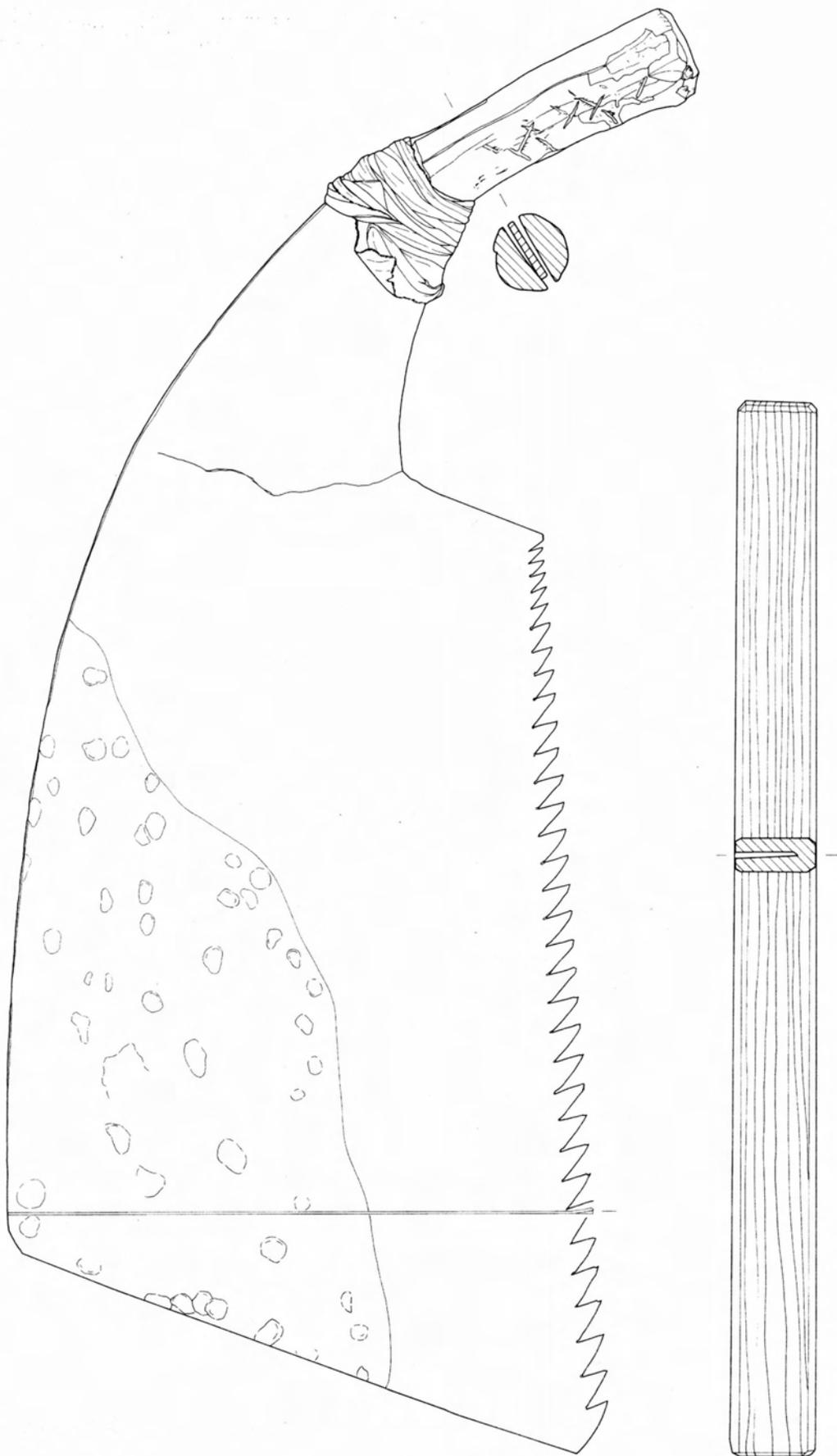


図6 マイビキ
×1/4

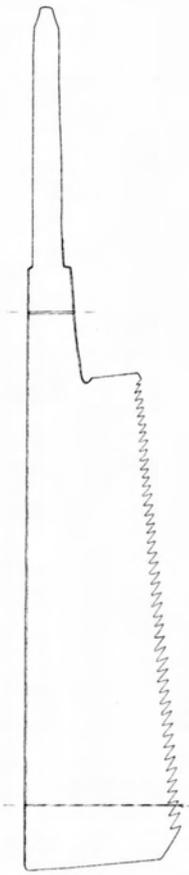


図7 タテビキ

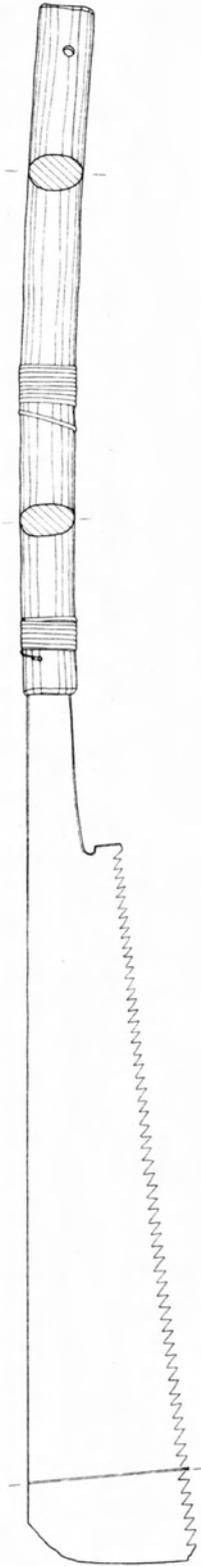


図8 タテビキ

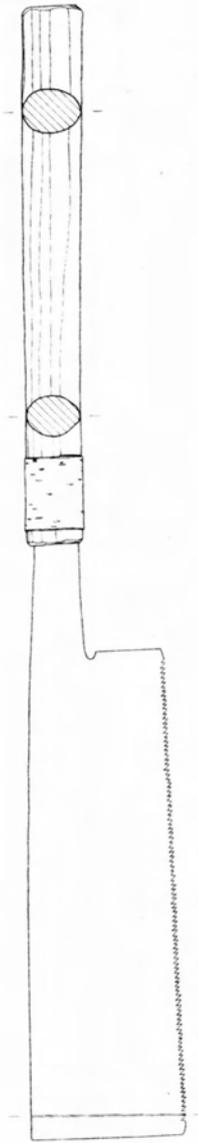


図9 ヨコビキ

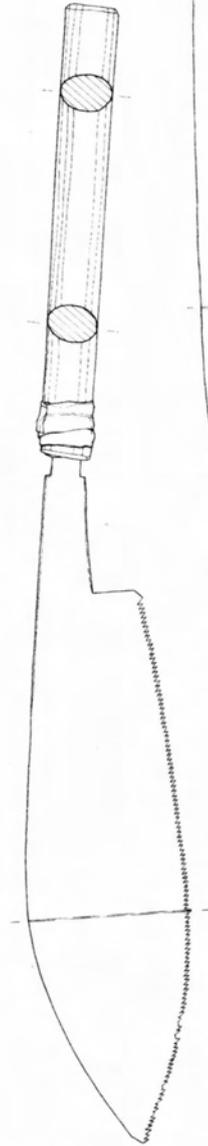


図10 スリノコ

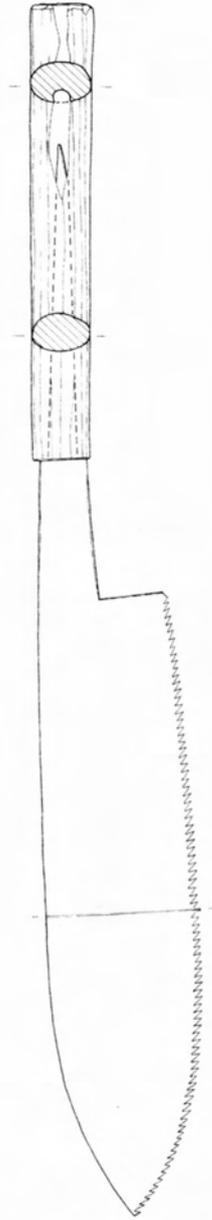


図11 スリノコ

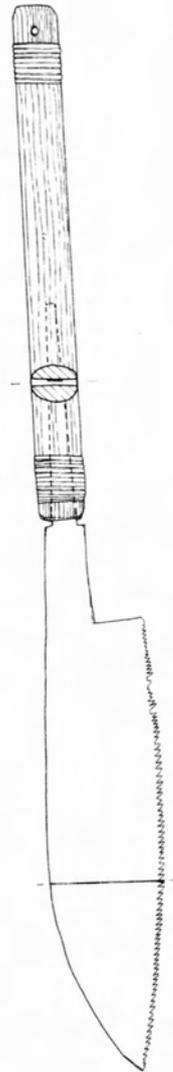


図12 スリノコ

×1/5.6

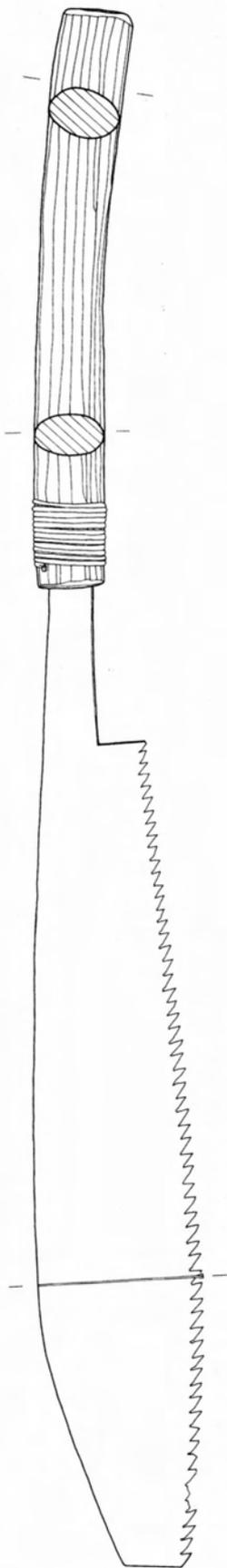


図13 スリノコ

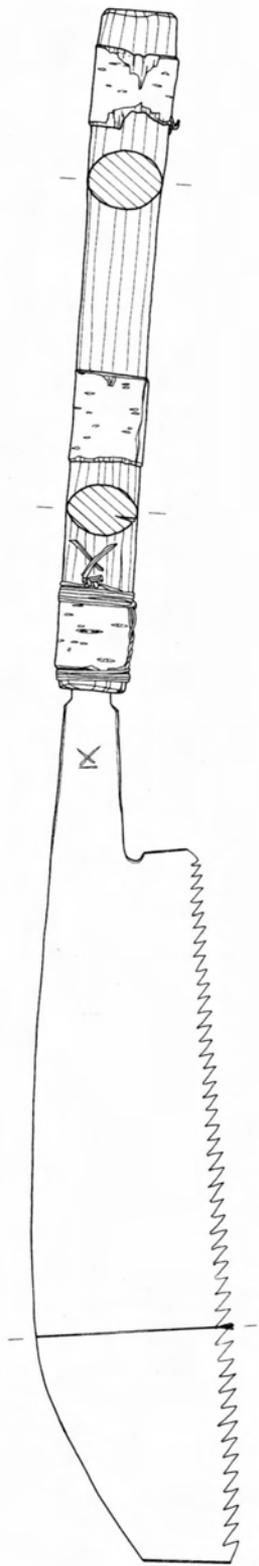


図14 スリノコ

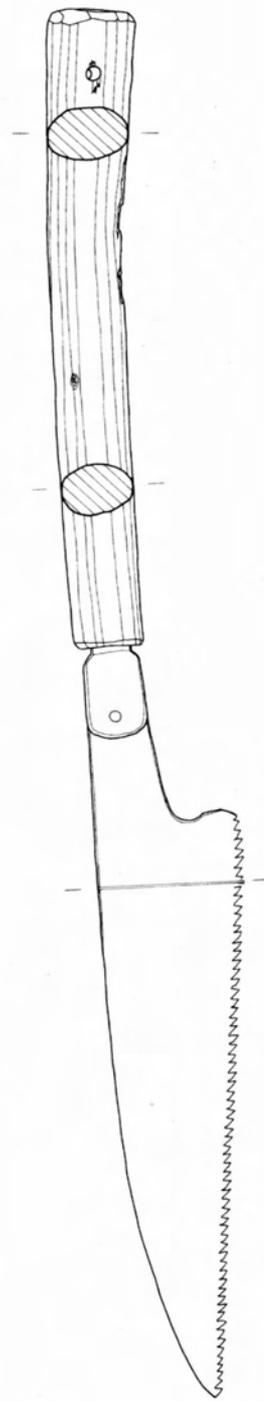


図15 スリノコ

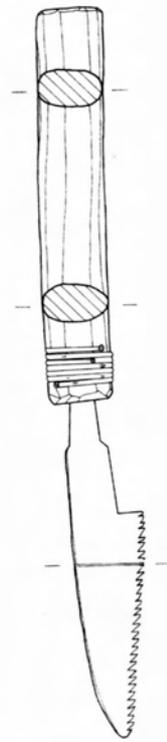


図16 スリノコ

× 1/4

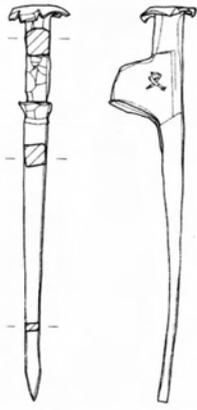


図17 タマリツバ

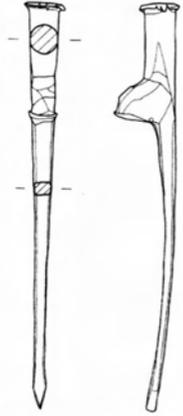


図18 タマリツバ

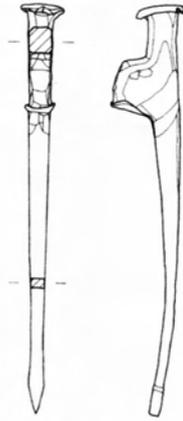


図19 タマリツバ

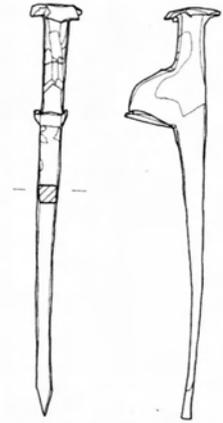


図20 タマリツバ

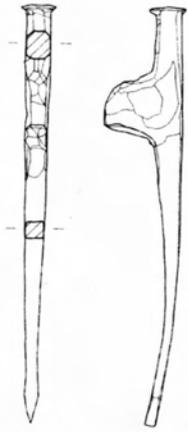


図21 タマリツバ

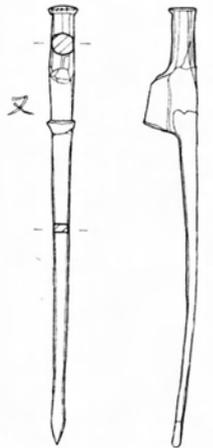


図22 タマリツバ

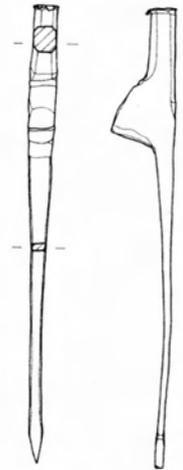


図23 タマリツバ

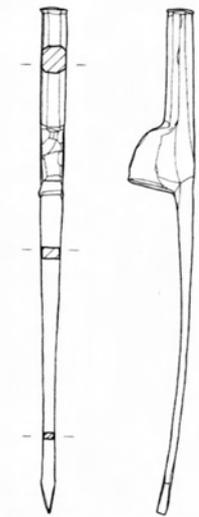


図24 タマリツバ

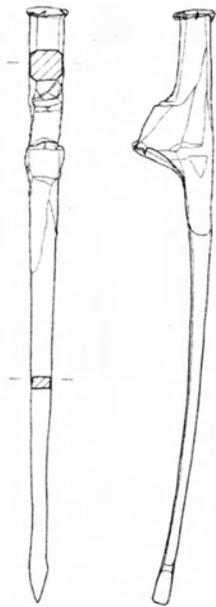


図25 タマリツバ

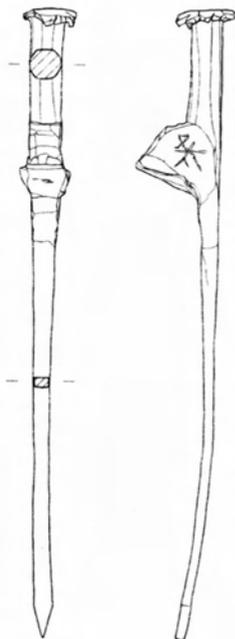


図26 タマリツバ

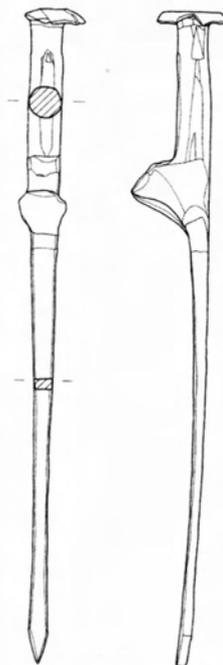


図27 タマリツバ

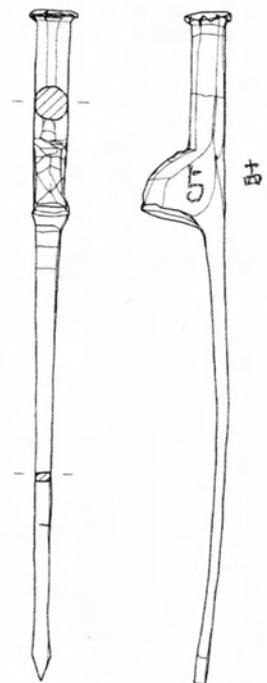


図28 タマリツバ

×1/4

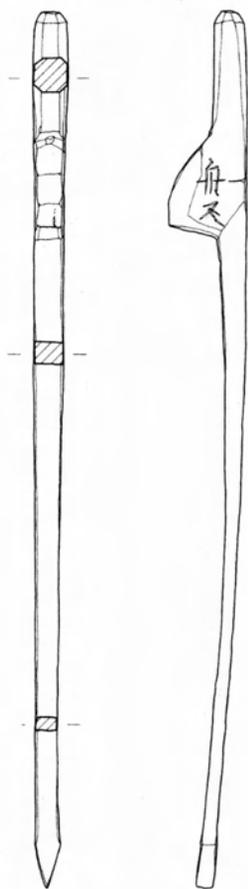


図 29 タマリツバ

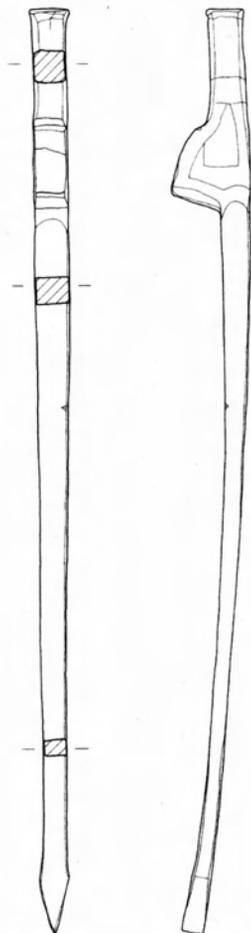


図 30 タマリツバ

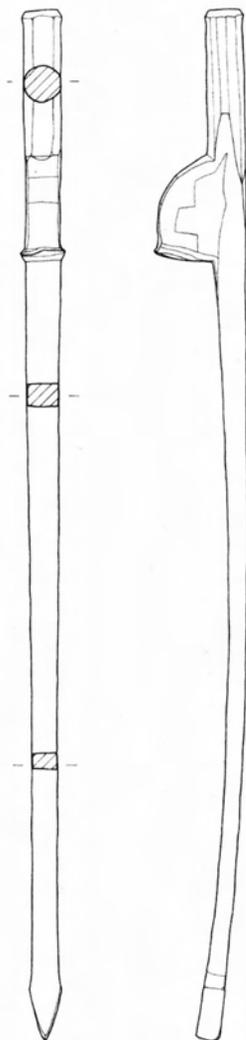


図 31 タマリツバ

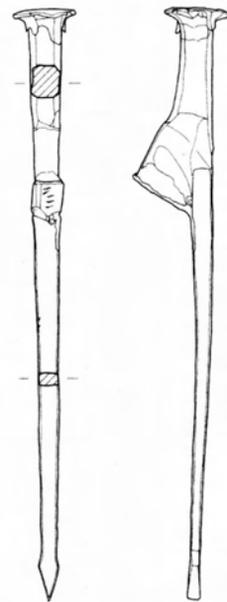


図 32 スグツバ

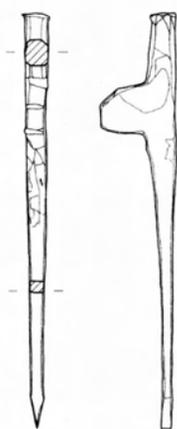


図 33 スグツバ

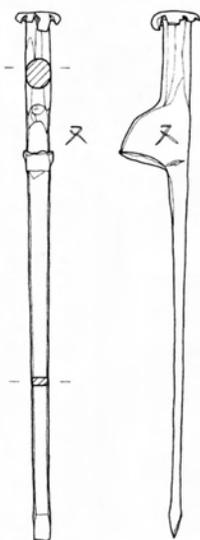


図 34 コグチツバ

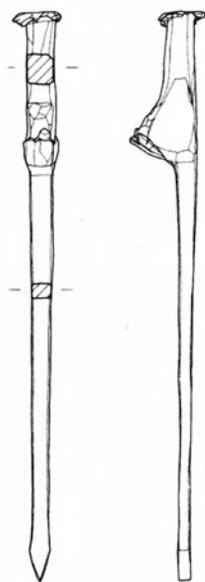


図 35 スグツバ

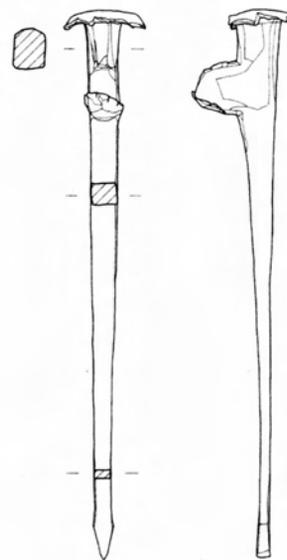


図 36 スグツバ

× 1/4

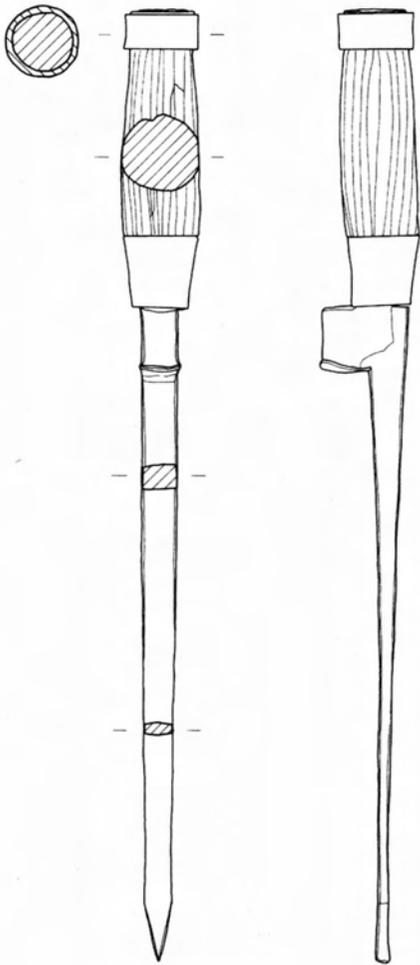


図37 スグツバ

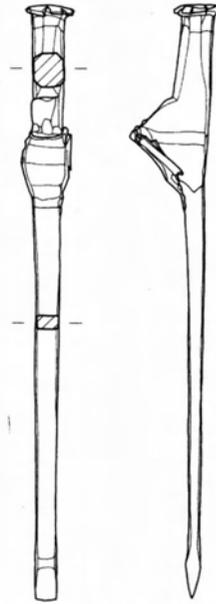


図38 コグチツバ

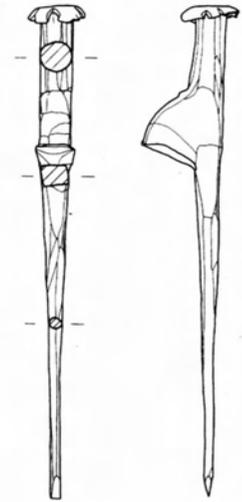


図39 コグチツバ

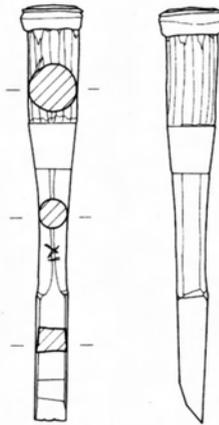


図40 タタキノミ
(向こう待ちノミ)

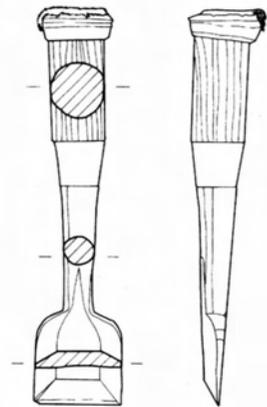


図41 タタキノミ
(追い入れノミ)

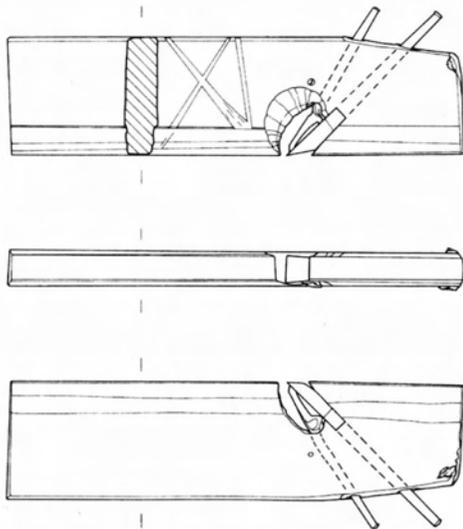


図42 ミゾカンナ (底取りカンナ)

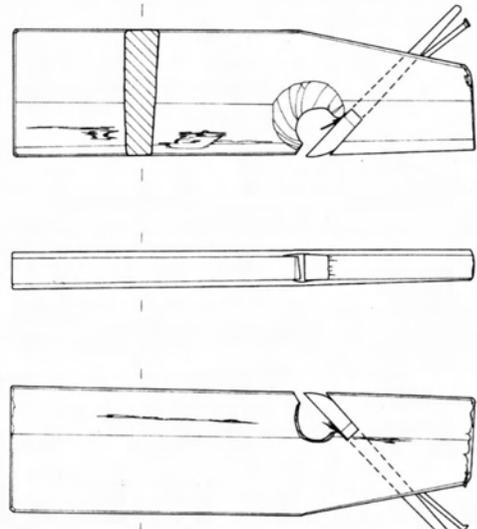


図43 ミゾカンナ (底取りカンナ)

× 1/4

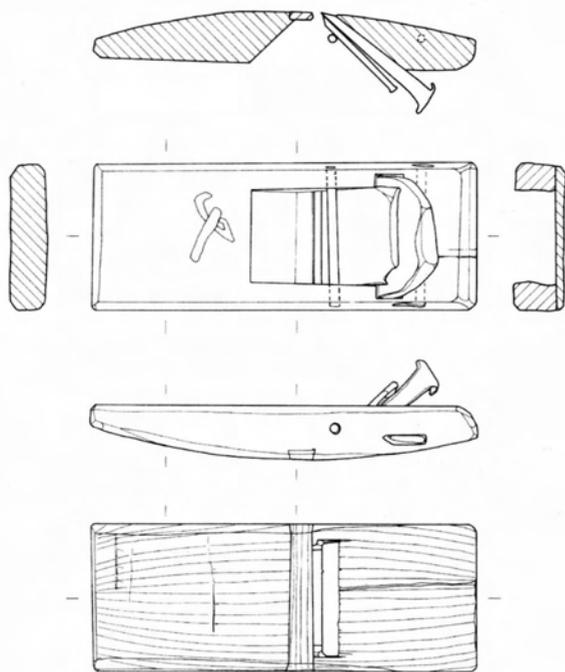


図44 ソリダイカンナ

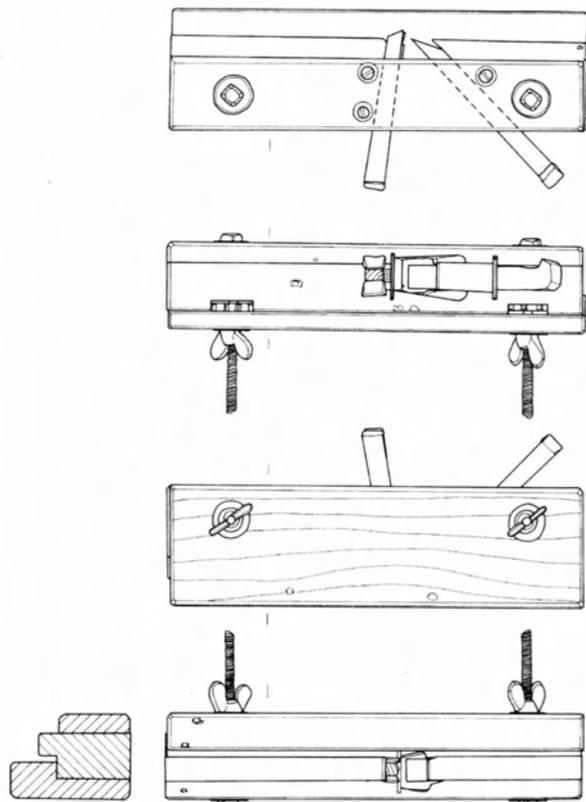


図45 シャクリカンナ

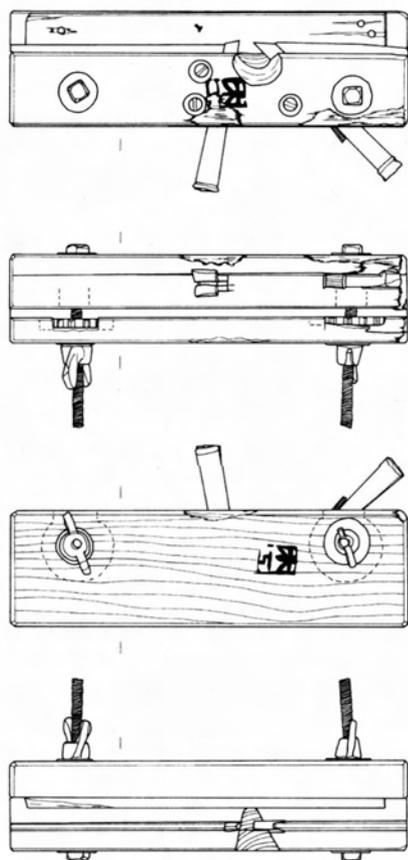


図46 シャクリカンナ

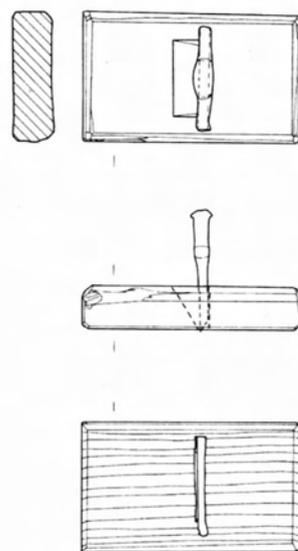


図47 ヒラカンナ

× 1/4

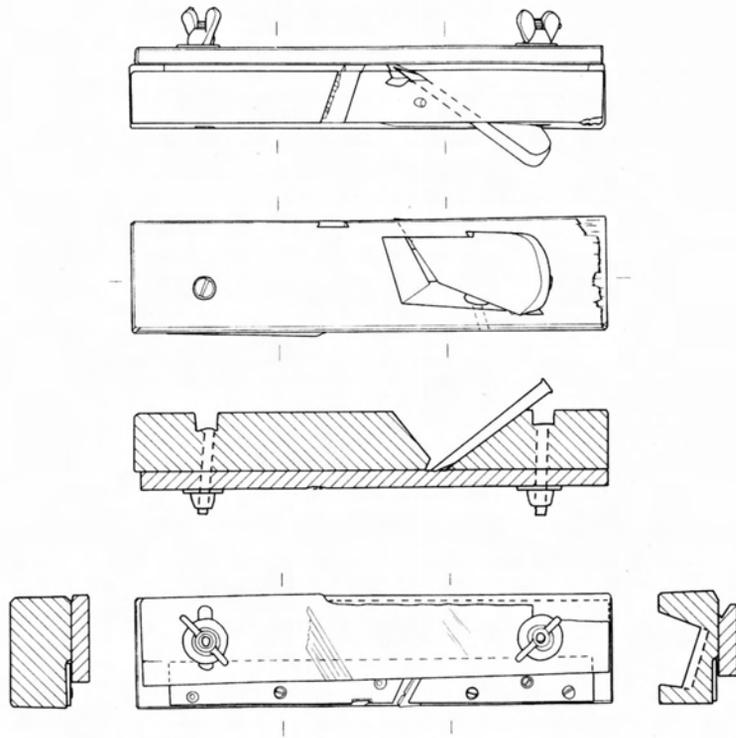


図50 ワキトリカンナ

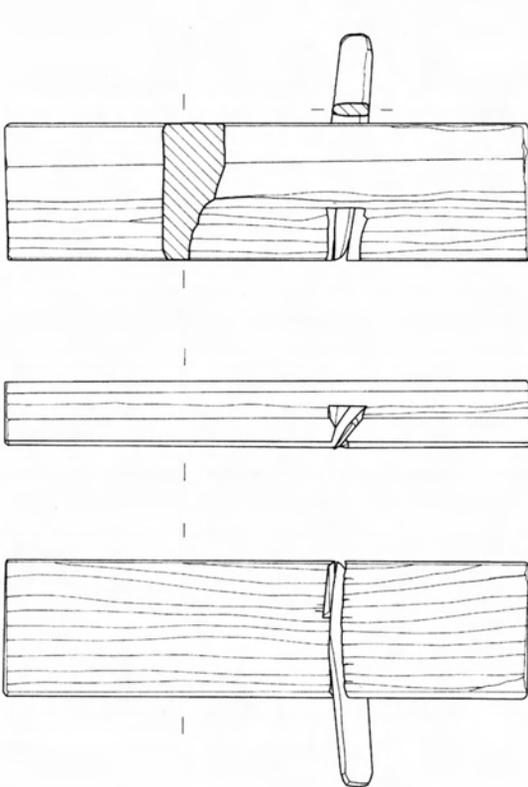


図48 ワキトリカンナ

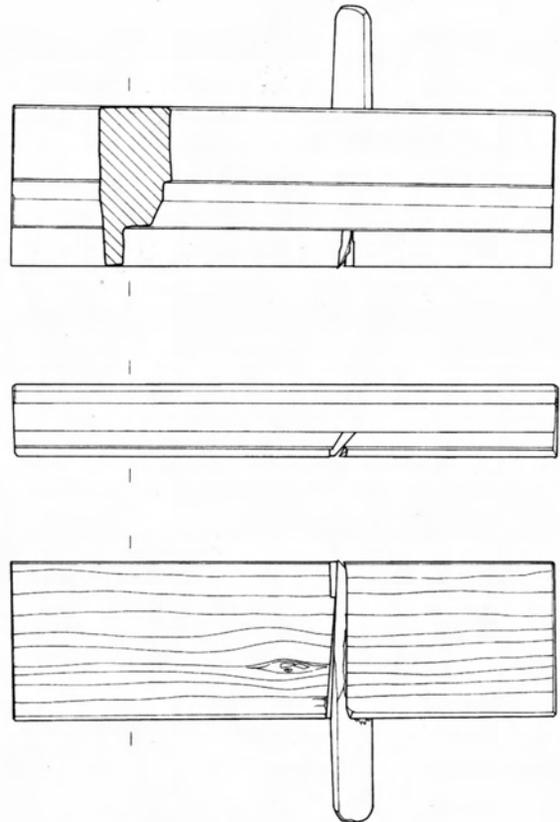


図49 ワキトリカンナ

×1/4

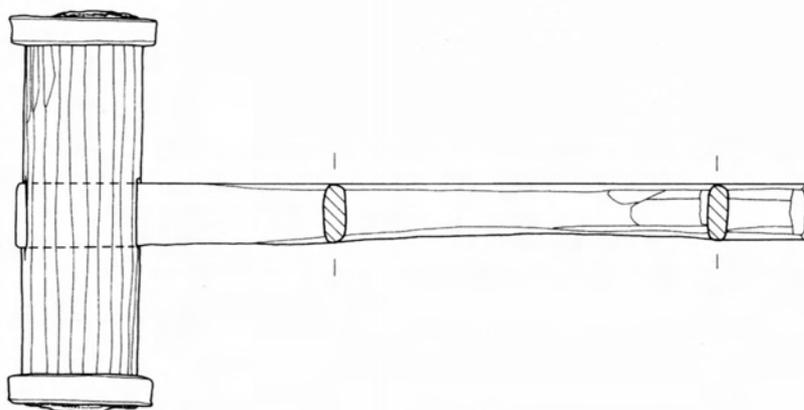
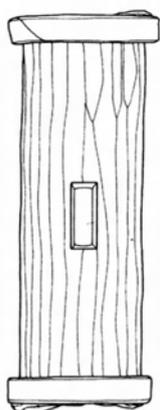
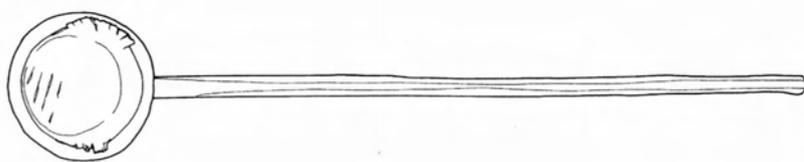


図51 サイズチ

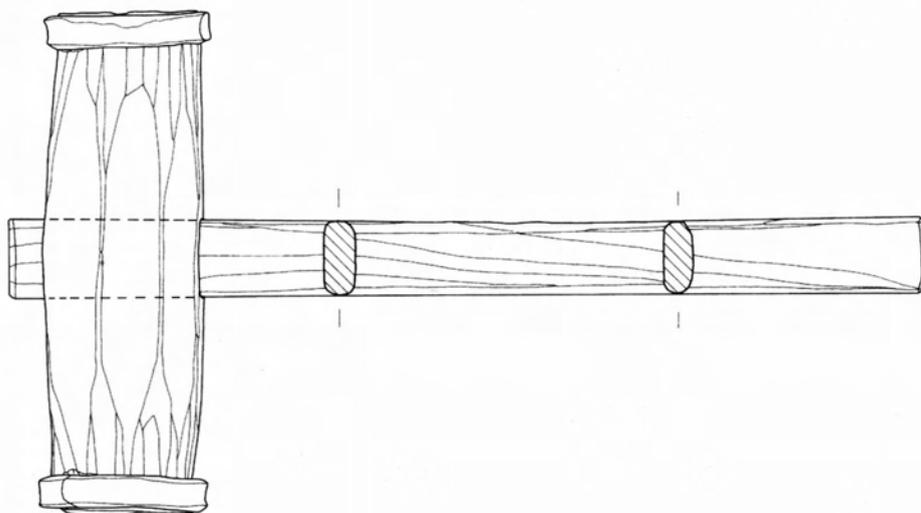
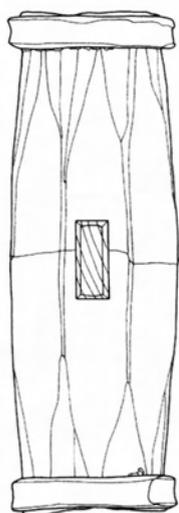
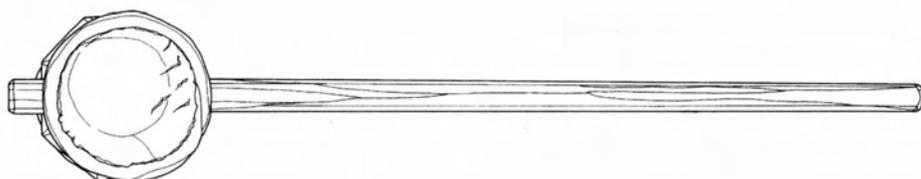


図52 サイズチ

× 1/4

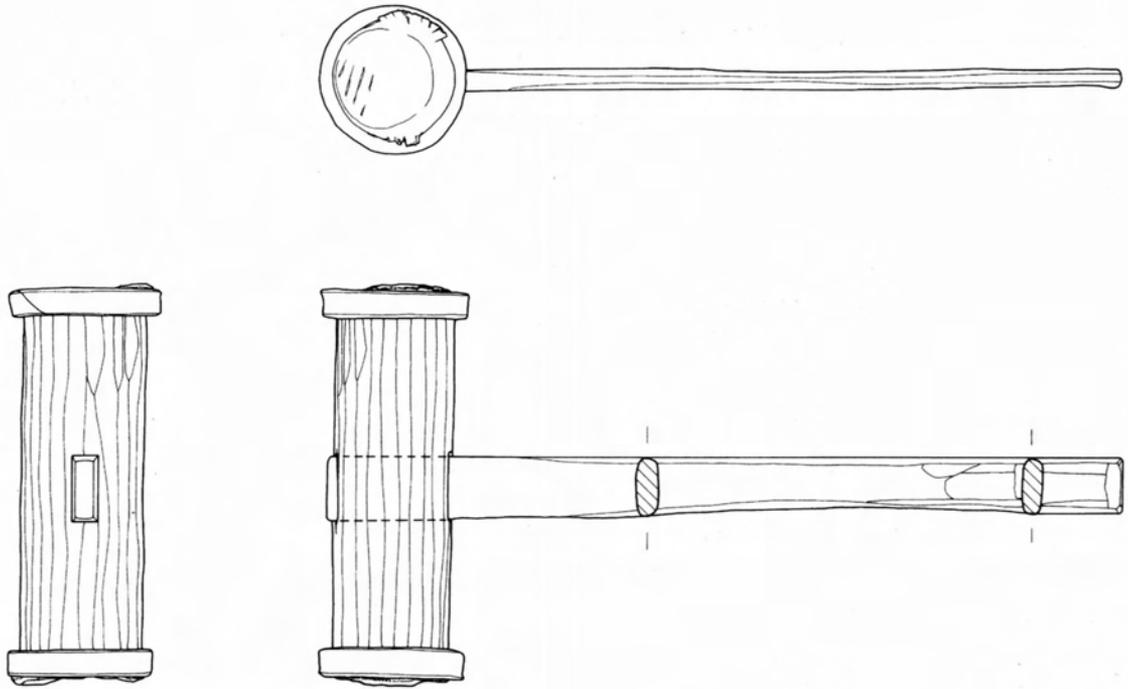


図53 サイズチ

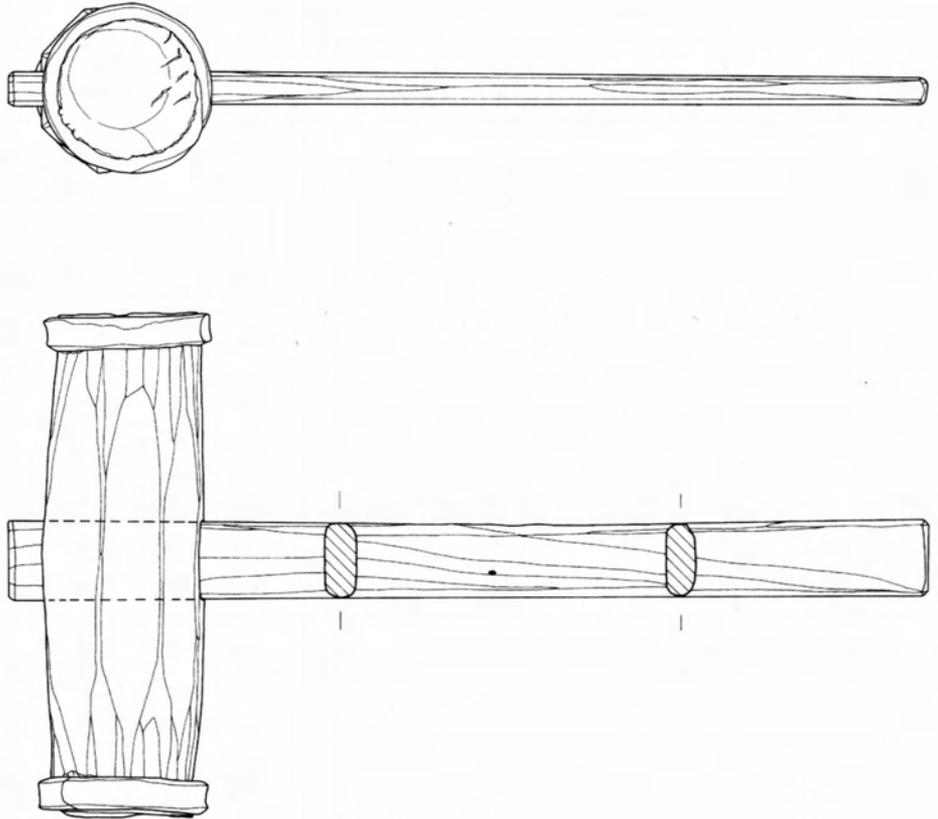


図54 サイズチ

× 1/4

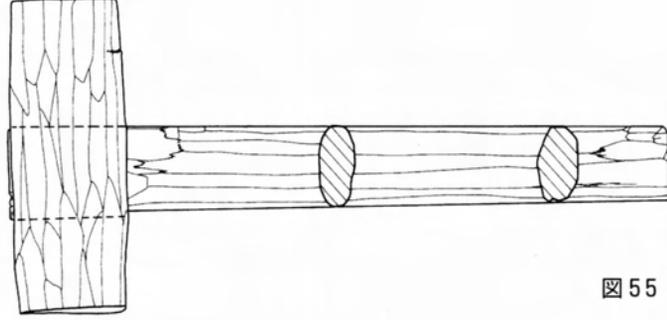
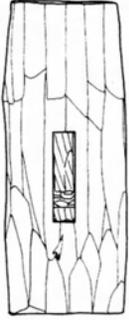
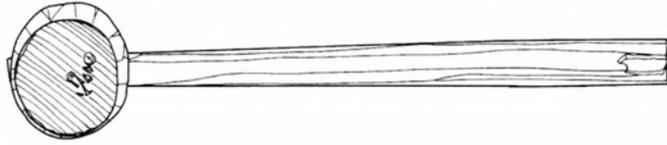


図55 サイズチ

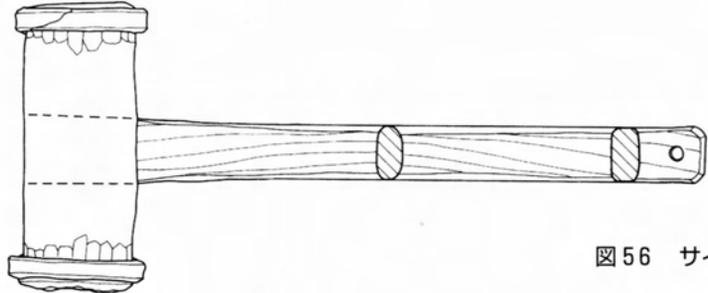
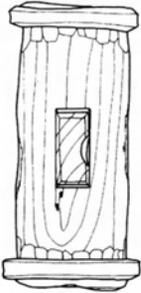
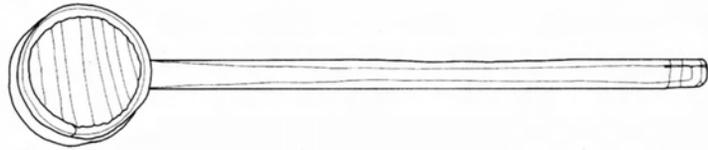


図56 サイズチ

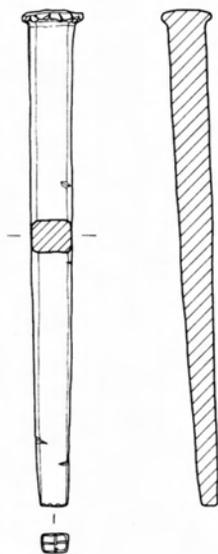


図57 ヨウガネ (クギシメ)

× 1/4

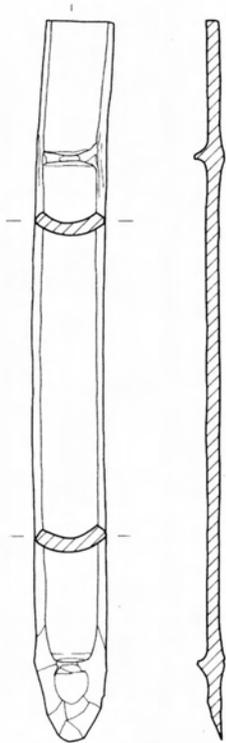


図58 サキヤリ

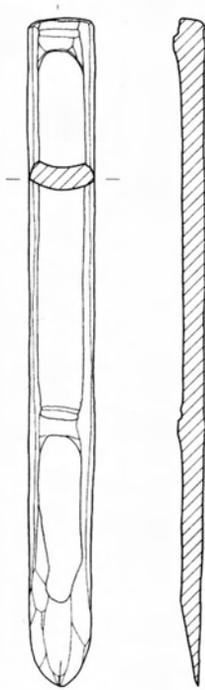


図59 サキヤリ

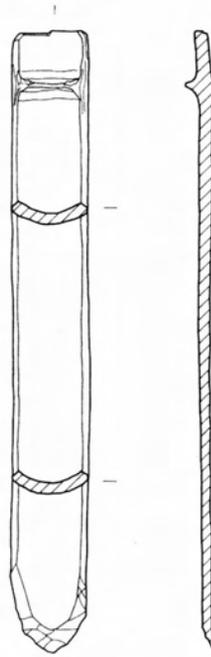


図60 サキヤリ

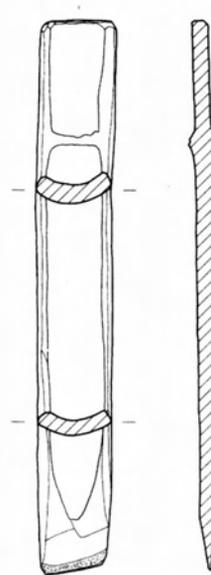


図61 ヤトク

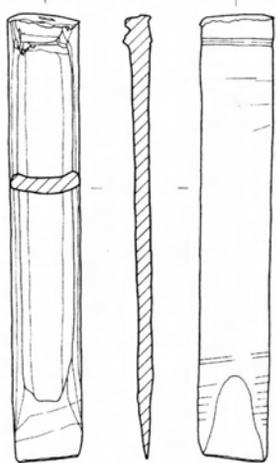


図62 ヤトク

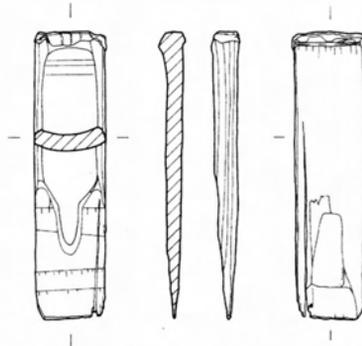


図63 ヤトク

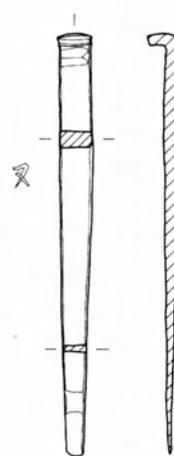


図64 釘ヤトク

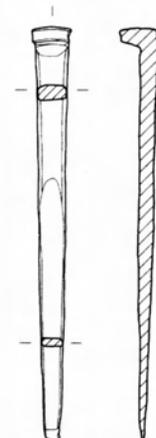


図65 釘ヤトク

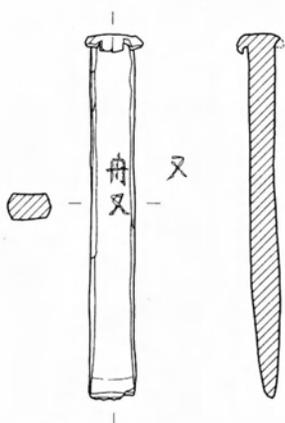


図66 金ヤトク

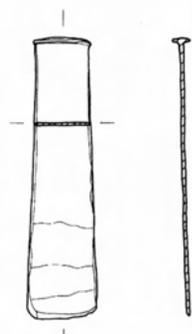


図67 金ヤトク

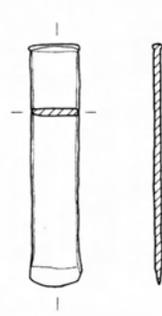


図68 金ヤトク

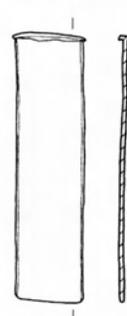


図69 金ヤトク

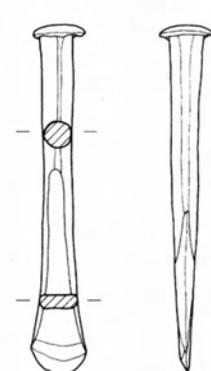


図70 ホウコン打ち

×1/4

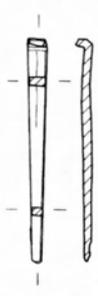


图 71 船釘

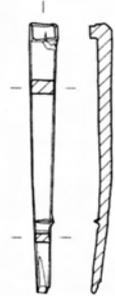


图 72 船釘

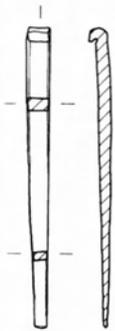


图 73 船釘

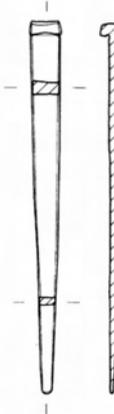


图 74 船釘

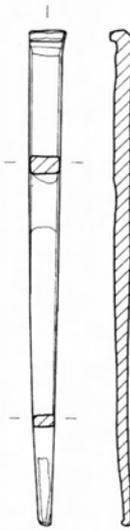


图 75 船釘

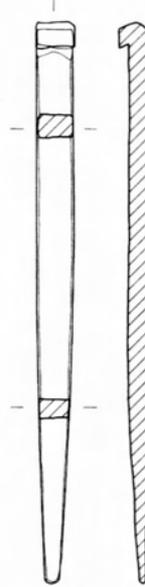


图 76 船釘

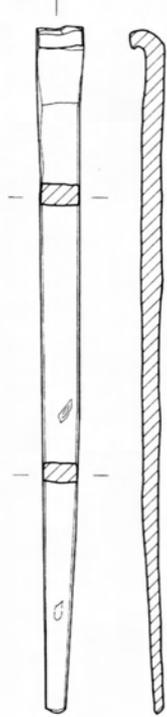


图 77 船釘

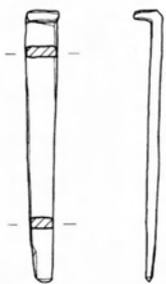


图 78 皆折釘

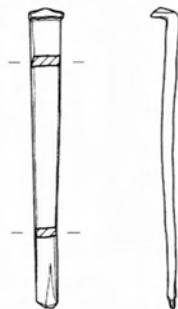


图 79 皆折釘

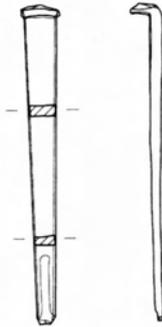


图 80 皆折釘

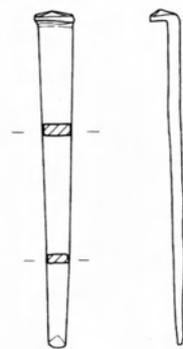


图 81 皆折釘

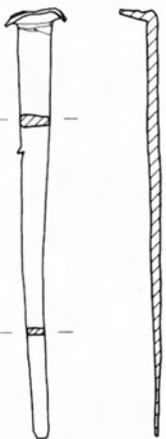


图 82 笠釘

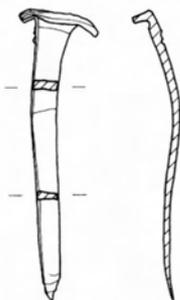


图 83 笠釘

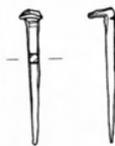


图 84 緣釘

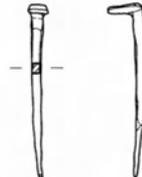


图 85 緣釘

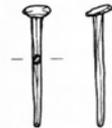


图 86

× 1/4

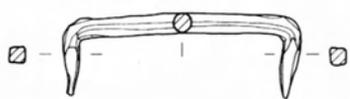


図87 カスガイ

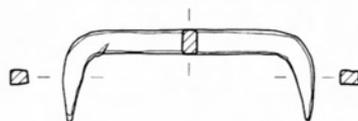


図91 カスガイ

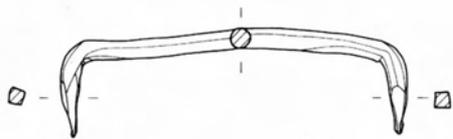


図88 カスガイ

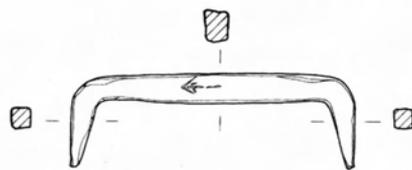


図92 カスガイ

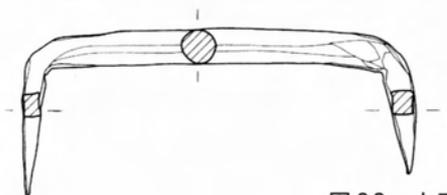


図89 カスガイ

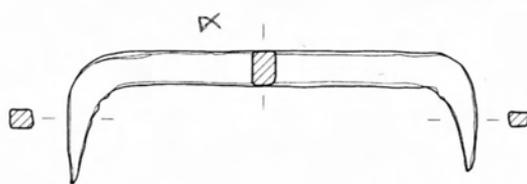


図93 カスガイ

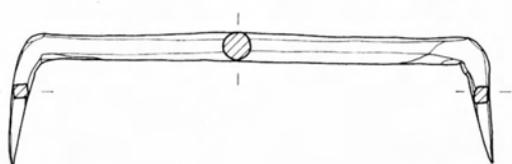


図90 カスガイ

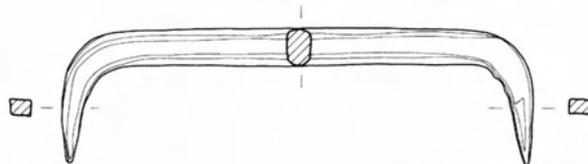


図94 カスガイ

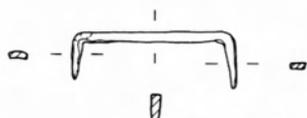


図95 平カスガイ

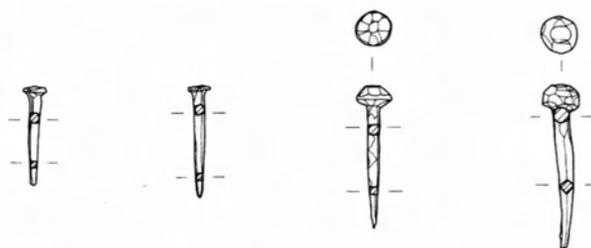


図99

図100

図101

図102

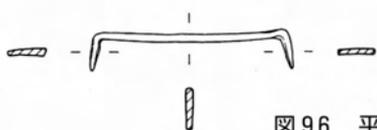


図96 平カスガイ

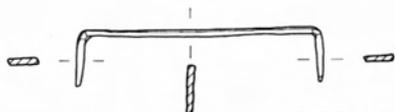


図97 平カスガイ

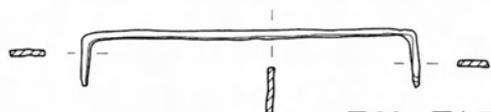


図98 平カスガイ

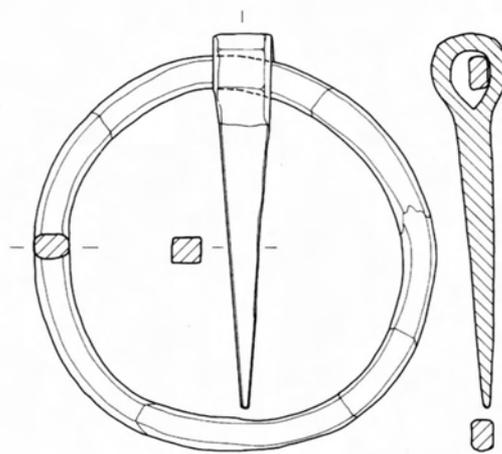


図103 マルカン

× 1/4

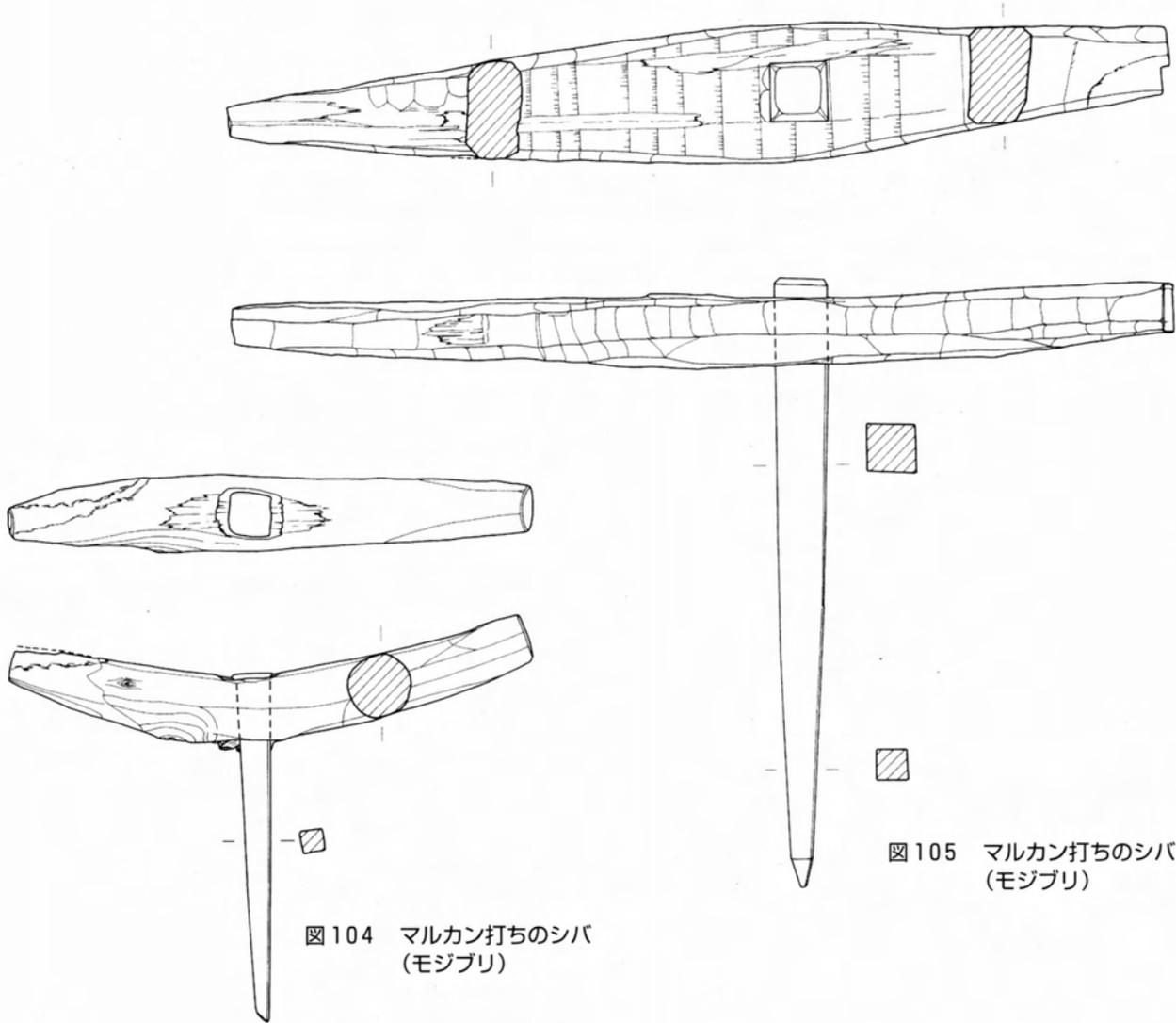


図104 マルカン打ちのシバ
(モジブリ)

図105 マルカン打ちのシバ
(モジブリ)

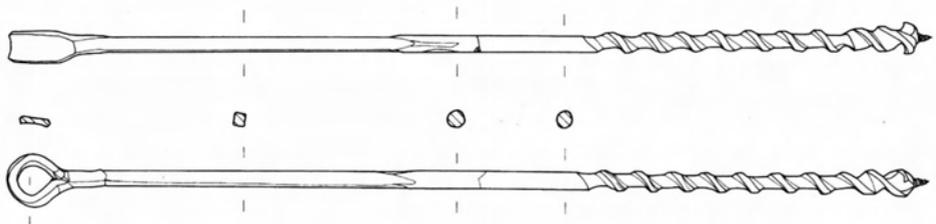


図106 ボルトギリ (ギムネ)

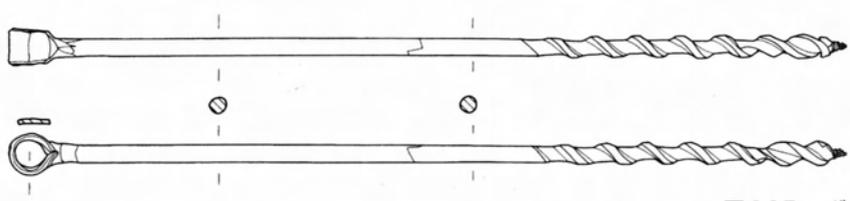


図107 ボルトギリ (ギムネ)

×1/4

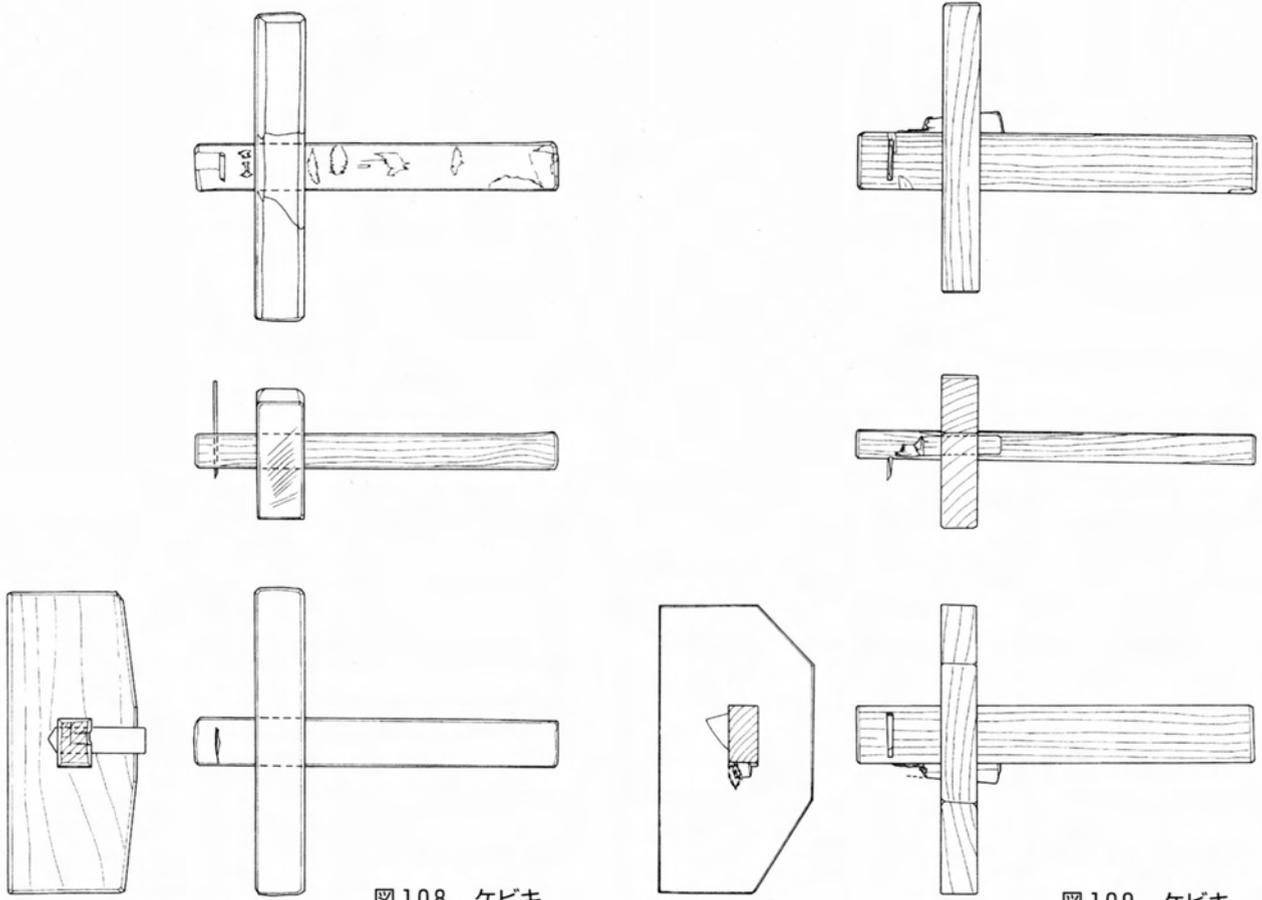


図108 ケビキ

図109 ケビキ



図110 帆の滑車

図111 帆の滑車

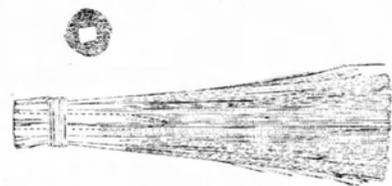


図112 ササラ

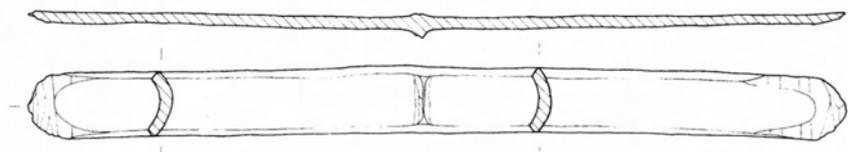


図113 サキヤリ

×1/4

第2章 西田正三家の造船用具用品

本報告は平成6年7月23日、および7月30日の両日にかけて行った大津市今堅田一丁目に所在する西田正三家に所蔵される造船関係品の調査概報である。

同家は少なくとも近世初頭からほぼ戦時中まで続いた船屋。正三氏（大正3年生まれ）は戦後になると船大工として出職されたこともあって、船小屋での造船はほぼ戦時中までのことで、当時のままの状態ではほぼ今日に至っている。かつて訪問した際に船小屋の中をつぶさに見て回る機会を得、比較的古いと考えられる道具の多いことに注目したものの、とても全容を掌握するに至るものではなかった。幸い今回の整理調査に際しては、その作業を行うことを快く承諾していただき、かつ多大なご協力を得ることができた。

1) 調査の目的

調査の目的は、かつて造船所を営んでいた西田正三家の船小屋に所蔵される造船用具用品の全容を掌握すると共にその散逸を防ごうとするものなので、今後使用されることが想定される一般的な大工道具は除外した。ために今回の調査は、整理分類、カード記入、写真撮影までの整理段階までとし、法量の計測や図面作成などの精査は後日に委ねることとした。

2) 調査の経緯

調査に際しては船大工でもあった正三氏の立ち会いの上で、かつての船小屋2棟に分散される造船関係品を1カ所に集め、名称や用途の確認を行う傍らこれらを同種別に粗分けすることからはじめた。

整理作業はあらかじめ準備したコード表に準じて粗分けし、さらにこれを名称別・寸法別に仕分けしていった。整理を終えた状態の各品に対して一連のコードナンバーを付し、カード記入していった。基本は1点1カードとしたが、船釘や目立てヤスリなどの同一多数におよぶ用具用品については、名称寸法別にある程度一括処理したものもある。このカード1枚に対し1コマの写真撮影を行い、撮影を終えた現品にカードと同コードナンバーを添付することでのちの照合手段とした。これらは可能な限り別途に準備したプラスチック箱に収納したが、保管場所は西田家のかつての船小屋の一角。

総点数は後に示した明細のように133種、687点（寸法別船釘・金輪は1種1点として集計）の多くを数え、改めて造船関係品の多さを実感した。それでもこれらの中には一部の一般的な大工道具類を含めな

かつたし、かつての作業台や船卸しの用具なども他に流用されたのか現存しない。保有される用具用品類のみで木造船を建造することは不可能だし、かつて職人は個々にノコギリ・カンナ類を保有するのが慣習なので、多くの職人を抱え造船が盛んであった時代にはさらに多くの用具用品がみられたことであろう。なお本報告書には調査時点で付記した総点数に相当するコードナンバーを省略し、名称別に一括することで済ませた。コードの定着に今ひとつ検討を要すと考えられるためである。なお造船や貸船関係史料も相当数目にしているが、保管場所の関係もあって後日に保留することとした。

3) 船屋「九郎左衛門」について

琵琶湖造船の中心地でもあった大津市今堅田一丁目に所在する西田正三家は、船溜まり（出島港）に面して船小屋・母屋を持ち、造船・貸船屋を営んだ船屋。代々九郎左衛門を襲名したことから「船屋九郎左衛門」「船九」を屋号とし、近年でもこの呼称で呼ばれることも多い。この一帯を出来島といい、かつては船溜まりを取り囲むように10軒前後の船屋が軒を並べた造船の中心地でもある。

同家の菩提寺でもある真宗大谷派「泉福寺」の由緒書によれば、西田家は新田氏と縁のある武将堀口掃部介の家臣を祖とする家柄とされる。天正12年（1584）豊臣秀吉は大津堅田を中心とした船大工40人（うち今堅田14人）に諸役免除の朱印状を与えたが、その中に「九郎左衛門」が含まれるので、少なくともこの時代にはすでに船大工を生業とするものであったと考えられる。慶安4年（1651）「堅田村舟大工九郎左衛門、蒲生郡牧村=而舟作り候得ハ、所之家大工罷出九郎左衛門道具をおさへ取」る事件は直ちに道具を返却することで解決をみている（「竹中弘家文書」）。これによってもすでに近江八幡付近にまでその造船得意先を得ていたことが明らかだし、さらに近世中期～第二次世界大戦前にかけて連綿として船屋を続けていたことを他の史料によって明らかにすることができる。元治元年（1864）仲間株37（うち半休株2、休株2）の多くを数えた今堅田船大工仲間の中でも由緒を誇った船大工筋にあたらう（「今堅田船大工仲間共有文書」）。

一方、寛政2年（1790）の「貸船屋船大工名前帳」（「竹中弘家文書」）に「貸船屋九郎左衛門」とあるように、船大工の傍ら貸船屋を兼帯するものでもあった。同家に所蔵される貸船代金受取史料のうち文久2年（1862）の「戌極月請取帳」を例に挙げると、71艘の

船を貸し付けたとあり、その貸付先は「堅田26, 木浜1, 大曲2, 赤野井1, 下物1, 北山田6, 南山田4, 矢橋9, 唐崎1, 川崎1, 七本柳1, 坂本4, 平辻1, 南雄琴1, 北雄琴1, 江頭1, 近江八幡4, 舟木4」などで、その範囲が広域に及んだことが窺えるが、これらの地域はおおむね造船の得意先と符号するものであったという。

今堅田では施主より注文があればあらゆる船を建造するのが船屋の技量とされ、同家所蔵の安政3年(1856)起の造船控えには二〇〇石積(千歳丸)・一五〇石積などの大丸子船から、中艀船である漁船や土船、さらには農用田船などの小艀船を手掛けていたことが知られる。

造船は主に2棟の船小屋(明治初年再築の3間×8間、隣接しのちの建築である3間×5間)。建造する船の大きさや進捗状況によってそれらの船小屋を使い分けるものであった。かつては船小屋の前に位置した船溜まりに向けて坂が設けられ、立木(柿の木)などを利用しながら船卸しや修理船の陸上げが行われていた。大きな船の船卸しともなると、今堅田の船大工仲間がロクロ・テコ・ソロバン・コロなどの船卸しの用具を持ち寄って手伝い合ったという。この坂も琵琶湖総合開発に伴ってその姿を消し、現況からはかつての船卸しの様子を窺うことはできなくなってしまった。船小屋は前後に取り付けられた庇から船の一端を少し出すことで、琵琶湖でも最大級とされる四〇〇石積程度の丸子船の建造が可能であったというので、造船の本場とされる今堅田にあっても建造能力を誇った船屋の一つであろう。また多くの船大工を養成したことでも知られ、かつての母屋の玄関の上の部屋は住み込みの丁稚の専用部屋であった。ほかにクイガヨイ(通いで修業する丁稚)や職人も多くみられたといい、常時7~8人の職人や丁稚を抱えた時代もあったという。

現当主西田正三氏は、尋常小学校を卒業後、父万吉(のち九郎左衛門を襲名)に就いて船大工全般の技術を修得した。若年の一時期には修業を兼ねて大津の太湖汽船で木造客船(洋船構造)の建造に従事したこともあったが、基本的には琵琶湖の伝統的な木造船を手掛けた船大工。父や数人の職人と共に船屋を切り盛りし、漁船・土船・ダンベ船・田船などの木造船を数多く手掛けたという。しかし、戦中や戦後のしばらくは資材などが思うように入手出来なくなった上に、父万吉も高齢となったので、戦後復員すると親戚筋にあたる「喜兵衛造船所」(船溜まり対岸にあつて現在でも

F R P船の業務に従事)に手伝い旁々勤務されるようになった。戦後間もなくここでも機械船仕様の小丸子船(五〇石積)を手掛けるなど、以降も多種多様の木造船の建造に従事されている。

昭和45年頃になると琵琶湖にもF R P船が出現したが、習熟した造船技術を必要としないこともあって、瞬く間に琵琶湖一円の船屋に普及していった。また耕地整理事業の施行もあって木造船の需要が激減していった時代なので、これらのF R P船(主に漁船)に主力を注ぐようになっていった。というよりは造船に携わろうとすれば止むを得ないことでもあったが、こうなるともはや船大工と呼ぶには相応しくなくなりました。一方このことは木造船にかかわる仕事の衰退に拍車をかける結果を招いていった。耐久性があつてほとんど修理を必要としないF R P船は、在来の造船に占める割合の高かった修理業務を確実に奪い去ってしまったためである。それでも多くの船大工がいた今堅田にあつても、比較的遅くまで木造船を手掛けた船大工として知られた存在であつたが、年齢的な面もあつてか昭和58年頃に長い造船関係の職に終止符を打たれている。

このように戦後は専ら船大工として出職されたことが幸いしてか、かつての船小屋もほぼそのままの状態でごく近年に至り、比較的古い道具類を数多く所蔵しているのである。

西田正三家の所蔵品明細

分類および名称	点数	備 考
1、計測墨付用具		
サシガネ	6	
	4	一部欠損
スミツボ	1	
スミサシ	6	
ワリズミサシ	3	
定規 (直尺)	1	
ジュウガネ	1	一部欠損
	1	真ちゅう製
ブンマワシ	1	
コンパス	1	
デバイダー	1	
硯と硯箱	1	
イトマキ (水糸)	1	
2、ノコギリおよび目立て用具		
マエビキノコ	2	
タテビキノコ	9	
ヨコビキノコ	8	
	2	一部欠損
スリノコ	7	
	1	一部欠損
アゼビキノコ	6	
	1	柄欠落
リョウバノコ	5	
ヒキマワシノコ	5	
	1	柄欠落
金ノコ (替え刃)	3	
メタテヤスリ	9	
	23	ヤスリ刃
アサリヅチ	1	
	1	一部欠損
3、ノミ類		
ツバノミ (曲) (カゴミツバ)	22	
	5	先折れ
ツバノミ (直) (スグツバ)	14	
	5	先折れ
小口ツバ	4	
タタキノミ	29	
	6	柄欠損
ヒラノミ	7	
	1	柄欠損
ウチヌキ	2	
マルノミ	9	
	1	柄欠損
コテノミ	2	
ツキノミ	1	

ノミ (パーツ)	16	柄およびカツラなど
4、カンナ類		
ソリダイカンナ	1	
ミゾカンナ (底取りカンナ)	2	
	1	一部欠損
シャクリカンナ	3	
ワキトリカンナ	3	
ヒラカンナ	13	内長台2
	1	一部欠損
	1	台のみ
マルカンナ	1	
カンナ替え刃	5	
5、斧・手斧など		
手斧 (チョンノ)	2	
斧	1	
6、カナヅチ・サイズチ類		
サイズチ	3	
	1	柄欠損
	13	半製品
カナヅチ	2	
	3	柄欠損
ゲンノウ	1	
カケヤ	1	
ヨウガネ (クギシメ)	5	
7、槓縄と槓縄入れの用具		
槓縄	1	(一把)
サキヤリ	1	
	1	半製品
ヤトク	4	
	2	半製品
釘ヤトク	4	
金ヤトク	1	
ハウコン打ち	4	
ハウコンのパテ入れ	1	
8、釘・カスガイ		
船釘 (4寸以下)	多数	
船釘 (5寸程度)	多数	
船釘 (6寸程度)	多数	
船釘 (7寸)	多数	
船釘 (8寸)	21	
カイオレクギ	1	(皆折釘)
カサクギ	5	(笠釘)
カシラクギ	6	(頭釘)
アイクギ	11	
釘樽	1	
カスガイ (丸)	2	
カスガイ (角)	3	

平カスガイ (大)	16	
平カスガイ (小)	38	
カスガイその他	12	
カスガイその他(ワカスガイ)	4	
カスガイその他(スジチガイ)	1	
9、金具類		
マルカン (大)	4	うち1は打込足欠
マルカン (中)	7	うち3は打込足欠
マルカン (小)	6	
エビカン (大)	2	
エビカン (中)	23	
カケガネ (大)	13	うち3は打込足欠
カケガネ (中大)	2	
カケガネ (中)	2	
カケガネ (小)	2	
カケガネ (丸大)	1	
カケガネのツボ (大)	4	
カケガネのツボ (中)	14	
カケガネのツボ (小)	2	
タガネ	8	
10、造船用具その他		
マルカン打ちのツバ	2	
	2	柄欠損
ボルトキリ (ギムネ)	3	
	2	柄欠損
ケビキ	2	
銅板	1	未使用
	3	
銅板押え板	5	
	2	ダテカスガイ用
鉄帯 (巻鉄)	1	
(鉄帯の穴空け)	1	
ポンチ	2	
ウマ	1	木製の作業台
(木の皮をはく用具)	1	
ナタ	1	
キリ	4	
キリ (ツボギリ)	2	
キリ (ミツメギリ)	1	
ヤスリ	1	
金ハサミ	1	
切り出しナイフ	1	
スパナー	2	
焼き判コテ	1	
水平器	1	
ジャッキ	1	
ボール	1	

道具箱	101	木製手作り
釘箱	9	木製手作り
手ホウキ	1	
11、形板・板図など		
追鼻の型板	1	
ヒラキの型板	6	
タチの型板	3	
釘打ちの型板	6	
手漕ぎボートの型板	一式	
ツキオケの型板	1	
丸子船関係の型板	6	
12、推進具関係		
櫓	2	
櫓の部材 (ウデ)	1	
櫓の部材 (シタサキ)	3	
櫓のカメ	2	
	1	半製品
櫓のツク	13	半製品
櫓釘	13	
	3	一部欠損
櫓の金輪	多数	
13、舵関係		
舵	2	
	1	半製品
舵の頭部のみ	1	
舵の滑車 (ヤジゲルマ)	3	
舵床	2	
14、碇		
四爪鉄碇	1	爪1本欠損
15、帆関係		
帆柱のセミ	2	
カメ (シャクリ)	1	
16、船の備品		
ロープ	4	
ヘラ	1	
ツキオケ	2	
	1	柄欠損
トビクチ	1	
	2	柄欠損
小丸子船の櫓板	1	

2 安曇川中流域の漁具と漁法

調査の目的

今回の調査では琵琶湖に流入する河川における漁業の変遷を記録することを目的として行った。

安曇川を調査対象として選んだのは、現在までの所、流域に大型のダム、堰堤が比較的少なく、より原始的な形態の漁労が残っている可能性が高かったこと、下流部における漁労調査が昭和56年に滋賀県教育委員会により行われていること等による。

また、源流域の調査に関しては中流域の漁業者が源流域まで出かけて魚を捕っていたという実態もあり、割愛し、今回の調査は、安曇川の中流域を中心とした調査に止めることとした。

調査は、研究員青山淳二、大沼芳幸があたり、漁労用具の実測、製図には研究員大沼芳幸、研究補助員大沼直子、中川ステ、小林貴子があつた。(文責・大沼芳幸)

安曇川中流域の様相

安曇川の水系は本流安曇川と、これに合流する北川、針畑川等の支流からなる。これらの水系はおしなべて京都市左京区百井峠付近に発し、大津市堅田を経て朽木村市場付近で支流を集め安曇川町の琵琶湖に流入する。

今回調査の対象とした地域は、安曇川町長尾、朽木村荒川、野尻、市場、岩瀬、木地山、雲洞谷の各地区である。

漁獲対象魚と漁具漁法

1. アユ

呼称 アユ、コアユ、オオアユ、アイ、ヒネアユ(越冬アユ)

【一般的生態】 通常の河川では、上中流域に生息し、河床の石に付着した藻類を両唇でこそぎとって食べる。

通常、春から晩春にかけて川を遡上し、初夏から盛夏にかけて川で成長し、秋に河口付近まで降り産卵をする。

ただし、琵琶湖水系のアユは独特の生活形態を持つことで知られている。

琵琶湖に流入する河川を遡上するアユは他の地域のアユと同様の成長を遂げるが、琵琶湖の中にとどまるアユは一定以上成長せず、コアユと呼ばれる形状のまま一生を終える。

このコアユは未成長のままではあるが、成熟し晩

夏から初秋にかけて産卵する。コアユを他の河川に移殖すれば通常のアユの大きさまで成長することから、友釣り或いは養殖用の種苗としての需要が高く、全国に向けて出荷されている。

【安曇川中流域での漁労者の見た生態】 安曇川中流域でのアユは、遡上途中のコアユと、定着したアユ(オオアユ)が漁獲の対象となっている。

のぼってくるのはコアユである。4月から5月末までにのぼってくるコアユは瀬に付いて確実に大きくなる。5月末から6月中旬ごろにのぼってくるコアユには大きくならないものもある。8月になってのぼってくるコアユはコアユのまま大きくならない。アユは、梅雨前までが最もよくのぼる。

盆の頃(8月中旬)になると卵を持つようになり、9月になると降り始める。特に朽木谷のアユは、日が早く暮れるためか成熟が速いようである。広瀬周辺でもアユの産卵を見ることが出来た。日の暮れに川の瀬の肩に、真っ黒に固まって産卵するので簡単に捕ることが出来るが、腹に砂が入っており食べられなかった。産卵後、たいていのアユは死んでしまう。しかし、1970年代までは越冬アユがかなりおり、5月の初めぐらいいよく捕れた。1尺ほどもあり、大きいものの皮が硬く、反対に身が柔らかく、余り旨なかった。大津に出荷したこともあるが売れなかった。

【利用】

1 商品

貴重な現金収入として出荷することが多かった。主な出荷先は京都で、値段は人により記憶が錯綜しているが、昭和初期頃で大(大きさで大・中・小・ビりに分類)で十二銭から五十銭(十二銭=大鯖1匹、五十銭=土方半日手間)ぐらいであった。このため、子供でもいい稼ぎになった。(大津市関の津では昭和33年頃大1匹が120円ぐらいで売れた。大工の手間賃が1日450円ぐらいの時代である。いかにアユが高価に取り引きされていたかが分かる。この頃、5月下旬から7月上旬のアユ漁で1年分の稼ぎがあったこともあった。しかし、養殖のアユが市場に出回るようになってから、アユの値段は下落し、生計を支えるためのアユ漁は成立しなくなる。)

ただし、アユが売れるのは祇園祭り(7月上旬)までで、それ以降はまったく売れなくなる。

朽木の場合、イケタンゴ(桶)に生きたアユをいれ、入部谷越を経て大溝に向けて出荷した。広瀬の場合も大溝に向けて出荷した。いずれも大溝からは

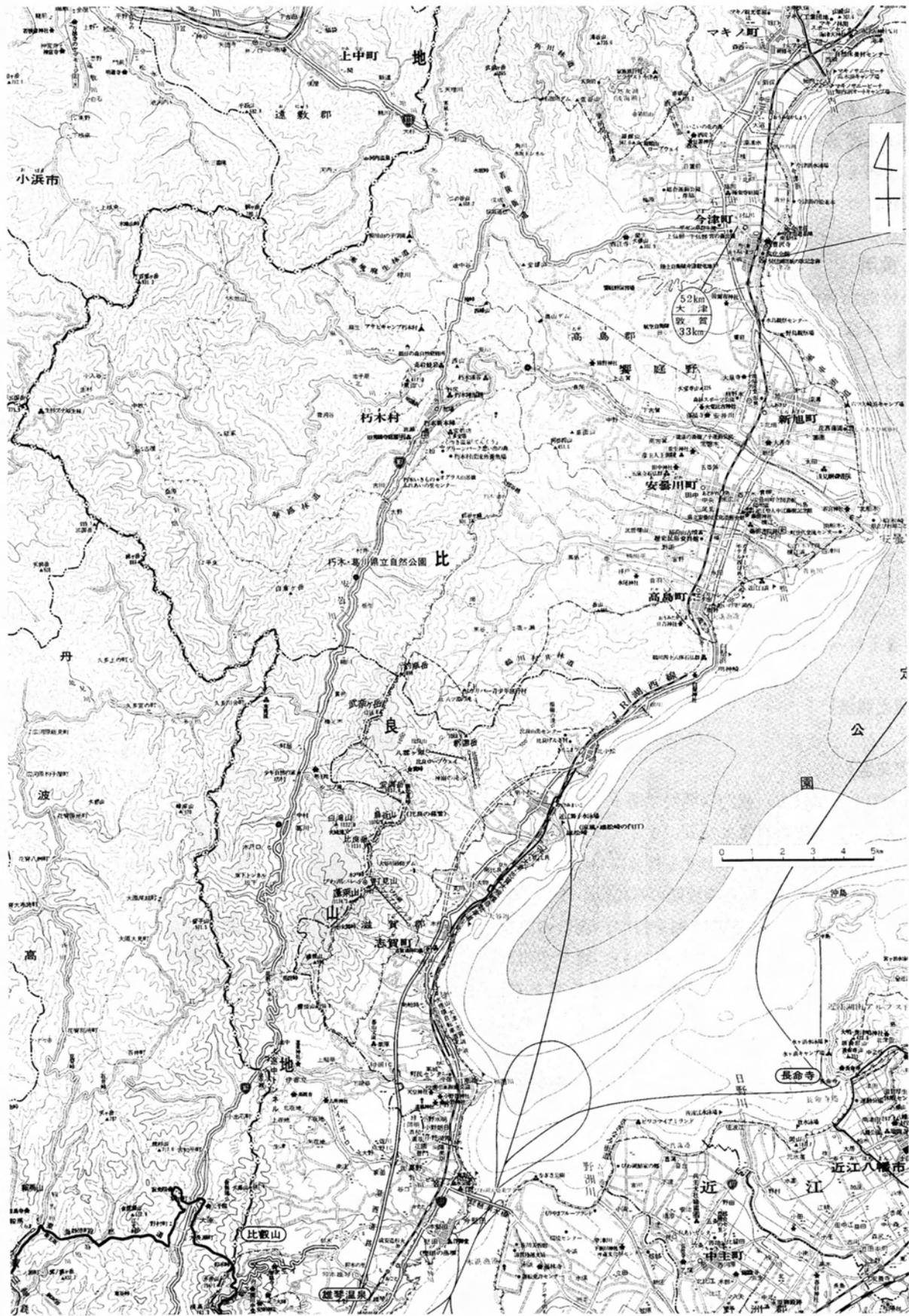


図-1 地形図

汽船にのせて大津に運んだ。アユは生かして運ばなければまったく価値が無く、夏の暑い時期にいかにかアユを生かしながら運ぶかに苦心した。

広瀬の場合、昭和初期には自転車で生かしたアユを大津まで運んだこともある。この場合、水を交換する場所をあらかじめ決めておいた。誤って悪い水をいれ、せっかくのアユを全部殺してしまったこともあるとのこと。

2 食用

一般的な食べ方は塩焼きで、若アユが一番旨い。コアユは醤油炊きにすることが多い。また、鮎のわたを抜いて、身を薄く輪切りにしてドロズ（酢味噌）を付けて食べることもある。

ウルカを作ることもある。ウルカはアユのワタ（内蔵）の塩辛で、苔を食べているときのものが一番旨いがいくらかとれない。ワタの分量と同量の塩で漬け込む。アユが捕れる度に継ぎ足して行く。毎日混ぜて、浮いてきた脂はすくって捨てる。卵と白子が出てくると量はたくさんとれるが味は落ちる。落ちアユのものはまったく使えない。ウルカの中にアユの身を刻み入れることもある。

【漁具と漁法】

【トアミ漁】

網漁の中では最も一般的な漁法である。コアユ、オアユともに漁獲の対象となる。オアユを対象としたものは、以前は漁期中いつでも行っていたが、近年では友釣り終了してからの晩期のみに行われている。

アユのいるとおぼしき処で網を打つ。流れの急なところ、底石の大きな処には適さない。錘りが流れにより浮き上がりアユが逃げてしまうからである。アユは非常に敏捷な魚で、石と石の間を縫うように泳いで逃げて行く。

網を打つときは、水面近くに低く広げ、網の向こう側を先に落とすようにする。

アユ漁に使う網は、朝顔型に開くものを用いる。比較的浅いところで用いるからである。これに対して、深いところで用いることの多いマス、ウグイ、コイ等の投網は、釣り鐘型のものを用いる。深いところに早く沈めるためである。

投網に用いるイワ（錘り）はヒル型のものが多かったが、最近では鎖型が主流となっている。流れのあるところではヒル型の方が優れているとのことである。

網に用いる糸は細ければ細いほどよく魚が入る。近年では0.6号ぐらいのナイロンテグスを用いることもある。

捕れたアユはビク等に入れる。友釣り等の場合とは異なり生かしておくことは少ない。

（漁具解説）

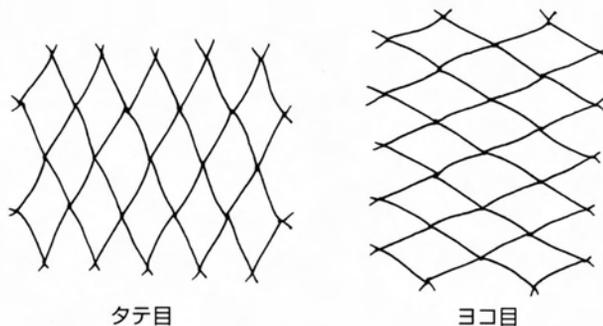
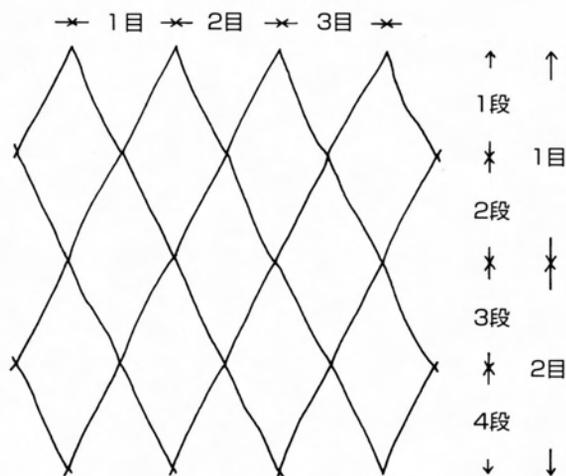
図-2 朽木村岩瀬

比較的小型の網で、全て手編みである。ほぼ10段ごとに目数を増やし朝顔型の網に仕立てる。

網丈は200cm、139個のイワが付く。手網の長さは400cm。網と網の接続部分は桐製の筒に通す。

網本体は絹糸の手編みで、全体に洗水と、防腐のために柿渋を施す。イワ（錘り）はヒル型の鉛製である。

編み目の構成は別表に示した。



補図 編み目に関する基本図

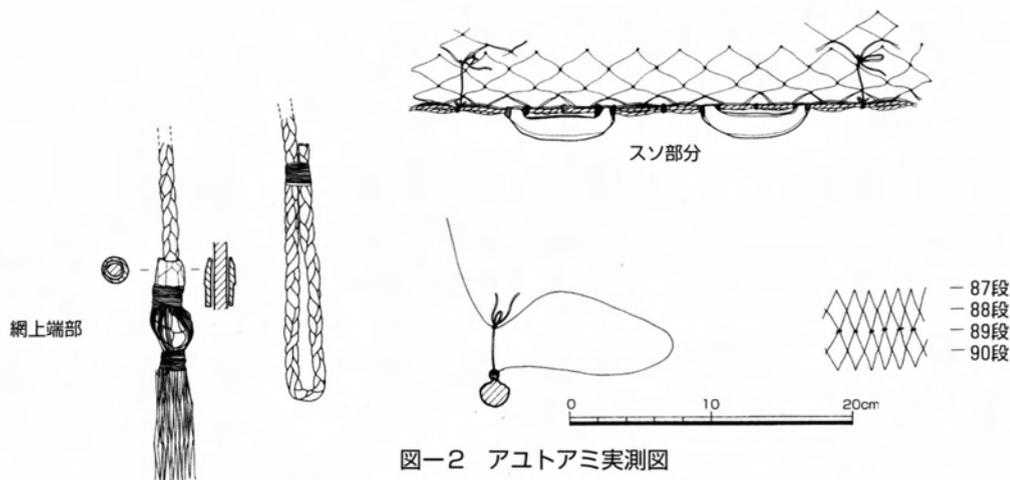


図-2 アウトアミ実測図

表1 アウトアミ網目構成表

段数	増し目方	増し目	目数
編始め	—	0	100
8段	—	0	100
9段	横5目おきに1目増し	20	120
~18段	—	0	120
19段	横3目おきに1目増し	40	160
~28段	—	0	160
29段	横4目おきに1目増し	40	200
~38段	—	0	200
39段	横5目おきに1目増し	40	240
~48段	—	0	240
49段	横6目おきに1目増し	40	280
~58段	—	0	280
59段	横7目おきに1目増し	40	320
~67段	—	0	320
68段	横8目おきに1目増し	40	360
~76段	—	0	360
77段	横9目おきに1目増し	40	400
~85段	—	0	400
86段	横10目おきに1目増し	40	440
	—	0	440
89段	やや太い糸にかえる		
~96段	—	0	440
97段	横11目おきに1目増し	40	480
~107段	—	0	480
108段	横12目おきに1目増し	40	520
~119段	—	0	520
120段	横13目おきに1目増し	40	560
	—	0	560
138段	165段目を138段目にくくりつけ袋とする。		
	—	0	560
165段	—	0	560

【ハリアミ】

下部に袋を付けた刺し網状の網を用いる漁である。使用法には2種類ある。一つは、流れを遮断するように網を張り、下流から上流に向けてアユを追い込み、目に刺すか、袋におとして漁獲する方法である。

もう一つは、流れの上下を複数の網で遮断し、中に閉じこめたアユを後述するヒカケにより漁獲する方法である。

この漁具による漁法が広まったのは比較的新しいことのように見える。

(漁具解説)

朽木村野尻 図-3

全長1700cm、網丈155cmを測る。網目は1辺1cm。網地及び網等の繊維類は全て科学繊維を用いる。アバ(浮き)は針葉樹製(サワラ?)、イワ(錘り)はヒル型の鉛製。

【サデアミ漁1】

大型の楕円形のすくい網を用いる、コアユを捕るための漁。この漁は2名以上で行う。一人は、魚群の下流でこの網を河床に強く接地させ待機する。もう一人は上流からウナワと呼ばれる竿先に烏の羽根を付けたもので魚群を散らさないように網の中に追い込む。この漁は鵜を恐がるアユの性質を利用したものとも言われている。

この漁は安曇川本流では余り行われていない。川幅が広すぎることで、水量が多いことから魚群をうまくまとめることが出来ないためである。この漁が行われるのは安曇川に流入する小河川や、高島町を流れる鴨川のような比較的川幅の狭い、水量の少ない河川である。

この漁は、アユ漁の他に冬季にハヤ等の雑魚を捕るのにも行われる。

(漁具解説)

図-4

網枠はマタケの割り竹2枚で構成される。上記したようにこの漁の要件として網枠を河床に強く接地させる必要があるため、網枠に柔軟性が求められるからである。柄は杉材。

網地は科学繊維製(ナイロンテグス)で、市販のものを仕立てたものを用いる。網目は1辺0.7cm。

網地は径1.09mmの銅線を介して網枠に固定する。網枠は柄に釘止めする。

[サデアミ漁2]

遡上するコアユをすくい捕るための漁。主な漁場は堰堤の下など底の平らなところである。遡上期のコアユは、堰堤に行く先を阻まれると、しかたなく堰堤の下に群れることになる。これをすくい捕る漁である。

安曇川では中流の堰堤で用いる。また、近年では、小堰堤のたくさんあるマキノ町の知内川まで行って漁をすることもある。

安曇川中流では、この漁によるコアユの多獲のため、上流の朽木村とのいざかいが多くあったとのことである。

(漁具解説)

安曇川町広瀬 図-5, 6

この2種類のサデアミ(タモアミ)は同一人が同じ漁に用いるために作成したものである。形状は著しく異なるが、共通点もいくつか読み取れる。

一つは、網枠が強固に作られ、その先端が直線であることである。これは、堰堤下のコンクリート面を押すように使うことから、曲線では隙間が生じ、効率の良い漁獲が望めないためである。

もう一つは、網枠の先の部分が二重になっており、網地を結束するための紐がコンクリート面に直接接触れることの無いようにしている。これもこの漁具の操漁上最も痛みやすいのが先端部分であり、摩擦による破損が最も生じやすい部分が網地を固定する紐の部分であるからである。

図-5のサデアミは半円状の形状を持つ。網枠は鉄製で、先端部分は二重になっている。柄は杉材で、ビニールテープが全体に巻かれている。

網地は、ナイロンテグス製の市販品を仕立てたものが使われている。網目は1辺0.7cm。網地は径1.3mmの銅線を介して網枠に接続される。

図-6のサデアミは長方形の形状を持つ。網枠は鉄製で、これも先端部分は二重になっている。柄は木製で、柄の先端にはスコップの取っ手が転用されている。

網地は、ナイロンテグス製の市販品を仕立てたものが使われている。網目は1辺0.7cm。網地は径1.3mmの銅線を介して網枠に接続される。

[サデアミ漁3 (ニゴリスクイ:ニゴリクミ)]

大雨による一時の増水時に、岸近くの淀みに集まるアユを始めとする魚をすくい捕るための漁。

朽木村岩瀬などでは、岸の岩盤を掘り抜いて作った麻蒸のくぼみに集まる魚をすくい捕ったりもした。

増水時のこの漁のため、危険がつきまとう漁である。

漁具の形状に定形はないが、いずれも岸から淀みの中を狙うため、長い柄の着くことが特徴となっている。

(漁具解説)

安曇川町長尾 (図-7)

ほぼ円形の網枠に長大な柄が付く。網枠は鉄製。柄は杉材。網地はナイロンテグス製の市販品を仕立てたもので、網目は1辺0.7mm。

[アユカケ漁(トモツリ:オトリツリ:オトリガケ)]

定着生活を送るようになったアユが縄張りを持ち、その中に侵入する他のアユを体当たりして撃退する性質を利用した釣りで、アユ漁の中では、最も一般的な漁法である。現在は、遊漁として重要な位置を占めている。

この漁により漁獲されるアユは、網漁によるものとは異なり、漁体を痛めることが少ないことから、生かしたまま出荷するためには最も適していた。先にも述べたように、アユが高価に取り引きされるのは活けアユのみであるから、漁獲したアユの扱いには細心の注意を払う必要があった。

漁具の基本的な構成は、おとりとなるアユを道糸に接続させる部分と、野生アユを掛けるための鉤の部分からなる。これらの構成は、地方により、時代により大きく異なるため、代表的な仕掛を図示しておく。(補図-2)

ここで取り上げる昭和初期から昭和30年代頃までの仕掛では、竿は3間前後の自然の竹。道糸は絹糸に渋を施したものや、木綿糸。針素は馬の尾を用いた。おとりと針素の接続方法は、古くは木綿糸を鼻

に通して付けていたが、針金による鼻環を用いることが多くなってきた。鉤は1本くりものを数本付けるものが古い形態であるが、後に2本くり、3本、4本を碇型にくくったものが主流となる。

おとりと掛け鉤の接続方法は、古い形態では鼻環等からそのままおとりの後ろに流す方法であったが、近年では逆鉤を用いて、おとりの尻鰭部分に針素を仮止めすることにより、掛け針を尾びれの付近に保持し、野生アユの掛かりを良くするようになってきた。また、ごく近年では、針素をおとりの背に背針を用いて仮止めし、おとりの潜りを良くすることも行われている。

用いる鉤は、掛かりを良くするためかえりの無いものを用いる。伝承の範囲では全て購入品である。

針素には馬の尾を用いる。これは、適度な硬さと張りがあるため、掛け鉤が垂れ下がること無く、おとりの後ろに位置するためである。この馬の毛は生きた馬のものでなければならないとのこと。また、断面形が円形のものが良く、平らなものはすぐ切れてしまって適さないとのことである。

トモヅリは循環の釣りと呼ばれるように、釣り上げた野生アユを次のおとりにし、常に元気のよいおとりを用いなければならない。おとりに元気がなく、水に潜らないようでは釣果は望めない。そのためには、おとりに使えるアユを上手に手にいれなければならないことになるが、野生アユを捕った時の鉤の掛り位置でおとりの善し悪しが出てくる。一番良いのが背に掛かった場合。二番目が尾。三番目がえら、口に掛かった場合である。腹に掛かったものはおとりに使えないことはないが、すぐ弱ってしまう。胸に掛かったものはほとんどの場合おとりに使う前に死んでしまう。(図-8)

生かしたまま出荷するためにも、背に掛けて元気なままアユを捕るのがいいわけであるから、アユを掛ける鉤の位置を調整する。すなわち流れが通常の場合、補図にしめしたような鉤と掛かり所の位置関係となる。流れの激しい場合はやや針素を延ばすようにする。流れが緩やかな場合はこの逆とする。

次に、ポイントであるが、アユは岩に付いた藻を食べるから岩の多いところとなる。また、水流のあるところの方が大きなアユが住み着いている。

このような場所で型の良いものを狙うときは、鼻環の前に錘りを付けおとりを沈めるように操作する。反対に数を狙うときは仕掛を軽くして川幅を広く狙

うようにする。いずれにしてもおとりが沈まないとおとりは掛からない。

おとりを沈めるためには錘りの他に竿の操作が肝要となる。竿先を下げたおとりが底に潜り込むように操作する。

上手な人は竿尻から3尺ほど仕掛を長くし、自在におとりを操ることが出来たという。普通の人でも仕掛は竿尻から5寸程出して使った。

掛かったアユはタモで受けるが、昔は桶で受けていた。そして川にかけたイケタンゴ(桶)に移して生かしておいた。

前述のように、掛かり所が悪く生かしておけないようなアユは、ワタを出して開き、陽で良く焼けた石の上で乾かしておき晩のおかずにした。

トモヅリに使う最初のおとりは、後述する引っかけ漁で捕ることが多かった。

安曇川の長尾では6月の30、31日は、田植えの泥落としの日で、普段川に入らないような人もアユ捕りに興じた。

友釣りが遊漁化するのに歩を合わせて釣りの技法は大きく変容している。ここで報告した技法はあくまでもアユの職漁が成立していた時代の技法である。

(漁具解説)

安曇川町長尾、朽木村岩瀬、朽木村雲洞谷

図-9 オトリガケの仕掛(ヤナギ)

道糸より先の部分である。馬尾を二重よりしたものの針素の先糸とし、途中にビーズを付け鼻環の移動を止める。道糸側の先端に結び瘤を作り道糸の乳輪に止める。針素側の先端には乳輪を作り針素を止める。針素は馬尾の両端にカエリの無い鉤を結び途中で折り返し乳輪を作り先糸に接続する。

図-10 オトリガケの仕掛

ハリスの部分のみである。ハリスに2本の掛け鉤を結び、糸の先端に開縮する輪を作りおとりアユの尾びれにこの輪を広げて直接付ける。最近の工夫か。

図-11 オトリガケのタモ

掛けたアユを取り込むためのタモ。普段は柄を腰紐にさしておく。下部が袋状になっており、水を溜めることが出来る。掛けたアユを一時この中で生かしておいたり、おとりの交換の際もこの中で行ったり、ポイントの移動の際におとりをこの中で生かしておいたりするなど実に多様な機能を持つ。

網枠はカヤの枝をたわめたものを整形している。袋の部分は木綿製。途中に隙間を設け袋の下部にのみ水が溜まるようにする。

[ヒッカケ漁]

水中を泳ぐアユをハコメガネなどで見ながら掛け捕る漁法。

鉤は、掛け鉤をシノベ竹を筒状に切断したものにアユカケバリを2本結び付けて作り、竿に付けた糸と接続する。鉤の形状は地域により異なるようである。また、鉤は小さい方が漁体を痛めないため良いとされている。

道糸は以前はホンテグスがもつれなくて良いとされていたが、非常に高価なもので、一本が大アユ1匹の値段ほどもした。現在はナイロンテグスである。

竿は竹の先に鉄芯を付けたもので、鉄芯の先にシノベ竹を通して用いる。本流で用いる竿は長く、支流で用いるものは短い。水中を見るハコメガネ(ノゾキ)は木製の箱の前面にガラスを取り付けたもので中に顔をいれ、縁を喰わえて用いる。

前述したハリアミと複合的に用いることもあった。

なお、ノゾキは後述するマスのヒッカケやウナギのヒッカケにも同じものが用いられた。

(漁具解説)

図-13 ヒッカケバリ

朽木村雲洞谷で用いられるヒッカケの鉤である。2本の鉤を並べて用いる。

図-14 ヒッカケバリ

朽木村岩瀬より下流で用いられるヒッカケの鉤である。シノベ竹の両側面に鉤を付ける。

図-15 ヒッカケの竿

本流で用いる長大なもので、操るには相当の腕力と技術を必要とした。途中に2箇所道糸を通すための輪が針金で作られている。

図-17, 18 ノゾキ

16は、朽木村岩瀬で用いられていたノゾキで、17とはほぼ同形状である。ただ、16の内面には予備の掛け針が装着されている。

図-15は、安曇川町長尾で用いられていたノゾキで、急流で用いるものである。16, 17が横型であったのに対して、縦型の形状で、水流に対して抵抗を減ずるように工夫されている。用いるときはこの箱の中に顔をすっぽりと入れて殆ど流れと平行した状態で用いた。

[定置漁]

安曇川流域では、鮎を捕るための各種の定置漁具による漁が行われている。

中でも最も著名なものは、河口付近で行われているカトリ梁漁であろう。これについては昭和54年に滋賀県教育委員会から詳細な報告がなされているため今回は割愛する。現在、中流域を中心に行われている定置漁法は、遡上する鮎(他に鱒、雑魚)を捕るためのものと、産卵のため降る鮎を捕るためのものとに大別される。

(遡上する魚を捕るための定置漁具。)

これに類する漁具は、川の流れに遡る魚の習性を利用してのもので、河口で行われているカトリ梁の漁獲原理と同様のものとなっている。名称は広瀬付近ではタキ、市場付近では、現在はみることは出来ないが、カトリと呼ばれていたようである。

漁場として選ばれる場所は、本流、支流様々であるが、いずれの場合も、流れの主流を遮蔽し、水流を片側、或いは両側に集める部分と、漁獲部を設ける分流部分に分かれる。(図-19)

水流を片方に集めることにより、流れに遡って遡上する魚は川の片方に集まり、遮蔽施設と岸の狭い間を遡上しようとする。このままの状態であれば、この部分の水流は激しく、多くの魚は水流により押し戻されてしまう。そこで、ここに、分流施設を作り、さらに分流部の下方に漁獲施設を設け、水流により、分流部に押し流された魚を漁獲する。

漁獲原理としては、カトリ梁のように落差のある漁獲部を設けることが出来る場合は、複雑な施設を設ける必要はないが、落差の無い場合は、漁獲部前面にカエリを付けるなど、入った魚が逃げ出せないようにするための施設を必要とする。(図-20・21)

これに類した漁法としては、中部地方の河川で見られるノボリオチ漁等が知られている。

(降る魚を捕るための定置漁具)

いわゆる降り梁に類する漁具であるが、川の本流全体を遮蔽し、漁具を設置するといった大がかりなものは見ることは出来ない。

現在見ることができるのは、朽木村市場で合流する支流、北川の上流部で見られる小規模なハサと呼ばれるものである。

北川の上流部では農業用水を取水するための堰が各所に設けられている。堰の上部からは用水路が分流され、水田に水が供給されるが、水を必要としな

い時期には、用水路に設けられた樋門によ水路を閉じ、本流に排水される。ハサはこの排水部分に設置される。

ハサの構造には規格性は認められないが、何れのものも、排水部分からの水を漉し取るような位置に設置されている。

漁が行われるのは9月の初旬から彼岸の頃までで、台風などによる大水が出たときの一時期に行われる。鮎は大水にのって産卵のために流すからである。流下する鮎を効率よく捕ろうとすれば、川全体を遮蔽する施設を作ればよいが、このためには多額の経費と河川管理上の問題が生じるため、事実上行えない。また、本流と水路の間に適当な段差のあることも見逃せない。このため、漁場として手軽に選ばれているのが用水分流の本流への排水部分ということになる。しかも、鮎が降るのは本流の激流部分ではなく、岸近くのやや流れの緩い部分でもあることから、小規模な定置漁具ではあるが比較的効率よく漁獲することができる。

ここでは、3箇所のハサの例を示すこととした。

この漁は、かつては安曇川の本流で中州により分流されているような所でも行われていたというが、現在はみることは出来ない。(図-22・23・24・25・26)

【その他の漁具・漁法】

そのほかに、現在はみることが出来ないが、伝承により知り得た漁を記しておく。

(オオモジ漁)

降りの鮎を始めとする魚を捕るための漁で、定置漁法に分類される。

断面半円系のカエリの無いシノベ竹で作ったモンドリを川が中州により分流されているような所に仕掛ける。モンドリの前面に水流が集まるように石で流れを導く。詳細に付いては調査途中で伝承者が鬼籍の人となったため不明である。イメージとしては山梨県富士川の中流域で行われているモジリ漁を小型にしたようなものようである。

(カワボシ)

これも川が中州により分流されているような所で行うもので、片方の流れを止め、下流に仕掛けたモンドリに魚を追い込むものである。

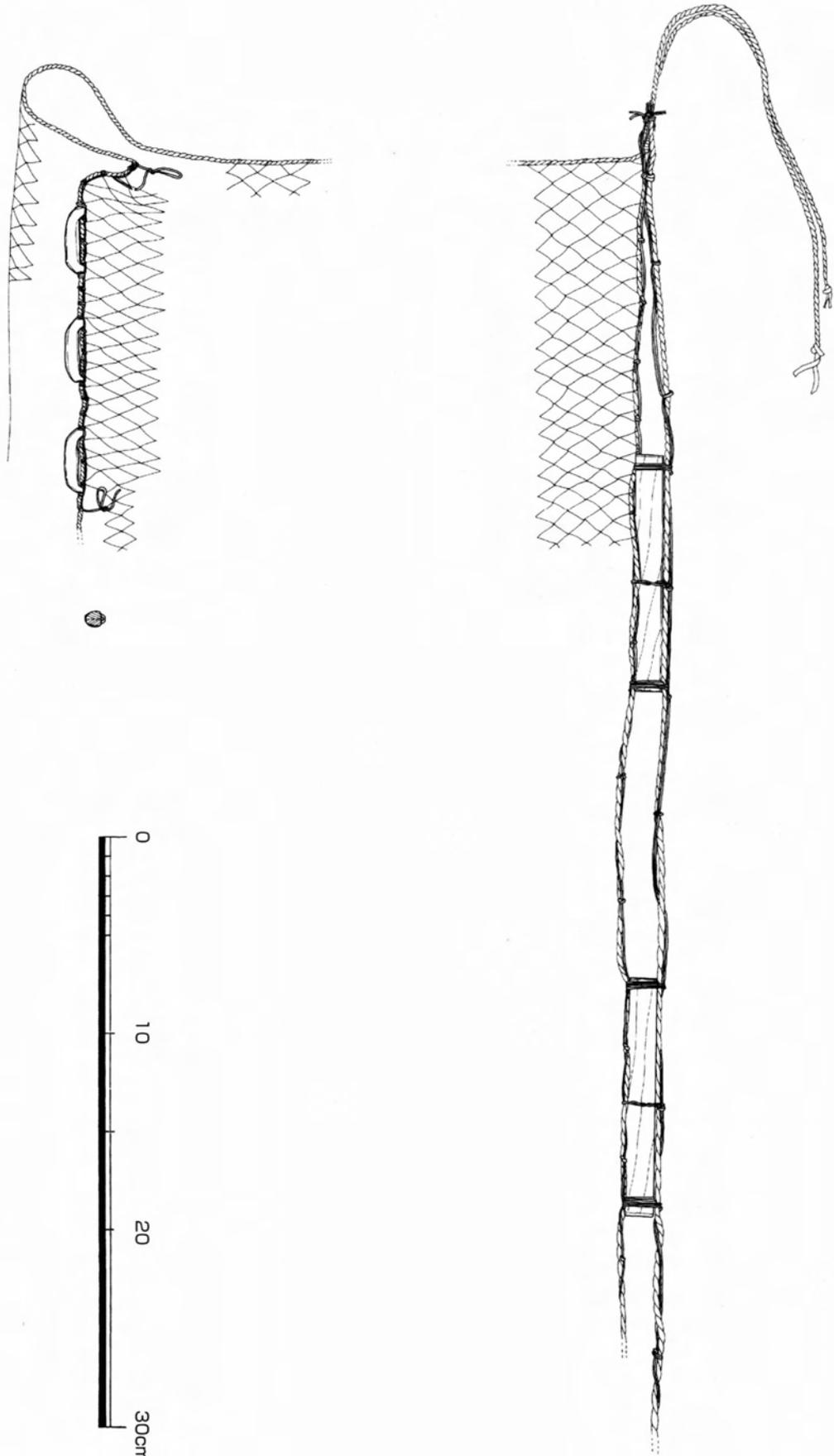


図-3 ハリアミ 実測図

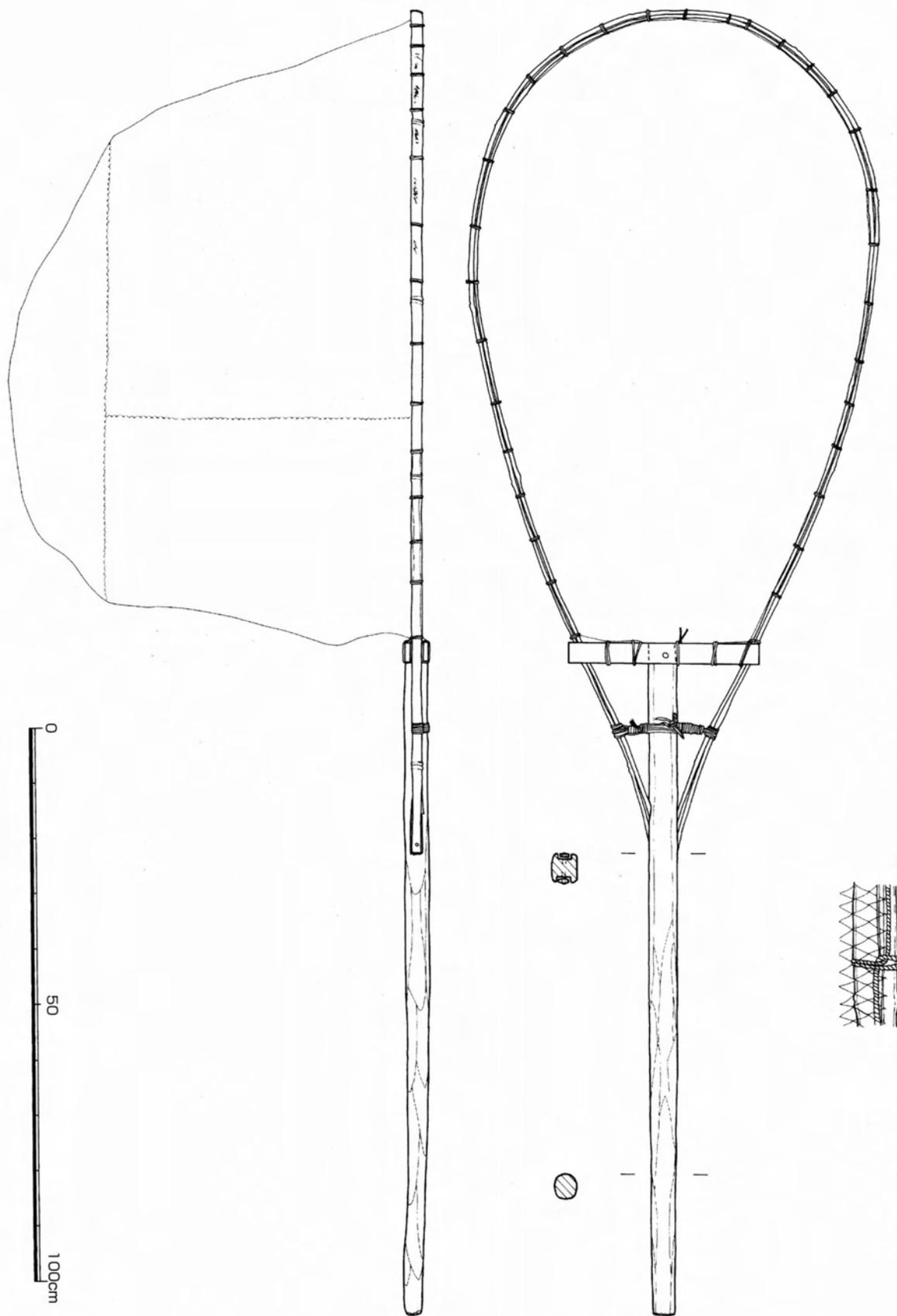


図-4 サデアミ1実測図

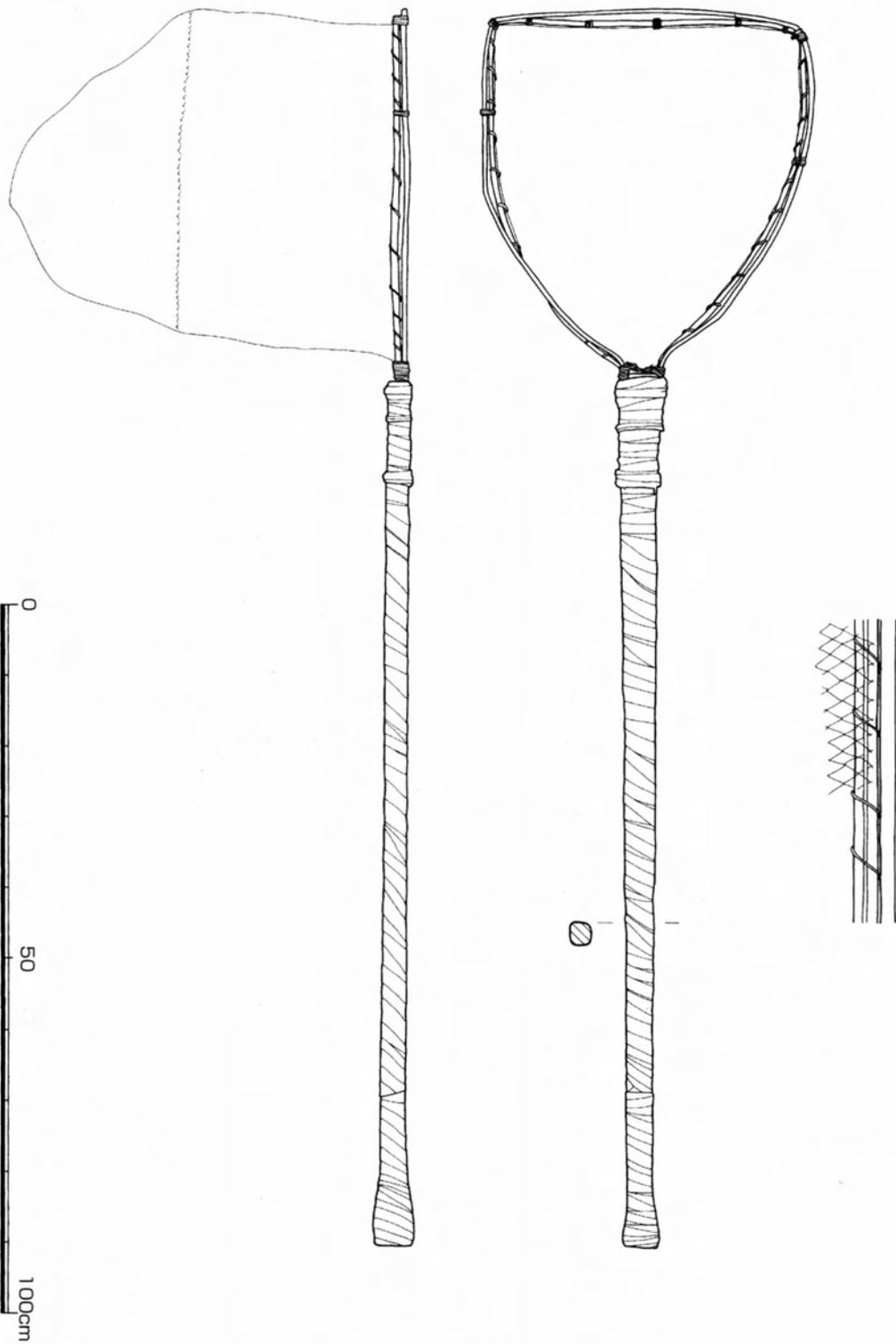


図-5 サデアミ2実測図

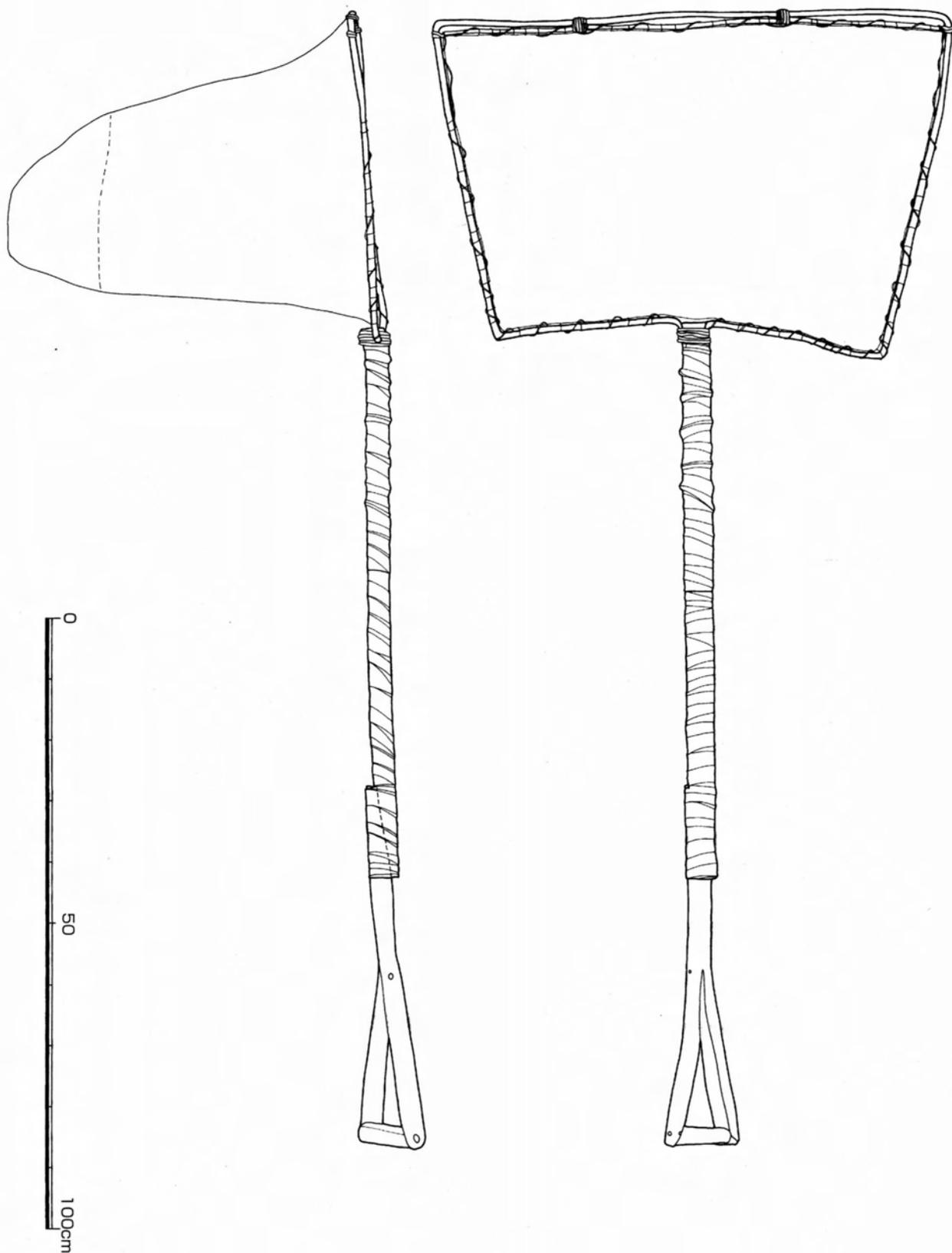


図-6 サデアミ 実測図

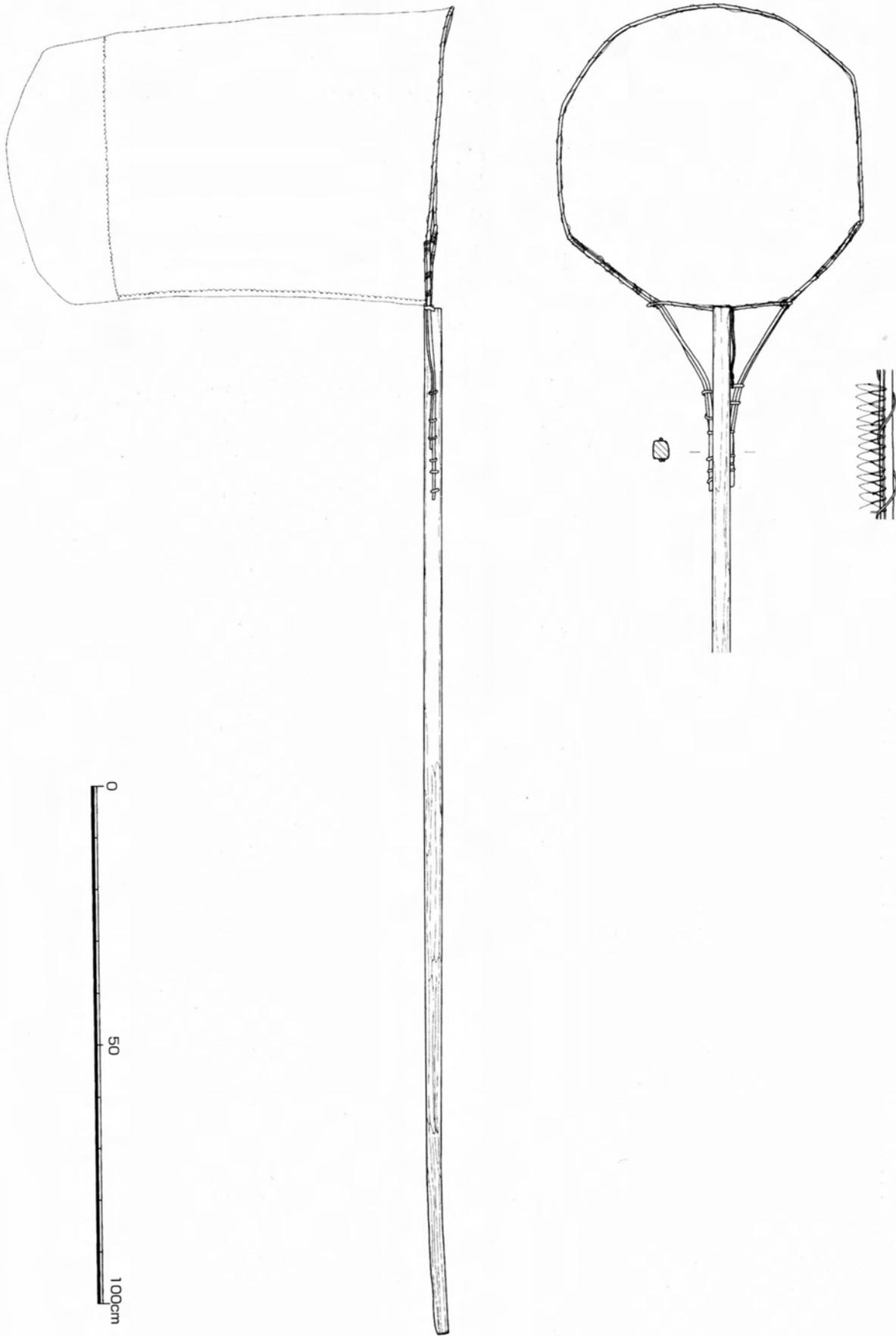
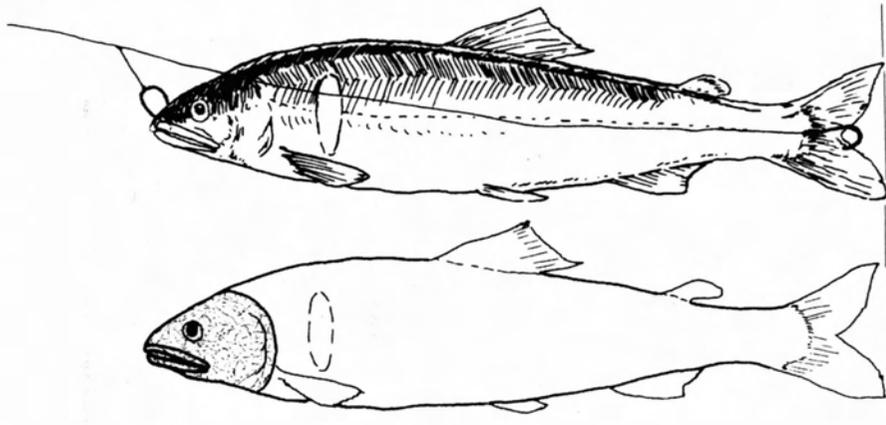
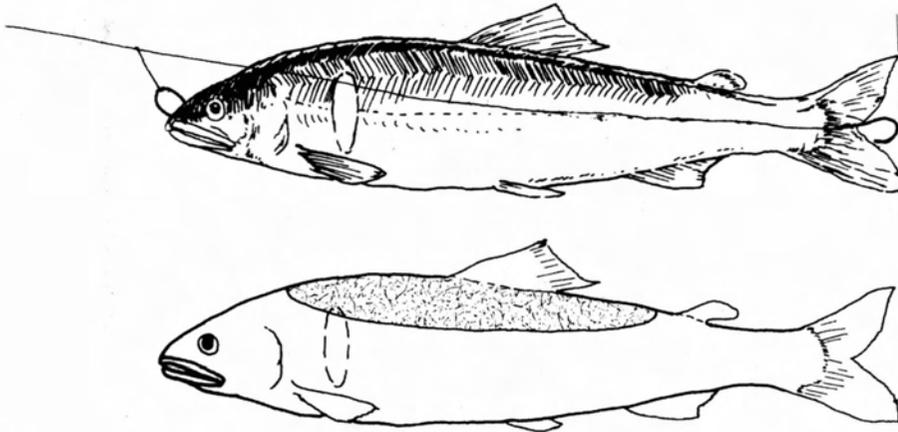


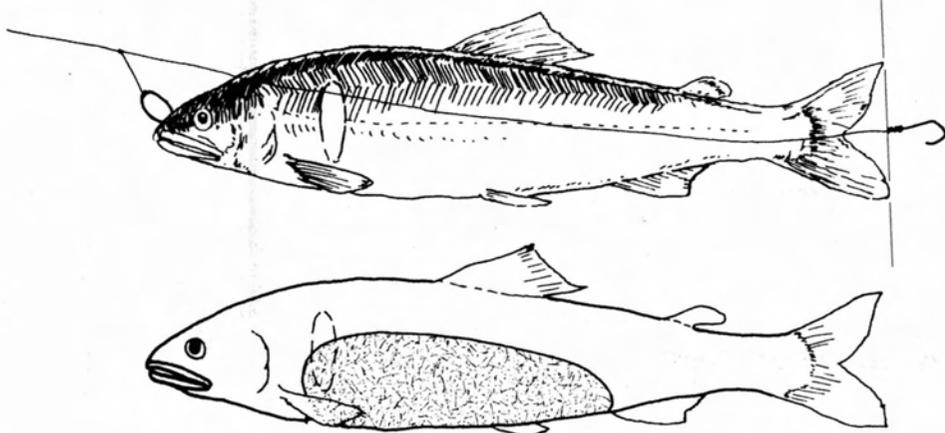
図-7 ニゴリスクイ 実測図



頭 口掛り



背掛り (おとりに使うのに最もよい)



胸 腹掛り (おとりとしてつかえない)

図一8 掛釣の位置と掛り位置の関係

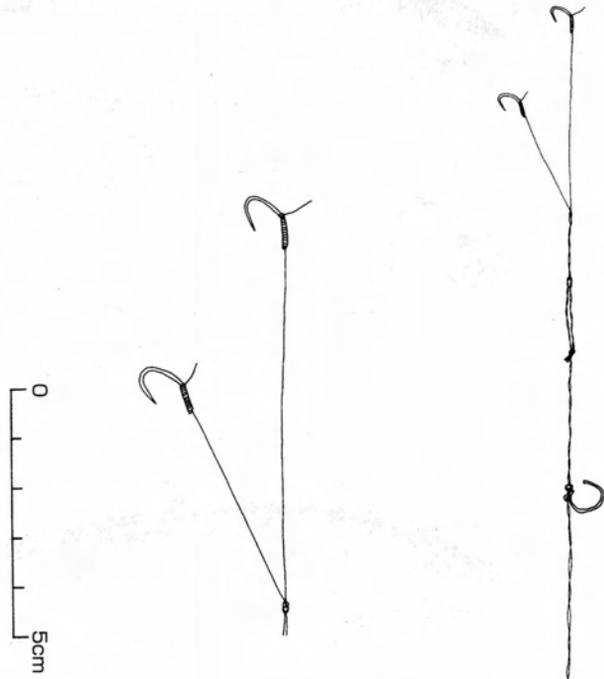


図-9 オトリカケの仕掛

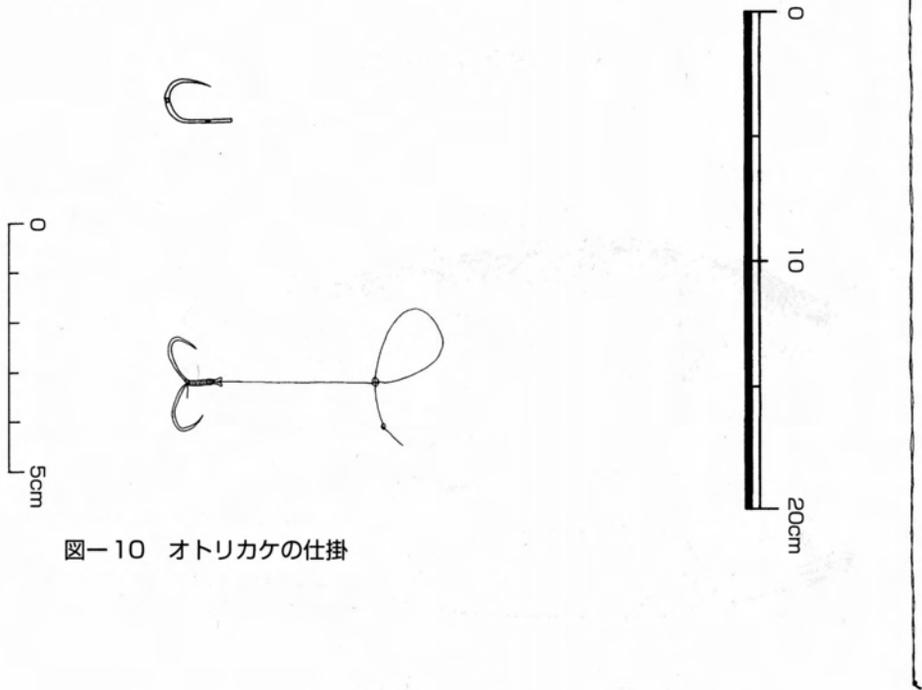


図-10 オトリカケの仕掛

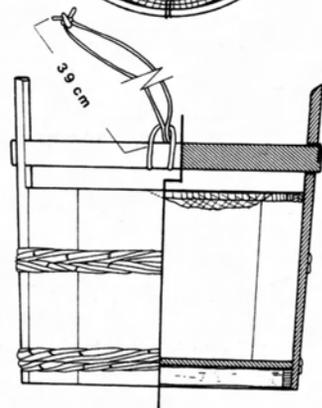
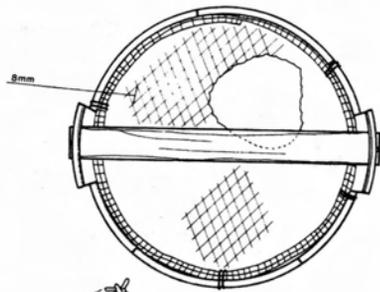
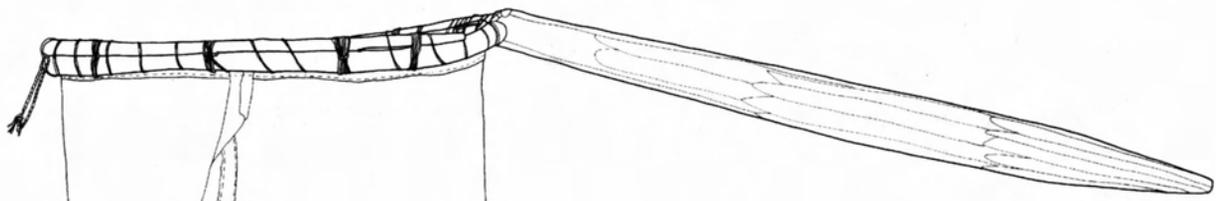
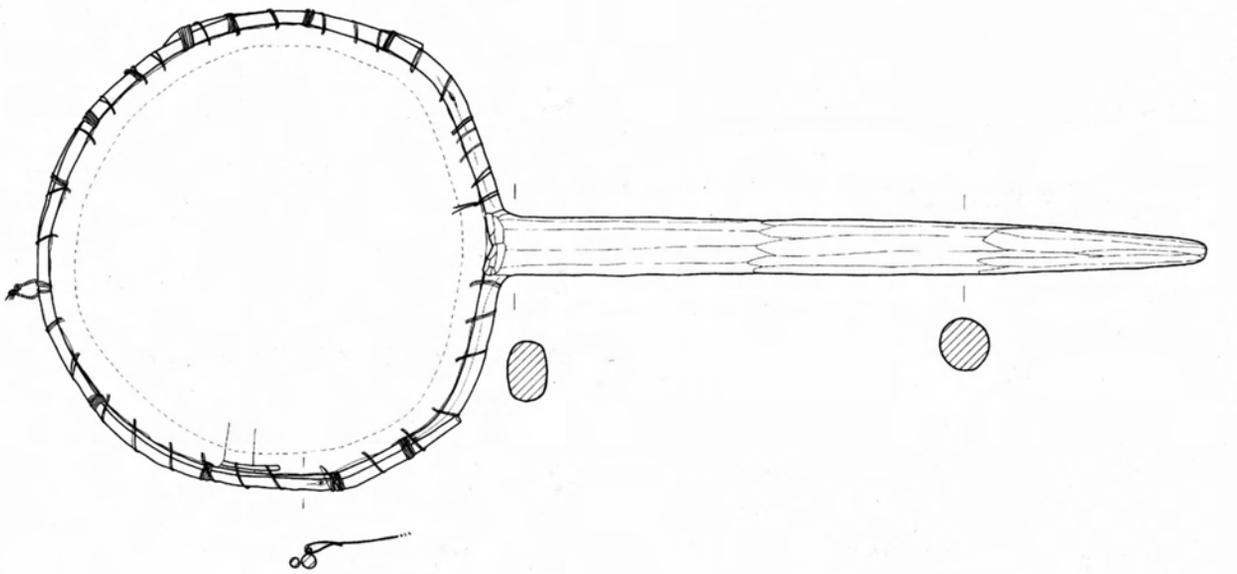
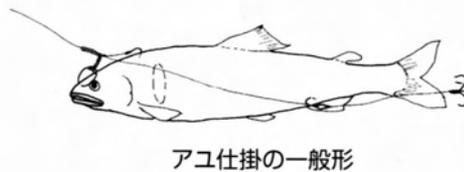
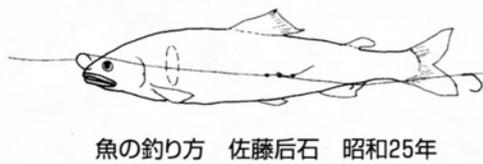
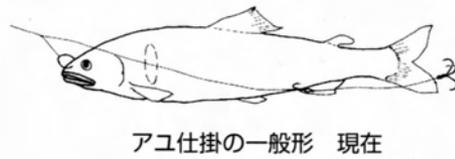
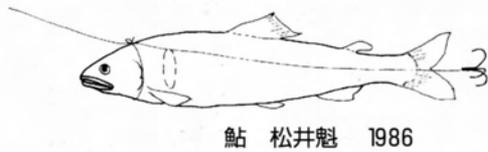
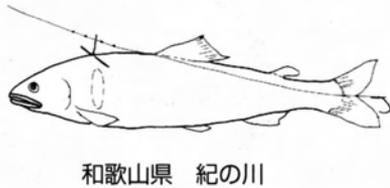
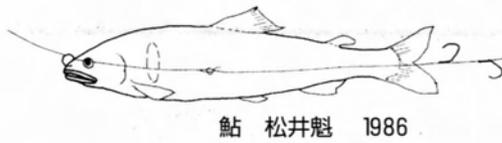
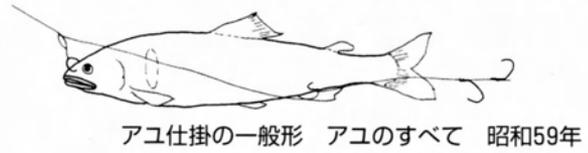
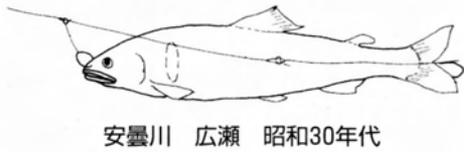
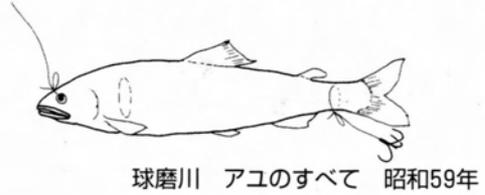
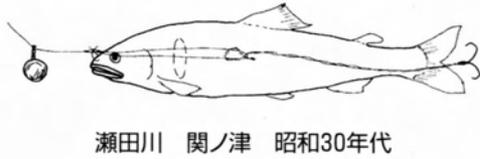
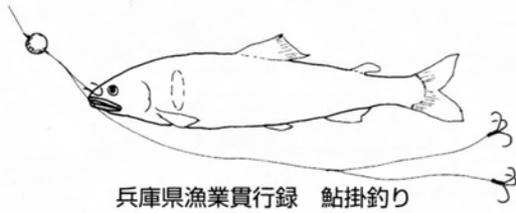


図-11 オトリガケのタモ

図-12 オトリオケ (参考 高島町・永田)



挿図-2 トモツリ仕掛

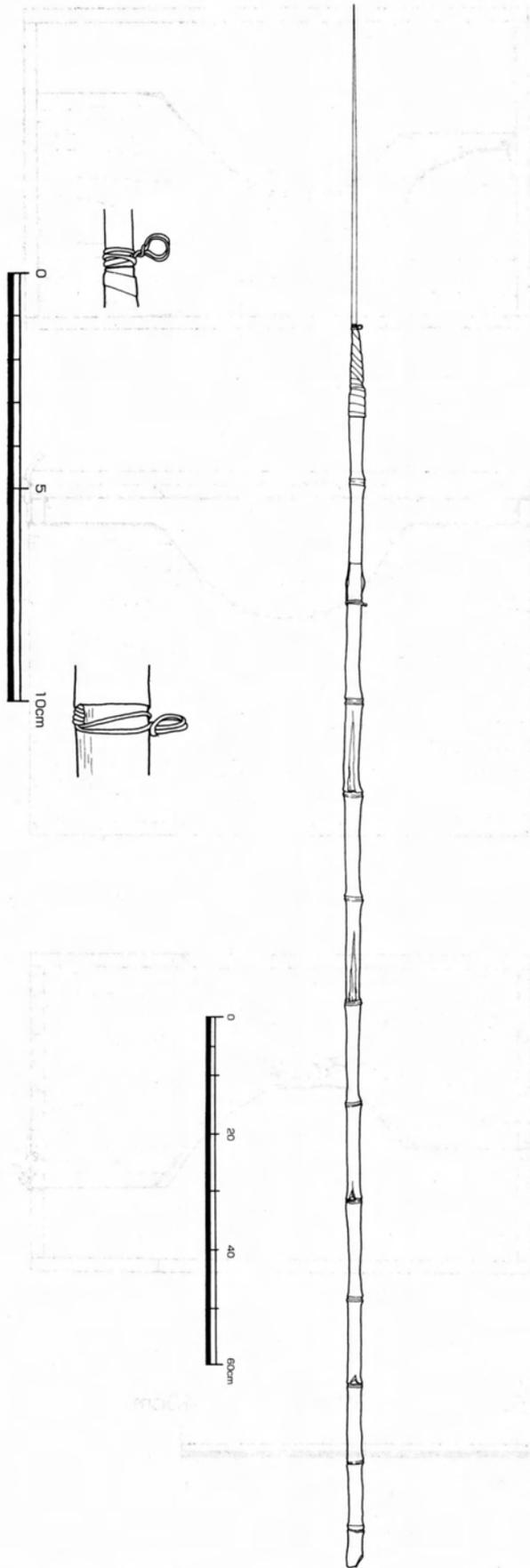


図-15 ヒッカケの竿



図-14 ヒッカケバリ



図-13 ヒッカケバリ

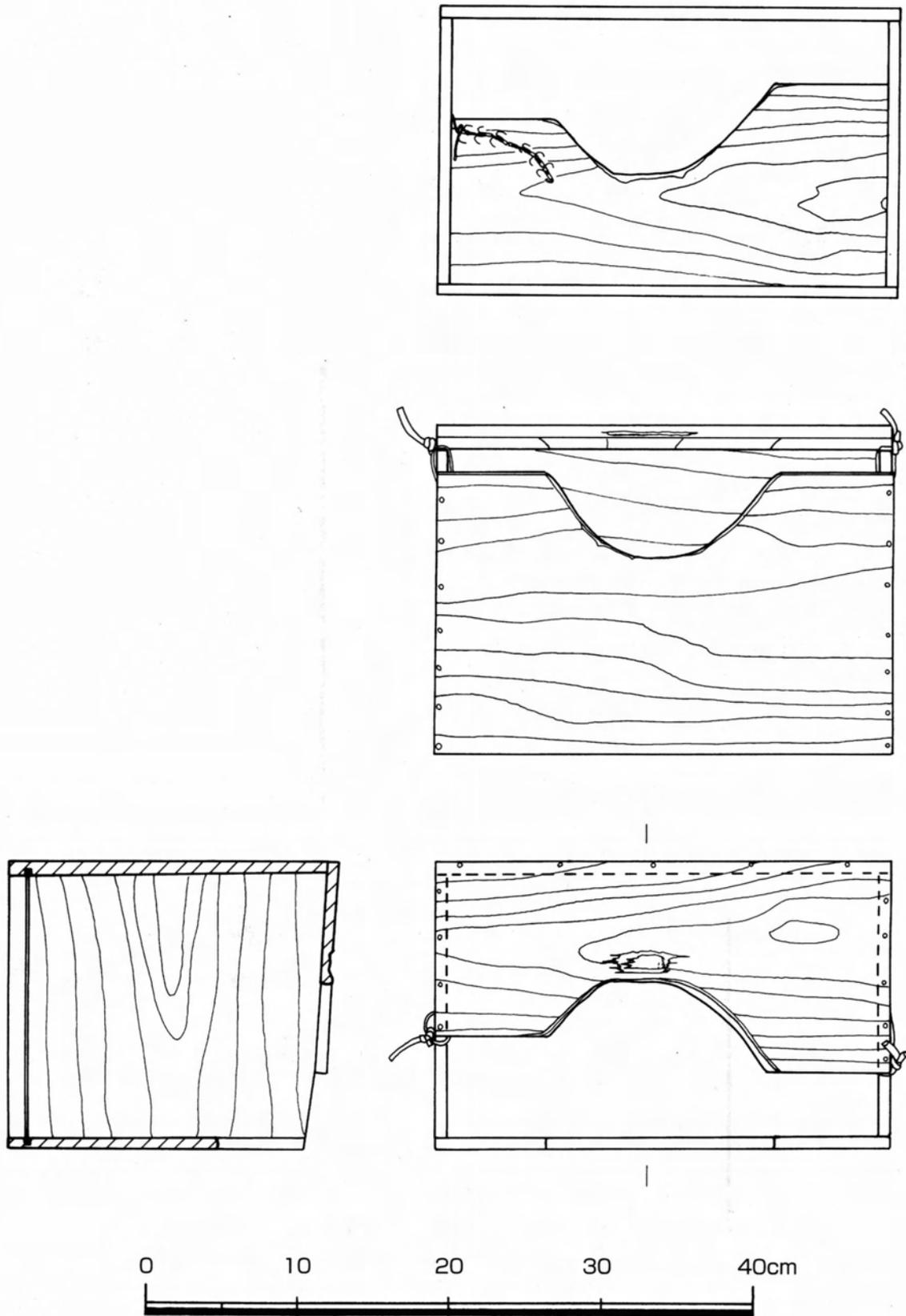


図-17 ノゾキ

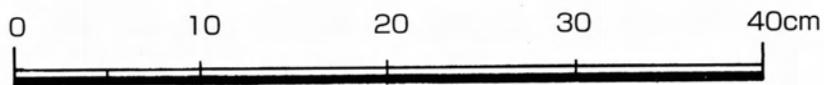
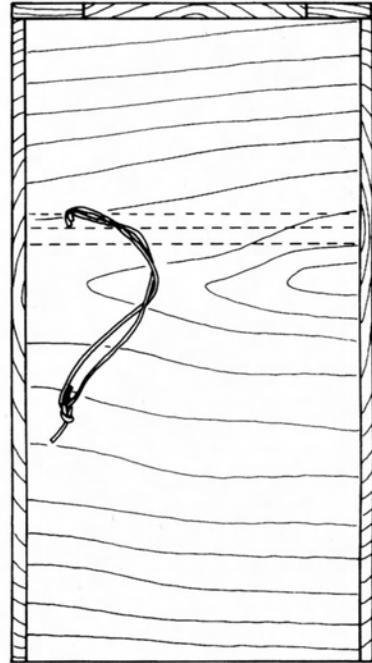
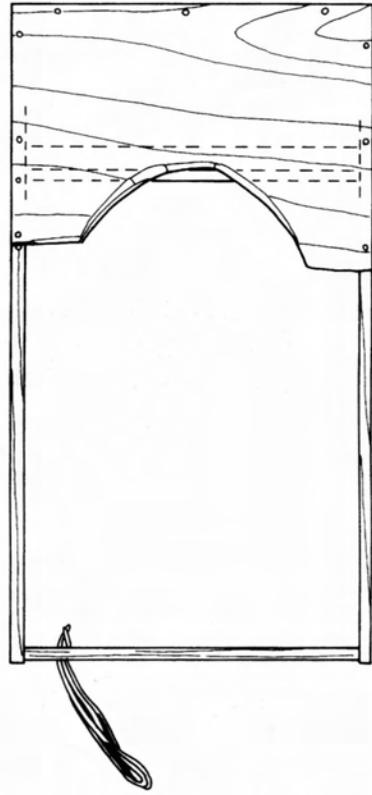
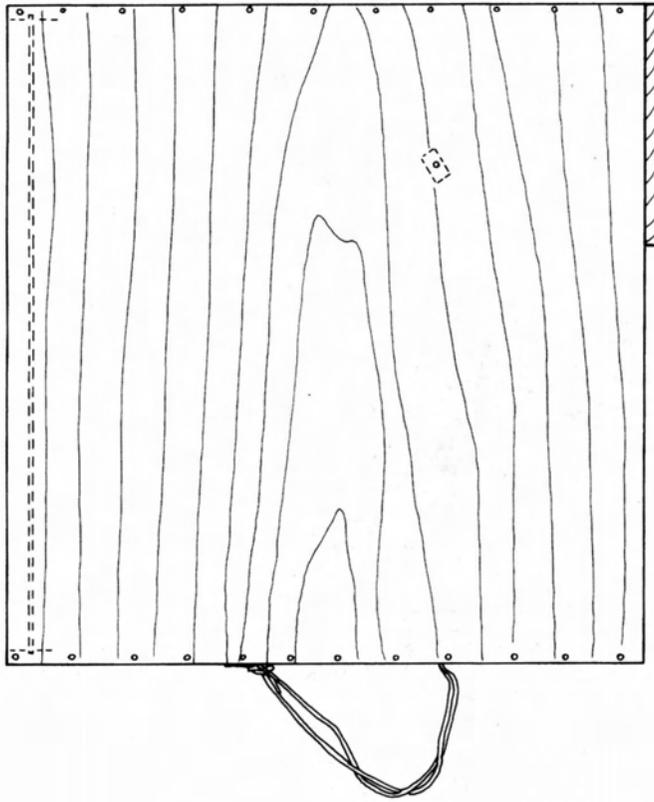


図-18 ノゾキ

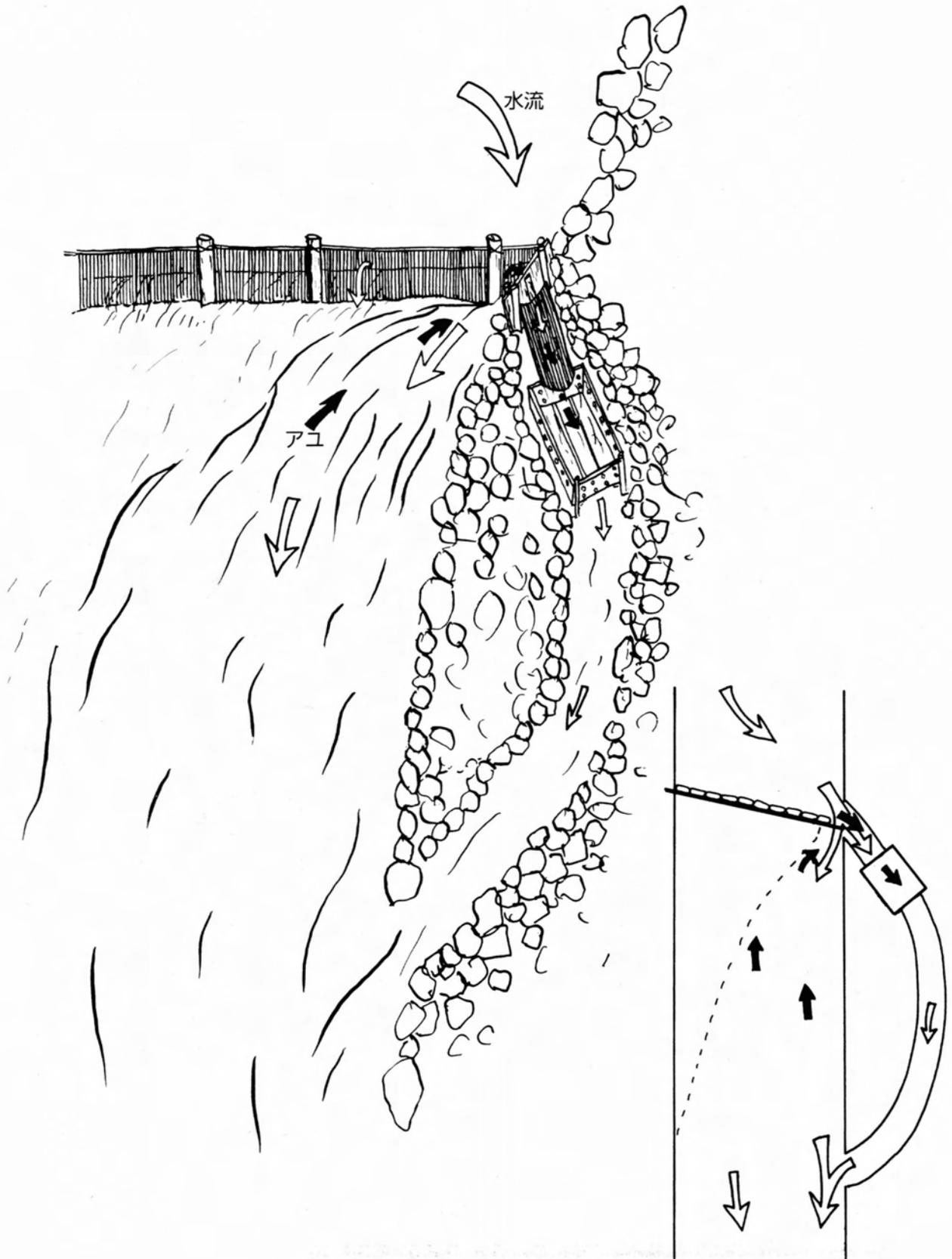


図-19 カッタリ模式図

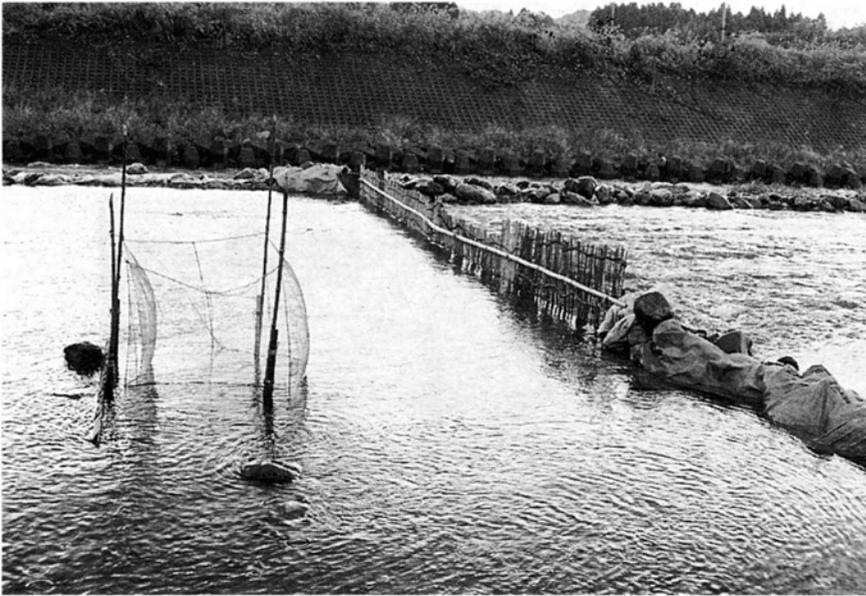
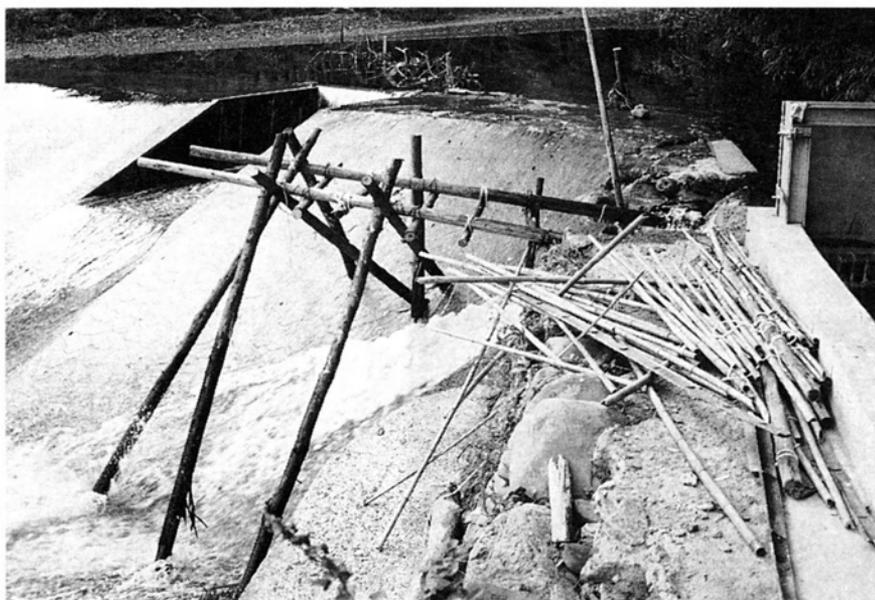


図-20 本流のタキ



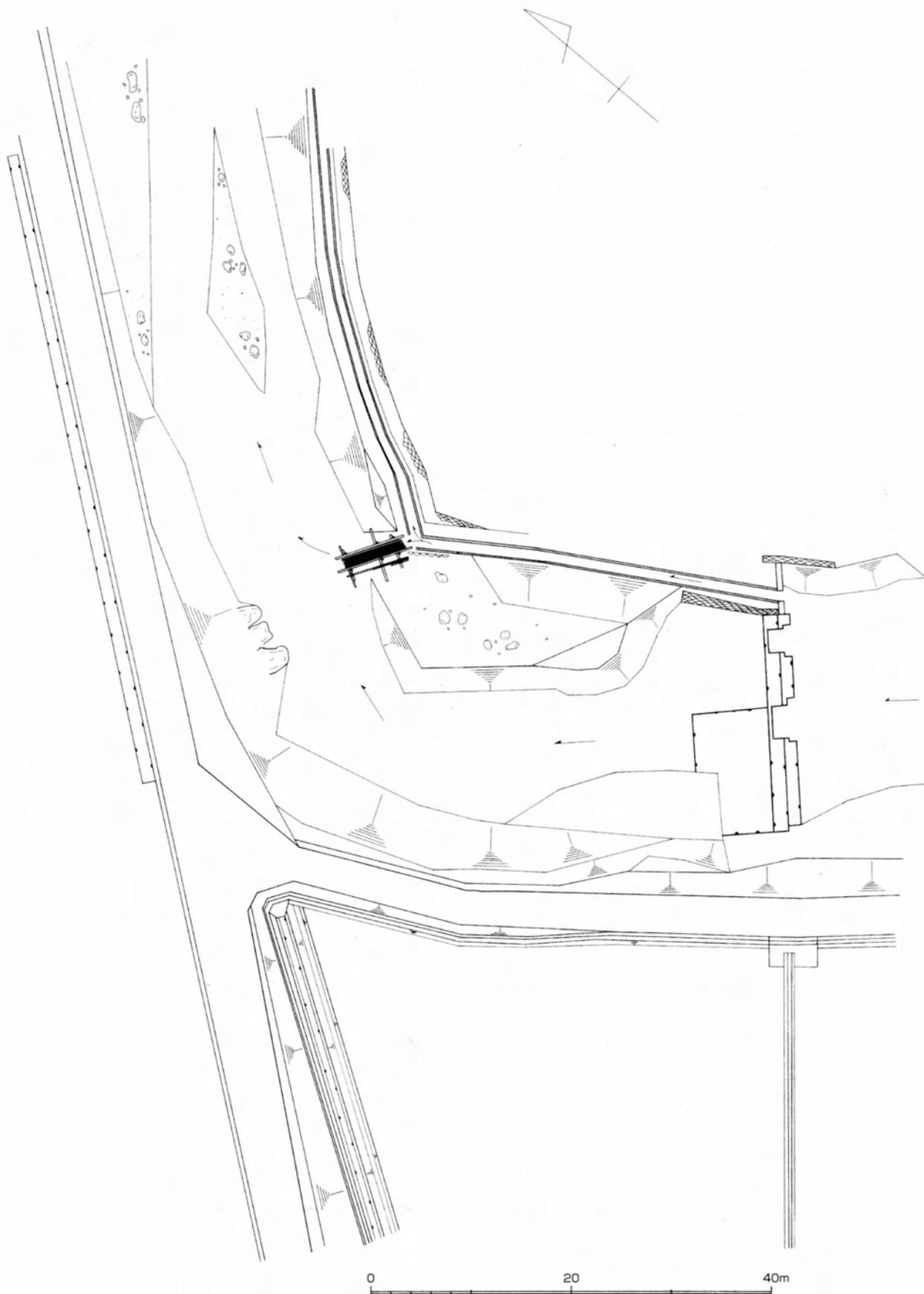
図-21 支流のタキ



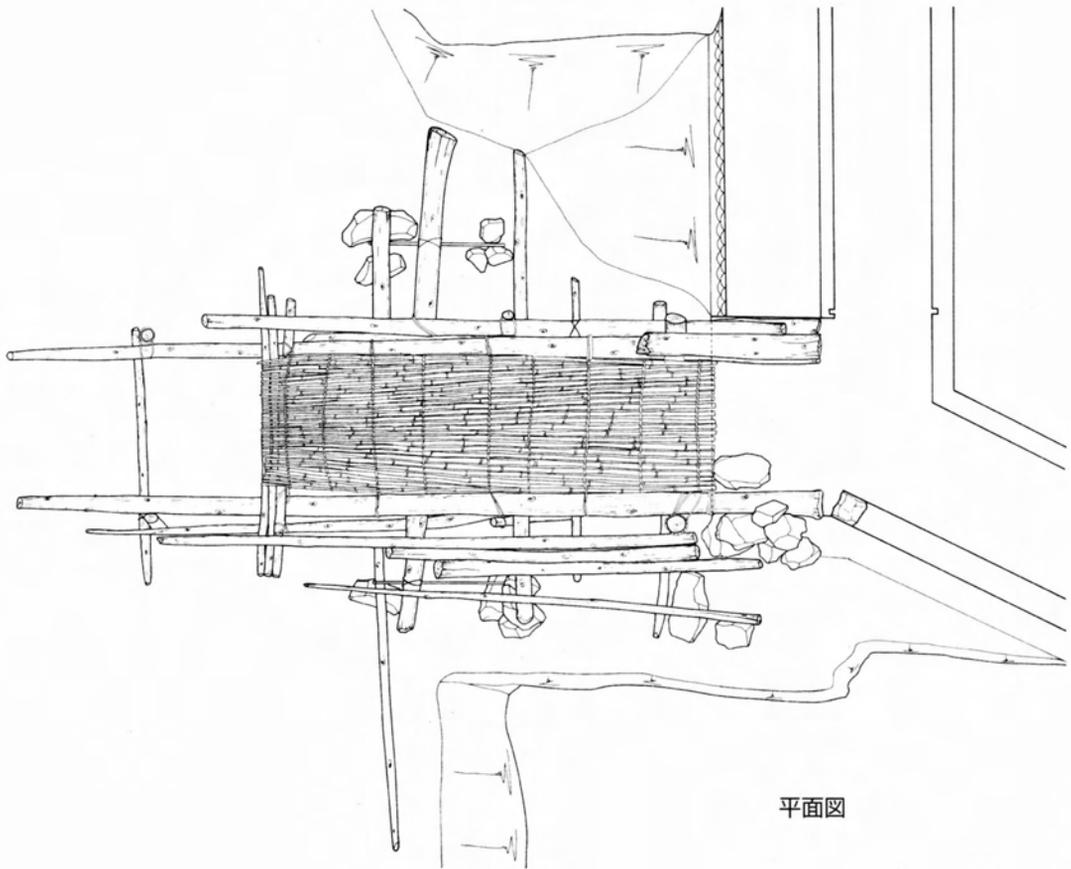
図一22 ハサ2



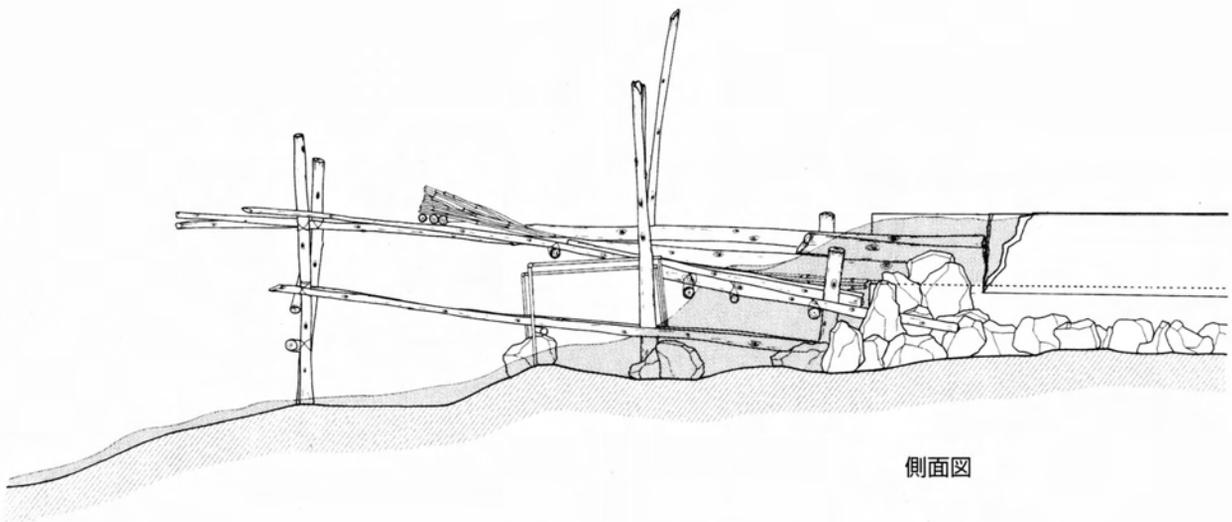
図-23 ハサ3



図一24 ハサ1測量図



平面図



側面図



図一25 ハサ1 詳細図

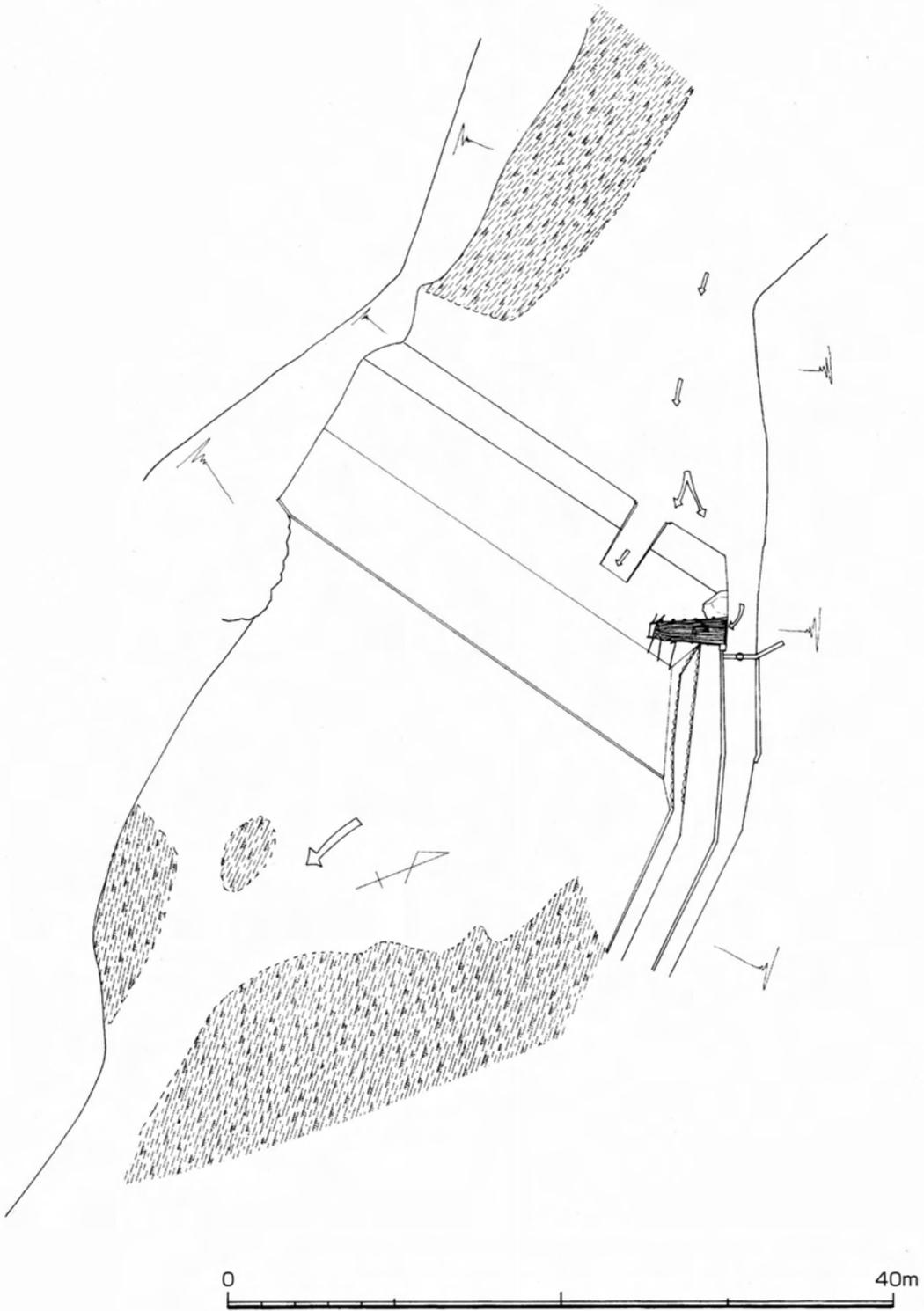


図-26 ハサ2 測量図

2, ビワマス

呼称 ビワマス, アメノウオ, マス, ツユマス, ナツマス

【一般的な生態】 琵琶湖の固有種で, 普段は琵琶湖の中層付近にすむが産卵期に川を遡上し中上流域で産卵する。産卵期のビワマスには顕著に婚姻職が現れる。雨による増水に乗じて遡上することからアメノウオとも呼ばれる。産卵を終えるとその一生も終える。ビワマスは, アマゴの降海型が琵琶湖を海にみたてて習性を変化させた湖沼型とも考えられていたが, ビワマスが産卵後死ぬのに対して, アマゴは生き続けることが多いこと, アマゴは琵琶湖に入っても朱点が消えない等いくつかの相違点があり, 両者は別種或いは別亜種として扱われる可能性がある。

【安曇川中流域の漁労者の見た生態】 マスには2種類ある。一つは初夏にのぼってくるツユマス。もう一つは秋にのぼってくるビワマスである。

ツユマス

6月のハゲシヨミズ(筏流しの水)に乗ってのぼってくる。真っ白な魚で, あごとシリビレが銀色に光っている。数は少ないが非常にうまい魚である。ツユマスはアユを喰いながら秋まで生きている。水の穏やかなところには居ず, 水の流れのきつところに住んでいる。ツユマスが産卵するかどうかは不明。ただ漁獲されたツユマスの卵はいつまでも硬いとのこと。アメノウオよりやや大型で, アメノウオが700グラムから800グラムであるのに対して1200グラムほどもある。

また, 夏にのぼってくるナツマスと呼ばれるマスもいる。

アメノウオ

10月から11月にのぼってくるマスを言う。広瀬付近では9月1日までがツユマスで9月1日の祭りを境に元服してアメノウオになるとも言う。

一般的な傾向として, 10月10日頃までに広瀬までのぼってくるマスは朽木までのぼって行くが, それ以後にのぼってくるものは広瀬どまりであることが多い。のぼってくる時期としては11月10日ぐらいまでのハンカンと言って寒の半分ぐらいの寒さまでの時が多い。11月も末となり寒くなると, 本流よりも支流の方が水温が高くなるので, 支流(谷川)の方へ多く集まるようになる。

アメノウオは, 大水に乗ってのぼってくる。しかし, 大增水の時は漁が出来ないので, 薄濁りの時ぐ

らいがちょうどよい漁となる。また, 小さい増水でも何回も出て水かさが増すと良くのぼってくる。

小さい水の場合, 舟木から朽木まで3日ぐらいかけてのぼってくるが, 大水の場合1日でのぼってくる。

産卵場所をホリと言う。やや流れの緩やかな砂礫底の部分で, 石に苔が付いていないのですぐに判る。通常, ホリに出てくるのは夜間であるが, 11月の産卵の最盛期をすぎると昼でもホリに出てくることもある。また, 隠れるところの多いところでは昼でもホリに出てくることもある。ホリの深さは水深20cmから30cmの所が多い。

昔のマスの身は白かったが, 最近のマスは身が赤くなってきたようであるとのこと。味は白い方が旨く, オスとメスではオスの方が旨い。特に産卵を終えたメスは身が痩せていてまずい。ただし, 婚姻色が出る以前にオスとメスを外見から区別するのは非常に困難である。

【利用】 非常に旨い魚である。

最も一般的な食べ方は, 生で造りにするか塩焼きにすることである。そのほかたくさん捕れたときは塩漬けや味噌漬けにし保存し折々に取り出して焼いて食べる。また, ご飯と炊き込むアメノウオメシも作られている。

【漁具と漁法】

【投網漁】

最も一般的な漁法である。河口付近ではのぼってくるビワマスを待ちかまえて投網で捕ることが行われているが中流域においては産卵床(ホリ・ホリバ)に集まるマスを捕ることが多い。時間帯としては昼も, 夜も行われる。

ホリは石に苔が付いていないので良くわかる。このようなところの特に美しく磨けているところでないとマスは集まらない(=最も新しい産卵床)。マスの集まりそうなホリを見つけたら, ホリの中の石に草や芝を少し挟んでおき, 時間をおいてマスがここにきて挟んでおいたものを流してしまうような所でねばる。

また, マスは産卵の際, 一匹のメスの周りにたくさんのおスが集まる。そのため, メスを捕ったら傷つけないように扱い, ホリバにくくって置く。そうすると, メスに誘われてオスが寄ってくるからこれを捕る。これを繰り返すと思わぬ大漁に巡り会うこ

とがある。

(漁具解説)

マス漁に使う投網は1辺が2寸程度の麻糸の太いものを使ったものであったが、現在では市販の網地を仕立てて使っている。

[オシアミ漁]

主に、夜間に行う漁で、ホリバに集まるマスを明かりで照らして捕る。

左手でコエマツを燃料としたトボシを持ち、右手で頭上にオシアミを掲げてマスを探しながら歩く。マスを見つけたならば、すばやくオシアミをかぶせる。マスに網をかぶせたら魚を下流に追い込む(下流側に網のたるみが出るため)。

トボシの火はメラメラと燃えるコエマツが最も良い。マスを見つけたらだんだんと灯を手前に引き、魚を寄せてから網をかぶせる。ヒザカイ(灯境)の魚は捕りにくい。

ホリに集まるマスは投網の項で記したように、メスの周りに多数のオスが集まるから同じようにメスをおとりに使い大漁に巡り会うこともある。

捕ったマスは、アゴトシで紐を掛け越しに吊るして歩くカリユックに置いて歩いた。

この漁は晩秋の夜間に行うことが多く、非常に寒い思いをしなければならない。且つ片手にトボシ、片手で頭上に網を掲げ、背には燃料のコエマツを背負おうという極めて体力のいる漁でもある。

(漁具解説)

図-27 オシアミ

朽木村岩瀬で用いられていたオシアミ。チシャと呼ばれる極めて粘性の強い木を十字に交差させて枠とし、ここに1辺2cmの目合いで60目の平面方形の網を張る。網地は麻糸に柿渋を付けたもので、網の深さは127cmを測る。この深い網は、魚にかぶせた際水流により下流に流され袋状になり、魚を追い込むためのものである。魚にかぶせる直前まで網のたるみ部分は枠の交差部分にまとめて持ち、魚にかぶせると同時に網の部分のみを離す。形状は著しく異なるが琵琶湖で用いられる押網とまったく同じ漁獲原理を持つ。(図-31)

図-28 オシアミ

安曇川町長尾で用いられているオシアミ。形状的には図-20のものと殆ど変わらない。但し、網地は科学繊維となっている。

図-29 トボシ

朽木村岩瀬で用いられていたトボシ。火を燃やす部分は針金を編んで作る。図-30のものよりやや柄が短いためか、火の熱さから守るための熱よけ(電灯の笠)が付けられている。柄は桐材を整形したので、端に杉材の肩当てを付ける。長時間の漁を行うために軽量化と機能化がなされている。

図-30 トボシ

朽木村長尾で用いられているトボシ。基本的な形状は図-29と同じであるが、竹製の柄はやや長く、脇で端を挟んで用いる。柄の先端付近に火による焼け焦げがみられる。

[さて網漁]

あまり一般的な漁ではないが安曇川町長尾で用いられているもの。鮎のおいさで網漁の項と同じ方法でマスを捕る。主に、産卵のため支流に入ったマスを追い込んで捕らえる。

(漁具解説)

図-32 サデアミ

形状は鮎のおいさで網とほぼ同じであるが網の目合いが大きく、1片2.1cmの科学繊維の網が用いられている。また、やや柄が長く、それに比して網枠の大きさが小さい、最も大きな相違点は網の深さがアユ用のものに比して約1.5倍ほどもあることである。これはオシアミの網が長大であるのと同じく、より確実にマスを捕らえるための工夫である。

[ヒッカケ漁]

漁獲原理は、鮎のヒッカケ漁と同じで、泳ぐマスをノゾキで見ながら引っかけて捕るものである。

アメノウオの場合はホリで引っかける場合と、ホリに出る前(産卵行動を起こす前)に流れの中を探しながら引っかける場合がある。前者は、前もってホリの場所を確認して置くことが大切となる。当然のことながら昼に行い、オカ(岸)から長い柄の引っ掛けを用いる。

それに比して、後者の場合は魚を探しながら直接視認して引っかけることになる。晩秋の水温の下がった時期に体を濡らしながら魚を探すのはなかなか辛いものがある。しかも、水の抵抗を避けるため素足で行うこともあった。川が浅い場合は殆ど川を這うような感じになり流れがまともに顔に当たる。しかし、魚を見つけたら一瞬たりとも目を離してはな

らない。マスは目を離すといなくなる魔の様なもの
と言う者もある。

マスの引っかけ部分は頭か背の部分を狙う。腹
を引っかけると身が切れる場合がある。

引っかけたマスは、ノゾキをタモがわりに用いて後
述のアゴトーチなどで腰に結わえる。

ツユマスの場合は、主にこの引っかけで捕ることが
多い。

特殊な場合として、堰堤の下などの広い場所でマ
スがいるのが判っているが捕れないときに、柴の束
に瓦や石を詰めて縄でくくったものを2個ほど沈め、
石を投げてマスを脅かし、柴の束に隠れたところを
引っかけられることもあった。

(漁具解説)

図-33 ヒッカケ

安曇川町長尾で用いられている引っかけの全体で
ある。基本的な形状は鮎の引っかけと同じであるが、
鉤の大きさと強度がまったく異なる。鉤の部分は鍛
冶屋に自分の好みを伝え作ってもらう。この例の場
合は、先にわずかに返りをつけて魚からの脱落を防
止しようとしている。鉤の根元にはシノベ（笹竹）
と麻紐を付けている。シノベは竿先を挿入するもの
であり、紐はかけたマスを取り込むためのもので、
この漁具は一種の遊離もりということができる。

図-34 ヒッカケの鉤

安曇川町長尾のヒッカケの鉤と麻製のロープであ
る。

図-35 ヒッカケの鉤

朽木村岩瀬で使われていたもので形状は33とほぼ
同一である。

図-36 ヒッカケの鉤

安曇川長屋で用いられていたもので鉤の腰の部分
がやや外に湾曲する。

図-37 ヒッカケの鉤

朽木村市場で用いられていたもので、鉤先に返り
がない。返りがあるものはかけた後、魚からの脱落
をある程度防ぐことが出来るが、ささがりやや劣る
こと、はずす際に魚体を痛めることなどの不利な面
がある。その点、返りの無いものは、魚を痛めない
こと（商品的な価値が高いこと、おとりとして生か
しておく場合に優れていること、採卵のため蓄養す
る場合に優れていること）と、より確実に魚を掛け
ることでは優れているが、取り込みに熟練を要する。

[その他漁具]

以上述べてきたマスのための漁に共通して用いら
れる副漁具を記しておく。

アゴトーチ

各種の漁で捕らえたマスを持ってかえるための用
具。エラから口に紐を通して運ぶ。1本の紐に数匹
のマスをくくる。そのため複数のアゴトーチを携帯
し出漁する。アゴトーチを使うわけは、マスの歯が
鋭く、直接口に手を入れると怪我をするからである。
そのため、アゴトーチの長さは、ある程度長い方が
安全である。

竹の籠状のものが一般的であるが、針金で簡単に
済ます者もある。また、歯ブラシの柄もなかなか使
い勝手がよい。

(漁具解説)

図-38 アゴトーチ

朽木村岩瀬で用いているもの。竹を籠状に削り、
片方に割れ目を入れ麻紐を挟み、麻糸で巻き付けて
固定する。麻紐の長さは166cm。魚をくくるための輪
を端部に作る。

袋

アゴトーチで運ぶことが一般的であるが、網袋に
入れて運ぶこともある。

漁具解説

図-39 フクロ

1辺0.6cmの編み目の網を仕立てて作る。素材は木
綿で柿渋に漬ける。

袋の構成は、1辺200目×50段の長方形の網地の
端に50目×25段の張り出しを付け各辺を縫い合わせ
て円錐状の網にしたてる。

なお、この袋の口に枠を付けてさで網として用い
ることもあるという。

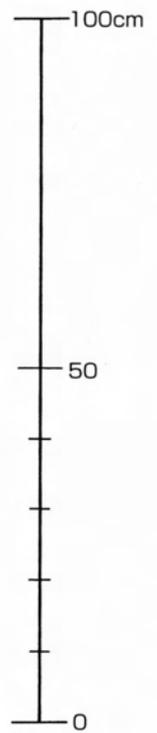
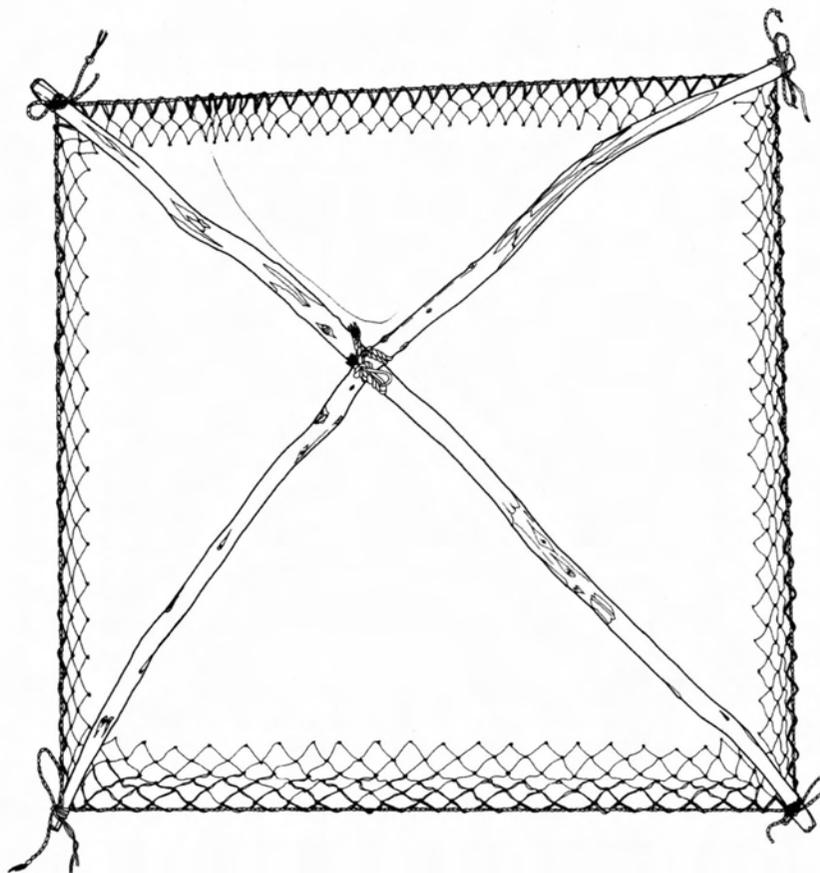
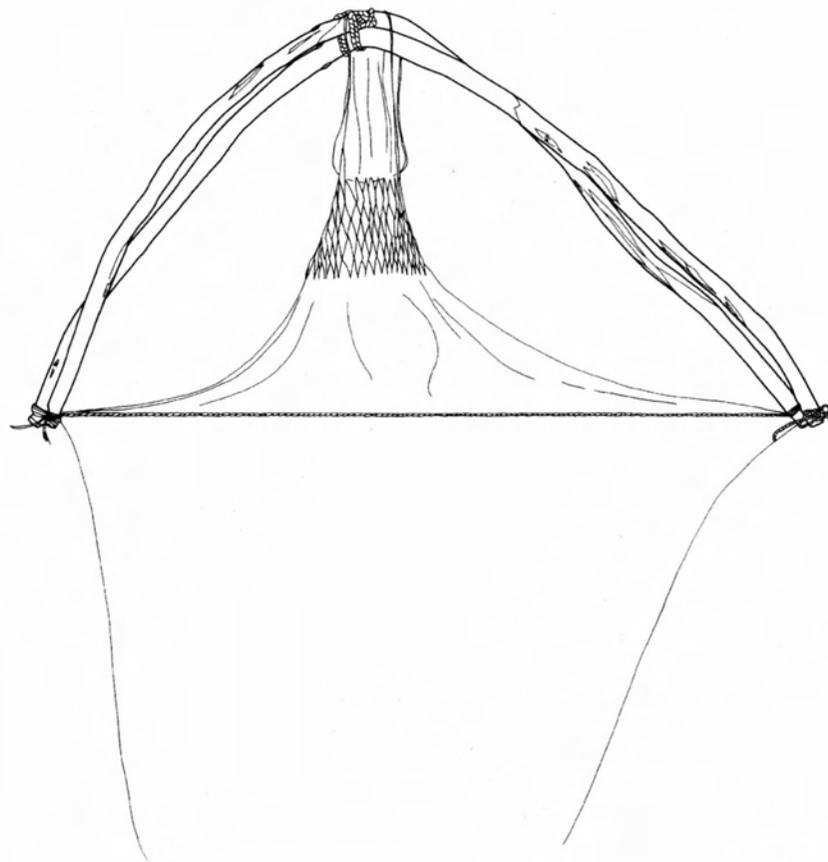


図-27 オシアミ

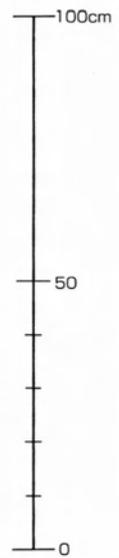
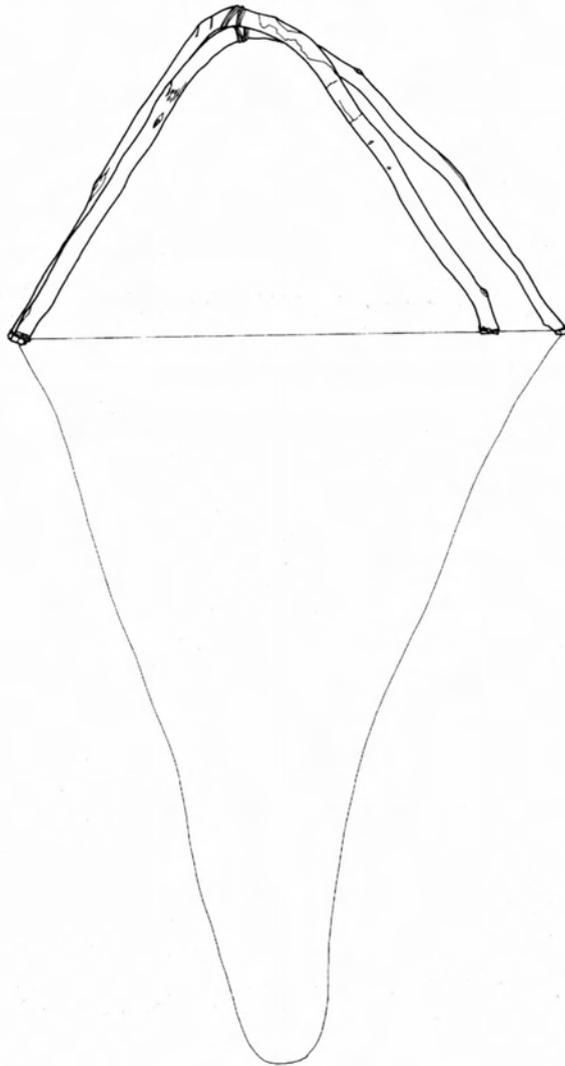
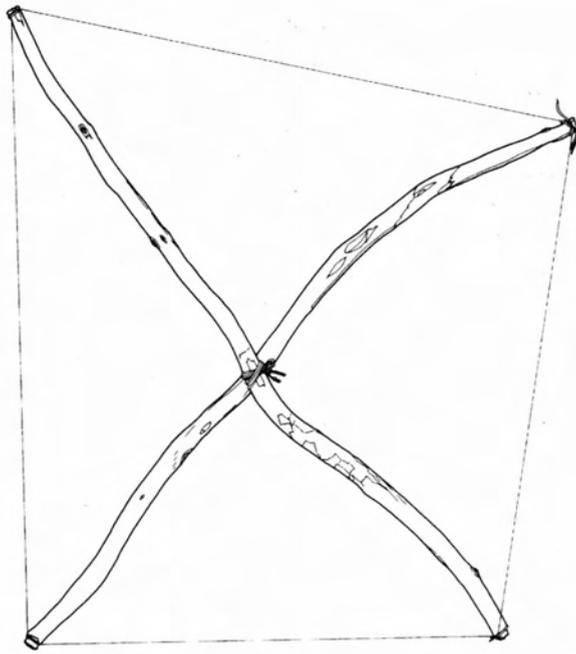


図-28 オシアミ

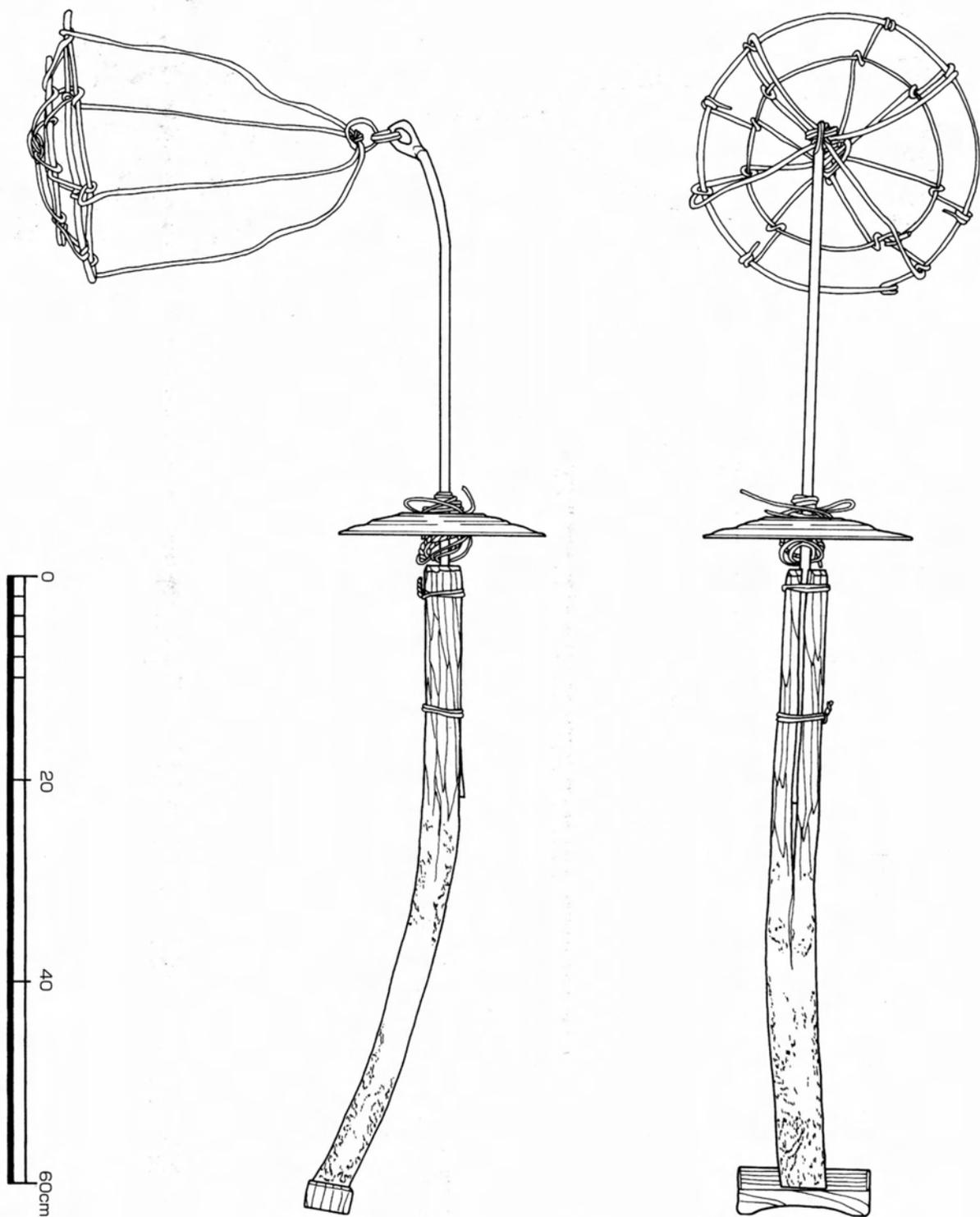


図-29 トボシ

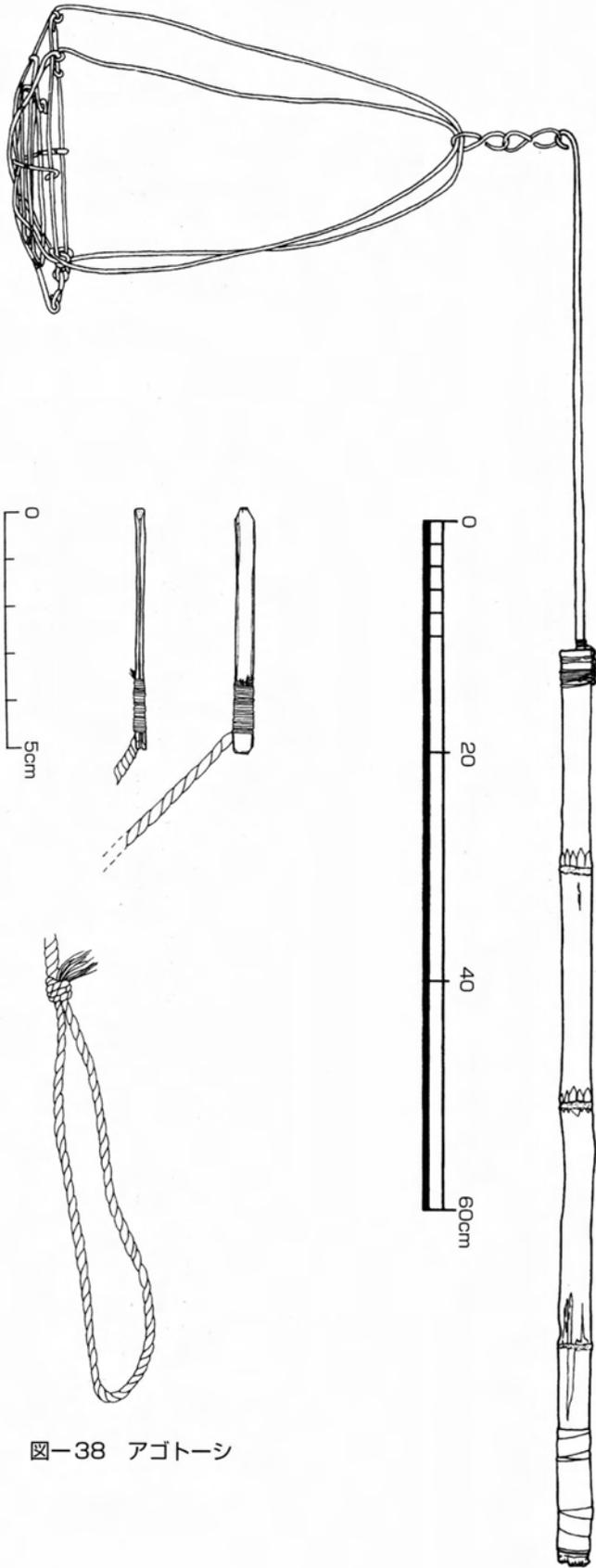


図-38 アゴトシ

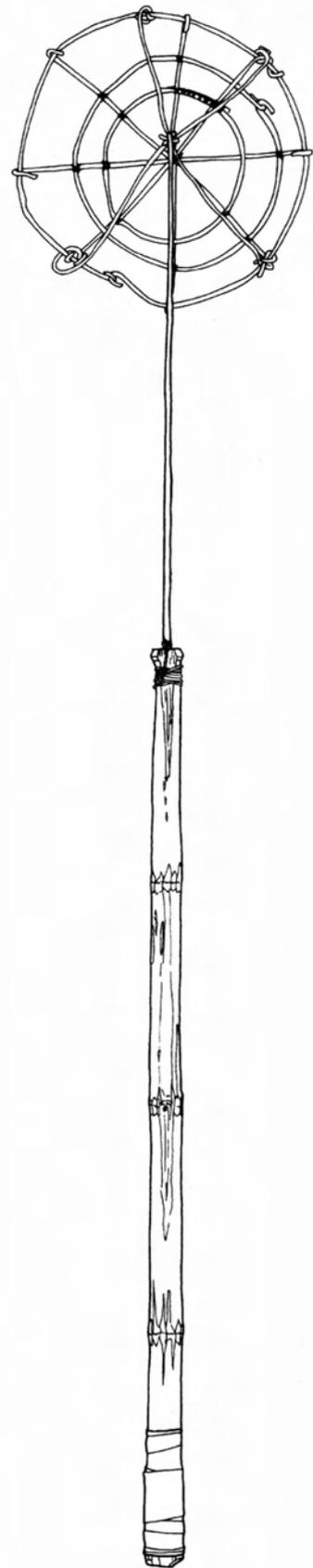
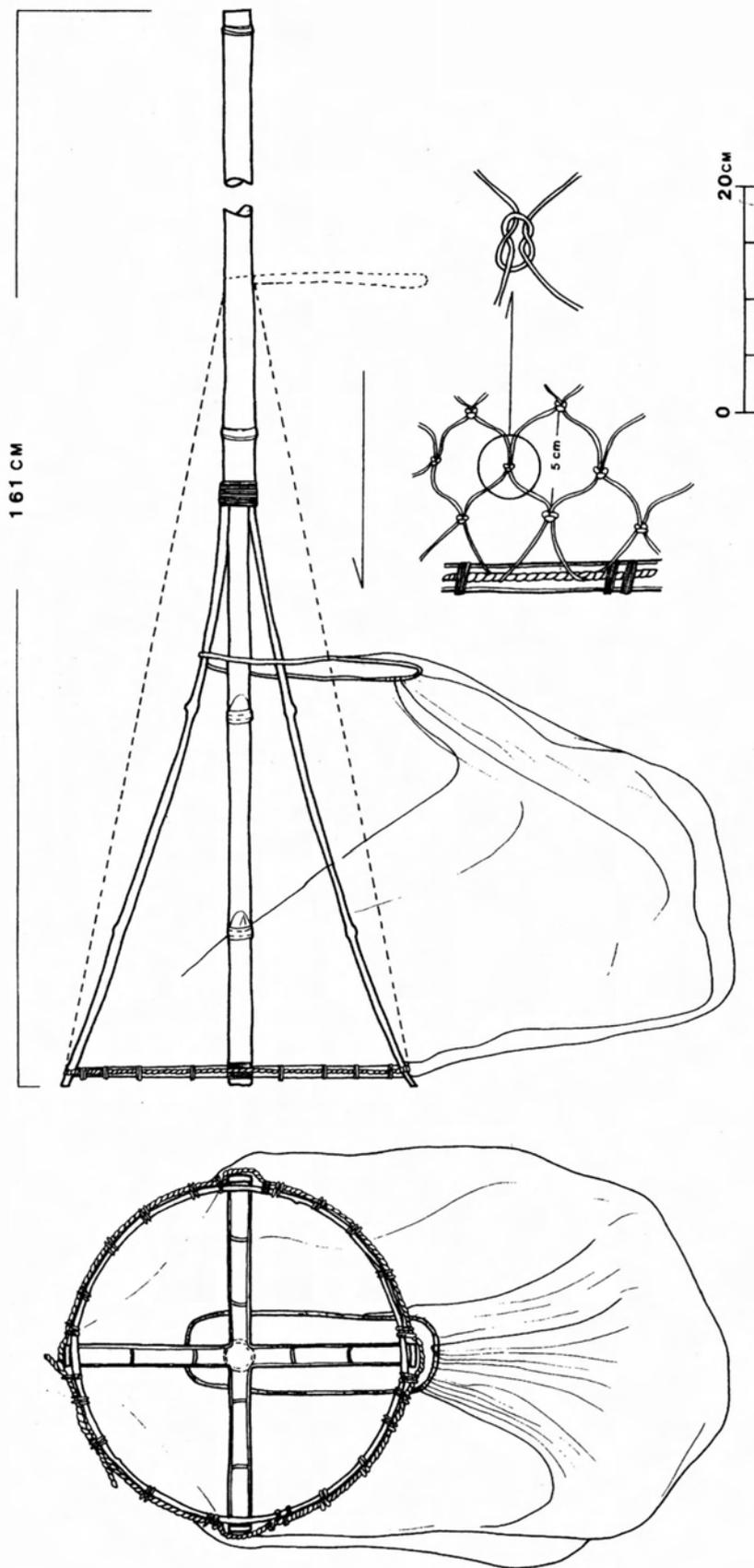


図-30 トボシ



図一31 参考. 琵琶湖で用いられているオシアミ(高島町永田)

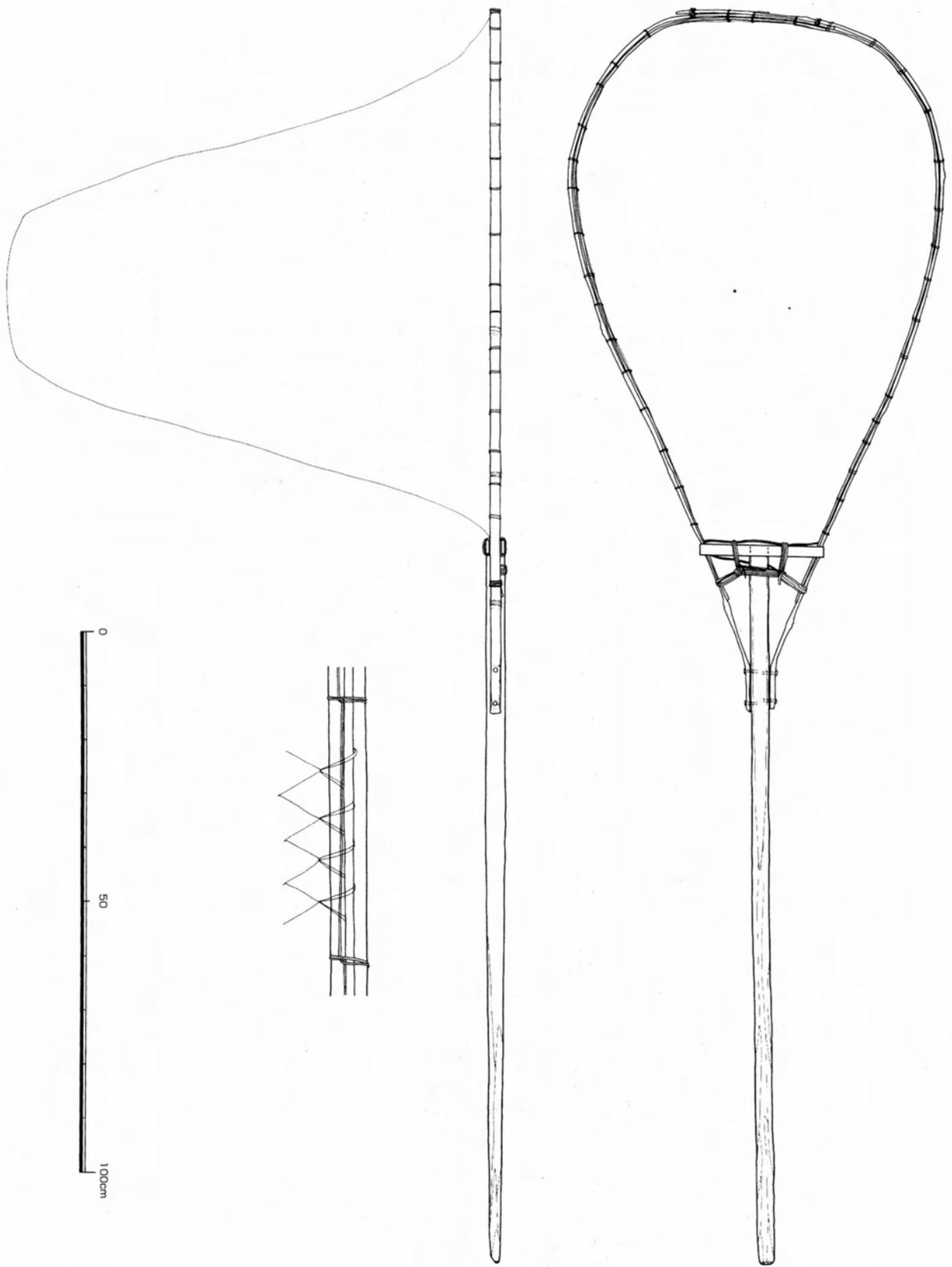


図-32 サデアミ



図-34 ヒッカケの鉤

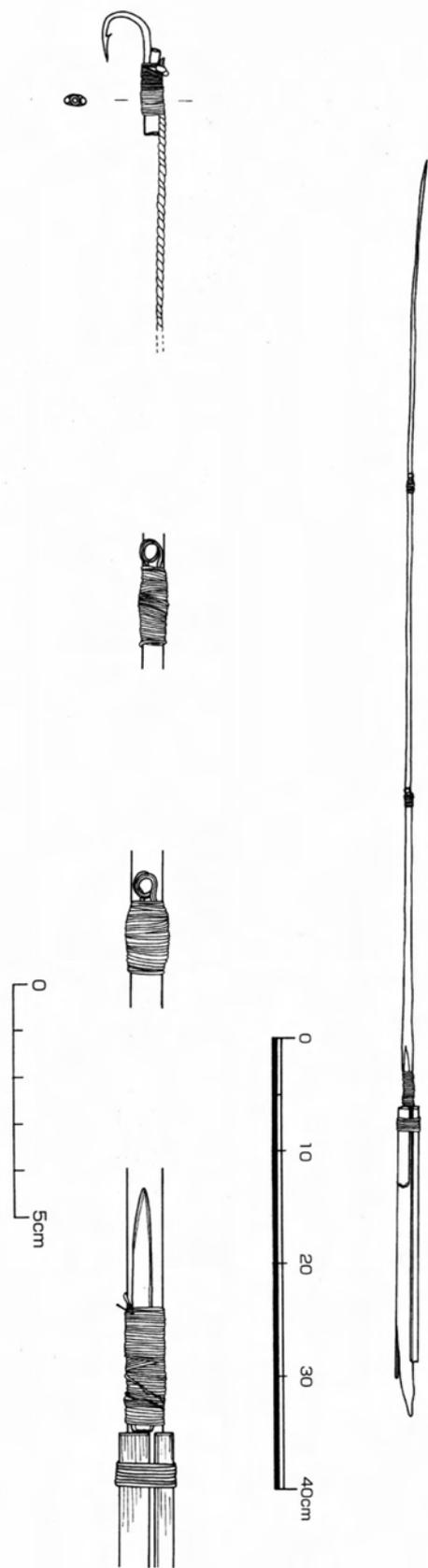


図-33 ヒッカケの仕掛全体図

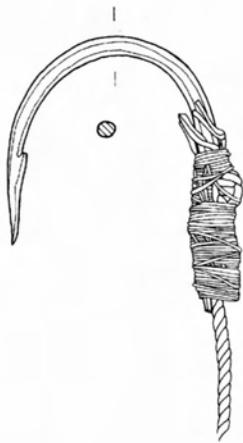


図-35 ヒッカケの鈎

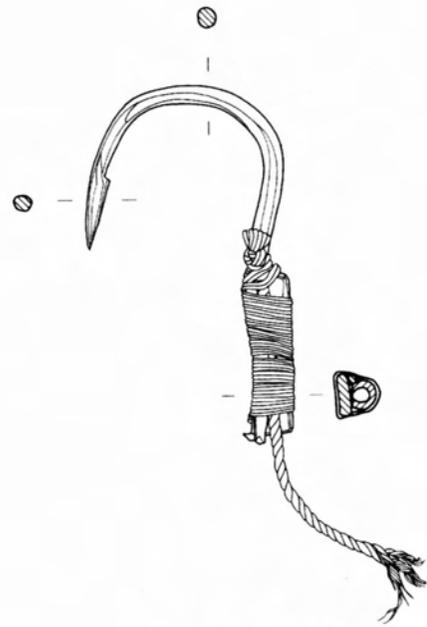


図-36 ヒッカケの鈎

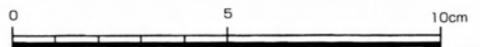
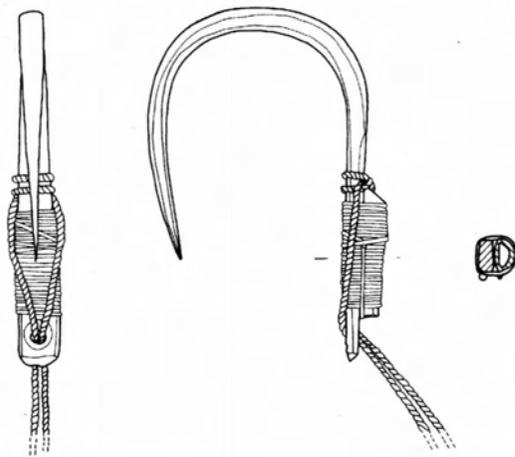


図-37 ヒッカケの鈎

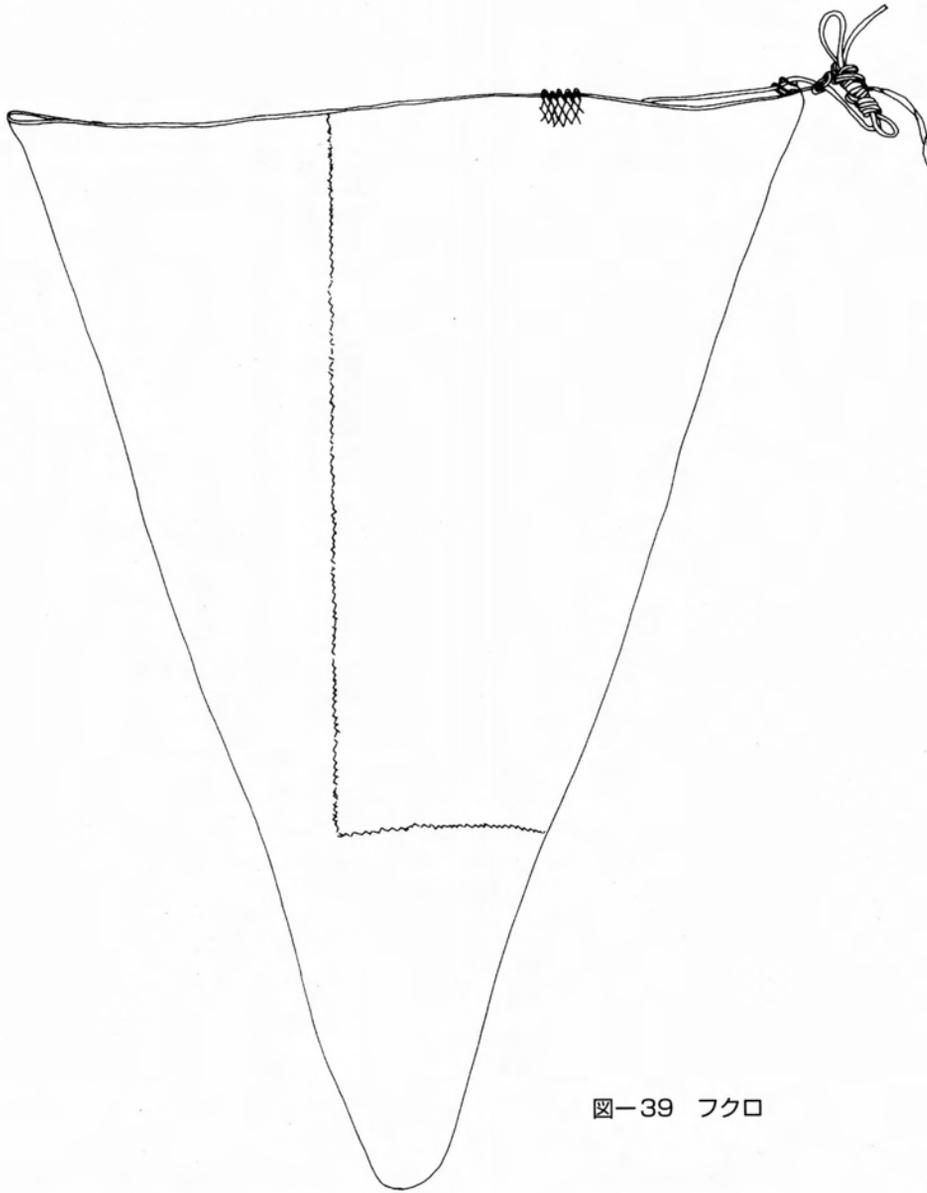
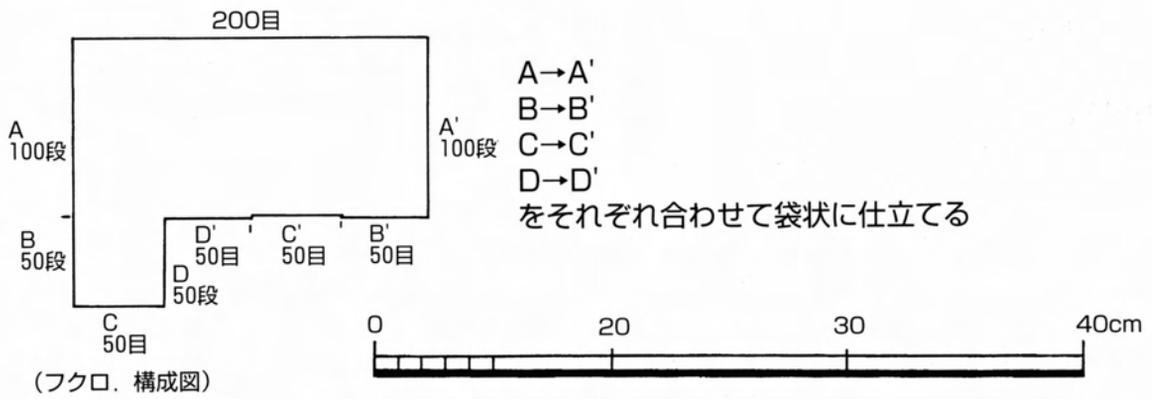


図-39 フクロ



3. ウグイ

呼称 ウグイ、アカハラ、ヂコ、ウグイコ、ノボリ

【一般的な生態】 ウグイはわが国の淡水魚の中でも最も繁栄している魚種の一つで、日本中に広く分布しており、海と川を行き来する降海型と、一生を川や湖沼で過ごす淡水型とがある。滋賀県に分布するウグイは淡水型である。

ウグイの環境への適応力は極めて強く、河川にあってはイワナの住む上流域から河口、さらに琵琶湖中まで分布している。

産卵期は、大体春から夏にかけてで、砂礫底の川底に密集して産卵する。産卵場所は砂礫底であれば特に特定の場所は選ばず、川の広い範囲で産卵が行われる。産卵期には雄も雌も明瞭な婚姻色で身を包む。

【安曇川中流域の漁労者の見た生態】 一般的な生態と殆ど変わらないが、産卵にのぼってくるウグイをノボリといい、1年中居るウグイをヂコという。両者は頭の形が違う。

ウグイのセル（産卵する）場所は川の中でも砂のあるところ、すなわち適度な流れがあり、泥の堆積しないところを選ばれる。ウグイは集団でセルが、雌がいなくなると雄もいなくなってしまう。

【利用】 塩焼きや、竹の子と煮て食べる。またナレズシにすることもある。

ウグイは赤く（婚姻色が出て）痩せている方が旨い。そのため、捕ったウグイを家で活かしておき、餌を与えずにカイシメル（身を締まらす）。ウグイは朽木が旨く、マスは舟木が旨いともいう。

【漁具と魚法】

【投網漁】

ウグイを捕る魚法としては投網が最も一般的である。

漁を行う時期は産卵期で、セッテいる場所を狙って投網を打つ。上記の産卵に適した場所を前もって調べておき、そこにあたりを付けて出漁する。

ウグイは固まってセルが、場所によっては畳1畳ぐらいの範囲に固まっていることがある。このようなところはまともに魚群の上に打つと魚で滑ってうまく捕れないので、下流の端から少しずつ捕る。セッテいる魚は逃げない。捕った魚は河原にイケスをこしらえ活かして置く。

【その他の漁】

いわゆるヂコ（居付きのウグイ）を捕るための漁が行われているが後述の雑魚の漁と共通するためここでは割愛する。

（漁具解説）

図-40 トアミ

安曇川町長尾で用いられているもの。網地は市販のものを仕立てる。目合いは1辺2.5cm。網地を大、中、小の三段階の円筒状に仕立て、それぞれの円筒を繋ぎ投網とする。網部分の全長は215cm（全100段であるが、85段目で裾を吊り袋としている [(2.5cm×100) - (2.5cm×15段) = 約215cm]。裾周囲は1055cmを測る。

図-41 フクロ

朽木村市場で用いられていた、投網で捕ったウグイを入れるためのフクロ。麻糸を手編みしたものに渋を施す。

全体形は不定形であるが、広げると電球状の形状となる。

構成及び製作過程は以下のとおりである。

- 1 : 1辺が5mm, 50目の正方形の網地を編む。
- 2 : 1辺が9mm, 横200目, 40段の網地を編み, 1の各辺に編み付ける。
- 3 : 1辺が12mm, 横200目, 60段の網地を編み, 2の上辺に編み付ける。
- 4 : 1辺が12mm, 横200目, 1段の網地を二重の糸で編み, 3の上辺に編み付け, ここに口を閉じるための紐を通す。

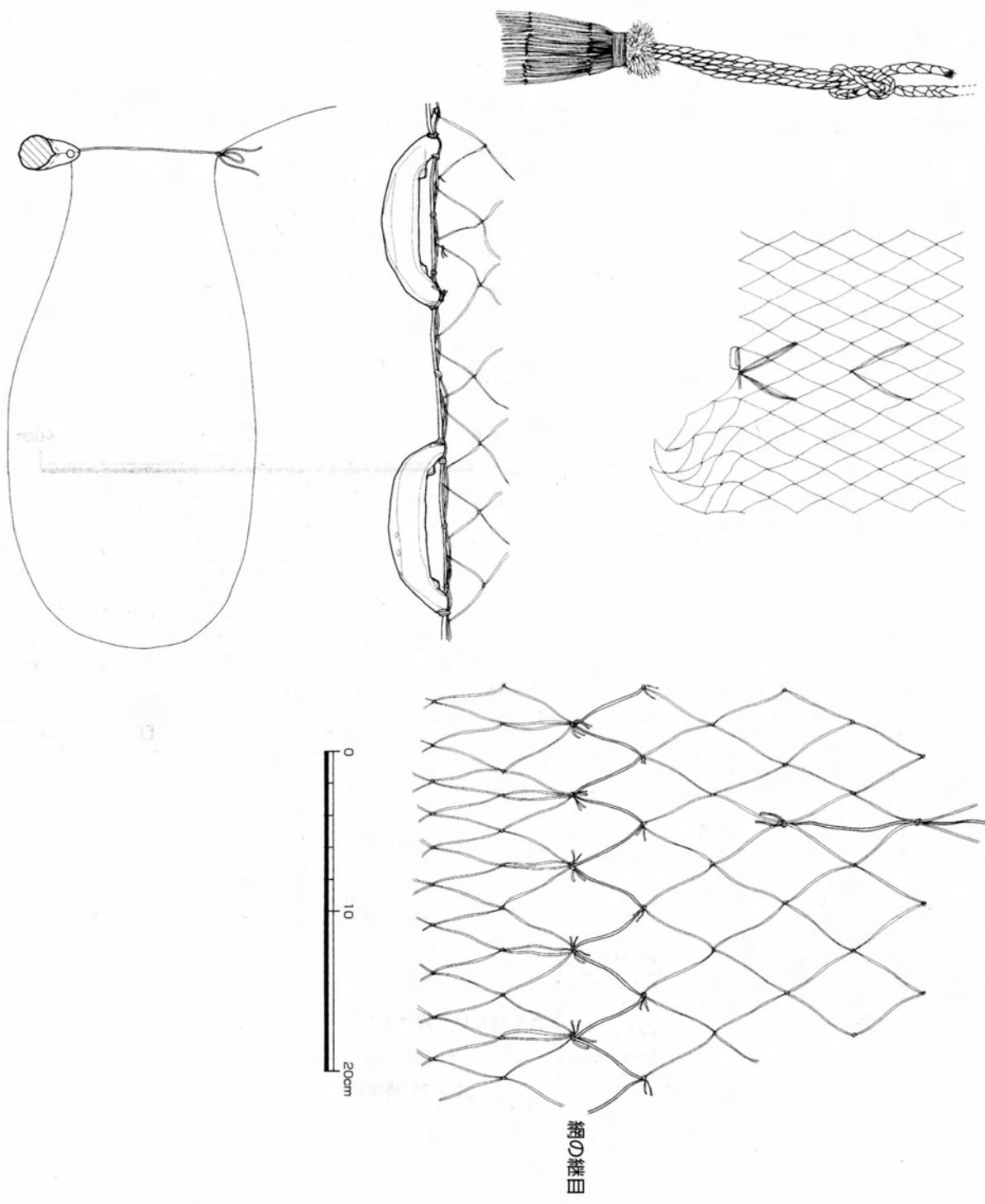


図-40 ウグイトアミ

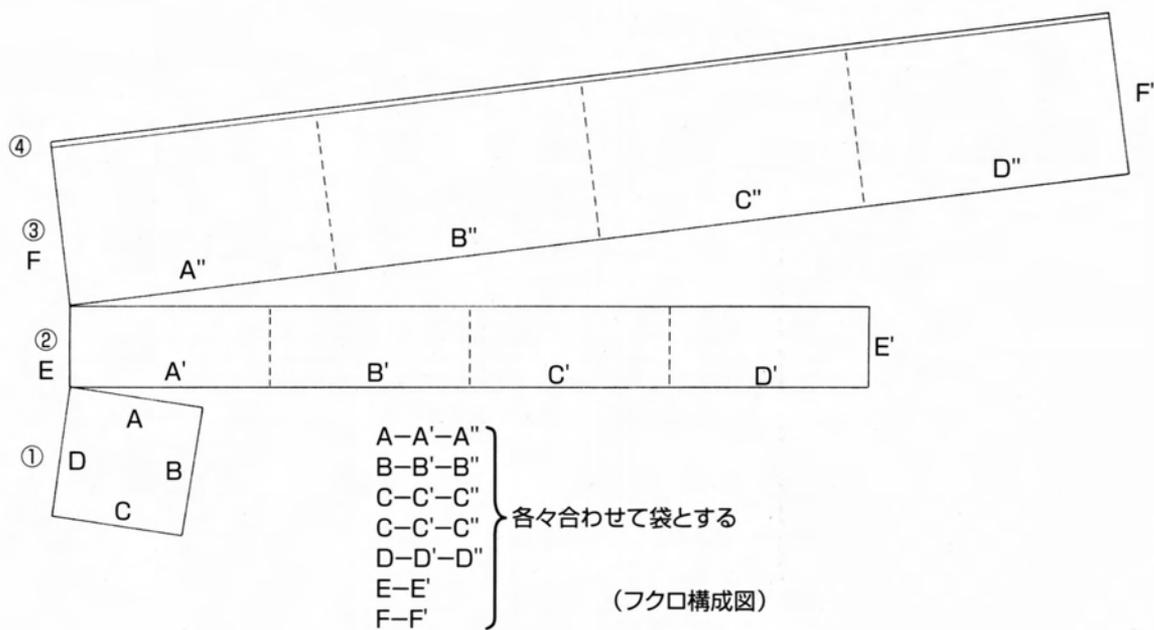
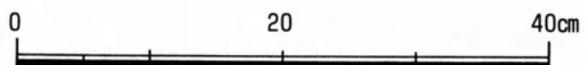
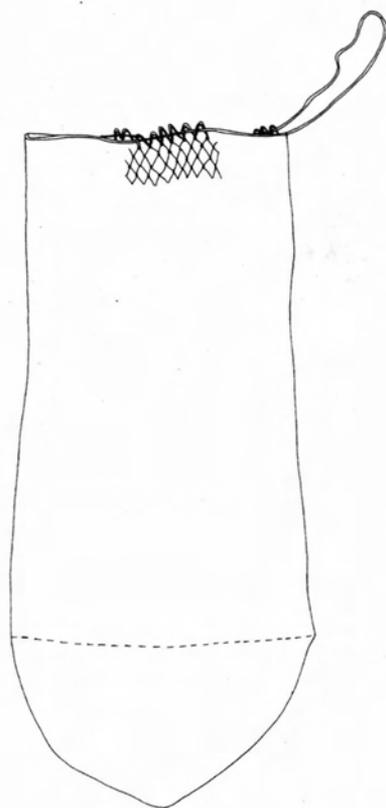


図-41. フクロ

4, ウナギ

呼称 ウナギ

【一般的生態】

琵琶湖水系の在来種で、人間の経済活動のあおりを最も劇的に受けた魚にウナギがあげられる。

ウナギは降海産卵型の魚で、琵琶湖水系で成長した後瀬田川を降り海に入り産卵する。当然のことながら、ウナギの稚魚は海から淀川、宇治川、瀬田川を廻り琵琶湖に入り留まるか、さらに安曇川などの河川を遡上し成長する。

しかし、現在は宇治川に天瀬ダムがあるため、天然のウナギの遡上は不可能な状態となっている。従って、現在琵琶湖水系にみられるウナギの全ては放流したウナギということになる。

一般には淡水で5から12年ほど暮らした後に海に降るといわれている。

【安曇川中流域の漁労者の見た生態】 ウナギは昼の間は石垣の隙間のような所において、夜に活動する。ウナギのいる穴の周りは磨けて綺麗になっているのでわかる。ウナギが活動を始めるのは藤の花の咲く頃からである。

【利用】 開いてカバヤキやスキヤキにする。

【漁具と魚法】 ウナギの漁で最も一般的に行われているのが釣り漁である。何れも餌として鮎やドジョウ、ドマン（ヨシノボリ、カジカ）、ミミズを用いる。ウナギは餌を飲み込むため外れることはないが、昼釣りの場合の鉤はやや外に開き掛かりやすくしている。

ウナギはヌルヌルしてはずしにくい、掛かったウナギの頭に向かって道糸をしごくとうナギは尾で腕に巻き付いてくるのではずしやすくなる。

安曇川中流域では以下の3種類の釣り漁が行われている。

釣り1 延縄式の夜間の釣り（ツケバリ、ナガシバリ）

夜間にシュロナワやポーセキの道糸に、オ（麻糸）をよったものを針素にした鉤を3本から4本付けたものをポイントに沈めて置く、道糸の端は岸の木や石に結わえて置く。

ポイントは石垣の隙間や、大きな岩と岩の間などで、ノゾキで観察し沈める。流れの状況によっては道糸の途中に石を付けて垂りとすることもある。

この漁は本流だけでなく、水田の水路で行うこと

もある。この場合は陸からポイントを見きわめて仕掛を沈める。

釣り2 単鉤の昼の釣り（ツケバリ）

鉤は1本で、先の尖った竿状の棒の先に餌を付けた鉤と針素を付け、ウナギの潜む穴の中に差し入れる。ウナギがいれば食いつくので引きずり出す。

昼の釣りはウナギしか掛からないので楽である。夜の釣りは色々な魚が掛かり面倒である。

釣り3 直鉤（シュモクツリ）

両端を尖らせた直鉤の中央に針素を結び上記と同じようにポイントの中に差し入れる。あたりで合わせると鉤が口の中に掛かる。

餌はミミズを用いる。普通の針に較べてウナギが痛まないとのこと。

（漁具解説）

図-42-1 ツリバリ

朽木村市場で用いられている昼用のツケバリの鉤および針素である。鉤は市販品で針素は麻をよったものである。鉤先がやや外に開き掛かりやすくなっている。しかしその半面はずれやすくなるが、掛かった魚を放置するわけではないので、掛かりやすさを優先したものと考えられる。

図-42-2 ツリバリ

朽木村市場で用いられている夜用のツケバリの鉤と針素である。鉤は市販品。針素は麻をよったものである。

図-42-3 ツリバリ

安曇川町長尾で用いられている夜用のツケバリの鉤と針素である。鉤は市販品。針素は麻をよったもの。鉤の腰が張るが特徴的である。

図-43・44 ハリ

鮎などの餌を通すための針。竹を削ったもので、後ろに刻みを入れ針素を挟むようにし、アユのエラ付近から尾に向かって針素を通す。

【ウナギモジ漁】

細長いウケを用いる。餌として袋にいれたミミズを使う。

【ヒッカケ漁】

鮎の引っかけと同じ道具を用いるが、針のみがウナギ針である。（漁具解説）

図-50 ヒッカケ

朽木村岩瀬で用いられているもの。アユのものと同様に変わらないが、鉤がウナギバリ、針素が麻糸となっている。

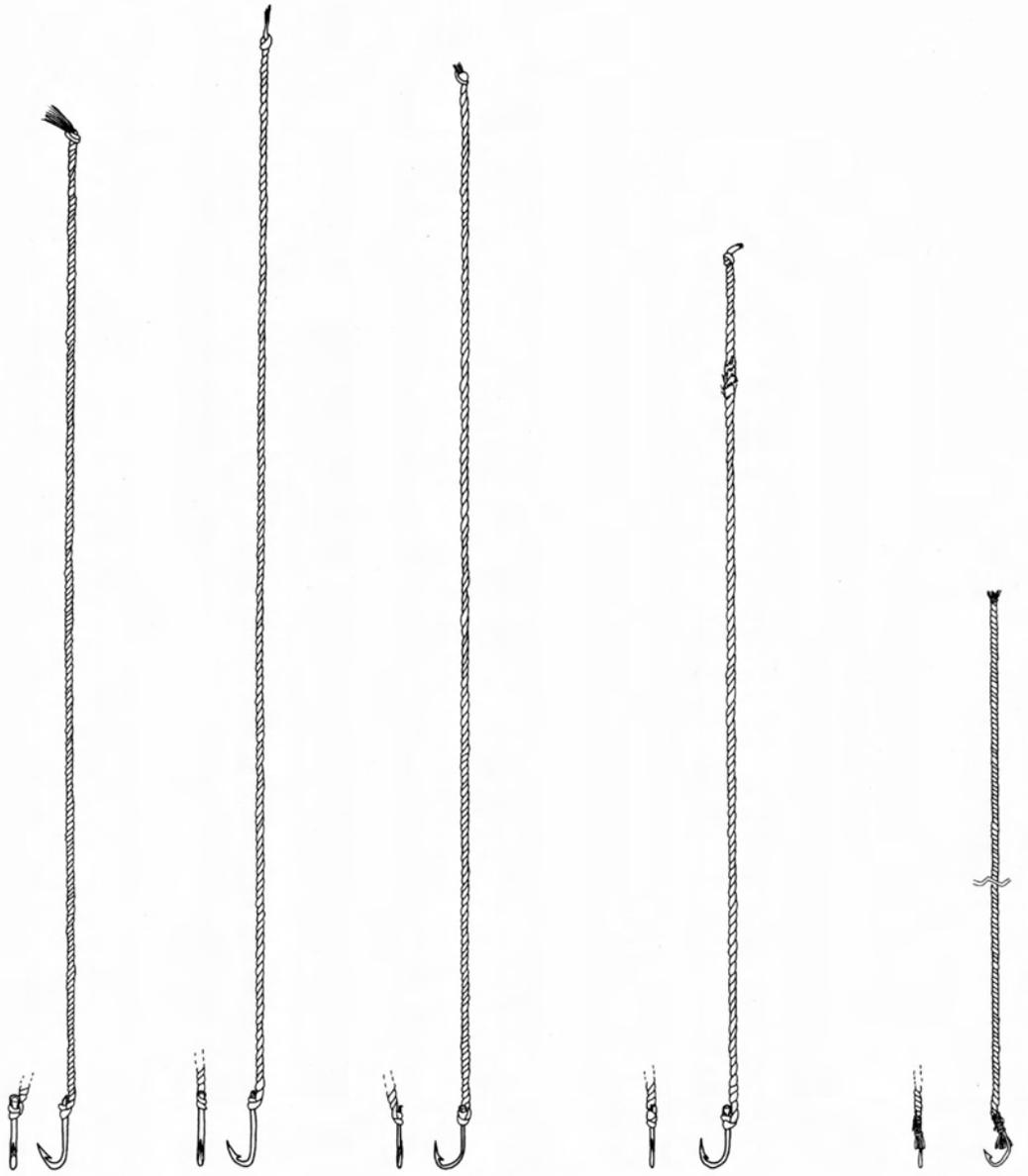


図-42-1

図-42-2

図-42-3

ツリバリ (仕掛) 各種

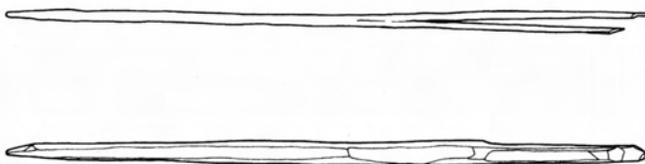
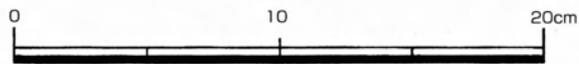


図-43

ハリ



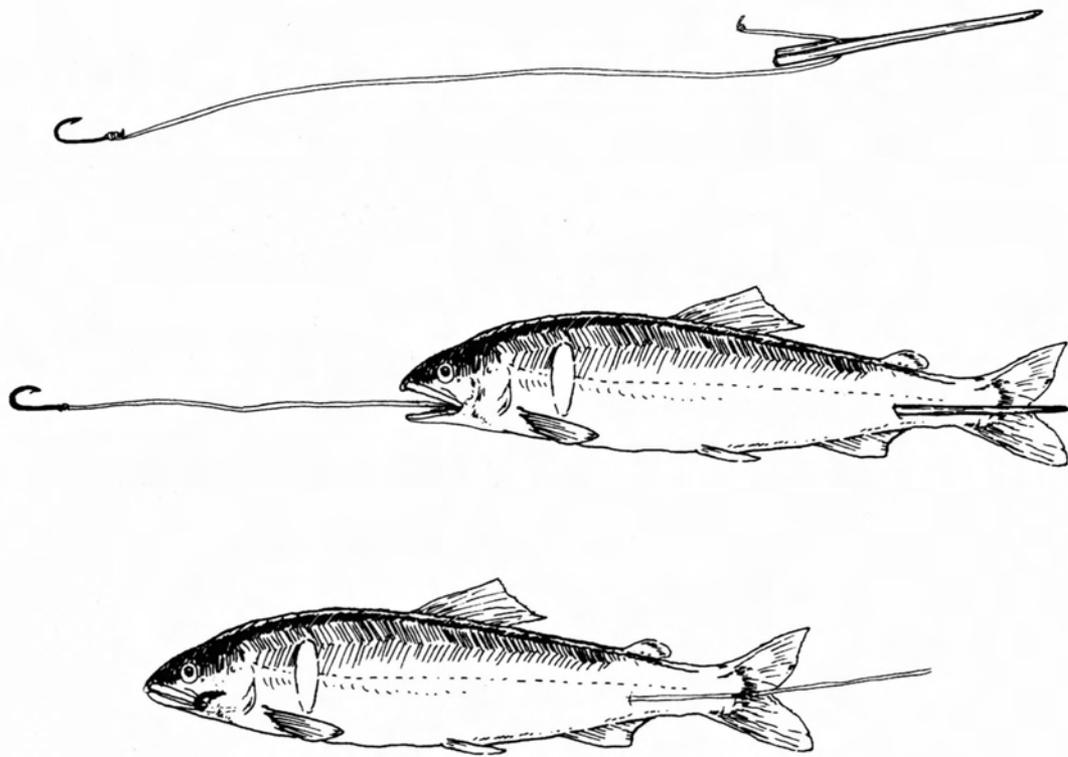


図-44 ウナギツリのエサ（アユ）の付け方

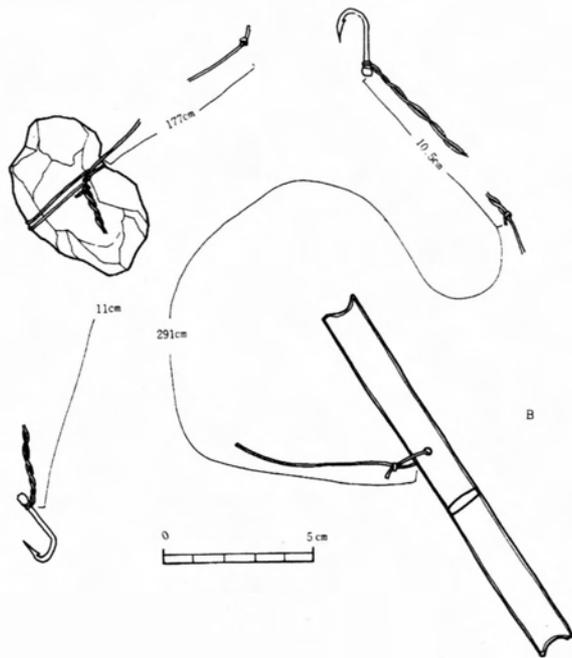


図-45 参考
余呉町鷺見（高時川上流）
のウナギツリの仕掛



図-46 ウナギツリ模式図 (延縄式)

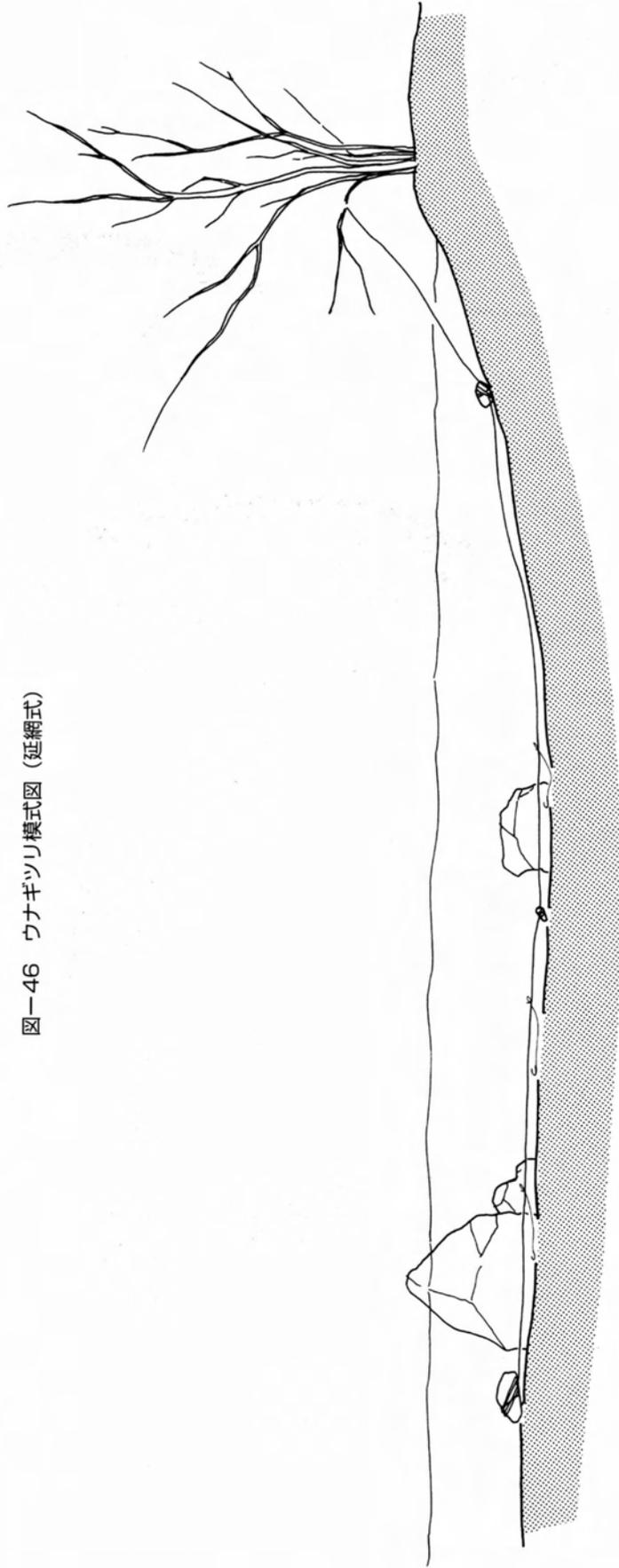


図-47 ウナギツリ模式図 (延縄式)



図-47 ウナギツリ模式図 (単鉤式)

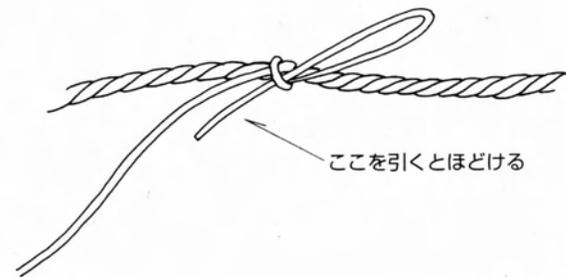


図-49 幹糸と鉤糸の結び方

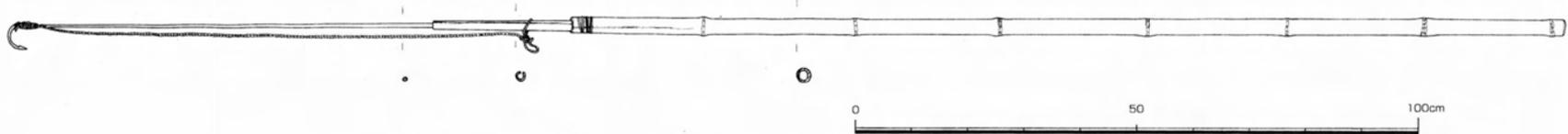


図-50 ウナギのヒッカケ

5, ゴリ

呼称 ドマン, アカリコ, アカリ, アカリタチ, アブラドマン, カラドマン, ツチドマン, ゴリ, ゼンコジ (善光寺参りのように列を作って移動するため),

【一般的な生態】

カジカ 川の上流から中流にかけてのやや流れのきつい砂礫底に棲む。成魚の体長は6~12cm, 産卵期は1月~4月の冬季。

ヨシノボリ 琵琶湖および流入河川に広く分布する。砂または砂礫底に棲む。稀には泥底の部分にも棲む。成魚の体長は4~12cm, 産卵期は4~10月。

【利用】 醤油と砂糖で煮あげる。

【漁具と魚法】

【ゴリフミ漁】

主に早春のネコヤナギの咲く季節に行う。雪解けの大水が出て、川の縁を削るような時、ゴリ(カジカ)は水当たりの少ないところ(川の湾曲部の下流など)に集まる。このようなところを狙い、下流に半月状の網を当て、上流の石を脚でひっくり返し、魚を網に追い込む。むしろ、流れを避けるようにへばり付いている魚を石もろとも下流に流してしまう、といった方が適切か。早春の水温の低い時期に行う漁で、寒さとの戦いでもある。

(漁具解説)

図-51 ゴリフミ

朽木村岩瀬で用いられているもの。半月状のチシヤ製の網枠(ゴリフミノテ)の下方に深い網を取り付ける。網地は1辺6mmの麻製で手編み上部の一周は200目。ながれのきついところで、石もろともにすくい上げるため、頑強な作りとなっている。特に網地の上辺中央と網枠の頂点に紐で吊り上げているところが特徴的。

図-52 ビク

ゴリフミの際に用いるビク。安曇川町長尾で用いられているもの。マタケを編んだもので、底部は網代編み。底部を編んだ後腰に相当する部分に各1本の骨を加える。さらに底部の材の内1本を途中で半裁し胴部に立ち上げる。従って、胴を構成する骨は奇数となり、胴のザル編みが可能となる。

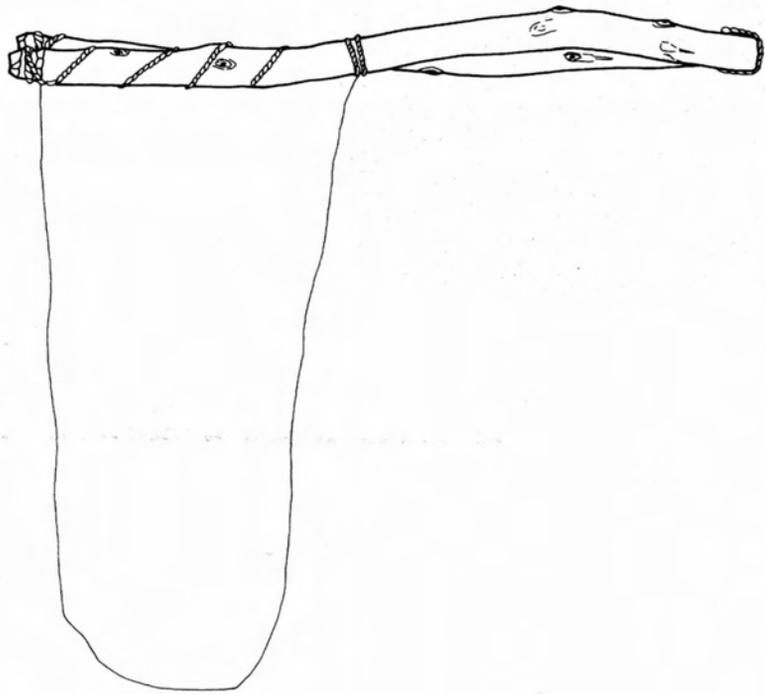
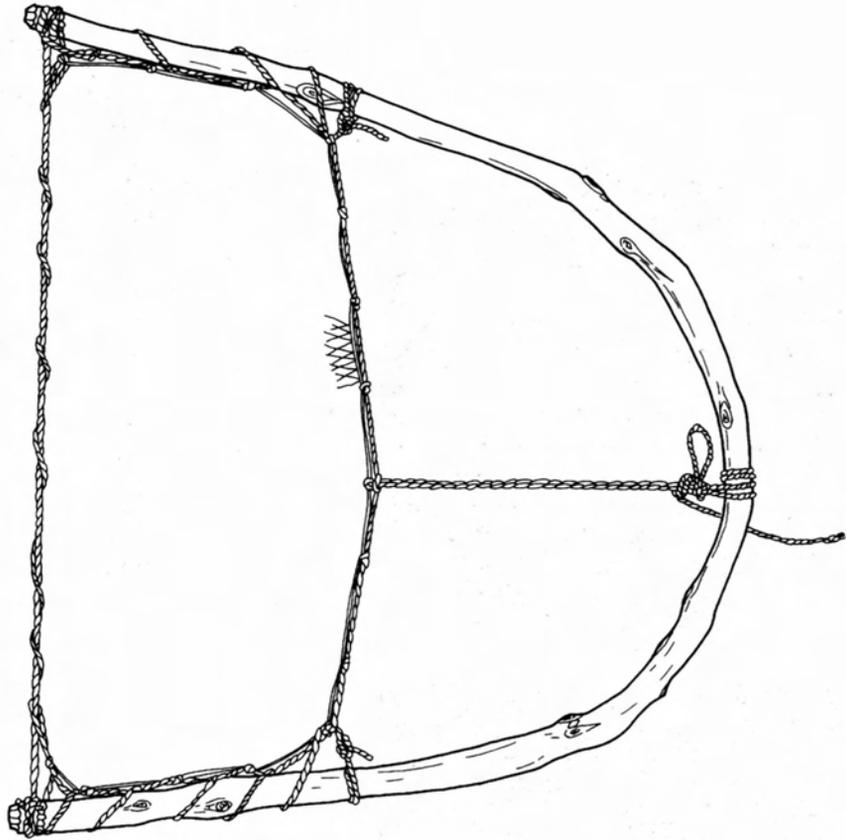
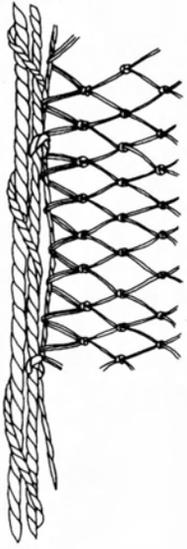
腰の一部に網による補修がみられる。

【ゴリフミ漁】

水温の高い時期に行う。用いるヤスは先が2寸程の小さなものを用いる。ドマンは石の下にいるから、鏡で覗きながらドマンを探して突く。ドマンはそれほど遊泳力は高くなく、シューと泳いではチョイと止まる。この止まった時を狙って突く。

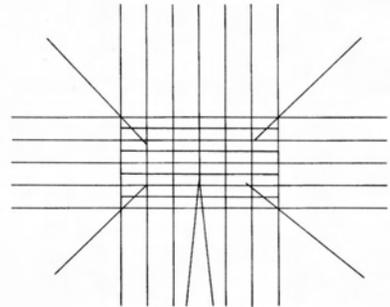
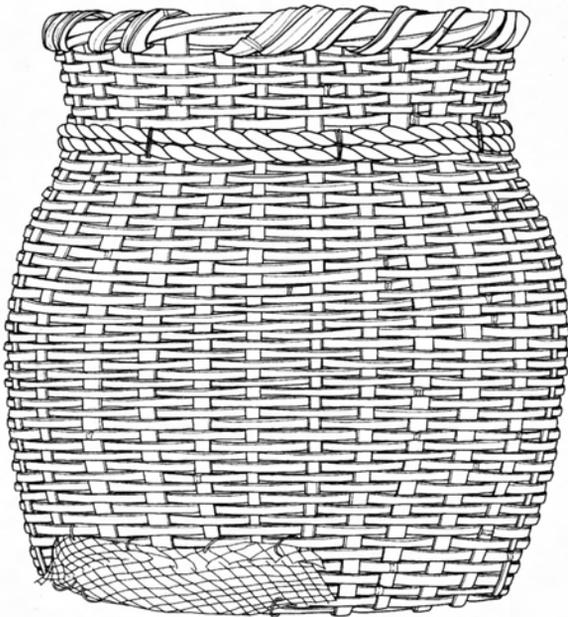
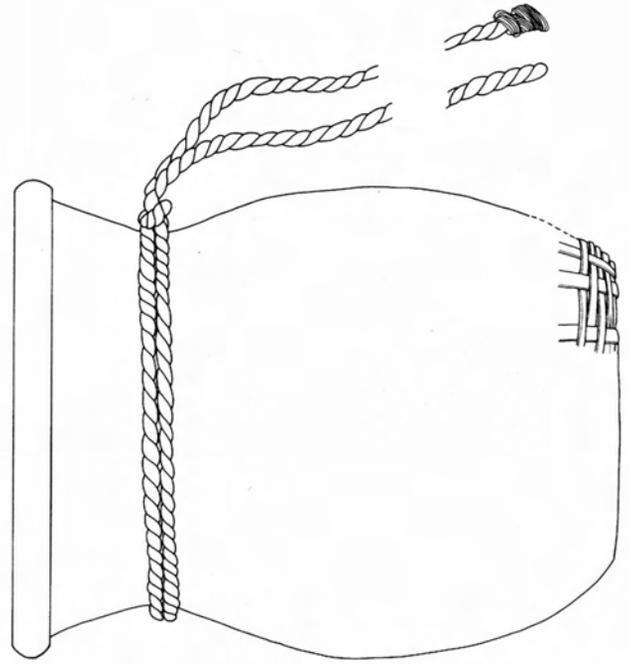
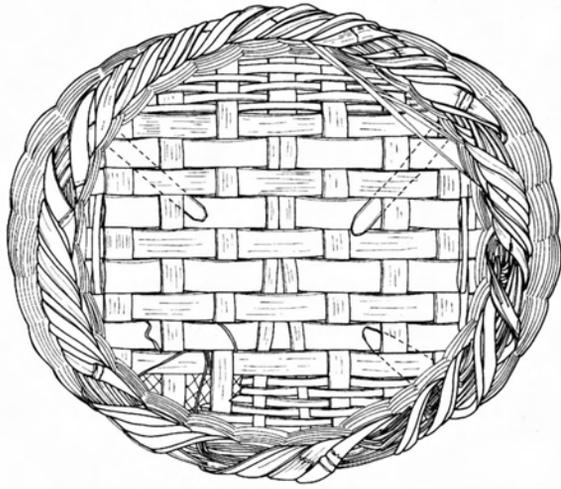
また、子供の遊びであるが棒の先に縫い針をくくり付けてドマン突きをしたこともあった。針先はすぐに折れるので、母親に頼み倒して針を2本3本ともらって行った。

5cm
0



40cm
30
20
10
0

図-51 コリマ



ビク 竹の構式図



図-52 ビク

6. アマゴ・イワナ

呼称 アマゴ, アメゴ, イワナ, イモウオ

【一般的な生態】 何れも河川の最上流部に生息するサケ科の魚である。イワナの方がアマゴより上流に分布する。イワナにあっては白点が不明瞭で朱点の目立つ、ヤマトイワナ系が安曇川域には分布する。

【安曇川中流域の漁労者の見た生態】 現在、安曇川の中流域にはそれほど多くのアマゴ、イワナはいないが、かつては本流部に大きなアマゴが多数生息していたこともある。現在、これらの魚が多く生息するのは支流の上流部である。イワナがアマゴの上流にいることが多いが、必ずしもそうとも限らないこともある。アマゴの方が警戒心が強く、捕りにくい。イワナはいれば捕れる。

【利用】 塩焼きにすることが多い。串に頭を交互に数匹づつ差して焼いたものをハネサシ（麦藁の皮を剥いて直径10cm、長さ30cmぐらいに束ねたもの）に差して置き、吊るし、1週間に1回ぐらい焼きなおして保存し、折々に食べた。

【漁具と魚法】

（釣り漁）

竿はハチクの細いものを用いた。長さは2間半、1間半、5尺等川幅に合わせて用いる。自然のものを用いることが多く、そのまま捨ててくることもあった。

糸はテグス、もしくは絹糸をよったもの。テグスは高価でなかなか使えなかった。

錘りは通常付けない。鉤は市販品。

餌は魚の喰い慣れているものを用いるのが基本で、栗の木の子、岸の草むらのミミズ、川虫、蜘蛛、アオギス（草むらの中にある青いコーロギのような虫）、カゲロウ、ドマンの卵等。何を餌にするかについては魚の腹の中を観察することも大切で、その時に喰っている餌を用いる。中でもドマンの卵はアマゴには絶対の餌で、軽く塩をして乾かして保存して置いた。

早春の解禁時分が最も釣りやすく、徐々に釣り難くなる。

淵にいる大型のアマゴを釣るために、蜘蛛を餌にする場合は、水面を上下させて誘い、魚のいそうな所から少し離れたところに餌を落とす。アオギスを使うときは餌を水面に流す。アマゴは飛び上がってこれらの餌に食いつく。

流れで釣る場合は、流れの中に餌を流すようにす

る。3月、4月はマスの子（一寸アマゴ）が釣れる。本流でアマゴが良く釣れるのは6月まで。支流との合流点などで、やや増水し、濁りが入ったときなどに大きなアマゴが釣れる。夏になると虫の飛ぶ時間帯（朝と夕方）しか釣れなくなる。特に夏は蜘蛛の巣が激しく、釣りにならないので鮎釣りに移行した。

谷で釣るときは、糸を極端に短くして障害物を避けるようにして餌を流した。（いわゆるチョーテンヅリ）

イワナ釣りも基本的には同じであるが、アマゴ釣りほどの繊細さいらず、居るところに行けば釣れる技術の「ぎ」の字も要らない釣りであった。

何れの釣り方も錘りを使わず、餌を流す釣り方であるが、毛針を用いる釣り方に付いては、話を聞くことができなかった。

（釣り（延縄）漁）

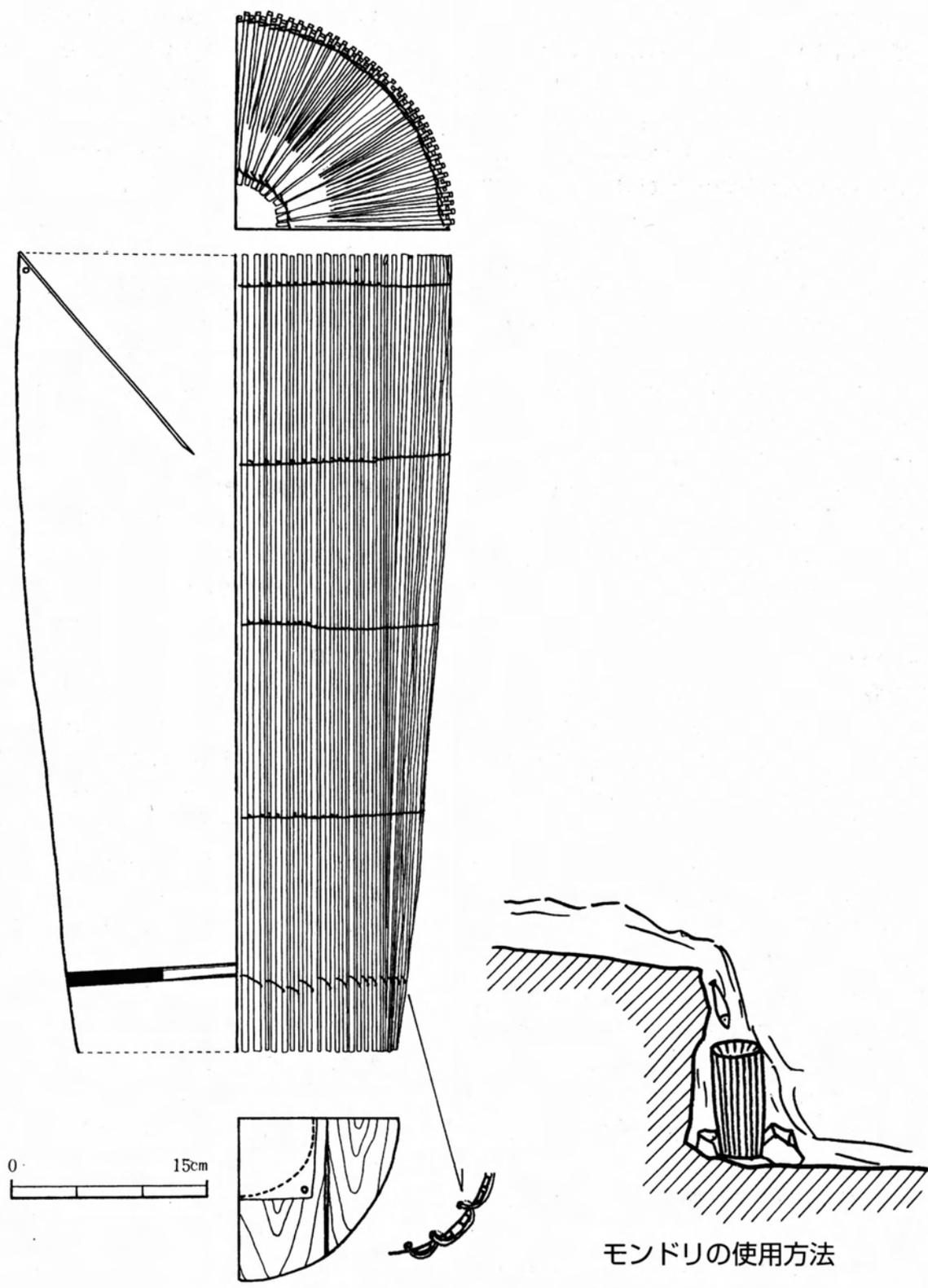
淵のイワナを釣るのに2～3本の針を幹糸に付けた延縄式の釣りをすることもあった。餌はドマンを用いるが、活き餌である必要はなかった。夕方仕掛けて朝に上げる。大きなイワナが捕れた。

（ウケ漁）

産卵時分に移動するアマゴを捕るための返りの無いサカモジと呼ばれるウケでの漁である。ドンド（淵）とドンドの間の滝に仕掛ける。直径60cmぐらい、長さ100cmぐらいの円筒形で、滝の水を口で受けるように仕掛ける。サカモジの尻を少しだけ水に漬けておくのがこつで、水にどっぷりと漬けると入った魚が逃げてしまう。特に餌はいれない。（図-53）

ヒッカケ 鮎の引っかけと基本的には同じで、鉤の大きさが大きくなる。鏡で覗いて引かける。夜にやる場合もある。この時は明かりを持つ人と、引かける人が分業して行う。

毒流し 現在は当然のことながら行われていない。水の量が少ない場合はタデの葉やチシャの実を叩いて流す。消石灰や山椒の葉、枝を叩いて流すこともあったらしい。



モンドリの使用方法

図-45 参考
余呉町鷺見（高時川上流）モンドリ

7. 雑魚

その他雑魚として扱われている魚について記しておく。

種類としては、標準名アブラハヤ、カワムツ、オイカワ、ウグイ、カマツカ、タカハヤ、ドジョウ等である。

当該地における呼称と標準名を一致させることは困難であるが記しておくアブラモツ（アブラハヤ、タカハヤ）、モツ（アブラハヤ、タカハヤ、カワムツ）、シャジ（オイカワ、カワムツ）、ウグイコ、ハヤ（オイカワ）、クソモツ（アブラハヤ）

【利用】 醤油で煮て食べることが一般的。

【漁具と魚法】

【モジ漁】

各種のモジ（ウケ）を用いて雑魚を捕る。基本形は同じで、流れの穏やかなところで使う。対象とする魚に応じてウケの大きさが異なる。小ードジョウ、中アブラハヤに代表されるモツ類、大ウナギ等。夏中の炭焼きのついでなどに捕って置き、家の池のドービン（いけす）の中で蓄養しておき、冬になり味が良くなった頃に食べる。

モジの中に入れる餌は、コヌカを練って焼いたものや、鯖の頭を焼いたものなどを袋に入れて用いる。

竹製が一般的であるが、ガラス製や金網で作ったものなどがある。ガラス製のものは一度入った魚が逃げ出すこともある。

【漁具解説】

図-54 モジ

朽木村雲洞谷で用いられているモツを捕るためのウケ。マタケのひごで造った砲弾形のもの外面に3箇所、内面に2箇所タガを入れて補強する。胴部中央に取っ手状の紐が付く。

【すくいあみ漁】

台風などの増水時に雑魚は川岸に掘られた麻蒸のかまど（カマブチ）に集まるので、これをすくう。

魚は、水の出が頂上を超えるといなくなるので、水の出増し時分が時合いとなる。魚は上を向いて後ずさりながら降って行くので、上流側からすくうようにする。

【蚊帳引き】

冬季の早朝、魚の動きが最も鈍い時分に、蚊帳の1辺に竹棒をつけ浮きとし、対辺に錘りを漬け、曳き網のように川の淵を曳いた。一般的な漁ではない。

【ヤス漁】

ヤスを用いた各種の漁も行われていた。特定の対象魚はないが、ゴリ等を突くことが大方である。また、他の漁の副漁具として携帯することもあった。

【漁具解説】

図-55 ヤス

朽木村野尻で用いられているもの。柄は状況に応じて長さの異なるものを取り替えられるようになっている。特に対象とする魚はないが、マスの引っかけなどの時に、淵にへばり付いている魚を突いたりした。

図-56 ヤス

安曇川町長尾で用いられているもの。特に対象とする魚種はない。一度先が折れたためか、図下辺の刃が著しく短く、しかもかえりを失っている。

直接漁具とは関係はないが、投網の錘りを自製するための用具を記しておく。

図-57 鑄型

安曇川町長尾で用いられているもの。ヒル型の錘りのためのもの。砂岩をくり貫いて造る。

図-58, 59 名称不明

鉛を溶かして、鑄型に入れるためのしゃもじ。鉄製。この上に材料となる鉛を入れ火の上で溶かす。

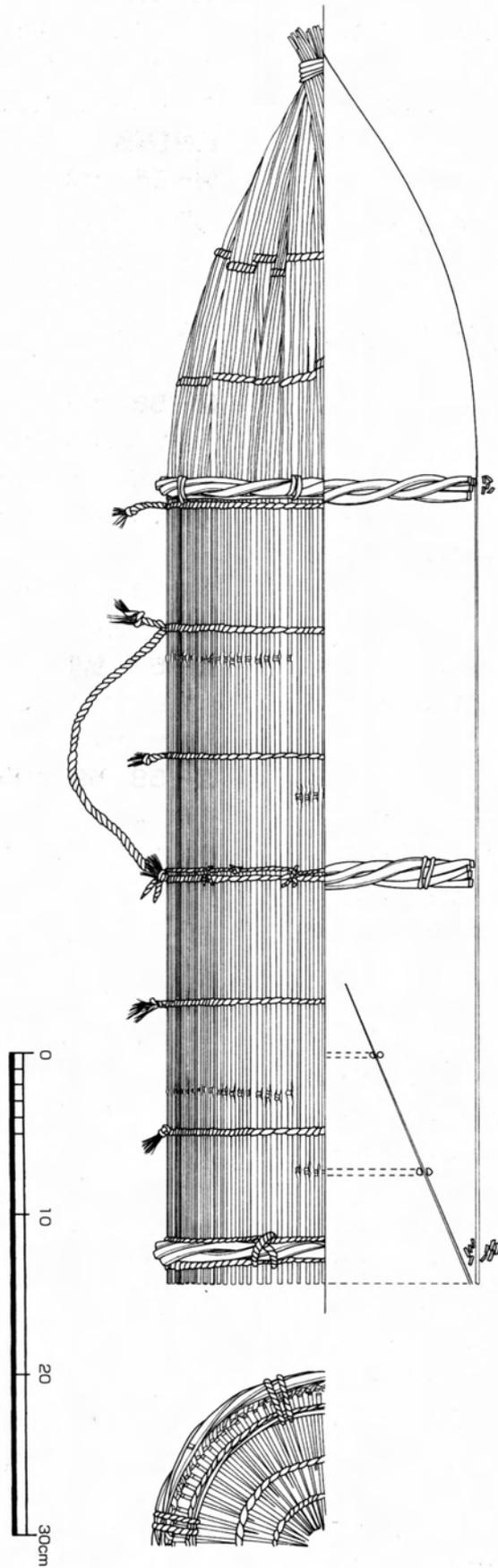


図-54 モシ

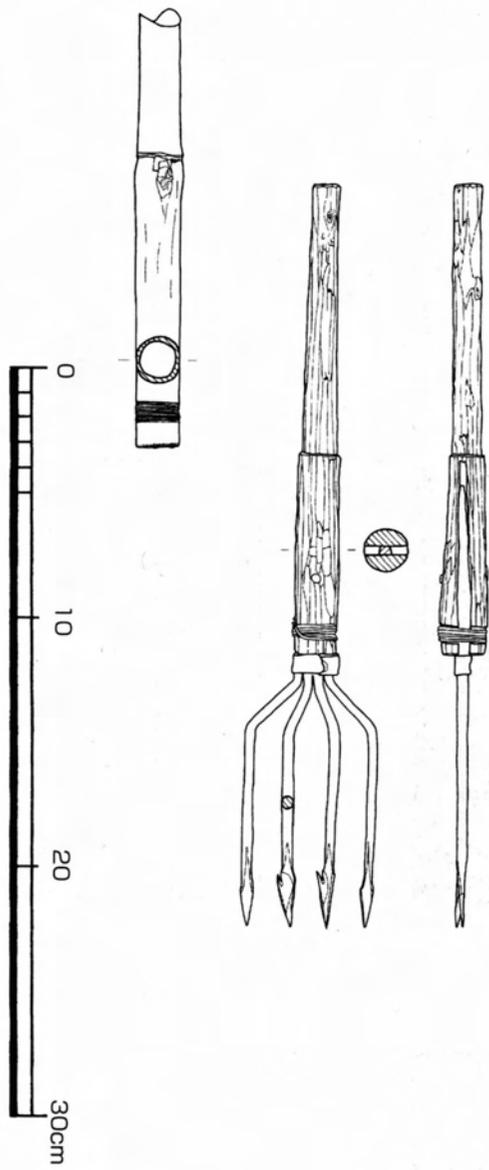


図-55 ヤス



図-56 ヤス

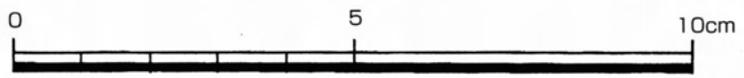
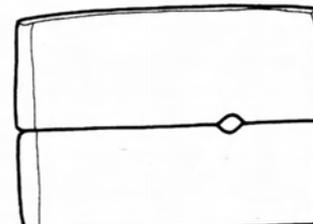
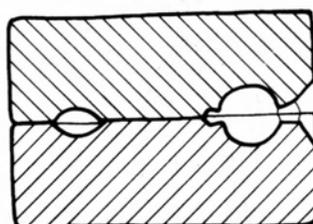
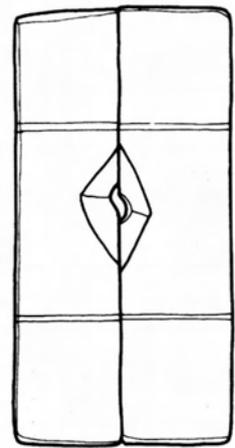
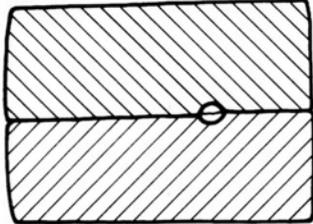
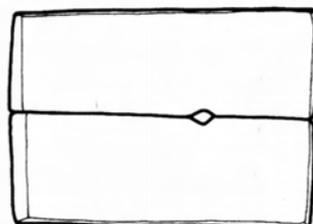
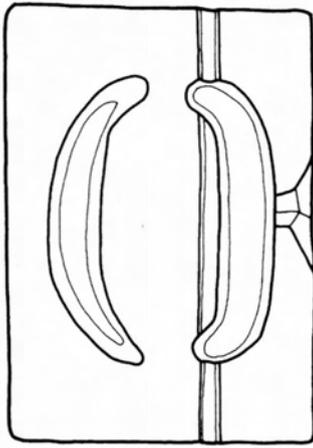
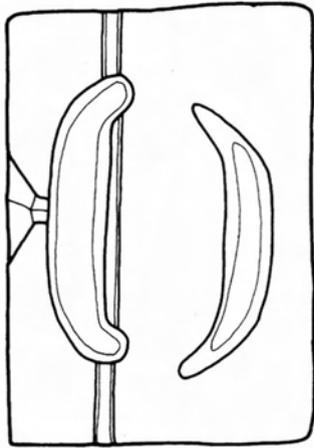


图-57 鉄型

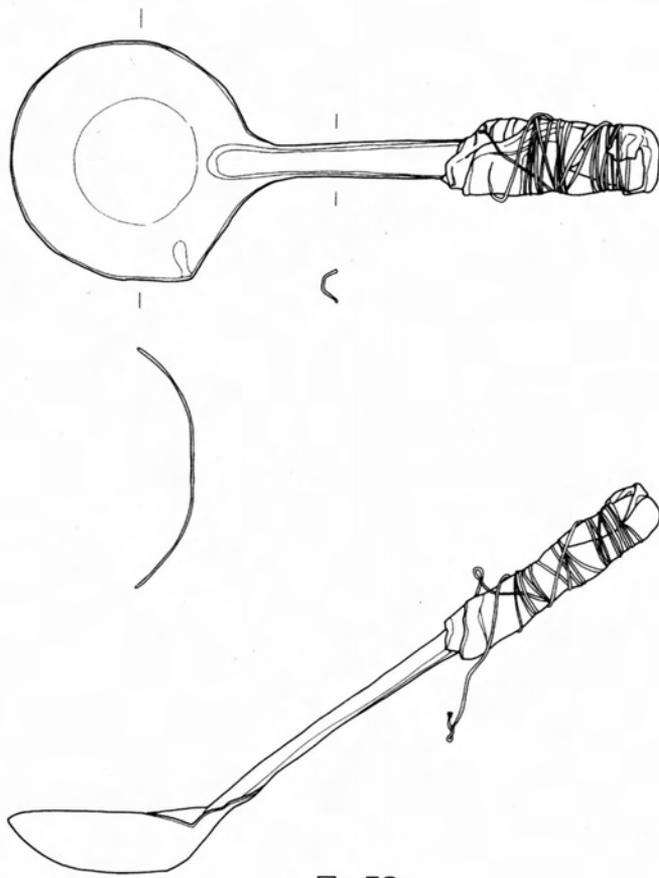


图-58

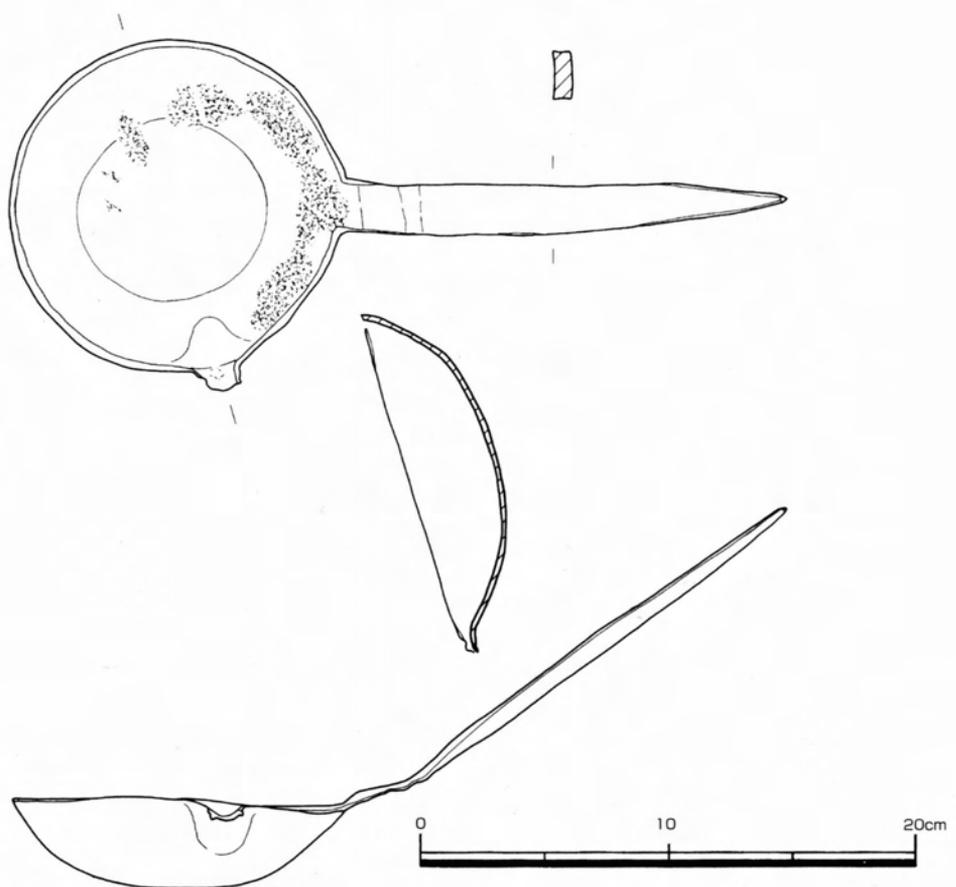


图-59

3 琵琶湖周辺の定置漁具記録調査

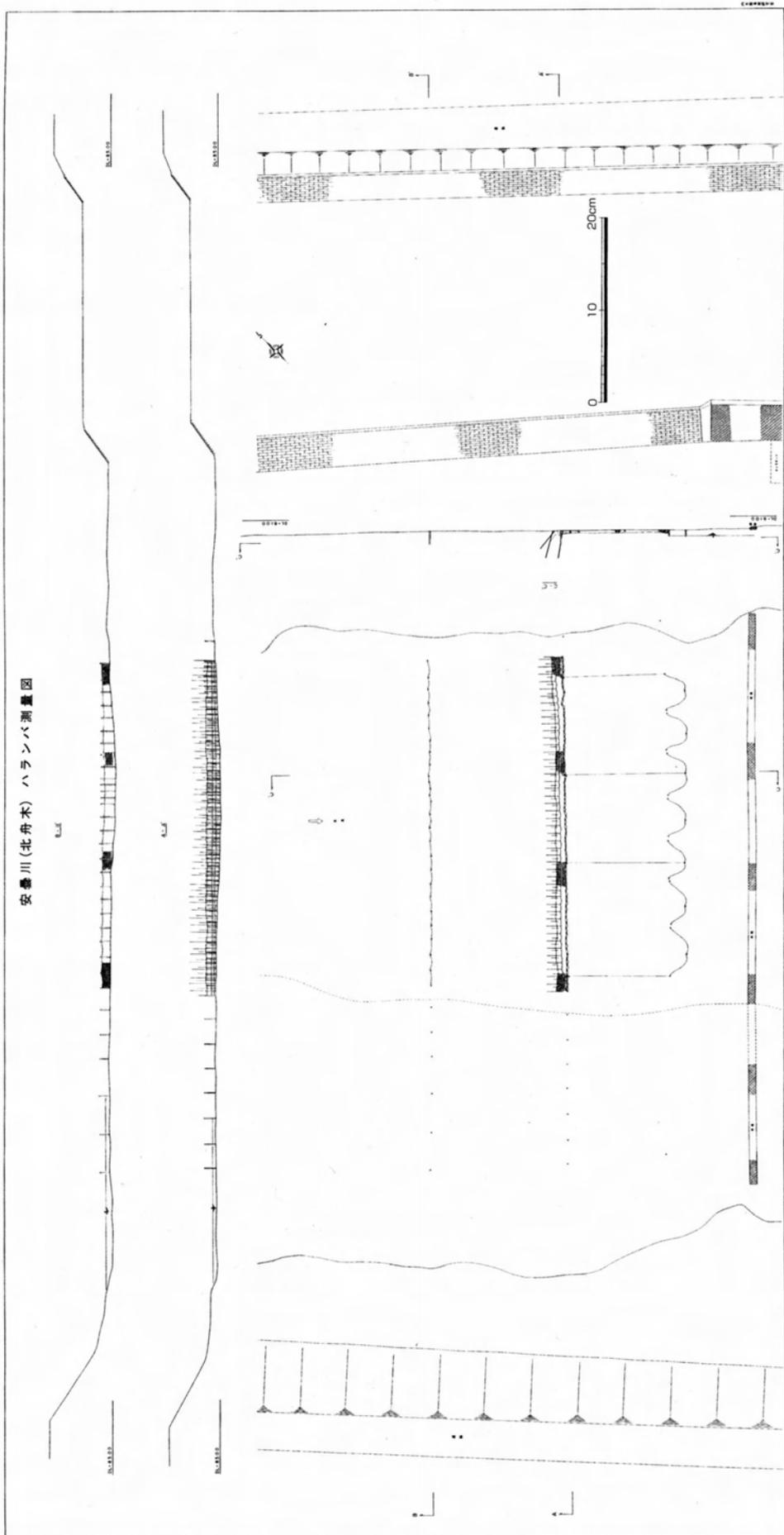
調査目的

琵琶湖周辺では各種の定置漁具による漁労が行われていたが、近年の湖岸の開発や河川の開発によりその姿を変えるものや、消滅するものが多くなってきている。今回の調査では、このような漁具を湖西北部を中心として無作為に抽出し、測量記録した。

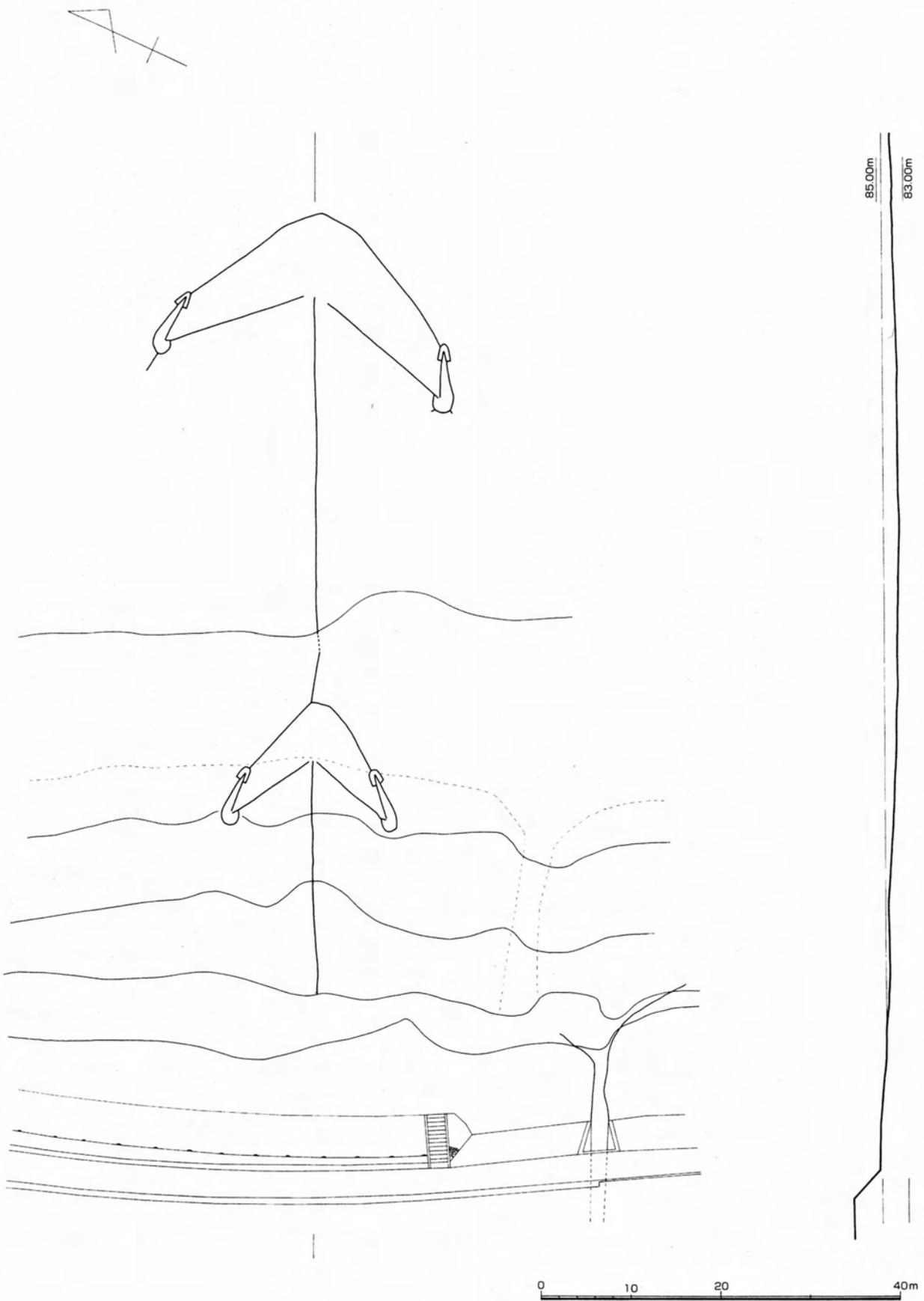
今回の調査では漁具の形態の記録化に主眼を置いたため、漁具の運用法、副漁具との関係までは調査していない。今後の各種調査に今回記録化した資料が用いられれば幸いである。

今回資料化した定置漁具は以下のとおりである。

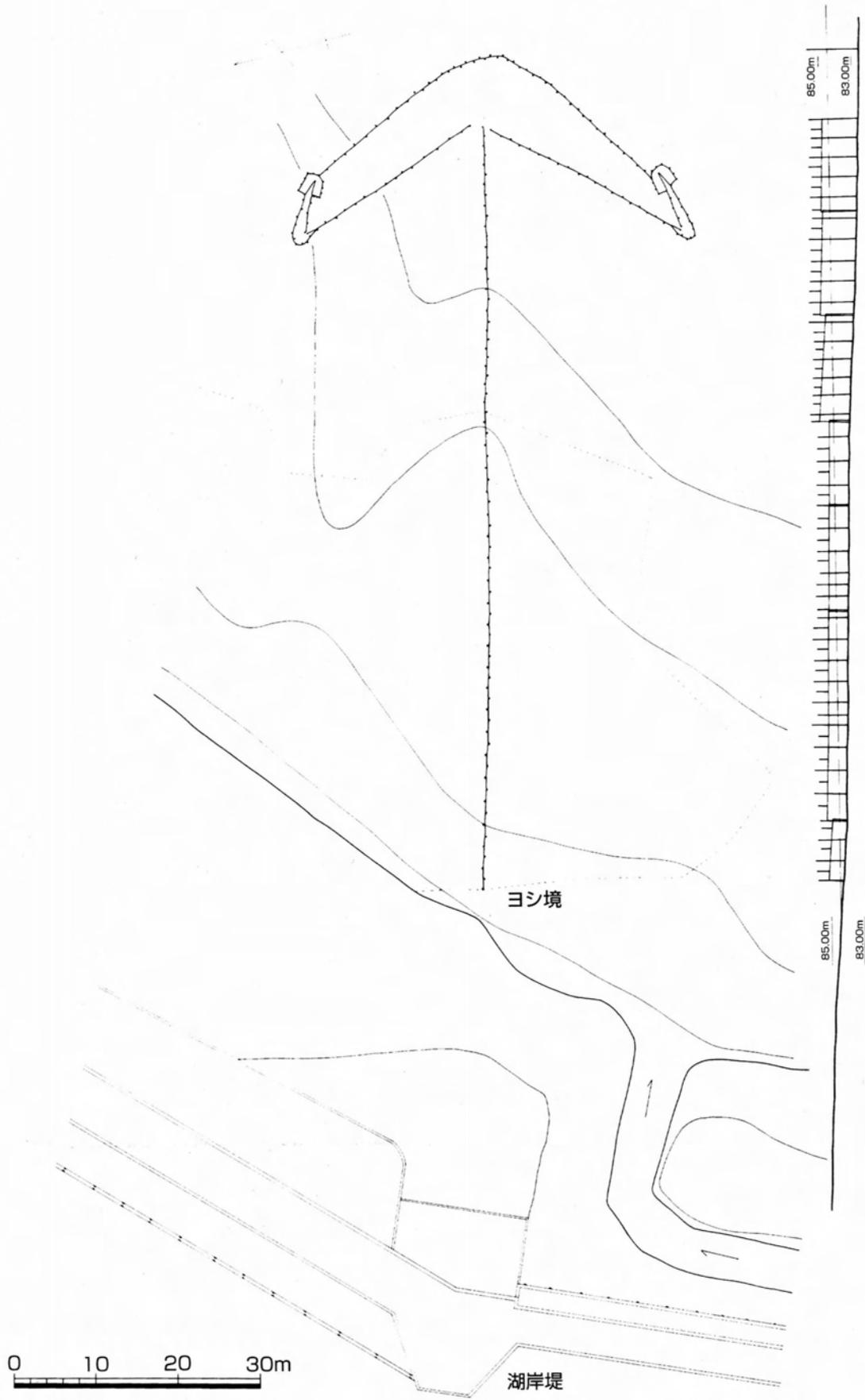
1. 安曇川 ハランバ
ビワマスを漁獲するための登り梁
2. 新旭町針江 ハマダイコ2棟
フナ・コイ等を漁獲するための粗目エリ
3. 今津町浜分 石田川カントリーヤナ
コアユを漁獲するための登り梁
4. マキノ町知内 知内川カントリー
コアユを漁獲するための登り梁
5. びわ町 内湖のエリ2棟
フナ・コイ等を漁獲するための粗目エリ



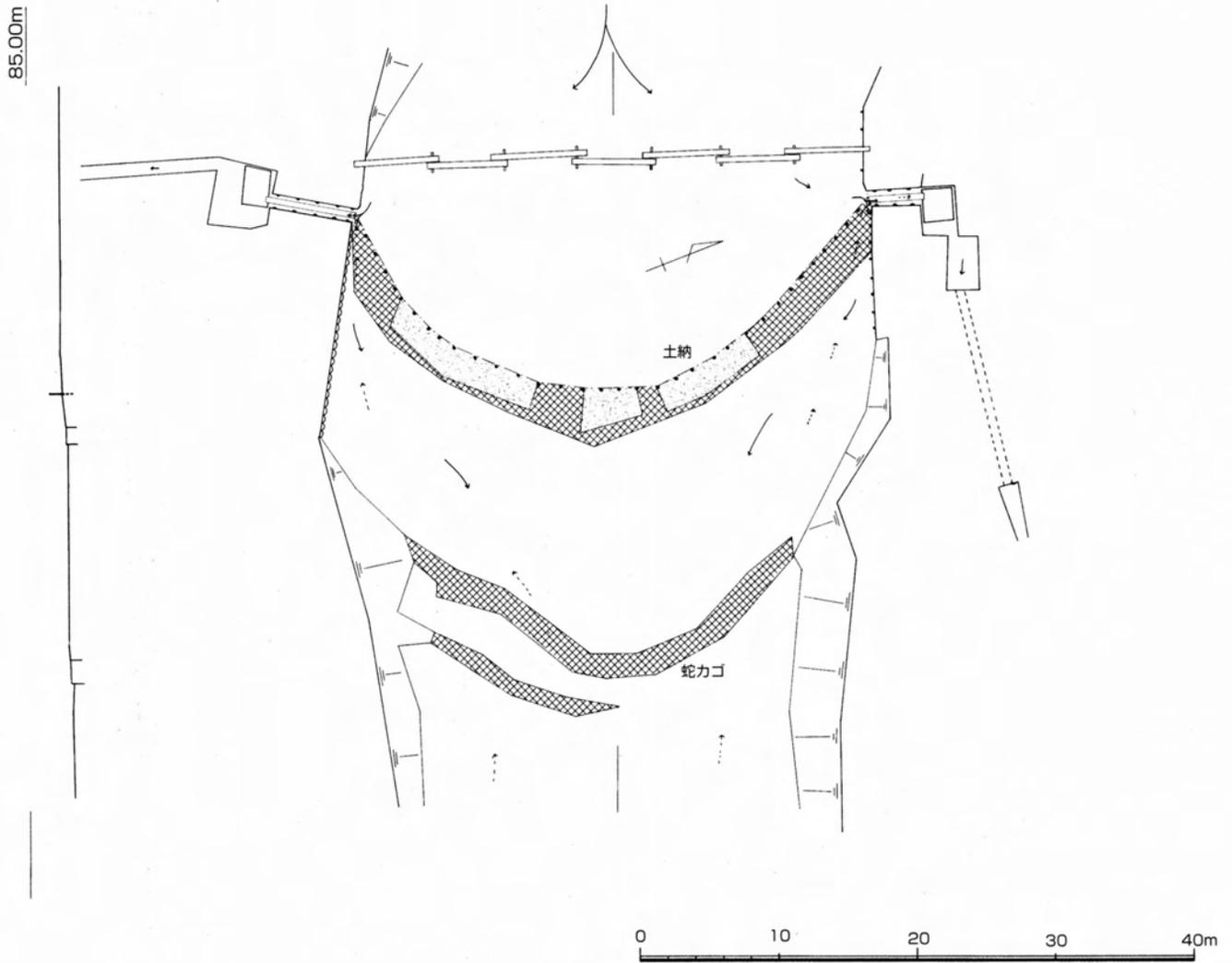
1 安曇川 ハランパ



2. 新旭町針江 ハマダイコ1

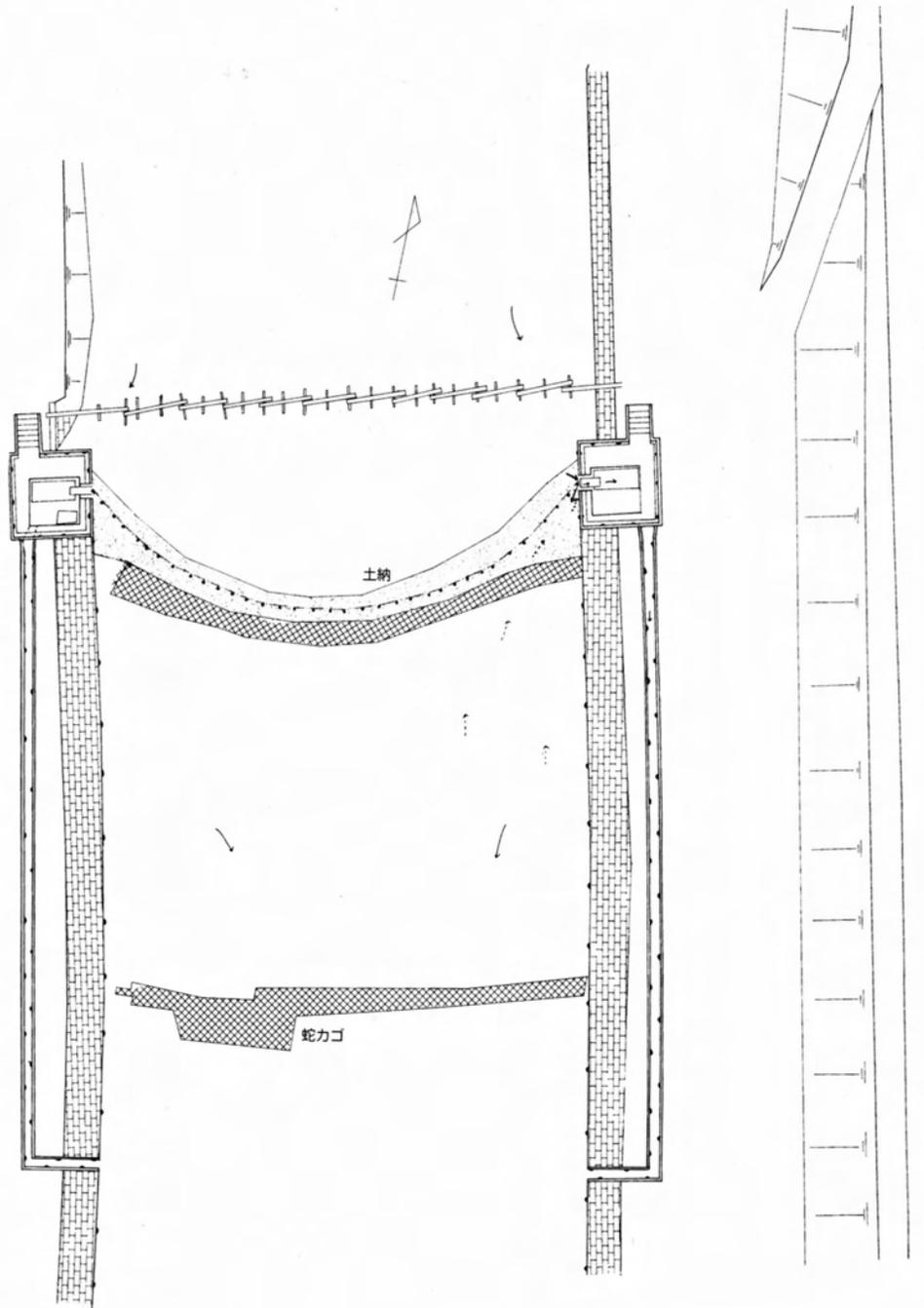


2. 新旭町針江 ハマダイコ2



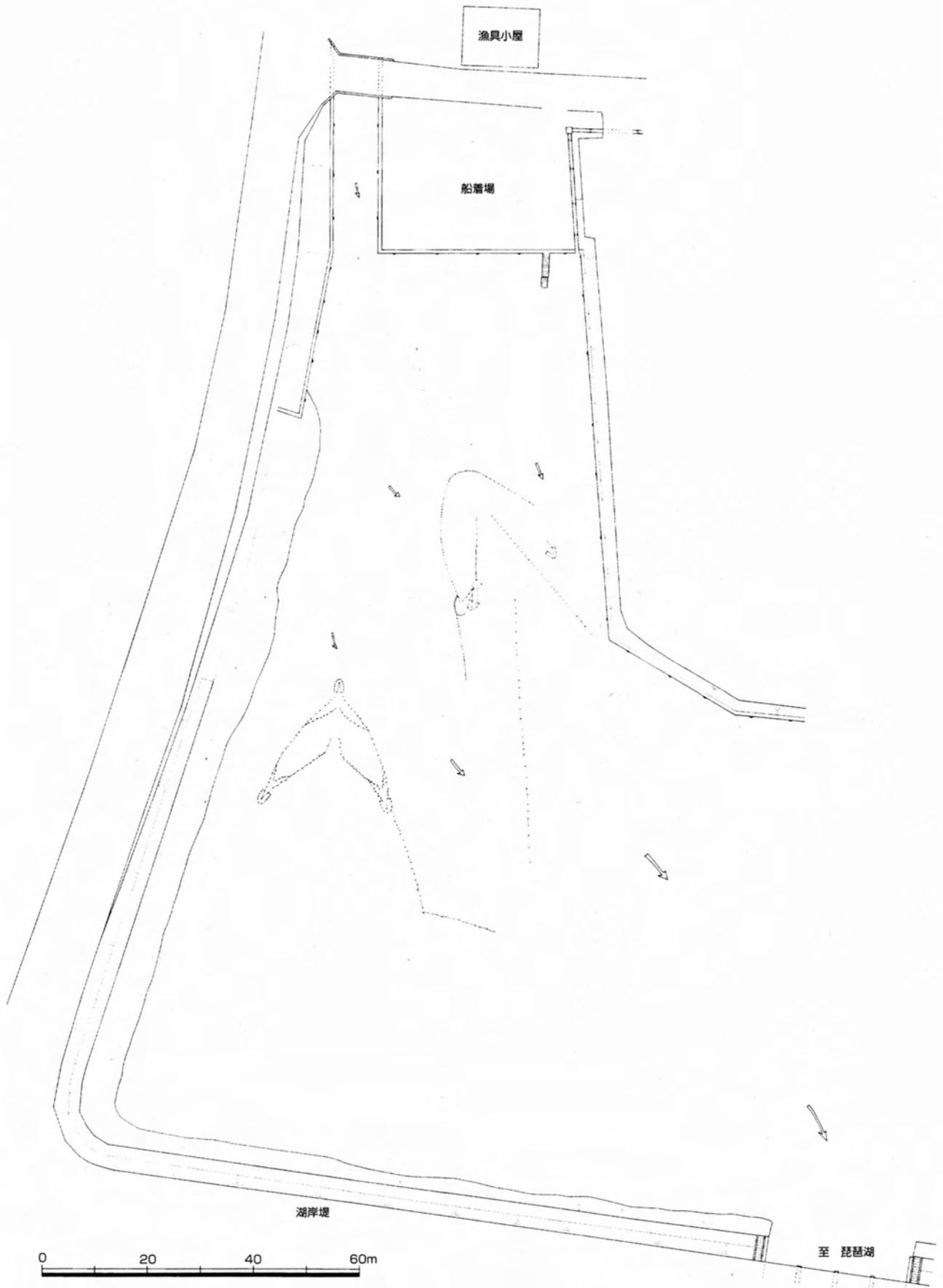
3. 今津町浜分 石田川カトリヤナ

86.00m



0 10 20 40m

4. マキノ町知内 知内川カトリ



5. びわ町 内湖のエリ2棟

琵琶湖博物館研究調査報告 7号
現存漁具記録調査報告

発行日：平成11年（1999年）6月
編集：内水面漁撈研究会
杉立 繁雄・大沼 芳幸
発行：滋賀県立琵琶湖博物館
〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091
電話077-568-4811
印刷：サンライズ印刷株式会社

Research Report of the Lake Biwa Museum

no. **7**

June 1999



LAKE BIWA MUSEUM

滋賀県立
琵琶湖博物館

〒525-0001 草津市下物町1091
TEL.077-568-4811代 FAX.077-568-4850

LAKE BIWA MUSEUM
1091 Oroshimo, Kusatsu,
Shiga, 525-0001, Japan